RECONSTRUCTION

改造

科學の窮局・人生の極致

レニンのユトピア

日米戰ふべきか！

思想と評論

吉江孤雁
倉田百三
室伏高信
堀江歸一
末廣重雄
賀川豐彦
新城新藏
石川千代松

批判と文藝

有平糖
貝塚澁六
永井潜
大杉榮
田山花袋
近松秋江
久保田万太郎
德田秋聲

花袋秋聲記念文藝


S.S.S.
Ink
永世不變!!
絶對安心の下に
重要書類に用ふ
べき
永世不變色の
サンエス
インキ
サンエス萬年筆本舖
細沼株式會社



改造十一月號目次



廣告主へ御用の節は〔改造〕廣告に依る旨是非御申添へ被下度

歐米にもない!!

日本に始めて出來た

專賣特許

二色萬年筆

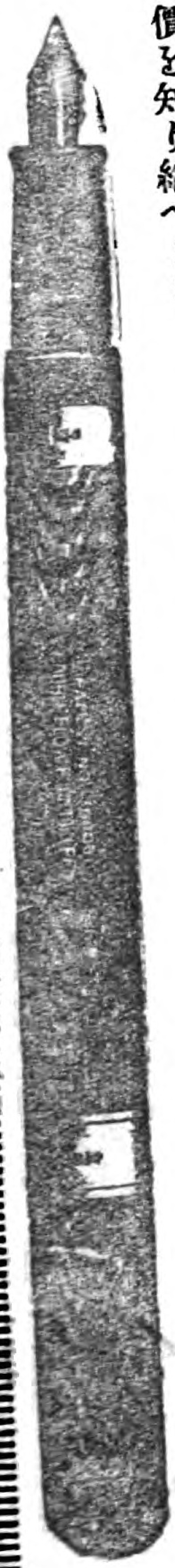
一號 拾貳圓	四號 七圓五十錢	
二號 拾圓	五號 六圓五十錢	
三號 八圓五十錢	送料 各二十錢	



二色のインクが自在に出る

便利ではありませんか？

一寸捻れば黑でも……赤でも……スラ〳〵と同じ調子で間斷なくインクの流れ出る……二色萬年筆の快味……先づ一本を購ひて其の眞價を知り給へ……



東京南千住三の輪

製造發賣元 東京工業株式會社

振替東京四二九六五番

電話淺草五〇五番



滿鮮赤化對應策

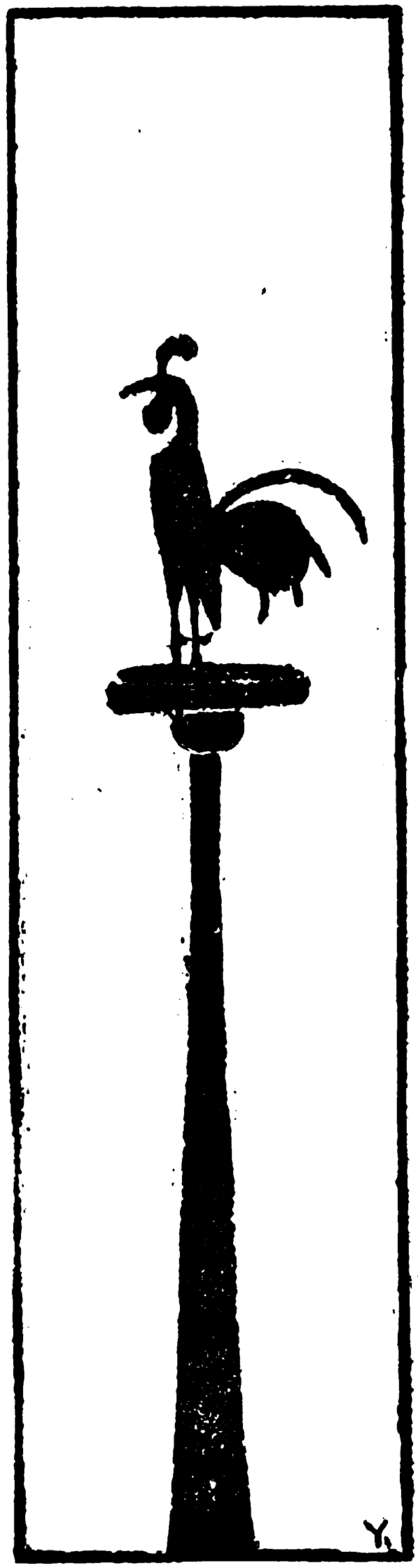
滿鮮の赤化は取締るべきものであるか、又取締り得べきものであるかよく考へて貰ひたい。

過激政治は假りに罪惡の結晶であるにせよ、その黴菌が培養され、生長さるゝからには現在の社會組織と、人心の根柢に多大の缺陷の伏在せるは否むべからざる事實である。隨つて原内閣や多數政治家の呼號する過激派撲滅策は何等有効な功果を齎らし得ないであらう。何となればソハ急性病にモルヒネを注射するやうに一時の安逸のみを目的とし、身體の根本に對しての改造の斧を加へぬからである。

眞に過激派を退治せんと欲せば、過激政治の病弊、缺陷を國民に徹底せしめ、その民主主義なり、君主主義が論理に於ても、實際に於ても國際政治に優越であることを自覺せしめるにある。

過激派が滿鮮に運入つたからとてペタ〳〵嗅ぎ出す必要はない。その侵入に畏怖を抱くが如き政治家や國民は人類として優越の域に達し得ないと共に、國民としても大國民たることは出來ない。自信があり、自我があつたら白刃を以て脅迫されても、その人の信念を奪ふことは出來ないからである。

然るに、日本の政治家に見よ、所謂先覺者に見よ、丸で水鳥に驚怖する平家の公達そのままである。枯尾花を幽靈の正體と觀ずると同一筆法で過激派を畏怖して居る。天は眞理に味方する。過激派の主張に眞理と正義がなかつたなら、假令へ一時は暴威を逞ふすると雖、結局は空中の樓閣の如きものであらう。而し、汲むべき眞理が其中に混じて居ないとも限らぬ。滿鮮に瀰漫するといふ過激主義を取締るなら、夫子自身が牢乎不拔の眞理の上に立ち、至純の情操の上に立ちつゝあるやを顧る必要がある。



新國民主義(其一)

—近代佛蘭西文明の批評—

吉江孤雁

一

或る一國民の緊張充實せる生活とは、即ち各個々人が十分なる自覺ある個性を有し、その確立したる各自個性の比較的融合統一ある結合の生活をなしてゐる狀態を指していふのであつて、かくなるがためには、個人の修養と、集合生活に於ける鍛錬とを得るために、相當の歲月が要せられるやうである。

常に論理をたどり、事理を究明することを生命としてゐる佛蘭西人にあつては、その集合團體の生活が經て來た歷史

の跡に於ても、明かなる理路を示してゐるからである。その理路とは何であらうか。即ち集合統一と、分離放散の二つの姿である。語を換えていへば、Centraliscetion と、Décentralisation の二つの形式である。

中世紀の分立不融の狀態が漸次統合せられて十六世紀を經て、所謂「大世紀」と呼ばるゝ十七世紀の統一文明を出したのであるが。次ぎの十八世紀はまさしく百年を通じて DIécentralisation を要求した時代であり、その極は大革命となつて一大解放を現出したのであつた。

十九世紀にいたつては、この集中離散を繰り返して、國民全體の修練を重ねたのであるが、ナポレオン三世の治下に到つて、一時の統一を見、所謂「少さな十七世紀」といはるゝ兎にも角にも熟した文明を生じたのであつた。

併しこの假りの統一は暫時にして破れた。そして第三共和政が創設せられて以來凡そ五十年、この約半世紀の間、即ち七十年戰爭と今回の大戰との間の近代フランス思潮の變遷は、再び放散より集中へ、分離より融合へ徐々として歩を追ふた姿である。

然らば統一集中とは何を意味するであらうか、分離放散とは何であらうか。前者は即ち少くも比較的多數の人々の階調融和ある、若しくは統一ある思想感情のもとに生活をしてゐる姿を指し、即ち個々の生命に重きを置くよりも、全體の上に、衆多の傾向に中心を求める姿をいひ、後者は即ち個々の生命を尊重して、衆多を一時分離して、個々の要素の價値を考察する現象である。

然るに佛蘭西人本來の性向よりいへば、彼等はゴオルの昔より、社交性に富み、團體生活を愛し、個々の分離を悲しみ、協調階和を求めてそこに無上の樂しみを發生する人種である。それが故に彼等にとつて幸福なる生活とは融合統一ある國民生活を意味し、分離放散の個性修練の時代は寧ろ憫みであり、悲しみであり、嘆きである。

併し彼等が求むる融合統一の生活を得るためには、少くもこの個々人の修練生活を經なければならなかつた。一度び彼等は十八世紀の末に於て、所謂「世紀末の惱み」としてこれを味ひ、二度びは十九世紀の末に於て、デカダンの生活としてその苦味を嘗めなければならなかつた。その間に於て、彼等は衆多より分離せられたる解放の中に、一種の自由と安易とを味ひながらも、孤立の寂しみ、獨往の不安、そして路なき荒野に一人立てる者の行先きを知らない惱みとに苦しめられて、或者は呼び、或者は泣き、殆ど狂奔の姿すら呈する者もあつた。即ち彼等は前の場合に於ては、求めたる解放は得ながらも、その解放の悲哀を味はずにはゐられず、後の場合に於ては、求めずして强ひられたる個人自覺の鍊獄の中に投ぜられて苦難を受けずにはゐられなかつた。前の場合とは即ち若きロマンチストの惱みを言ひ、後の場合とは即ち十九世紀末のヴエルレニアンの苦惱を意味す。廿世紀のフランスの比較的統一なる文明の一事は、この苦惱の中より咲き出てたる花である。

二

七十年戰爭當時フランスの思想界を支配して居つたのは、物的の哲學であつて、科學に對する信仰は萬能の時代であつた。宗教も科學によつて取りかへられ、あらゆる研究はことごとく科學的方法によつて遂げられるものと信じて居た時代である。

エルネストランの如きあの宗教的情調をもつた人でありながら、尙且宗教を科學に代へる（La science unplace la religion）ことの出來ることを深く信じて居た程である。即ちエンテンクチアリズムの萬能の時代で、それが文藝上に現はれては即 naturalisme の旺盛な時代である。従つて七十年戰爭の結果は、戰敗國辱に終つたけれども、其當時の

思想に從へば、この戰爭は寧ろ責任が自國に在り、ナポレオン三世の野心の結果とも見られ、ビスマルク以來堅き統一の出來て居るプルシアの軍を相手にしては敗けるのが當然である、と云ふ考へが寧ろ當時を支配して居たのである。從て戰敗そのものの影響は一般思想界には余り著しく現れはしなかつた。けれどもその戰敗の結果は、實質的には物質上の富源を失ひ、精神的には國の光榮をなげすてゝしまつた結果、從來の華やかな歴史に醉つて居た一般の國民、特に若き時代の人々の感情思想の上には非常な打擊があつたことは事實である。その打擊は一個人として、亦一國民として、殆んど如何にして前途に希望をつなぐべきか、何によつて新らしき光明の中に歩むべきか、惱みとかなしみとのいたましい有樣を呈したのであつた。その時の表現されたるフランス當時の文藝が即ちデカダニズム所謂頽廢派の文學で、當時の靑年等のたつべき道なくして惱み苦しんだすがたを現はしたに外ならぬ。

この二つの物質的なる naturalisme と、個々人の惱み苦しんだ Décadanisme の文學とは一時日本へ照留せられて佛蘭西文學の近代の代表の如くに見られた時もあつたのであるが、佛蘭西の國自身から云へば、國民生活としては寧ろ衰頽遲緩した時代の表現に外ならない。而してその二つの文學の日本の生活に對してなした效果及其使明については別に批評することゝして、佛蘭西自身の國民生活の上から考へる時は、この物的なそしてこの頽廢的な氣分を續けていつたならば、恐らく世人一般に思つて居つた如く佛蘭西が衰亡に向ふものと思はれても仕方なかつたのである。

然るに一國の生命の極まる時、必ずそこに何等かの道を開いて來なければならないのが當然の順序である。之等の傾向に反對してその當時起つて來たのは、即ち一方に於ては物質生活の極からしてその先きを求める精神的の運動、即ち宗敎の復興となり、他方に於ては、振り返つて自國の過去に於ける光榮ある歴史のあとを辿つて一國民の歩むべき道、世界文明に對する使命、それを求め出して初めて佛蘭西國民の立つべき所以をたしかめた傳統主義の運動である。それ

が凡そ八十年代より廿世紀の初頃に亙る間の現象であつて、即ち傳統主義の高唱せられ、カトリツクの復活が唱へらるゝに至つた徑路である。

三

傳統主義とは何であらうか、社會哲學にあつては、十九世紀の初頭より一種の反動の哲學として、ボナアル、或はド・メエトル以來唱導せられたるところであるが、十九世紀の末葉に於ては、寧ろ文藝上にこの主義が表はれて來たのである。即ち一層直接に國民の感情にうつたへて、精神上の統一をはからうとしたのである。

傳統とは何であらうか。ブルユヌテイエルに從へば、人間の經驗の徐々に累積せられたる寳である。"Le tresor entement acenmulé de 'eexpérience humaine" 而して比較的古い時代に於て、國民が一層自然に近い狀態に置かれてあつた場合、不知不識の間に積み累ねて來た經驗が、一種の融合のある統一を見せてゐる。例へば聖王ルイの時代の如きがそれである。これを文藝的に說明すれば、餘りに個人的な性質を帶んだもの、餘り奇異(ビザアル)なもの、或は一時的の性質を帶んだものを除いて、人間の普遍性にうつたへる可き要素を尊重せよといふことになる。これもブルユヌテイエルの說明であるが、要は、統一普遍を求めたものであつた、個々の分離を避けやうとする傾向が即ち傳統主義の中心要求である。

これを歷史的にいへば、國民全體をなる可く統一ある思想感情の狀態に置きたい。その統一が國民集合生活の自然に近い狀態と見て、一種の集合生活の「自然に還れ」を求めたるのであつた。十八世紀の末にルウソオが個人中心の立ち場から、それを求めたものが、一世紀を經過した後に、集合生活の上にその要求をなした姿となるのである。

同時に個人生活の方面から見る時は、例へば最初、モオリス・バレスの如き、また當時の多くの若き人々の如き、自己の尊重 "Le Culte de moi" より初まつて、次第に自己の周圍に目を向け、自己の生ひ立つた郷土を考へ、自己の生命を組織する要素を考察し、除々にその自己一個の生命を愛する情が、擴大し、具體化し、その愛情が集合生活の上に注がれ、やがては祖國を愛する情となつたのである。

女詩人、ド・ノアイユ夫人がうたつてゐる。

Je t'aime, ô ma Patrie......Il fut jadis un temps
Ou tu m'étais presque étrangère......
Pardoun-moi. l'écris sur ton coteau divin
Ou la grappe est noire et sucrée
Mais je ne t'ai point fait, quand je ai versé le vin,
Une libation sacrée.

（我は御身を愛す。おゝ祖國よ……かつて我はおん身にとつて、一異邦人であつたこともある……我をゆるせ。我はそをおん身の聖なる丘の上にしるさう、そこは黒き甘き葡萄の實の熟するところ、しかも、我はその葡萄の酒を注ぎながらも、かつておん身のために一つの尊き灌奠の式をもしなかつた。）

これはけだし、廿世紀の初頭に於ける一般フランス人の感情のあらはれであらう。個を愛し、個を引き離して、一つの尊きものとして愛してゐた心は、寧ろ弱くして寂しく悲しかつた。その愛を集合の上に注ぐとき、自己も廣くなり、地平線は開けて、郷國の胸は多數の同胞を生かす悦びの樂土となるであらう。こゝには古來からの文化の種子が播かれてあつた。こゝにはカトリックの鐘の音が、朝夕空に向つて大地の祈禱を奏してゐる。祖國に對する愛情は、自國の文

化の誇りと、宗教の復活とを當然伴つて來ずにはゐなかつた。

宗教情緒の復活は、前にあげたデカダニスムの人々の中に、既にあらはれてゐた。自己の惱みをつきとめた奥底には涙の中から、薄暗い牢獄の曉の窓から、おぼろげに浮ぶ白衣の聖女の姿が立ち現はれた。その裾にすがり、その足許に膝間づいて、愛を求め、愛を注ぎ、自己に對する愛情を他に向つて注ぐ心の開けるのを感じた時、彼等の弱さは救はれて、昨日までの惱みは一種自己を確かめる階段であることを覺り得て、自己の命の究極より立つて他を愛する心持ちとなつて來た。この心持の次第に廣まつて行く姿は、デカダニズムの文藝よりして、象徴主義の文藝へうつり行く間に於てよく表はれてゐる。

自己に囚はれすぎてゐたものが、一層自由な世界へはいれた形であり、自己を離れて却つて自己の獨創を感じ、自由を感じ、創造を能くし、オリヂナルな藝術境に入るを得た姿である。近代の詩祖、ポオル・ヴエルレエヌの一生はこの苦惱と解脱とを見せるよき典型である。彼が "L'amour de bu l'atrie, C'est premièr" 祖國の愛は第一であると謳うことを得た心持は、愛他的精神の具體的なあらはれである。

宗教的情緒——言ひかへれば精神的な自由な運動は、個々人の藝術境地を拓いては、Symbolisme の文藝を手にしたのであるが、この運動に統一を與え、組織を立てたのがベルグソンの Vitalisme 哲學である。刻々の進化、創造的な直觀と衝動、彼のディシプルの一人が、ベルグソンの著書の「毎ページごとに神に接す」といつたのは、この宗教的情感を言ひあらはしたのに他ならない。シアル、・ペギイの評論のごときは同じくこの精神の發動である。

さらにこの宗教的情緒が傳統的の精神と結合しては、カトリシズムの復興となり、一層ミスティックなそして愛國的な文藝をつくり出した。その代表者たるポール・ブウルジエをはじめとして、傳統主義者等の藝術はみなこれである。

而して、カトリツクの盛んであつた時代は、比較的能く國民思想の統一のあつた時代であり、カトリツクはいつもこの國民の統一生活と消長を共にしてゐる。彼等は精神上、宗教上にこの統一を求むると同時に、政治上に於てまで同一の統一を求め出した。而して王政時代にその範を求めて、こゝに王政の出現を望むまでに到つたのである。今日のフランスに於て、王政の復興を求むるなどは、或は不思議な現象と思はるゝ人々があるかも知れない。併し、戰爭最中如何に彼等ロアイアリストが活動したか、L' action Francaise の運動が、如何に盛んであつたかを知る人々は、それは別に不思議とは思はれない。現に昨年の暮の選擧には、王黨の代議士が五人も選出せられた。彼等の理想がたゞちに、今日に於て實現せられるとは思はれないが、またフランス人が十九世紀初期の慘ましい復位期（レストラシオン）の經驗をふたゝび嘗めようとは思はないが、今日にいたるまで如何にフランス人一般が L' unitér de la nation を求めてゐるかは明かなことである。綜合統一の傾向に向つてゐるかは明かである。

四

フランス人のよくいふ語に、「人道は床上に轉々反側す」"L' humanité se tourmente sur le lit"といふことがある。卽ち彼等はこの轉々反側のあひだに、身の行く末を、國民としての執る可き途路を、見出さんと惱んでゐるのである。この間に殆ど彼等が、自國の過去の歷史に於て世界の文明のためになして來た効果をかんがへ、未來に於て果す可き使命を思ひ、次代の若き者共に導くために、國民敎育の根本を立てようとしたのであつた。

暫く彼等の言ふところに從つて、フランス文明の効果を見てみよう。彼等によれば、第一に彼等がなしたる文明の解放は、ルネエサンスであつて、これは智識の解放といふ可きで、古代ギリシヤ、ローマの文明と、「第三の古典」といはる伊太利の文化を卒先して歐羅巴に紹介し、それによつて一種集成したる藝術を作り出したるものは第一に彼等である。

第二には宗教の改革であつて、彼等に從へば、ルーテルのなした宗教改革は、眞のデモクラテイツクの改革ではない、寧ろその國の統治者の都合よき、所謂狹き意味のナショルナルな改革である。自國のカルヴアンスによつてなされたる改革こそは、眞の宗教の解放であり、これが如何に近代文明をデモクラテイツクに導いて行つたかは文明史上明かな現象である。

次ぎには、謂ふまでもなく佛蘭西大革命である。これは政權の解放であり、一時は自分等に反對したものまでも次第次第にこの解放の恩波に浴せずにはゐられなかつたではないか。これから先きに橫つてゐる文明史上の解放は何であらうか、それは「所有の解放」である。從來この樣々な解放の使命を果して來たフランス人が、今後に於て研究す可き問題としては、この所有權の解放といふことである。これは何人たるを問はず、殊に若き時代の人々にとつては、解放す可く殘つてゐる大問題であつて、現時の文明は如何にしても一度では、この關門をくゞらずしては、進むことは出來ない。ただそれを如何なる手段によつてなす可きか、それを考へ、それを實現することに、今後の文明の進む可き路が橫はつてゐるのである。

これ等はリセエ（中等學校）に於て用ゆる、フランス文明史の教科書に於てさへ明示してある點であつて、かくして過去の歷史と未來の進路とを明かにして、一國文明の指導をなしてゐるのである。かくて自國文明に對する自信と抱負とを明かにして、國民の元氣作進に努めたのであつた。

五

千八百九十年、ドレフユ事件なるものが生じた。これはドレフユなる一人の猶太人が、軍機の祕密をぬすんで敵國に賣つたといふ嫌疑のもとに獄に投ぜられたのであつた。これは單なる一事件の如くに見ゆるけれど、その當時の人々にとつては、一大事件であつた。一方に於ては、それが爲め一種の衝動を感じ國民的意識を一層明かにする機會は與えられたと同時に、人種の差別といふ觀念が多少ともフランス人の胸裡に浮び上つた。今日でもよくフランス人が言つてゐる。ドレフユの爲に我々は初めて目が醒めたような氣がしたと。卽ち油斷はならないといふ考へが出て來たのである。

當時のあらゆる階級の人々、政治家、文學者、一般思想家をとはず、殆ど全フランスの論壇が二派に分れ、ドレフユ

ザール（ドレフュの味方）、アンテイ・ドレフュザール（反對者）として爭論した。シャル、・モオラスが L' action française を創設したのもその時代であり、これによつて國民的感情の歸一を求めようとし、エミイル・ゾラがその反對に立つて論戰し、アナトオル・フランスの批評となり、モオリス・バレスの「國民主義の爭論と數理」となつて表はれ、一事件のために、思想界全體が一大波瀾をまき起した。

ドレフュに味方するものは言ふ、單なる嫌疑のもとに、一個の人間を有罪と斷ずるは間違つてゐる。眞理は如何なる場合にも主張しなければならない。その反對者は、いやしくも一國の利害に關する場合は、多少の犧牲は覺悟しなければならないと。

この現象を解剖して見れば、個人を尊重するか、多數を尊重するかといふことに歸する。これを單に議論の上からいふならば、何とでも解決はつくであらう。實際上の問題として、その議論を具體化するとき、いつ如何なる場合に於ても同一の處知がとれるであらうか。論理を徹底し、究極に達せずんば止まない、所謂議論ずきなフランス人等がその當時、如何に熱狂したかは思ひ半ばにすぎる。そしてその熱狂の間から、彼等は個人意識と國民意識と個人の價値と、多數の要求との教訓を如何に明亮に學び得たことであらう。

これは事件そのものとしては、一小事件にすぎないけれど、最近フランスの文明史上に於て忘る可からざる、國民訓練の大事件であつた。

傳統の精神と、宗教の情緒と、過去の歷史に對する自負と、外來の刺戟と、これ等があつまつて、次第〳〵に國民精神を振興し、綜合統一ある生活に向はしめ、愛國的精神は到る處に充實し、內面的フランスの復興は、廿世紀の初頭よりしてあらはれて來たのである。英國人等の所謂 France herselfr again といふ姿は見られたのであるが、併し、愛國の精神は必ずしも主戰論とは結び付かない。過去の光榮を戰ひに於て取り返す、國民全體を戰爭の慘禍の中に沈ましめても、復讐の一念を果たすといふ事が必ずしも、必然的な愛國心の發現とは見られない。今日の日本に於てならば、非戰論と愛國心の結合が可能であることは理解せられるであらう。いや、或る場合には、非戰論こそは、更に深い愛國の結果であることも了解せらるゝであらう。次ぎにその當時、フランスに於ける愛國的主戰論と、愛國的非戰論の解剖をしてみようと思ふ。（未完續載）

遺　言

大　杉　榮

一昨年の二月頃だつた。或日、突然明治大學の學生から電話がかゝつて來て、今大學の講堂で學藝部の演說會をやつてゐるから、直ぐやつて來て何にか話してくれと云ふ。

其の演說會のある事はかねてHから聞いてゐた。法政經濟專門の學者の意見は聞きあきてもゐるし、それにとかく國家とか政治とか法律とかの何等かの權威に囚はれた說ばかりで面白くもないから、こんどは全く方針を變へて、文藝方面の新思想家を招きたいと云ふ話から、其の人選の相談にもちつと與つた。そして辯士の一人として生田長江君を紹介して置いた。しかし僕自身が其の會に招かれようとは夢にも思はなかつた。僕なぞがさう云ふ會によばれるのは、絕對的にと云つてもいい程に、先づない事であつた。現に此の十幾年ばかりの間に、幸德が一度早稻田大學で講演したのと、堺が一度慶應義塾大學で講演したのと。二度だけしかない。尤も僕も一度、二三年前に早稻田の何んとか會から呼ばれかかつた事はあるが、何にかの都合で中止になつて了つた。滅多にはない機會だ。是非出て見たい。しかし呼ぶにしても餘りに突然な呼びかただ。それに、二週間ばかり前から疑似赤痢とも云ふやうな病氣にかゝつて、漸く一二日前から普通の食事を許されて、まだ寢床に橫はつてゐた。電話をかけに二階から下へ行くのでさへ、からだがふら〳〵する。とても明治大學まで出掛けて行つて演說なぞの出來よう筈がない。で、其の譯を云つて、殘念ながら斷つた。

『しかし、同委員會で是非先生にもと云ふ事にきまつて、私が其のお使者に立つたやうな次第なんですから……ほんのちよつとお顏を出して戴くだけでもいゝんです……ちや、誠に恐れ入りますが、どうぞ直ぐお出でを願ひます。』

と云つて電話はきれた。

向うでも顏だけ見せればいゝと云ふんだ。こつちでも元氣のいゝ學生達の顏を見るだけでもいゝ。とにかくいゝ機會だから行つて見よう。僕は卽座にさう決心した。そして相憎く財布が空だつたので、菊坂の下宿からひよろ〱歩いて駿河台まで行つた。

講堂にはいつて見ると一ぱいの聽衆だ。座席が足りないでうしろの方に大勢突つ立つてゐる。そして其の餘りが廊下にまでも溢れてゐる。千人餘りはゐさうだ。講壇では生田君が例の氣取つた身振り口調で、生田君獨得の社會問題の話をしてゐる。僕は講壇の横の辯士席に、馬場孤蝶君のそばに座を占めた。

生田君は先日來の、社會主義候補者たる堺の選擧運動の應援から、大ぶ社會問題に油が乘つてゐた。ふだんの雄辯よりも一層の雄辯をふるつてゐた。場内には若い生氣が充ち滿ちてゐる。僕は直ぐに此のアトモスフアに同化されて了つた。途中で一二度引つ返さうかとまで思つた疲れたからだをも忘れて、何にか氣焔を吐いて見たい氣持になつた。そこへHがやつて來た。

『演題は何んとして置きませう。今あそこへ張りつけようと思ふんですが。』

Hは小聲で斯う云ひながら、講壇のうしろの張紙を指さした。僕の名の上には演題未定としてある。

『あの儘でいゝぢやないか。實際まだ未定なんだから。』

『えゝ、しかしそれでも困りますから、何にか題を……』

『こつちも困るよ、さう早急ぢや……』

と僕はちよつと考へたが、勿論さう急に題が出來るものでもない。何にを話さうかすらまだ決まつちやゐないんだ。しかしHが笑ひながら默つて僕の返事を待つてゐるのを見ると、何んとか云はなくちやならん。

『ではね、何にを話すか知れんが、とにかく座談とでもして置いてくれ給へ。』

僕は仕方なしに背つて自分の雜誌で或る雜錄につけた題を思ひ出して云つた。そしてHが行つて了つたあとで、こんな事を考へてゐた。先づ病氣の云ひ譯をして、演壇に椅子を持つて來て貰つて、そこへ腰かけながら何にか喋舌つて見よう。

さう決めて僕はそばにゐた馬場君の方を見た。馬場君も生田君と一緒に堺の應援に加はつてゐた。僕は二人ともよく思ひ切つて堺の選擧演說なぞに出たものだと思つてゐた。そして今、恐らくは人並みはづれた喫烟からだらうと思はれる馬場君の妙にくすぶつた、其の生活や年齡から見ても少しやつれ過ぎた顏を見ながら、ふといつか馬場君が話した其の亡兄の遺言と云ふのを思ひ出した。

『私への直接の遺言ではないんですがね。とにかく兄貴が或る人を介して私に傳へた、まあ遺言とも云ふべきものが、たつた一つあるんです。しかもそれが大ぶ變つた遺言だから面白いんです。日本のやうな國では、何にか少し人間らしい事をしようと思へば、どうしても○にはいらなくちやならぬ。だからお前も其のつもりでうんと勉强をしろ。と云ふんですよ。ところが、どうも、此の遺言はなか／＼果せさうもないんで……』

馬場君が笑ひながら話した此の言葉が今ふいと僕の頭に浮んだ。

『さうだ。此の事を話しよう。』

僕は思ひがけないいゝ話の材料を捉へたので、話の順序の腹案をしに、中庭へぶらつきに出た。

斯うした僕がそとへ出てゐる間に、生田君の話も濟み、有嶋生馬君の誰れだつたかの西洋の畫家の話も濟み、馬場君の近代社會文藝に就いての話も濟んだ。そしてあと一人で、いよ〳〵最後の僕の番になつた。

其の間に僕はちよつと委員室に入いつてお茶を飲んで休んでゐた。すると、一人の委員があはたゞしく室の中へ駈けこんで來た。

『おい、また警察から電話だよ。今日の演説會の責任者に出てくれとさ。』

『また、さつきの事なんだらう。うるさい奴だな。で、君は何んと云つたんだ。』

『うん、大杉先生を呼んだのは誰れだの、先生は演説をするかの、演題は何んだのと、いろんな事を聞きやがるんだ。僕は面倒臭いから何んにも知らんて云つて來たんだがね。とにかく待つてるんだから、誰か出てうまくやつてくれよ。』

『本當にうるさい奴だな。ぢや、二三人で行つて、皆んなで電話口でわい〳〵云つて、それでもまだ何にか面倒な事を云ふやうだつたら、構ふ事はねえ、直ぐ電話を切つちやおうぢやないか。』

『さうだ、それがいゝ、それがいゝ。』

若い三四人の學生がドタバタと電話室の方へ駈けて行つた。そして暫くすると、皆んなで大きな聲でアハヽアハヽと

笑ひこけながら歸つて來た。

『とう〳〵切つちやつたんですよ。奴等は不意打を食つて大あはてにあはててゐるんですがね、なあに構ふもんですか。』一緒に行つたHが、また腹をかゝへながら、笑つて云つた。そして、

『しかし、とにかく邪魔のはいらんうちに早くやつちやおうぢやないか。』

と皆んなに云ひながら、

『先生もどうぞ上へ。』

と云つて、皆んなで又講堂の方へ駈け出した。僕も其のあとへ隨いて行つた。講壇では學校の講師の何んとか云ふ人が何にか話してゐた。委員の一人は何にか紙片に書いて講壇の上へ持つて行つた。其の講師はそれを見ると、急に話をいゝ加減に端折つて講壇から下りた。そしてHが聽衆に僕を紹介した。

盛んな拍手が起つた。僕はもう、さつき考へてゐたやうな、椅子に腰かけて話さうなぞと云ふ呑氣な心持ではゐられなくなつた。そしてとう〳〵、苦しいのを我まんしいしい、一時間餘り喋舌り續けた。

僕が何にを喋舌つたかは、今はもう詳しくも覺えてゐないし、又こゝでそれを發表する自由を持つてゐさうもない。

僕は演壇から下りた。委員のHは閉會を告げた。すると、いつの間にかはいり込んでゐた刑事共が、委員等をつかまえて、僕の演說の筆記を渡せと强請んでゐる。僕は直ぐに、速記者の筆記を奪ひ取るやうにして取つて、ストオヴの中へ入れて了つた。そして呆氣にとられてゐる刑事共をあとに殘して歸つた。

あとで聞くと、警察では其の手ぬかりを掩ふ爲めにいゝ加減な報告をしたので、其の筋でも從つて學校でも大した問題にはならずに、たゞ危險人物の僕を呼んだと云ふかどで委員等が辭職しただけで事は濟んだ。

レニンのユトピア

室伏高信

一

私がこゝにレニンのユトピアといふ時に、私は無條件にはこの言葉を使ふことはできないであらう。何故なら、レニンは疑もなくマルクスの門徒であるからである。勿論、私がこゝにレニンをもつてマルクス門徒であるといつてゐることは、レニンにおいて、唯一つのマルクス門徒を見出してゐるといふのではない。マルキシズム即ボルシエヴヰズムであるかどうか。レニンに從へば、ボルシエヴヰズムにおいてのみ、眞正のマルキシズムが存在する。そしてプレフアノフもカウツキーも、ヴアンダアペルトもあらゆる第二インタナショナルの戰士――『黄いインタナショナル』の戰士は、みな悉く俗學者であり、阿諛者であり、『國民自由主義者』であり日和見主義者であり、『マルキシズムの淫賣婦』である。マルトフやチエルノフや、シヤイデマン、エーベルトや、ルノウデル、ロンゲーや、マクドウナルド、ヘンダアソンや、ブランチングや、チユラチや、いふまでもなくみな變節漢である。如何に變節漢の多いことであらう！　レニンの毒舌のもとには、あらゆるマルキシズムの古るき頭領達は、正統派の何んであるかも問ふところではない、何人が謂ふところのレビチヨンストであるかも問ふところではない。一切の第二インタナショナルの戰士達は包括的にレビヂヨニストである。一切が墮落者である。一切が變節漢である。一切が『淫賣婦』である！　そしてボルシエヴヰズムのみ獨り眞正のマルキシズムである。『かくのごとき事情のもとにおいて、マルキシズムの曲解がかくのごとくに瀰漫してゐる時に、われ等の第一の仕事は國家の問題についてのマルクスの教儀の眞正なる性質を蘇生せしめることである』――レニンは

かくのごとき確い信念のもとに彼れの『國家と革命』を書いた。彼れの『國家と革命』がマルキシズムの文獻としてどれだけの權威あるものであるかの問題はこゝに問題とはしない。ボルシエヴヰズムが果して眞正のマルキシズムであるか否かの問題はこゝに問題とはしない。しかしこの問題を肯定すると否定するとにかゝわらず、レニンは疑もなくマルクス門徒である。レニンとカウツキーの相違はマルキストと非マルキストの相違ではなくしてマルキシズムが如何に解釋されるかの區別である。そして最も興味ある區別である。カウツキーに從へばレニンのごとくに。プロレタリアの獨裁政治を、レギエルングフオルムとして考へてゐるものは、マルクス・エンゲルスの名を引用するの資格のないものである。しかしかくのごとくに、レニンをもつてマルクス・エンゲルスの名を引用することはできないと論じてゐるカウツキーですらも、『ボルシエヴヰキはマルキストである』――カウツキーはその『プロレタリアの獨裁政治』の卷末においてかくのごとくに述べてゐる。マルクス・エンゲルスの名を採用することのできないレニン！そしてマルキストであるレニン！、矛盾でないと誰れがいふであらうか？しかしその矛盾は、それが矛盾であるといひうるならば、そはいふ人の矛盾であるといふよりは、寧ろマルキシズムそのものゝ矛盾ではないであらうか。否、私はこの問題に深入りすることの必要はないのであつた。私はこゝにはカウツキーが卒直に認めてゐるとほり、レニンもまたマルクスの一門徒であるといつて置くだけでいゝのであつた。マルクスの門徒としてのレニンにユトピアがありうるであらうか。ユトピアン社會主義の最大の嘲罵者としてのマルクス・そのマルクスを父と仰ぐレニンにユトピアがありうるであらうか。『勞働階級は實現すべき理想をもたない、たゞ古るき崩壞しつゝあるブルヂョア社會それ自身が胚むでゐる新社會の要素を解放するほかには』――これレニンの父としてのマルクスがその『フランスにおける内亂』のうちで喝破したところの、有名な一節であつた。『勞働階級は實現すべき理想をもたない……』――果たして勞働階級は理想をもたないであらうか。勞働階級は實現すべき理想をもたないといつたマルクスは果して理想を說かなかつたであらうか。私はこゝにはこの問題にも深入りをするとの必要はないであらう。そして直にマルクスの言葉を引用すればそれで充分である。何となれば、私

の謂ふところのレニンのユトピアが、どこから生れてきたものであるかはこれによつて知ることができるであらうし、またレニンのユトピアの淵源を知ることだけがこゝには必要な要點であるからである。マルクス曰く

『共産社會の最高相において、分業の原理に服從することから起因する人間の隷屬がなくなつた後に、これとともに精神勞働と體力勞働との對抗がなくなる時に、勞働が單に生活を支持するの手段であることが止むでそしてそれ自身が生活の第一の必要事となる時に、個人の完全なる發達とゝもに生産力もまた完全なる發達に達しそして凡ての社會的富のあらゆる力が連綿たる急流を注出する時に、――この時においてのみ全然ブルジョア法律の狹隘なる地平線を超えることができるであらう、そしてこの時においてのみ社會はその旗幟に次のごとく書きつけることができるであらう、「各人からその能力に從つて、各人に彼れの必要に從つて」と』

この一節はマルクス主義の研究者が何人も知つてゐるとほり、マルクスがそのゴータ綱領の批評において述べたところの有名な一節である。『各人からその能力に從つて、各人にその必要に從つて』――この原則こそマルクスにおいての『共産主義の最高相』であつた。そしてまた同時にレニンにおいての共産主義の最高相であつた。(レニン「國家と革命」及びレニン「共産土曜」參照)

二

ブルヂョアのイデイオロヂイから完全に解放されることのできない人達の陥るところの病は、平等の名に憧憬をもちながらも、尙ほ平等の原理を利己的に考へてゐることである。この人達は、私有財産制度においてのみ、自由が保證されると考へてゐる。そして私有財産制度の撤廢から新奴隷制度が生れるもののように考へてゐるのである。プルウドンは夙にこうした考の持主であつた。彼れの『財産とは何んぞや』を讀むだものは、財産において彼れが如何に多くの害惡の體現を考へてゐたかを思ふであらう。そしてまたこのプルウドン、財産は偸盜であると叫んだプルウドンが、その

財産論の終りにおいて、財産の撤廢を主張することができないで、彼れが『共産主義と財産』とを二つながら要求したことを忘れることはできないであらう。何故にプルウドンは『財産』を要求したか。彼れは何故に共産主義に滿足することができないで更に『財産』を要求したか。彼れは『共産主義』においては『獨立』と『比例』がないからだといふのである。何故に共産主義においては『獨立』と『比例』とがないであらうか。プルウドンに從へば個人的獨立とは各人の才幹能力の相違から生るゝものであり、そして與へられるものがこの才幹能力に比例してのみ社會的正義または社會的平等が存在するからであるといふのである。即ち人々は、彼れの能力に從つて働き、そしてその能力に應じて報酬を與へられる時においてのみ平等が存在するといふのであつて、こゝにプルウドンが共産主義と財産とのシンセシスを自由と呼んでゐることの根本の理由が存在してゐるのである。ラサルレが勞働者によつての勞働の全果實の收受を主張した時にも、私達は、彼れがまだ徹底的に、ブルヂョアのイデイオロヂイから解放されてゐなかつたことを知るのである。總じて私有財産制度においてのみ自由が維持されるものであると考へてゐる人達——ベロックやチエスタアトンのやうな分産主義者も、そしてまた總じて賃銀制度の撤廢に想到することのできない人達——コレクチヴストの諸君は、ブルヂョアのイデイオロヂイに囚はれてゐる人達である。マルクスが彼れの謂ふところの『共産社會の最高相』を想像してゐた時には、彼れは明らかにブルヂョアのイデイオロヂイから完全に解放されてゐたといふことができるであらう。レニンにおいても同じである。何となれば彼等は既に各人の能力に從つて各人の報酬が決定されべきものであるといふ資本主義の經濟學から完全に解放されて、その反對に、能力に從つて働き、そして受くるものは、能力の如何を問ふことなくして、各人の必要に應じて社會から受取るべきものであるとするの、新らしい道徳的境地に想ひ到つてゐるからである。この道徳的境地こそ實にプロレタリアによつて創造せらるべき新社會の新道徳である。繰返していへばブルヂョアのイデイオロヂイが能力と報酬との均衡においてのみ平等が存在すると觀念してゐるのに對し、プロレタリアのイデイオロヂイは、『各人からその能力に從つて、各人にその必要に應じて』の最高法則からその一歩を初めるものであるとい

ふのである。レニン主義がこのプロレタリア道德の最高法則を理想としてゐることは、彼れをしてプロレタリア運動の最高思想から共鳴せしめるところの最大の理由である。何となれば人々がその勞働の全果實を欲求してゐる時には、人人は尙ほラッセルの謂ふところの所有慾を中心とするの生活を生活してゐるのである。所有慾を中心とするの生活こそ實にブルヂョア社會生活の精髓であつて、この種の社會の產出したものが經濟的には私有財產制度の極度の發達である。從つてこの種の社會生活においては、勞働の報酬は勞働能率に順應するものでなくてはならない筈であつて、『結果拂ひ』の制度のごときものは、かくのごとき社會生活においての勞働の報酬を律すべき最高の規準であつて然るべきである。しかし勞働の結果によつて人々が勞働の報酬をうけとることは、人々がその勞働を商品として賣ることである。この勞働商品主義から解放されようとするものは、勞働の報酬が、能力に應じてゞはなく、また人々の勞働が報酬に應じてゞはなく、かくのごとき唯物的觀念を一蹴して新らしい道德的境地を創造しなくてはならない。この新道德的境地とは、かくのごとき唯物的思想を超越して、勞働の物質的報酬の如何にかゝわらず、人々が自發的に全人類の理想を彼れの個人の自由なる發展のために無强制に勞働するところの道德的社會でなくてはならないからである。この種の最高理想は、クロポトキンの無政府共產主義においても理想とするところであり、またわれ〳〵が最も多く興味をもつてその思想の發展に注意しつゝあるギルド・ソーシャリズムにおいての理想郷とするところであつて、ギルド思想の父としてのウヰリアム・モリスの News from Nowhere からクラムの Walled Town に至るまでの、あらゆるギルヅマンのユトピアに一貫するところの大精神である。モリスがその理想郷において、勞働の報酬はライフである。ライフそのものであるといつたことも、クラムがその理想郷において『正義と名譽と騎士道とそして同胞的協同の失はれたる理想の復歸』といつてゐることも、みなこのプロレタリアの新らしい道德的境地を表現してゐるものであつて、レニンの謂ふところの『共產社會の最高相』なるものもまた實にかくのごとき理想郷であるに外ならないのである。

三

『各人からその能力に從つて、各人がその必要に從つて』――こうした原則の行はるゝ社會とは如何なる社會、または社會進化の如何なる狀態をいふのであるか。私は先づクロポトキンの場合について考へて見たい。クロポトキンの無政共產主義を研究し、そして同時にレニンの謂ふところの『共產社會の最高相』について研究するものは、この二つの共產主義――レニンの書いてゐるところの共產社會と、クロポトキンの書いてゐるところの共產社會との間に符節を合するごとき一致を見出すであらう。クロポトキンはその小冊子『無政府共產主義』のうちで次のごとくに述べてゐる。『アナーキストは、コレクチヴヰストのやうに、各人がその富の生產において費した勞働時間に比例する報酬を理想であると考へることはできない』と。また續いて次のように述べる。『われ〳〵は社會の公平な組織はたゞ凡ての賃銀制度が撤廢された時に、そして、各人が彼れの全能力を傾けて一般の幸福のために寄與して、社會の共同の倉庫から彼れの必要の最大可能の範圍において受取る時においてのみ考へることができる』と。(同書廿頁及廿一頁)即ちレニンにおいてのごとく、クロポトキンの共產主義においても、その社會においての謂ふところの平等なるものは、ブルウドン流の比例的、唯物的、ブルヂョア的――不平等を基礎とする平等、從つて不平等そのもの――ではなくして、勞働能力の如何にかゝわらず、勞働能率の如何にかゝわらず、各人は社會の共同倉庫からその必要だけの生活品を享受することができるといふのである。そしてクロポトキンのこの共產社會はクロポトキンに從へば單に願はしいものであるばかりではなしに、また實に近代社會の傾向(growiug tendency)が正確に共產主義に向つてゐるといふのである。かくのごとき社會こそクロポトキンに從へば共產主義――『自由共產主義』の社會であつて、そはアナアキスト・コムミユニズム、『政府なき共產主義』であり、そして『人類がその歷史の曙光以來追及してきたところの二つの目的――經濟的自由及び政治的自由のシンセシスである』と(同書廿二頁)これに對しレニンにおいての共產社會――『各人からその能力に

從つて、各人にその必要に從つて』の社會は如何なる社會であるであらうか。レニンに從へばその社會は先づ無國家の社會である。彼れは凡ての無政府主義者と同じく自由と國家とは兩立の出來ないものであると考へてゐる、『國家が存在してゐる間は自由はありえない。自由が存在する時には國家は存在しないであらう』――レニンはかくのごとくに解してゐる。彼れにおいては國家とは恐く壓迫の機關である。それは恐く一階級が他階級を征服するための機關である。強力といふことが國家の本質であり、そしてそれは階級の存在を前提とするものである。階級なくしては國家なるものがなく、階級の成立とともにその階級によつての階級征服の機關として國家が存在してゐるのであつて、ヘーゲル流の倫理的理想の實現として國家が存在するのではなく、『自由國家』などといふものは幻想であるに過ぎないと。即ちレニンの謂ふところの『共產社會の最高相』なるものは、國家のなき社會であつて、『各人からその能力に從つて』の大原則は無强制に、各人の自發的に行はれて滯ることなき道德的社會である。しかしそれはただ階級的壓迫の機關としての國家なき社會であるのみではなしに、また民主主義の存在することのない社會であることに注意しなくてはならぬ。レニン曰く『國家の破壞はまた民主主義の破壞を包含する。國家の死滅は民主主義の死滅を包含する』と。(『國家と革命』第八四―五頁)また曰く『民主主義が完全になればなるほどそれの必要の終熄する瞬間が接近する』と(同書一〇五頁)即ち民主主義なくして『各人はその必要に從つて』の大原則が自由に行はれるところの道德的世界である。繰返していへば國家と民主主義とがともに死滅しさつた瞬間において『連綿たる急流を注ぎ出す』ところのものがレニンの謂ふところの『共產社會の最高相』であつて、それはレニンに從へばマルクス、エンゲルスが夙に豫想して居つた社會進化の狀態であると。だからこの點からいふと、レニンのユトピアとクロポトキンのユトピアとの間に、私たちは何等の區別をも認めることはできないであらう。クロポトキンも國家を排斥する。凡ての國家を壓迫の機關として排斥する。レニンにおいても凡ての國家は壓迫の機關である。共產主義は國家への道ではなくして國家の死滅への道である。民主主義の場合においても同一である。否、民主主義の廢滅もまた無政府主義の特質である。ゴドキンの『政治的正義』からウエークマン

の『無政府主義と民主主義』に至るまで、無政府主義の歴史は民主主義への反感の歴史である。ゴドヰン曰く、民主主義とは『政治の制度』であると、また曰く、凡ての政治――『それの最善の状態においても』『政治は害悪である』と。ウエークマンは曰く、『私は木葉微塵にすることを求める、あなたの迷想、オヽ民主主義！』と。

四

無政府共産主義とレニンにおいての共産主義との相違はレニンのいつてゐるとほりに國家を承認するか否かの點に存するのではない。また從つて『國家の形式としての民主主義』を承認するか否かの點に存するものでないことも明白である。レニンの共産主義においてのユトピア――レニンに從へばそは決してユトピアではない。これをユトピアだといふことは、レニンの共産主義、そしてマルキシズムについて無知であるがためであると。（『國家と革命』九十九―百頁）何故にそはユトピアでないか。レニンに從へば、レニン主義においては、『共産主義の最高相』を『約束』するものでなくしてたゞ『豫見』してゐるに過ぎないからであると。そして曰く、『偉大なる社會主義者』はかくのごとき社會の到來することを豫見するのであると。（同書百頁）『偉大なる社會主義者』は『豫見』はするが『約束』はしないと！　然り、豫見はしても約束はしないといふところが、レニン主義がユトピアでない所以であつて、また同時に『偉大なる社會主義』である所以であるのであつて、こゝに無政府共産主義とレニンの共産主義との唯一の區別が横はつてゐるわけである。何となればクロポトキンは、無國家の社會を『豫見もすれば『約束』もするからである。然らばレニンの『偉大なる社會主義』は何故に豫見するだけであつて約束はしないか。また果してそは『約束』しない『偉大なる社會主義』であるか或はまた約束する『偉れなる社會主義』であるか、この點を明らかにすることはレニンの謂ふところの『社會主義』と『共産主義』との區別に入つてゆくことである。嘗つて福田博士は、社會民主主義は梯子段であるといつたことを私はこゝで思ひ出すものである。そしてその社會民主主義梯子段論を證據立てるために福田博士の最近の論文（『マル

キシズムとしてのボルシエヴヰキズム）はカウツキーの『民主主義か獨裁政治か』の一書を擧げてゐる。併し惜い哉、此書物はカウツキーの『プロレタリアの獨裁政治』の一部分であつた。（無論序文は變つてゐるが）若しも福田博士が『プロレタリアの獨裁政治』の最後の一章を讀むだとしたら、あゝした冒險的な態度はとらなかつたであらう。何となればカウツキーはこの書物の最後の一章即ち『新理論』と題する一章において、社會民主主義梯子段論に論及してゐるからである。そして明白適切にかくのごとき梯子段論に反對を聲明してゐるからである。カウツキーがかくのごとき梯子段論に反對してゐることは彼れがレニン説を攻撃せんがためであつた。梯子段論は福田博士の發見ではなくレニンこそ實に『梯子段論』の達人であつたといふことを、彼れの『國家と革命』を讀むものゝ何人も見落すことはできないであらう。レニンの『國家と革命』のうちには、『プロレタリア革命においても同樣に、幾つかの梯子段が掛かゝつてゐる。この梯子段を名づけてレニンは民主々義といつてゐる。彼れ曰く、民主々義とは『たゞ封建主義から資本主義へ、資本主義から共產主義への發展の徑路における段梯の一つである』と（『國家と革命』百〇二頁）この採用によつて見るとレニンの謂ふところの梯子段は二つであるわけであるが、レニンの梯子段論はこの二つだけで行詰つてゐるのではない。資本主義から共產主義への梯子段の次ぎにも一つの梯子段がある。この梯子段は彼れの謂ふところの『共產社會の最高相』への梯子段、最後の梯子段である。即ち合せて三つの梯子段があるわけであるから、レニンの梯子段三つ論は福田博士の梯子段二つ論よりは、二つだけ複雜な世界である。そしてレニンに從へば、この第一の梯子段即ち封建主義から資本主義への梯子段がブルヂョア民主主義であり、第二の梯子段即ち資本主義から共產主義への梯子段が『高級民主主義』であり、最後の梯子段即ち共產主義の第一相から最高相への梯子段が彼れの謂ふところの『完全なる民主主義』である。從つてレニンが登りつゝある梯子段、そして登らうとする梯子段は先づ『高級民主主義』であつて次ぎが『完全なる民主主義』であり。そしてこの最後の梯子段の頂上に攀ぢ登つた瞬間に、花咲き鳥笑ふユトピア――『各人からその能力に從つて』の大原則が自發的に行はれ、『各々その必要に從つて』の大原則が自由に行はれる。ユトピアに非ざるユトピ

アが展開するのである。これぞレニンの『共産社會の最高相』であつて、かくのごとき最高相は『偉大なる社會主義者』が豫見してゐるところの社會發展の最後の狀態である。

五

ボルシエウキズムが最初に攀ち登らうとする梯子段は謂ふ所の『高級民主主義』である。『高級民主主義』とは如何なる狀態、否、レニンに從へばそは狀態即ち、ズスタンドではなく、またレギエルングスフオルムでもなく、實に一つの國家制度であるのである。『民主主義は國家の形體である』といふレニンの民主主義論の根本原理は勿論この場合にも當て篏まるのであつて、謂ふところの『高級民主主義』はまた『高級の國家制度』である。高級の國家とはブルヂョア國家に對するプロレタリアの國家である。プロレタリアの國家といふことの意味はカウツキーの解してゐるやうなプロレタリアが優越なる狀態即ちズスタンドをいふのではなくして、福田博士が解してゐるごときプロレタリアのみをデモスと認めるところの國家制度である。そはレニンが一九一八年四月廿八日の演說において述べてゐるとほり、『勞働するところの、そして絞取されてゐる民衆』にのみ選擧權を制限して所有階級から選擧權を剝奪するの制度であるとともにまたソヴヰエット憲法第三條第七項において規定せられてゐるとほり『勞働者を武裝し』そして所有階級から完全に武裝を剝奪するところの國家制度である。だからこの種の制度はカウツキーがその『プロレタリアの獨裁政治』第七章において述べてゐるとほり、かくのごとき制度は『人々の民主主義とはいはない』ところの制度であつて、エデン・エンド・セダアル・パウルが、その『創造的革命』のうちでデモクラチアといはずしてエルガトクラチアがあるといつてゐるものがそれである。しかし、福田博士はこのエルガトクラチアをもつて社會民主主義と名付てゐるのであるがレニンは寧ろ社會民主主義の名を不合理であるとなして『プロレタリアの民主主義』または『高級民主主義』といつてゐるのである。それはレニンに從へばボルシエヴキキが一九一七年の最初から繰返して主張したところであつて、「『プロレタリア革命』五十

一頁）この種の國家制度がレニンの謂ふところのプロレタリアの獨裁政治である。否、レニンに從へばマルクスがその一八七五年のゴータ綱領の批評において『プロレタリアの革命的獨裁政治』(revolutionäre Dictatur des Proletariats)といつたことがこの國家制度を指してゐるのであるのであつて、マルキシズムの精髓がこの點に存在するときは、彼れの獨裁政治の根本原理であり、そして同時にボルシエウヰズムの根本原理をなしてゐるのである。このディクタトウルの任務とするところはブルヂヨアの國家制度を、從つてブルヂヨア、デモクラシイを打破することであるが、このディクタトウルの梯子段の後に來るところの最後の梯子段がレニンの謂ふところの『完全な民主々義』である。この『完全な民主々義』はレニンに從へば最早やディクタトウルの國家制度ではなくして共産主義の國家制度である。そしてそは完全な共産主義の制度ではなくして、『共産社會の第一相』と稱せられるものがこれである。そしてレニンにおいての『社會主義』の社會なるものがこれに當るのである。レニン曰く、『共産主義の第一相は尙ほ依然として正義と平等とを産出することはできない。富においての區別、そして不正な區別が尙ほ存在するであらう』と。また曰く『共産社會の第一相においては、ブルヂヨアの正義は完全に打破されてはゐない。たゞ一部分、たゞ經濟的變轉の到達された範圍に比例してのみ、卽ち共産手段に關してのみ打破されてゐるのである』と。(『國家と革命』九六—七頁) 卽ちレニンにおいての社會主義の社會とは、完全な共産主義の社會ではなくして、生産手段が社會化されて、この生産手段の私有制度からめつたに不合理と不平等とがなくなつた社會を指すものであるが、それとゝもに、この種の社會においては、『ブルヂヨア正義』は未だ完全に打破されてゐるのではない。『ブルヂヨア正義』は未だ跡を止めてゐるのであつて、ブルウドン一流の自由の狀態である。繰返していへばこの種の社會において謂ふところの共産社會の最高相において見るやうな『各人からのその能力に從つて、各人にその必要に從つて』の大原則が自由に且つ自發的に行はれるところの最高の道德的社會ではなくして、『働かないものは食はない』といふ『社會主義の原理』が行はれるところの低き社會である。『働かないものは食はない』といふ原則の勵行される社會は、また『平等の勞働量に對する平等の生産量』の原則の行はれる社

會であつて、そはプルウドンの謂ふところの比例正義論から未だ脱却してゐない社會であるのである。そしてまたこの種の社會制度は依然として國家制度の存續する社會であつて、國家は依然として武裝したる國家であつて、その國家は一大サンヂカに組織されてゐるのである。だから凡ての市民はこの武裝されたるサンヂカ――國民的國家、國民的範圍においての武裝的組合の雇人であつて、凡ての市民は賃銀制度のもとに、このサンヂカとしての國家から『平等の勞働に對する平等の支拂』を受取ることを許されるのである。（『國家と革命』百〇四頁）しかしこの種の國家もレニンに從へば決して彼れの理想ではなく、彼れの『最後の目的』からは遙に隔つてゐるものである（仝上百〇四頁）そしてそは單なる足掛けであり、梯子段である。この梯子段を登りきつた瞬間に花咲き鳥笑ふユトピアが生れる――生れることを『偉大なる社會主義者』が豫見するものであるといふことは既に述べたとほりである。しかしまたレニンに從へばかくのごとき最高相の社會は彼れの『最後の目的』であるといふことも今まで述べたとほりである。然り、レニンのユトピアは豫見するだけであつて約束はしない。そして約束はしなくつて『最後の目的』である！

六

かくのごとくにしてレニンの社會進化論は『約束』されてはゐないが『豫見』されてゐる。そして明瞭に豫見されてゐる。資本主義――ディクタトウル――社會主義――『共産社會の最高相』――といふ順序がこれである。他の公式をもつてすれば、ブルヂョア、デモクラシイ、――高級民主主義――完全民主主義――民主主義の死滅――といふ順序であり、國家についていへばブルヂョア國家――プロレタリア國家――簿記國家――國家の死滅――の秩序であり、運用方法からいふと、議會政治――ソヴヰエツト――サンヂカ――無制度――への順序である。その順序は明瞭である。恐らく何人も未だレニンのごとくに明瞭にそのユトピア、然り、『ユトピアに非ざるユトピア』を畫き出したものはないであらう。マルクスに從へばオーウエンも、フーリエーも、サン・シモンも、みなユトピアンであるが、しかしそのオーウエ

ンも、フーリエーも、サン・シモンも、彼等のユトピアを畫き出すことの才能においてはレニンの足もとにも及ばないのである。ユトピアの天才よ！　レニンはカウツキーの學究振りを罵しつて、彼れカウツキーがマルクスを論ずる時には、彼れは机の抽出しから物をとり出すようであるといつたことがあるが、レニンが將來の社會を論ずるのを見ると、丁度自分の抽出しの中から自分の入れて置いた品物を抽き出すように、明瞭的確である。そしてそれは『豫見』はするが約束はしない。『約束』はしないが『最後の目的』である！　最後の目的ではあるがユトピアではない。ユトピアでないユトピアである。然り、何といふ見事なユトピアであらう！　一部の階級に權力を專斷して、一部の階級に武力を專斷して、そしてそれは普通平等選擧よりも高い『高級な民主主義』である！　その『高級な民主主義』の主張者が、『ブルヂョア正義』の未だ殘存してゐる時に、即ち尙ほ階級が全廢されない時に、『階級と必然的關係があるところの、』——如何なる場合においても『何々階級の民主主義』でなくてはならない筈の民主主義が、『完全な民主主義』へと進化する！　そして民主主義が完全すればするほど、民主主義は死滅に近づくものである！　そして民主主義が死滅した時においてのみ『人々は自由を口にすることができる』！（『國家と革命』九二頁）何といふ見事な民主主義の使用振りであらう。民主主義は『高級』になつて、『完全』になつて、そして死滅する！　林檎の花が實になつて、果實が熟して、そして落ちる！　ニユートンの引力說こそ實にレニンの『唯物的社會主義』であつたのである。然り、科學的社會主義が『最後の目的』とするところは『自由』であつた。自由！　そして民主主義！　嗚呼、自由と民主主義ほど便利な言葉はなかつた。そして自由と民主主義ほどあらゆる人々を征服する、美しき名はなかつたのであつた。

他人に働きかける心持の根據について

倉田百三

人間には他の人間の群に對つて呼びかけたい願がある。今私は其のねがひが熱と潤ひとを帶びて心の中に高まるのを感ずる。私は話しかけたい。私は其の願ひを人間らしい、純なものとは知つてゐた。けれど私には其の願ひを行爲に移す路筋で心のなかに深い支障があつた。私は永い間默つてこらへて來た。そのために魘されるやうな氣がしながら。

私は私の師からも大衆に向つて話しかけることを誡められて居る。それは今の私の器量では他人に働らきかけるのは他人を傷けることだといふ道德的の理由からである。私は師の心を察して涙ぐむ。しかしそれにも拘はらず、私は今これから他人に向けて働きかけやうとしてゐるのだ。私は今の世の多くの人々が私に話しかける心持の根據の說明を迫るほど、他人の運命を畏れる心を持つて居るとは信じない。それらの人々には私の用意は餘計な心使ひとも見えやう。併し私には師の慈悲深き澁面が見ゆるやうな氣がする。私の心の奥に君臨する裁き主の前に uneasy な氣がする。それ故私は半ば人に半ば自分に辯疏しなくては氣になるのである。

四、五年前まで私は何の苦も無く他人に話しかけ、働きかけた。そして其の膽氣と自由とを自ら誇つてゐた。けれど私は嚴しき試錬に遇つてその無智を罰せられた。人をも身をも損ひ傷けた。私はその時から畏れる心を知つた。他人の運命を傷けてはならない、我れとわが聖靈を瀆してはならないと。『私は生きて居る。私の周圍には他の人間や動物や草木が生きて居る。私らは同じ太陽の下にともに生きてゐる。私は彼等に愛を感ずる。彼らに觸れたい、話したい、働きかけたい。かくすることは凡ての生けるものゝ純な願ひで、そして善い事である』

私はかつてかく考へた。私は此の信念にジャスチイファイされて勇しく且つ公けに他人に働らきかけた。他の生命に觸れ、捕り、擁し、抱き、一つに融けやうとして喘いだ。そして其の結果は自他共に傷いたのである。その慘めな結果はその公の動機に對していかにしても不合理な氣がして私は天地を呪ひかけた程であつた。併し私はその時始めて地上の運命と、それに對する知慧とに眼醒めたのであつた。私は今までもその時の私の願ひをそれ自身惡いものと思はれない。若し此の世が天國であつたなら、善の法則に對抗する惡の法則が無いならば、知慧なき無邪氣のまゝで、すべての純な願ひは悉く容れらるべきである。求むる心は直ちに與ふる心に、愛は必ず感謝に出遇ふべきである。また他人を不幸にするやうな不調和な願ひは生じない筈である。私は今でも、きはめて現實的な氣持でかゝる國をあこがれる。併し地上には人間に負はされたる運命がある。私はそれを知らなかつた。私は今ではたゞ他人に呼びかけたいから呼びかけるのは淺いことを知つて居る。他人に無用意で働きかけたことを後悔して居る。それは自他の運命を損うたからだ。それは實に私の罪——過失であつた。さう云ふことを許して貰へるなら。併し過失もその報いから免れる事は出來ない。見よ私も、友も、彼の女も、妹も、皆その報いを受けて居る。それは償はれなければならない。私は恕して與れよと言ひたい。併し地上の禍惡は主もに人間の過失から生ずるのである。一旦の過失が永い悲哀を遺すのである。人間はやはり皆本來は神の子であるらしい。がたゞ惡魔に魅入られて居る。自ら企んで他人を傷けるやうな惡人はさう居るものではない。併し地上の約束を知らない無智を惡魔に乘ぜられるのである。そして自他の運命を傷けるのである。善良な人間の犯す罪は殆ど皆過失と云つてもよい。過失だからとて責任を免れる事は出來ない。現に自分の前に自分のために傷いた人がゐる時過失だからとて自らを責めずに居られやうか? あはれな子守が愛してゐる幼兒を負うて溝に轉んだ。子供は片輪になつた。大きくなつてもお嫁にも行かれない。その報いはいつまでも續く。假令その兒は恕してくれても、子守の心は一生傷くであらう。それに恐い事には一人の運命が狂ひ出すと、その周圍の人々の運命が共に狂ひ出す。罪は罪を孕み、不幸は不幸の因となる。私は佛教の「業」といふ思想を深いものと思ふ。私らの不幸なのも、祖先が積み重ね

た罪や過失の報いが深い因を成して居る。アダムとイブの過失から人類の運命が狂ひ出したといふ聖書の原罪の思想には深いグルンドがある。私たちは過失を恐れなくてはならない。けれど最も恐しいのは其の過失が自ら氣の付かぬやうな深所に、しかも道徳的な假面を被つて、自分の反省の屆かない域に潜んでゐる時である。其れを見出すのは知慧の深さに待たねばならない。聖人とはかゝる知慧の深い人の事であらう。昔から惡魔が聖者を試みた時にはかゝる一見道徳的に狡い方法を用ひてゐるのでもわかる。私らは自ら氣の付かぬのみか、善と信じてした事が、知慧の足りないために、却つて他人を傷ける結果となる事が多い。かゝる過失は心の純なイデアリストが却つて屢々犯すものである。そして最も深い過失である。私らは何故にかく過失に充ちてゐるのであらうか？　此の問題を考へ詰めるとき、深い問題の場合にはいつでもそうである如く、此處でも私らは永遠な、宗教的意識の中には入り込む。思ふに私らはナイーブなまゝでは善くある事は出來ないらしい。私らの享けたる「生」の中には、已でに「善」の芽と「惡」の芽とが混じて生えて居るからだ。私らはそれを感別する知慧（エンフイテン）で明るくせられなくてはならない。そしてその知慧に眼醒めるまでには、人間は多くの苦い杯を呑むさだめとなつてゐるやうに見える。何故私らの生命のなかには二つの相乖く要素があるか？　これは實に恐い事である。その理由は私には解らない。恐らく造り主の知慧であらう。ほむべき造り主は其の中に却つて深い愛を藏してゐられるのかも知れない。私らは純な、人間らしい願ひを振りかざして事實に向ふ時に、その願ひに對抗して働く力にぶつかつて其の願ひが崩れる。成就しなければならない筈の願ひが裏切られる。「すべてのものを失ふことによつて人は象徴を信ずるやうになる」とアンドレーフは言つた。一心籠めたる願ひが滅ぶときに、人間は運命を知るのである。モータルとしての運命を。あの親鸞聖人のやうに。その後は「善」と「惡」との問題はつまり運命と智慧との問題となる。本能の愛から脫した慈悲心が初めて出發する。人間は涙に濡れた顏を回らして初めてまともに天に向くのだ。

私自身に就いて語れば、私は淋い戀をした。それは純な、一すじな、且つ公けなものであつた。けれども私は裏切られた。そして深い心の傷と癒えざる病とが私に殘された。其の時私は人生の寒冷を沁々と感じた。そして他人に依囑し

た生活の脆さと、求むる心の果敢なさとをしつた。私は最早他人の愛は求めまい、私自身のなかに獨立自全な生活を建て様と企てた。私の是迄の生活の破産の原因は、他人に求め且つ働きかけた點に在る。故に私は他人との接觸を斷つて私自身のなかに閉ぢ籠らねばならぬと考へた。此の心持の中には人間に對する反抗心とミスアンロフイックな感情が含まれて居た。その時私を惹き付けたのは中世紀風な、隱遁的情趣であつた。淋しい海べの旅館や、沼のほとりの離れ家に、人を避けて靜かに、書物を讀み殆んど賑かな人里へは出なかつた。私は偶々街に出ても、行き遇ふ人は皆卑しく、恐しく感じられた。『あの品の好い紳士は、あれで心は殘酷で、吝臭いのだらう。あの百姓は單純さうに見えて、本當は嫌にしつこくて貪慾なのだらう。あの娘は美いけれど、あれでいざとなれば戀人を捨てるんだらう。あの奥様は淑やかに見えるが、あれで娼婦のやうな性質が隱れて居るのだらう。私はお前さんたちに愛を求めるほど弱くはない』私は此の様な風に考へた。そして急いで隱れ家に歸つた。水邊には芦など生えて居た。夜となれど燈火をかゝげて、トマス、ア、ケムピスや、アウグスチヌスなどを讀んだ。Don't trust to man but believe in God と聖書には錄されてあつた。『汝等心の貞潔を保たんとならば人を避けて、靜かなる處に隱れよ、決して出づるなかれ、汝若し外に出で、人と語りて歸る時は、必ず汝等の心荒らされて汚れたるを見出さん』とトマス、ア、ケムプスは敎へてゐた。O, gott, du liebest ohne leidenschaft! とアウグスチヌスは祈つてゐた。時々夕ぐれなど人懷しい心に惹かれて街の方に足の向く時には私は自分を叱つた。『お前は何を求めに街に行くのか。人の愛か、女のなさけか？お前はそれを求めて失敗したばかりなのに。』そして私は心を堅くして refuge に引返し／＼した。

けれど、か様な生活は、博いまともな道を歩きたいといふ私の本來の願ひと相容れるものではなかつた。かやうな隱遁生活には反抗心のつくる無理がある。公けな心はその無理を發見する。そしてもつと素直な道を求めずには置かない。私の心の内には素質としての人懷かしさがある。その願ひは外に出道を求めずには置かなかつた。私は反抗心の和ぐと共に、獨りの生活に寂しさを感じだした。私は遠くの友には、却つて前よりしば／＼手紙を送つた。殊に女の友には、

「私は最早女の愛を求めやうとは思ひません」と書かねば氣が濟まなかつた。けれどかく書き送る心の底には微妙な訴へのこゝろが含まれてゐた。その時此の人懐しさの外にもつと強く正面から私の退隱生活を破る原因となつたのはドストエウスキーと聖フランシスとであつた。ドストエウスキーは西比利亞の牢獄で、荒々しい、殘忍な、ひつこい人々の間に交はりつゝ、如何にそれを耐え忍むで愛したであらうか。殊に感動すべきは彼らから排斥せられた時に、自らを高くし、輕蔑の心から孤獨を守らずに、心からそれを辛きことに思つた事である。それを辛く思へたのはドストエウスキーの博さと謙りとである。またフランシスは隱遁して神との交りに專らにならうとの願ひが高まつた時に、それを惡魔の誘惑として、その願ひに打克つやうに祈つたといふではないか。私は退隱するのは強い事と思つて、市に出たい、自分の心を叱つたのに、フランシスは退隱するのは弱い事として、山に隱れたき心を鞭打つてゐる。其處に私の心のエゴイズムが日に晒さるゝ如くに露はれて居るではないか。ドストエウスキーのやうな場合には、愛を求める心は決して弱いとは云へなくなる。また例へ愛を求むる心は弱くとも、愛を求めずに、與ふる心で市に出でるのはもつと強い事である。愛が強くなればさうせずにはゐられぬ筈である。私は高慢で、エゴイスチツシユであつた。私はどのやうな嫌な冷淡なしつこい人間とでも忍耐して交はらなくてはならない。

　私は退隱生活を止めやうと決心した。その頃私はまた病氣が惡くなつて、旅の病院に入らねばならなくなつた。其處で私は手術の苦痛を怺えつゝ、長い月日を送らねばならなかつた。私はその頃の私の生活を、めで慈しみつゝ思ひ返さずにはゐられない。心はかなしみと忍耐に濡れて、親しい靜けさを守つてゐた。「ドストエフスキーのやうに」といふのが、その頃の私の生活のモツトーであつた。其處で私は觸れ得る限りの人と觸れ、彼等を悉く隣人の愛で包まうと努めた。他人の爭ひの仲裁者となつたり、病める青年を慰めたり、新聞賣りの老婆や、飯焚きの小娘や、犬やをも勞はり愛した。また卑しい仕方に私を弄ばうとした一人の小女にも、少しの怒りをも漏らさずに、却つて彼の女に赦しの德を說く事も出來た。私の生活は、此處で、まれな靜けさと、調和とを獲て落付くやうに見えた。そして自らも天の甘美と、

遠い平和とに與るやうな心地がした。けれどもそれは、偶々運命に許されての、偶然な惠みに過ぎなかつた。運命に毀たれぬ確かな平和は、未だその影をも私に示してゐるのではなかつた、病院生活の終り頃に、私はまた一つの出來事に試みられて私の生活法(レエベンスアルト)を代へねばならなくなつた。私は一人の社會的に身分の低い女に戀された。私は牧師や、伯母の注意があつたにも拘はらず、キリストがサマリヤの女と井戸端で語つた例などを思ひ、どのやうな人でも愛を求めて來るものを斥けてはならないとて、此の女とも公けに交はつた。私は此の女をもナハ、パーリンとして交はる氣であつた。けれども様々の紛糾の末に、その結果は女の心に惱みの種を蒔き、自らの心の平和を亂し、周圍の人々に煩はしさと混雜とを被らせる事に終つた。此の出來事は私に深い反省を與へた。私は自分の理想と器量との間に考察がなければならない事に初めて氣が付いた。「如何なる人々をも愛して交はれ」といふ教は正しい。此の教を生かすのは耶蘇の器量である。併し器量の小なるものは此の教を生かす事は出來ない。サマリヤの淫婦に話しかけた耶蘇には、彼の女を說服して神の國の民となす力があつた。併し私は一人婦人の運命を傷けたのである。私は其の時から自分の力がひどく氣になりだした。ある人と接觸する前に、其の人を幸福にし得る、少くも傷けないとの自信がなくてはならない。その自信なくして他人に働きかけるのは、假令與ふるの愛に燃えてゐるとも、運命を畏れざる輕卒である。恐らく何人と雖も、此の反省の自分の行爲の前に横へる溝渠を越える事は容易ではあるまい。私の足はぴつたりと止つた。私には自信がない、一人の人間、一羽の小鳥でも、觸れて傷けないとの自信はない。「一人の小さきものを躓すよりは、石臼を頸に懸けて、海に沈めらるゝ方寧ろ安かるべし」と聖書には錄されてある。私は苦しくなつた。私は愛することゝ、その愛を働きかけることゝの間に夥しい障礙を感じだした。私は或る人が「あなたは善い人間だが、直ちに人の懷の內に飛び込んで中を見やうとするから、本能的に心の扉を閉ぢたくなる」と云つたのを思ひ出した。また或る友が「他人がアヤセプトしないのに愛したがるからいけない」と云つたのを思ひ出した。私は益々解らなくなつた。私は考へ出すと殆ど手も足も出ない程不自由を極めてくるのを感じた。その時私は親鸞聖人の心持が泌々と仰がれる心地がした。聖道の慈悲では「心のま

まに助け攝ることあり難き」故に、「此の慈悲始終なし」と見て取つて「いそぎ佛となりて心のまゝに助け攝るべし」と浄土の慈悲に入られたのである。「念佛申すこそ誠に末通りたる慈悲にて候ふべき」と云ふのは實に深い心持である。心の內で愛すことは出來ても（それも覺束ないのであるが）その愛を働きかけることは、他人の運命を傷けずしては至難の業である。愛はどうしても念佛に深まらねばならなくなる。私は祈りの心を泌々と感じた。私たちは眞に愛するならば、隱れて祈るより外に道はない。すでに働らきかければ他人を損じるのである。此處になつては私は初めて眞の隱遁の根據を見出したやうな氣がした。「お前さん見たやうな人等とは」と云ふのでなく「私見たやうなものは」と感じて退くのである。「求める氣はありません」と云ふのでなく、「與へる事が出來ないのみか、傷けますから」とて隱れるのである。隱れても他人の祝福を祈るのである。其處には最早高慢とエゴイズムとの影はない。私は昔から聖者たちの隱遁は、かゝる種類の隱遁であつて、私の前にした如きエゴイスチツシュな退隱とは全く異つて居たのであらうと察せられる。此處まで來て私は永くためらうてゐた。此樣な隱遁はその心持は泌々は解るけれど、どうも私の素質のムードとしつくり合はないのである。私の心の內には天與の人懷しさがある。他人と何ものかを分け持ちたき願ひがある。他の生命と觸れたい心がある。そのねがひはどうしても惡いものとは思へない。否人間性の主要な部を成してゐるものである。その願ひが外に道を求める事が出來なくては人間の生活の材料がなくなる。人間は自ら氣が付かなくとも、實は大部分愛で生きてゐる。他人を內容として生きてゐる。その接觸がなくなれば死の如き空虛が殘るのみである。それでは生きてゐる空がなくなる。私は如何にしても孤獨といふものは、究極のものとは思はれない。もつと博いヒユーメンな人間性の願ひの許される生活が本道でなければなるまい。それに達しないのは何處かに思索に深まり方が足りないからであらうと思はれた。とは云へ働らきかけることは畏ろしい事である。私はその中間でうろ／＼してゐた。そして壓されるやうな晦滯の感に責められて居た。その間にも文化は日に混亂の中に陷り、殊に道德的の世界は紛料を極めて、稀なエゴイチツシュな時代は益々其の度を高めて行く。モーラリツシュな素質あるものは、ものを云ひたき心を挑まるゝ

やうな事のみ起つて行く、今日は沈默することの實に苦るしい時代である。じつと見てゐると咽喉下まで言葉がこみ上げて來るやうな氣がする。殊に自分が樣々の不幸に遭つて、心が濡れ輝いてゐる時には、同胞に向つて呼びかけたくなるものである。併し自分には同胞の運命を直くする程の實力があるのではない。觸るゝところのものを幸福にする丈の器量があるのでもない。しかし默つて祈つてのみ居るには堪えられない。しからば如何にすれば善いのであらうか。

私は考へ悶えた。自分の內に圓熟するまで働きかけるのを待つならば、いつまで持つてもそのやうな時期が來べしとも思はれない。終に「未だ畫かざる畫家」となり、「未だ說かざる說敎者」として終らなくてはならなくなりさうである。何となれば眞理と云ひ、力と云ふものは一時にその絕頂に達し得られるものではなく、其の內容を少しづつ體驗しながら、次第に aneigen して行くものであるらしいからだ。かくの如くして終に、同胞とその苦しみや、喜びを分け持つ事なしに自らの切り離された生活の內に蟄居するのが知慧ある生活であらうか。また祈りの心持のなかには、深かい實踐的な氣持が含まれてゐる。祈りとは寧ろ實行精神の最深なるものである。「愛兒の病氣のなほれかし」との祈り、よもすがら病兒の枕頭に侍して、身も心も疲れた母の心に起る切願である。默禱に對して「體禱」といふやうなものが眞の祈りである。また隱遁しても、絕對的に他人に荷を負はすことなしに生きることは出來ないのである。寧ろ他人の喜捨のみで生きるのが眞の聖人の生活であるらしく思はれる。かく考へて來れば私はどうしても此處で地上の約束、モータルとしての人間のさだめに觸れずにはゐられない。すなはち互ひに傷けずには生きられないのである。宗敎心とは此の恐るべきさだめの內に却つてつくり主の愛を見出す心を云ふのであらう。そこで私は考へた。私は高い處に自らを置いて說敎しやうと思ふから、發言することが出來ないのである。人々と與に步め。與に眞理を硏め、與に德を積め。「共存者よ、私はかく感ずる。御身は如何に考へるか。善い所があれば用ゐてくれ。誤つてる所は敎へてくれ。私を愛してくれ。私は御身を祝する」とかういふ態度で話しかけたら如何であらう。それでも他人を傷けないと保證することは素より出來ない。恐らく傷けもするであらう。そして自分も傷けられもするであらう。併し絕對的に他人を傷けないといふことが出來な

いとすれば、(出來ねばならぬ筈だが、人間はその方法を知らないやうに見ゆる)その傷害を同胞の愛をもつて互ひに赦し合ふたら如何であらう。それでも互ひに働きかけないよりか遙かに人心の願ひに適ふのではあるまいか。「我らに罪を犯すものを我らが赦すごとく、我等の罪をも赦し給へ」と耶蘇が弟子たちに、「かく祈るべし」と敎へられたのも其のこゝろではあるまいか。私は敎會で人々と共に此の祈りを口に唱へる時、いつも涙がこぼれる。一人で祈る時にはさうでもないが、人々と共に祈ると涙がこぼれる。平生は互に罵り合ひ、傷け合うてゐる人間同志が、日曜に一度神の前に出て互いに赦しを乞うて居るのだと思ふと私は何ともいへない感動をおぼゆる。そして祈りは密室の默禱でなくてはならぬとよく云ふけれども、ピープルと共に祈るのは別な深い意味があつて、其處に敎會の存在する根據がありはせぬかと思ふ程である。私等は與に生きてゐるのである。共存の意識は個存の意識より淺いものではない。自らを一段高く置く態度は到底相對的のものである。「あなたはそれで私を傷けませんか」と小さきものに念を押された時何と云つて答へやうぞ。かの耶蘇の生涯と雖も、その疑ひから免れる事は出來ない。耶蘇は恐らく舊約を讀み、また永きユダヤの傳説から、自分を基督である乃ち人間とは本來品を異にせる神の獨り子なる贖主と信じたのであらう。彼の高き權威は其處から出て居るのである。パウロの權威と耶蘇の權威とは程度の相違でなくして品の差異である。私は耶蘇の特殊の傳說的地位でなくして、耶蘇の如き權威を以てものを言ふのは間違ひであると思ふ。パウロの權威は私に理解出來る。併し耶蘇の權威は今の私には不思議と云ふ外はない。神と被造物との間には絶對的の區別がある。聖者は神ではなく被造物の最大なるものである。それは人間性の超越ではなくして完成である。其處には未だモータルとしての制限は殘つてゐてもよいのである。私らが被造物としての境を守るならば、「兄弟よ、私も間違ふけれども赦して吳れ」といふ態度を取らねばならぬ。其の方が合理的であるのみならず、良心の前に安らかである。私は其の態度になつて初めて他人に話しかけ、働きかけることが、自らに許される心地がする。かくて後假令互ひに過ちをつくらうとも、祈りと赦しとによつてその過失から却つて互ひを結び付け、富ますことも出來るのである。私はこの後他人に働らきかけたい時にはかく思は

うとおもふ。「私は今此人を傷けるかも知れない、併し今傷けないからといつて、それで私はいつも傷けないといふのではないのだから、出來る限り氣を付けて働きかけさして貰はう。神樣私が誤りませぬやうに守つて下さい。兄弟よ。許してくれ。」と。自らを高しと置くも、兄弟と置くも、實力だけの事しか出來ず、また實力だけの事は出來るのである。併し兄弟と置かなくては uneasy である。今の私の器量では此の祈りの心と敬 を求める心とに支へられて、他人に働きかけるより外に知慧を持たないのである。もつと深い態度があらば、私は切に敎へてほしい。

私はか樣な態度でこれから私の心の内に積つてゐる感情や、願ひや訴へを同胞に話しかけたいのである。私はそれらのものを共存者と公有してゐることを信じる。何となれば私の惱みや願ひは最早私のものとしての其れらであるといふよりも、人間としての公けなるものばかりだからだ。その點に於て永遠性と普遍性を帶びて萬人の心に觸れる筈である。例へば「何故に此の世には樣々な禍患があるのであらうか」と云うやうな惱みは私の私有であらうか？ 私は、私としてゞなく、人間として、公けに惱んでゐるのである。私らはかく惱む時に、その惱みを同胞と分け持ちつゝあることを信じることが出來る。そして深い共存の感じがする。私は樣々の不幸のなかに涙して生きてゐる、人生の永い悲哀に觸れて心は濡れて輝いてゐる。一人の人間がいかに忍耐して、強くまともに生きてゐるかは他の人間の力となり、慰めとなる。私は泌々と誇りたい。安否を兄弟にたづねてみたい。みんな〳〵しあはせに暮して下さいと言ふ氣がする。

（此の一篇は「生命の川」に發表されしものなるも、乞ふて再錄す、大正五年八月稿）

勞働運動の集中化と國家社會主義

高畠素之

友愛會解體の噂

最近友愛會の實質上の解體が傳へられて居る。始め凡ての產業部門及び凡ての地方に亘つて、尨大なる一個の團體として出現せる友愛會は、勞働運動の集中を體現せるものであつた。從つて斯くの如き解體は、勞働運動の分散化を語るものと言へる。

假りに既往の日本に於ける勞働運動が友愛會に依つて代表されて居たとすれば、今や日本の勞働運動には、一個の轉機が齎されて居ると見なければならぬ。一切の社會現象を必然として見るならば、從來の友愛會が集中的であつたこと、そして今それが分散化せんとすることも、總て必然の過程である。思ふに友愛會の發生は、少數の指導者の提唱に依つたものである。當時の會員は、所謂自覺要求と言ふが如きものに依つて、自動的に會を組織したものでなく、指導者の言ふが儘に會と言ふ一の形式に身を任せたものであつた。しかも今や、自己の要求を自覺したか 見える。而してその要求は、尨大なる團體の形式を保持するにあ ずして全く他にある事を明かに示した。それは主として勞働狀態の改善と言ふ事である。若し此の要求と大團體の存在とが必然に一致するものであるならば、もとより解體の傾向は示されなかつたであらう。然るに斯かる要求に對して必要なるは、地方的、產業的、又職業的勞働團體であつて、既往に於けるが如き全國的の單一體ではない。即ち斯かる要求にとつては、分散的團體のみで充分であつて、その上に更に集中的の大團體を維持するの負擔を忍ぶ必要がない。

既往會員の知識及び自省が斯かる解釋に到達した時、解體の兆を示し來たるは必然であらう。始め會の形式に吸收せられたる會員が一大團體の傘下に集り、今自己の要求により、その要求の手段としての機關を求めて、新らしき形式を追ふに至つた

のは、何れも必然の勢ひである。

然らば今後、友愛會――假りにそれが日本の勞働運動の傾向を代表するとして――は如何なる過程を踏むであらうが。

社會運動の二種

吾々の考ふる處に依れば、一切の社會運動は改良性のものと革命性のものとに二分する事が出來る。即ち現在の資本制生産の下に、無産階級の生活の充實と安定とを、幾歩にても進めんとするものが、改良性の運動であつて、資本制生産自體及び階級對立の存續を否定するものが革命性の運動である。從つて凡ての運動主體は此の見地より二種に分つ事が出來る。

吾々の社會運動に對する評價及び觀察は此の見解に立脚して行はなければならぬと考へる。社會主義者たる吾々は、もとより革命性の運動をのみ主張し、他の一切を原則上革命性運動の妨害物と見做す。假りにその存在を肯定する場合ありとすればそれが革命性運動の準備として、妨害と相殺し尚幾許の剩餘的效果ありと認められる場合に限るのである。

唯物史觀の指示する處に從へば云ふまでも無く、假りに從はずとするも、現在の社會制度――この矛盾と背理とを多量に含んでゐる――が、永久に存續し得る者とは考へ得られない。只殘る所は時間の問題であつて、何時の日かは必ず革命的展開に逢着しなければならぬ。斯る見解の下に於いては、一切の社會運動は革命性のものと見る事も出來る。しかし社會運動に右の如き差別を附するは、結局時間の問題であつて、問ふ處は如何なる形體及び本質の運動が、革命の到來を速かならしむるかにある。吾々及び凡ての社會主義者が、慈善及び社會政策を否定する所以は、それ等の機能によつて無産階級の生活が姑息なる向上を遂ぐるは、必然的にその革命的情熱を冷却せしめ、一方特權階級に、逃避の地を與ふるが故である。然れども斯る慈善溫情の政策に對する評價は同時に無産民自身の運動の、これらと同一の結果を招く可き種類のものに對しても適用さる可きは明かである。

假りに、賃銀が一割の增加を得たる場合、それが同盟罷工の結果なると、資本家の自由意志によると、或は更らに、慈善團體の勸告、立法の指示等に基づくとに依つて、その結果の上に何等かの差別があらうか。若し溫情主義を否定す可くんば、此の種の同盟罷工も亦同一評價の下に置かれなければならぬ。

論者或は言はん、斯かる溫情主義及び立法は、同盟罷工或は

其の潜在狀態とも目す可き、勞仂者の示意に依つてのみ促さるゝではないかと。されど勞働運動の斯かる効果は、其の革命性のものこそ、改良性のものより遙かに優越なるものであらう。要するに吾々は改良性の社會運動の、原則上無價値であり有害であるを斷定せんとするものである。

二種の欲望と二種の運動

思ふに、勞働運動の革命性なると改良性なるとは、勞働運動に從事する者の心理に於ける背反的差異をも含む。

改良性運動は、單に生活狀態の改善を目標とする。即ち其の心理的基礎を爲すものは、經濟的欲望である。然るに革命性運動の心理的基礎は、優勝の欲望である。現在人類の抱く欲望は多種錯雜せる無數の形體を備へて居る。しかしそれ等を、極度まで單一なる形體に還元する時は、經濟的欲望、優勝的欲望、性的欲望の三箇に歸一するを得る。多樣なる現存の欲望は、これらの原素的欲望より分化し派生したものであるが、その心理學的考察は兎もあれ、現在の人類を支配しつゝある根本的欲望は、これら三種のものである。今經濟的欲望と優勝的欲望との相互背反性に就て少しく說明する。

人間は物質上の打算のみに依つて動くものではなく、名譽、支配、優越、征服等の欲望が、打算に反して人を動かす場合が屢々ある。吾々は人間生活史を編み來たりし種々なる色糸の中これら優勝的欲望に屬する幾條かを無視することは出來ぬ。假りに、優勝的欲望は、經濟的欲望の一遂行過程と見做す唯物論者の提說に從ふとも、此の欲望は獨立せる體系を保ちて、吾々の心理を貫いて居り、經濟的欲望と全く分離せるものとして、吾々の認識に映じて居る。しかも此二箇の欲望が相反する方向を指して動く傾向の著しきは、吾々の經驗上明かに認められる所である。翌日の米代を犧牲にして、隣人の面前に鰹を買ふ江戸ツ子を例に引くまでもなく、官尊民卑の語が多年官吏をして薄給を忍ばしめた事も、正月の出初め式に、一杯の振舞酒に演ずる極天の兄哥が命がけの離れ技も、之等はすべて優勝的欲望の存在を說明するものであらう。即ち斯かる優勝的欲望發動が經濟的欲望を裏切るは、貯金的唯物論者と雖も無視する能はざる事實である。生前一杯の酒か、死後永遠の名か、雜駁なる古人の思想にも此の二個の欲望の矛盾性は映じて居たのである。

上述の如く、經濟的欲望と優勝的欲望とは相背馳するものである。而して眼前の物質的生活の向上と安定とを追求する改良

性社會運動が、主として經濟的欲望に淵源するものであつて、直接の利己的滿足は第二義に置くのみならず、時には絶大なる危險との面接すら豫期して、たゞ知識的斷定の實現をのみ目標とす可き革命性社會運動が、經濟的欲望より見て引き合はず、たゞ優勝的欲望の對象としてのみ追求され得るものなるは多くの說明を要せざる處であらう。かくて此の二種の社會運動は相背馳せる二種の欲望に準據せるものである。從つて此の二個の運動は本質上、相背馳すべき筈のものである。即ち原則的に見れば、何れも他の一方を犧牲にする事によつてのみ存在し得るのである。

模倣心理の社會支配

更に吾々はこれら二種の社會運動の發生過程に對して、一瞥を投じなければならぬ。その心理的本質は、以上二種の欲望である。されどこれらの運動の全成員は、必ずしも、個々の心理上の斯る差別より自主的に參加せるものではあるまい。何となれば吾人は、模倣心理が人間を支配する絶大の力を無視する事は出來ぬからである。

思ふに、人類社會の進行を支配する者は創造と模倣とであるこれらの本質に對する社會學的考察はこゝに省略するが、要するに一人が或る特異の事物及び狀態を創造するや、その環境は必ず之を模倣する。斯くして創造される文化の新素質が普遍化し、人類社會進行の各階段を形成するのである。蓋し鄕村の樂隱居が寶生流を始めたのは、それが閑潰しの爲めであるにしろ、或は特異の技能を隣人に誇らんが爲めであるにしろ、兎に角一個の創造であつて、鄕村たちまち之に倣ひ酒屋の小僧に至るまで寶生流を口にするは、之れ即ち模倣である。帝劇の數人によつて輸入された女優髷は忽ちにして全國の大都市を風靡した。大正八年の讀書界が如何に多くの社會主義を迎へたかは、吾々の記憶に尙鮮かなる所である。これらの流行は實に人間生活に對する決定的支配力を含む模倣の、單時間に於ける形態である。要するに、創造とそれに附隨する模倣との反覆によつて人間生活は進歩の幾百千層を累積して來た。或時代に瀰漫する勞働運動の本質及び形態も亦、此の法則によつて支配さるゝ事を免かれ得ないのである。即ち或種の運動が、先行者によつて提示されると軈て模倣によつてそれが普及される。模倣の速度及び範圍は主として欲望共通の深淺及範圍、並に模倣可能の條件の有無によるのである。

勞働運動に於ても、其の本質及び形態は、運動成員の欲望の本質によつて決定されるが、其の決定が全成員の上に實現するには小數者の創造提示と、それに應ずる多數者の模倣との過程を經由しなければならぬ。換言すれば、一運動の形態に於ては其成員の欲望內容は潜在原因を成し模倣は機會原因を成すものである。

運動形態の變化

友愛會が解體の兆を示した事は、會員の無自覺より自覺への推轉、若しくば尠くとも自覺の深化に基けるものなる事は何人も認むる所であらう。而して其の自覺とは、經濟的欲望の自覺である。眼前の勞働條件の改善に依つて自己の經濟的地步の豐富と安定とを、進一步せしめんとする要求の自覺である。斯かる要求は地方的或は産業的團體によつて充分に實現する事が出來、全國的の團體を存續せしむるの必要なく、それに伴ふ犧牲を負擔する事は、此の欲望に對しては無意義である。

これが、其解體の傾向を示して來た根本の理由と考へられる即ち友愛會道般の傾向は、會員の經濟的欲望に準據せる運動形態の生成である。從つて將來もし友愛會々員が革命性社會運動の欲望を抱くの日ありとすれば、此分散的傾向は再び變化するかも知れない。更に現在の日本に於ける勞働運動の傾向が友愛會に依つて代表せらるゝものとすれば、現在にあつては日本に於ける全勞働運動の傾向も亦分散化しつゝあるものと見らるべく、同時に將來勞働階級の欲望內容が革命性を帶び來たる時、全運動の傾向も亦一變するものと考へ得られる。

かゝる現狀及び將來の變化は、前述の如き吾々の法則的解釋即ち勞働者の欲望の內容と、模倣心理との交錯によつて實現するものと見なければならぬ。友愛會の成立は少數者の結合に始まり、その結合自體を模倣せる者の參加に依つて成り立つた。即ち創造と模倣の一回轉であつた。而して今、解體の過程に踏み入つた事も、始め會の一隅に現はれた事實が、たま〲會員の意識の中に潜在せる經濟的欲望の自覺に觸れ、忽ち模倣を呼び起したものである。將來に於て運動が革命性を體現する事も亦同一過程の反復に依るであらう。即ち、優勝的欲望を有する少數の先行者に依つて革命性運動が提示さるゝ時これに對する總員の模倣に依つて全運動を革命性化する事となるであらう。

運動の革命化と集中化

こゝに吾々は一の斷定を試みる。それは勞働運動の分散化は主として經濟的欲望に基く改良性運動に應じた傾向であつて、若し優勝的欲望に基く革命性運動が要望さるゝ時來らば、全運動は必然に又異なれる傾向を現はさねばならぬとの斷定である。蓋し、人間の優勝的欲望は、自己の所屬する社會（勞働團體も勿論一の社會である）の擴大を要求する。それは自己の住む家屋をば居住上の必要以上に擴大するを望む心理が、優勝的欲望に基くものなるが如くである。故に此の一面よりすれば、勞働者等が自己の屬する團體の益々大ならん事を希望するは、即ち彼等が優勝的欲望を抱きたる時運動は集中化するとの如上提說の一根據である。

他面革命性運動の戰術として、運働の集中化を必要とすべき理由がある。それは即ち現存特權階級の勢力がその基礎たる資本の集中と並行して集中しつゝある事實である。集中せる勢力に對し分散せる勢力をもつて拮抗する事の不可能なるは、團結の勢力がその單位の個々勢力の總量よりも遙かに大なりと言ふ一切の團體運動を支配せる社會學的根本命題の直接に指示する處である。個々の資本家に勞働條件の改善を要求する改良性の運動でさへ、資本家の背後にある其集中的勢力にによつて屢々妨害される。況や此集中せる勢力そのものゝ打破を目標とする革命性運動が、分散せる勢力に依つて行はれ得ざるは自明の理である。

一方、優勝的欲望は所屬團體の擴大を望み、他方、運動上の戰術は勢力の集中を要求する。而して此の時には、優勝的欲望が經濟的欲望を凌駕して居る。故に運動の集中化に背馳せる經濟的欲望は、その發言權を潛むるであらう。即ち運動は必然に集中化されねばならぬ。

これを約言すれば、現時の友愛會によつて代表せらるゝ我國の勞働運動は、その本質改良性なるが故にこそ分散化の傾向を示したのである。而して將來その本質革命性を帶び來たる時、其傾向上に必然集中化の一變化を來たすであらう。

國家社會主義との一致

勞働運動集中の範圍は、國境に一致すると考ふべき根據が二つある。それは、集中の政治的對象たる特權階級の勢力集中が國境を範圍として行はれて居るが爲めと、類似相親しむと言ふ社會學的法則より演繹して、同一國民間には他國民に對するよりも遙に濃厚なる親和、即ち結合の重要なる素質が存在して居

る事とである。

そこで勞働運動の集中化は、必然國家社會主義の思想に結び付く事となる。思ふに國家社會主義は、三個の特質を持つて居る。第一は運動範圍の單位を一國家に置く事である。第二は運動過程を集中的形態に置くことである。第三は將來社會の經濟組織觀を集產主義に置く事である。そこで第一と第二の條件は勞働運動の集中化によつて、その主要部分が實現される。從つてその第三の特質たる將來社會觀も、集中的勞働運動の將來社會觀に一致すると見做さなければならぬ。故に勞働運動が、その本質の革命化する事によりて、その形態が集中化すると吾々の右の前提が眞であるならば、吾々はまた國家社會主義の理論を正しとせねばならぬ。更に推論の順序を逆轉して考ふる時は、國家社會主義を主張することは、勞働運動の必然的歸結なる集中化によつて、その論理的根據を與へられる事となる。

最後に、尚ほ殘された一問題がある。それは勞働運動が果して革命化するや否やと云ふことである。けれども本文に説かんとするは、社會主義その者でなく、社會主義の一派を構成す可き論理の究明である。そこで、勞働階級の一隅に革命性運動の提唱者が出現する事、及び勞働階級がそれに模倣し得るまでに革命的慾望を抱き得るに至る事に就ての論證は、社會主義そのものゝ説明に屬することであつて、社會主義の一系派を説く本文には既に前提として認めらるゝ所である。たゞ附言す可きは、友愛會の成立初期に於て勞働團體の形式そのものが、多數の會員を吸收し得たるが如き模倣心理の作能に依つて、今後革命性集中的勞働運動も亦、運動の形式自體に基き多數の勞働者を糾合し得るの日あるべしてふ事である。此時こそ、時代は急轉する。一切の社會事象が社會主義に向つて朝宗し來たり、各々の抱懐す大衆運動は此時實現して、或は急激に或は緩漫に、社會　的變動に導くであらう。而して集中化せる勞働運動の史的使命は、斯る社會推轉の槓杆たるに在る。

外交の失策と排日の前途

法學博士　堀江歸一

國際間に於ける移住の自由

日米通商航海條約は締盟國民の間に、一方の締盟國に渡航し入國し、居住し、營業する自由を認めて居るに拘はらず、日本人で米國に移住せんとする人々に對しては、是等の自由は必ずしも承認されず、中央の移住民法で、日本移住民の入國に對して、種々の制限を加へ、歸化法は斯る移住民の歸化を自由にせず、州の法律は更に移住民の營業權や、財產權に制限を施し、其制限の爲めに、所謂排日問題を惹起し、多年日本人が米國に於て、幾多の困難と戰ひ、又多くの危險を冒して、獲得し來つた地步を覆されやうとするのは、我々內地に居る者の甚だしく遺憾とする所である。

廣い見地から達觀したならば、世界全體は總ての人類の據つて以て生を繋ぐ場所である。一方に天が人に手足を與へたのは此手足で勞働させる爲めであつて、既に勞働する以上は、人は自分の好む場所なり、自分の勞働するに最も適すると考へた場所なりに行く自由を持たなければならないのである。此點から考へれば、米國の如くに、天與の富源が豐富であつて、勞働力を用ひて、最も大なる效程の發揮され可き國には、世界到る所から、勞働者が移住し來るのは、當然の勢と認められる。而して此場合に斯る勞働者の移住を迎へて、富源の開發に從はせることが移住民自身の利益であると共に、米國自身の利益であるかどうか、一個の問題たらざるを得ない。

之に對する制限

若しも移住民と彼等に入國させる國との利益が何處までも一致するならば、後者は喜んで移住民を迎へるであらうし、斯くて經濟上の自由が國際間に承認されることゝ爲るのであるが、兩者の利害は決して斯く一致す可き譯のものでない。米國の移住民法にも明に指されて居る如く、移住民の內には、入國を許

すことの望ましからざる者即ちアンデザイヤブル、クラスと云ふ者があつて、斯る輩を入國させたならば、移住國に於ける富源の開發に資せざるばかりでなく、却て移住國の負擔を加重する虞のある場合には、其入國を禁止し、又入國後と雖も、所謂望ましからざる條件に適合したならば、其者を放國することを以て、適當としなければならぬ。

一方に國際間に通商の自由が認められ、而して通商の自由は今日の通商條約に於て、最も重きを置かれなければならぬ所であるとすれば、他の一方にアンデザイヤブル、クラスを設けて締盟國民の入國民を制限すると云ふことは、確に一つの矛盾があるから、アンデザイヤブル、クラスを設けるにしても、成る可く其種類を限定する。是れは締盟國間に於ける關係を重んずる上に於て、當然の事としなければならないのであるが、社會上や、經濟上の關係は決してアンデザイヤブル、クラスの範圍を局限して置くことを許さない、時勢と共に、種々の方面に擴張せんとして已まないのである。例へばアンデザイヤブル、クラスの一ツとして、受救民なるものがある。即ち貧困の結果國家又は公共團體の救助を受けなければならぬ者であつて、斯る輩は移住する國に來つて、其富源を開發するよりも、寧ろ其國に負擔を加へることを多くすると云ふ理由で、排斥すること丶爲るのである。既に斯う云ふ理由で、右の如き地位に居る者を排斥しなければならぬとすれば、（一）生存生活の狀況劣等であつて、如何に不利な勞働條件にも滿足して、勞働しやうとする者であるとか、（二）一時移住國へ來て勞働するが、決して永住の目的はない、相當の蓄財でも出來れば、直に之を携へて、歸國しやうとする者であるとか、（三）移住國へ來て何年か生活して居りながら、其國の風俗習慣に同化せず、一ツの國の內に、更に違つた社會を作り出さうとする者であるとか、總て移住國に不利の影響を及ぼす虞れのある者を排斥するに至るのは、自然の趨勢である。

日本人排斥の理由ありや

偖、米國に移住民排斥の起る理由は右の如くであるとして、日本人が米國で排斥されるのは、果して無理であるかどうか。米國人の排日運動には隨分不公正の點もあり、又非人道德の嫌もある、是等の點に就ては、後節に之を論じるが、日本移住民の方にも、米國から排斥される理由を供へるだけの弱味のあることを認めなければならぬ。固より米國で排日問題が喧しく爲る一方に、日本の方で自發的に移住民の種類や、數を制限して

排日の氣勢を緩和しやうと試みて以來、日本住民の素質は以前に比較すれば、餘程改良されたやうなものの、全體から云へば米國人に比較して、劣つた勞働條件で、ドンナ仕事に就くことにも意としないのである。其れも日本の移住民が纏まつた儘で地方の農園へでも行つて、勞働するのであるならば、大して人目を惹くこともなからうが、移住民中、都會で職業を求めて勞働する者に對しては、低廉の賃銀で勞働することの爲めに、勞働組合の方から、故障が起つて來る。日本の勞働者だけ、不衛生の狀態で、寄住し然も日本流の生活を推し通さうとする爲めに社會改良家の方から、排日の運動が起つて來る。日本人の方でも、斯う排斥される所に居つても、面白いこともなし、可笑しいこともないので、貯金が出來れば、之を携へて、本國に歸る。さうすると日本の勞働者は渡り鳥即ちバーヅ、オヴ、パッセーヂであつて、詰り米國の富源を掠奪する爲めに、入國するものであると云ふ反對論が出て來る。更に地方農園に働いて居る勞働者が多年苦辛して餘し得た金で、土地を買入れるなり、又賃貸借契約をするなり、漸く農業勞働者の地位を脫して、農事企業者の地位に進んで來ると、米國人は之を以て米國に對して日本の經濟的侵略の加へられるものであるとし、土地所有權を奪うとか、賃貸借權を禁ずるとか云ふやうな方法で、日本人の權利を脅かさうとするのである。現に此事は今度加利福尼州に於ける排日問題の經過に就ても、其一端を窺うを得るのである。

以上の如き種々の事情から、米國人が排日問題を起すものであるとすれば、私は最も冷靜に考へて、一方に排日に理由のあることを知ると共に、同じ排日であつても、何等の理由の備はらないものゝあることを認めるのである。米國が社會上殊に勞働經濟上の見地から、劣等の勞働條件を厭はないで勞働しやうとする日本勞働者を排斥するのは、當然の處置である。勞働者をして一國文明的生活の供へる種々の享樂や、利益に親しませやうとするには、勞働者の間に團體を設け、此團體の力で勞働條件を改善して行くのが必要であつて、米國に形式に於て異なるものありとしても、尙ほ全國を通じて、幾多の勞働組合の存在する所以である。然るに日本から米國に入國する勞働者の如き、本來自國に於て、多年程度の低い生活を營んで居つた者であり、米國に來ても之を向上させる道を知らない、寧ろ衣食の費用までも節約して、貯蓄をしやうと云ふ考であるとすれば、彼等の生活程度の低いことは論を俟たない。此生活程度の低いことが彼れ一個の問題に止まるかと云ふに、決してさうでなく

斯る低い賃銀で勞働する者のあることは、貪慾な事業主をして勞働組合の維持しやうとする標準賃銀を打破させる口實と爲るのである。是れが勞働組合として、曩に支那人移住に反對し、又今日日本人移住に反對する所以であつて、現に今度の加州土地問題に就て、勞働組合聯合會が排日の言動をして居るのも、畢竟日本人の土地所有權其ものに反對するのでなく、日本人に土地所有權を許すほど、全體の調子の緩かに爲つた曉に、日本勞働者の移住し來る數が增加して、勞働組合の存在を危うくするに至ることを恐れるのに外ならないのである。

國際會議に於ける日本の失策

斯う考へると、日本が年來久しきに亙つて、社會改良を閑却し、國民生活の改善を放擲し、而して生活程度の劣等である邦人を米國に移住させ、一時は契約移民同樣の姿で、彼等を移住させ、スクール、ボーイとか、皿洗ひとか、給仕人とか云ふ賤業は勿論、修練を要しない、技術を求めない仕事は殆ど日本人の專門であるやうな風を馴致したことは、大なる間違であつた。先年の紳士協約や、寫眞結婚制限などは、僅に移民問題に對する米國人の感情を緩和するに與つて力あつたやうであつたが、先頃特に排日問題を剌戟させる事實が續出した。多數の日本人は今度の加州排日問題の起つた際大統領選擧運動に於ける掛引に過ぎないものであるとして、之を樂觀して居つた。或は斯る策略もあるのであらう。然し私は今回の排日問題を釀成した責任は日本にあると考へる。即ち巴里講和會議に於て、日本の全權委員が人種差別の撤廢を要求し、續いて華盛頓國際勞働大會で、日本の代表者が勞働條件の改善に就て、或は除外例を求めたり、或は猶豫を請うたりしたことは、外國人殊に我國の移住民と密接の關係を有する米國などに、如何なる感を與へたであらうか。米國は斯う感じたに違いない、日本は一方に人種差別の撤廢を主張して、移住民入國の自由を得やうとする、人種差別を撤廢したからには、此自由は當然與へられなければならぬ然るに內國に於ては、勞働條件を文明諸國並みに改善する意思を持たない、特殊國として、他の諸國よりも、餘程劣等の地位に置かれやうとする、而して斯る劣等の勞働條件に安んずる勞働者が人種差別撤廢を機會として、米國其他の國に大手を振つて移住して來たならば、如何なる結果を生ずるであらうか之に對して徹底的排日法を工風しなければならぬと云ふことが米國の排日熱を盛ならしめた原因であつて、要するに我國が成功もしない人種差別撤廢案を講和會議に提出したり、勞働會議で不

徹底な態度を示したりしたことは、排日運動を盛にする機會を與へたものと考へられる。米國の排日運動を靜めやうとするならば、其表面に現はれて來た時に抗議を申込むのは勿論平生から反對の宣傳を行つて居らなければならぬ筈であるのに、日本では平生却て排日問題の起るやうなことをして置きながら、其起つた時に騒ぎ立てる、誠に見苦しい擧動であるとしなければならぬ。

米國人の反省すべき點

故に私は最も公平な立場に身を置いて、日本が下等な勞働者を米國に送つて、米國で排斥されることを以て、當然と考へる日本でも今後支那の苦力が多數入國して來るやうであれば、現行以上に制限を嚴重にしなければならず、同國民に爲つた朝鮮人の內地に於ける勞働に對しても同一の制限を必要とすると考へるのである。一國は決して他國の文明權を蹂躙したり、國民の生活權を危殆ならしめるやうな要求をすることを回避し、遠慮しなければならない道理である。然し私は米國官民に向つて糺す可きことが一ツある。加利福尼州其他の地方で、日本の農民が農業を經營して居ることが、何で米國の利害と衝突するかと云ふことである。都會に密住して居ると違つて、斯る日本人の居住することに依て、國民衞生の上に、何等の危險を及ぼすものでない、生活狀態が劣等である爲めに、他の勞働者の勞働條件を害するかと云へば、日本人の農園經營者が日本人だけを使つて居る場合であるとか、日本人でなければ、出來ないやうな方面の仕事に、日本人を使つて居る場合などには、決して斯る弊害は起らない、寧ろ日本人の努力に依つて、加州の農事的企業の發達し、加州の富源の開發されないとは、爭う可からざる事實であるのに、日本人の土地所有者の增加することに反對であると云ふだけの理由で、日本人の土地所有權を脅さうとするのは何等道理のない所業であると云はなければならぬ。

米國人は日本の軍國主義に恐怖心を懷ひて居る。成る程日本は既往に於て軍國主義であつた如くに、今日に於ても軍國主義の國であるに相違ないが、事實外國との經濟的關係が密接に爲れば爲る程、軍國主義の威力は消滅するのである。假に米國が虛心坦懷に爲つて、日本人に土地所有權も與へれば、歸化權も與へる、詰り歐洲國民並みに日本人を取扱つたとした場合に、如何なる結果を生じるであらうか、米國化された日本人は米國に相當に殖へて、日本人の米國に於ける農事經營なり、商業なりは、今日以上に發展するであらう、其斯く發展することが果して軍國主義の先驅と爲るであらうか。若しも本國に於て米國

に向つて軍事的侵略を加へるやうな計畫のあつた場合に、之に對して第一に反對する者は米國に於ける米化された日本人の一團であつて、之に次いでは米國に向つて最も大なる輸出品である生絲を輸出し、又之を製造する內國の當業者である。米國が飽くまでも排日政策を徹底させるやうなとをさして、日米兩國の關係を疎隔し切つたならば、其時こそ、兩國の國交は餘程危險に陷り、米國人の憂慮する軍國主義の禍害を實驗しないとも限らないが、此反對に米國が日本人を入れたり、日本の商品を迎へたりしたならば、日本の軍國主義は米國に向つては何等の用を爲さないのである。米國人が日本の軍國主義を恐れつつ却て日本をして軍國主義を實用するに、都合の好いやうな狀態を自ら作り出さうとして居るのは、我々から見れば、誠に滑稽の感に堪へないのである。

若し夫れ日本の移住民は米國に同化しないとか、渡り鳥であるとか云ふやうな攻擊に對しては、私は斯る狀勢を醸成するに至つた一原因を以て、米國が日本人に歸化權を與へないことにあるとするに躊躇しない。米國人自ら日本人をして永住するに堪へざらしめる事情を作つて置きながら、日本人の永住しないことを咎めるが如きは、横暴も亦甚だしいのである。或は日本人の兒童が米國で軍隊の遊戲をするから、誤解を受けるとか、日本字新聞が露骨な記載を掲げるので、米國人の感情を害するとか云ふやうな話も聽くが、斯の如きは枝末の事であつて、多少邦人として注意すれば、何等の支障なきに至るのである。

要するに移民問題に於ける日米間の交渉に就ては、兩國共に反省す可き所がある。米國人をして上記の諸點に就て、反省させるのは、日本人の義務であり、又日本人として當然爲す可き所であるが日本人は果して之を爲して居るであらうか。米國の有力者が來朝した米國の議員團が觀光に來た、大騒ぎに彼等を歡迎するのは結構であらうが、彼等に向つて、二十年も三十年も前から、否グラント將軍來朝の時代から言ひ觸らした「日本は米國に導かれて、世界の仲間に入つた」とか、「ゴモドル、ペルリは日本開國の恩人である」とか、活版刷りのお世辭を並べ立てた所で、日本の眞意を米國人に理解させ、又米國人從來の所爲の間違つて居つたことを彼等に反省させるのに、何の效果があらうか。日米人間に眞の理解を得るには、日本人として彼等に苦い事も言はなければならず、又日本に坐つて居るだけでなく、日本人自ら米國に行つて、國民的宣傳を行はなければならぬ。唯日光を見物させた、何々會長の拜米的演說を聞かせた是れで日米兩國間に理解が出來ると考へたり、時局の急に爲つてから、外交上の交渉にばかり訴へて結末を付けやうとする、誤りも亦甚だしいのである。

日米葛藤は遂に解決さるべきか

一

フイーラン、インマン等を中心とする加州排日派は、排日土地法案の通過を計るべく、目下必死の運動を試みて居る。之に對して、共和黨も、民主黨も、大統領選擧の折に、加州の投票を得んが爲めに、黨略上賛成を表して居る。共和黨候補者ハーヂングは、加州代表者に對して、米國政府は米國に同化せざる外國人を排斥し、太平洋沿岸諸州の排日運動を援助せねばならぬ。と聲明して、排日派を煽動し、民主黨候補者コックスも亦、桑港に於て、

「或州が、其の地理的形勢及び內的狀態に鑑みて、亞細亞移民排斥政策及び、之に準據して發表せられたる法律を施行せんとするに對し、民主黨は之に援助を與ふる事を誓ふものである。……加州に於て其の土地が亞細亞人の所有に歸する

法學博士　末廣重雄

事を希望せぬならば、加州は既に確立せる民主黨の方針に基き、亞細亞人排斥問題に關する政策を遂行する上に於て、米國政府の一致協力を期待する事を得る。」

と述べて、負けず劣らず、聲援を與へるから、加州排日派の勢は頗る揚つて居る。

二

此時に當り、我が政府は排日問題解決の爲めに、種々苦心し其の一策として、最高委員會の設置を米國に提議したとか、するとかの風說があるけれども、此の委員會は排日土地法案の如き、米國政府の權限外の事件を取扱ふのには不適當である。假に適當であり、且つ米國政府の同意が有るとしても、最早や一般投票施行の日までに、約二旬を餘すに過ぎない今日、我が委員が渡米する時間も無いやうな譯であるから、之に依つて、排日

土地法案の通過を沮止する事は、所謂出來ない相談である。今日の形勢では、排日土地法案が、結局大多數を以て可決せらる事は、殆んど疑を容れる餘地がない。

或人は云ふ、『排日土地法が成立すれば、在加州日本人が土地を購入する事は不可能になり、借地は全く禁止せられる事になつて、日本人の農業は致命傷を蒙るであらう。然るに農業は日本人の中心たる產業であるから、農業が衰微すれば、日本人の大多數は經濟上甚大なる打撃を蒙る事にならう。斯くては、加州に留まつても將來殆んど見込みが立たぬから、米國を引揚げて中米又は南米方面に移住せなければなるまいが、之に就ては、米國に對して、日本人の此の方面に於ける發展を妨害しない保障を要求すべきである。』と。

然し乍ら此人の考へるやうに、中米南米は必ずしも加州より逐はれたる日本人の新移住地とはならない。メキシコ移住は、米國の故障が出るものと覺悟せねばなるまいし、或國は氣候等の關係上移住しても面白くないであらうし、又亞爾然丁の如きは、例の白亞爾然丁主義に依り、既に日本人に對して其の門戸を閉鎖して居るのである。最良の移住地として目せらるる伯剌西爾の如きも、戰前既に排日運動の兆が有つた。何萬と云ふ日本人が一時に移住する事になつたら、直ちに排日運動の起る事は火を見るよりも瞭かである。今後日本人が加州を引揚げねばならぬ事になるとしても、中米南米への大移住は言ふ可くして行ふべからざる事である。

三

顧ふに、大正二年の加州土地法は、其の當初の目的を達せず、日本人は其後も農業上に發展したから、排日派が今次の排日土地法を必要とする事になつたのである。然る處排日土地法が新に成立しても、日本人は收獲分配契約等の方法に依つて、引續き農業を營む餘地がある。從つて其他の產業を營んで居る者も、稍其堵に安ずる事を得て、排日派が期待する程の打撃を日本人に與ふる事があるまいから、遠からず更に新なる排日運動が起るに相違ない。曾て支那人に對して爲したやうに、排日派は、今後、手を替へ品を換へ、一の排日方法に次ぐに他の排日の方法を以てし、結局日本人を加州から驅逐し終るまでは止むまい。

四

今次の一般投票は、最早、沮止する道はないけれども、在加

州日本人の爲めには、今後起るべき排日運動の防止策を、今日より工夫する事を必要とする。

之が爲めには、日米の間に、在米日本人に最惠國人民と同等の待遇を保障する條約を締結し、日本人は米國に於て英佛諸國人と同等の待遇を受け、此等諸國人が有し得る利權は日本人も有し得る事とするか、又は米國をして其の歸化法を改正せしめねばならぬ。此の改正に依りて、歸化に關し差別待遇を撤發し、日本人も白人同樣米國市民たるを得る外國人となる事になれば、外國人を米國市民たるを得る者と然らざる者とに分ち、後者の權利を制限する加州土地法や、新排日土地法や、其他如何なる排日法が有つても、日本人の地位は大に安全になる。曾て大正二年に、加州知事ジョンソンが、米國々務卿ブライアンに對して『米國歸化法が、外國人を米國市民たるを得る者と然らざる者とに區別して居るから、加州は此の區別に基き立法するに過ぎない。価を作つたのは米國である。米國が外國人の間に差別を爲さぬならば、加州も亦差別をするのではない。』と云つた事があるが、實際加州に於て、土地に依りて差別待遇を爲し得るのは、米國歸化法があるからである。此の米國歸化法を改め日本人に對し歸化の道を開く事は、排日問題解決の根本的手段である。

我が政府も、去る大正二年六月加州土地法問題交渉の折、此點に關し米國政府の注意を促した事があり、又米國人中にも排日問題の解決策として、日本人に歸化を許すべく主張する者があるけれども、現在のやうに、米國に於て排日の空氣が濃厚であつては、如何ともし難いから、歸化法改正の爲めには、先づ米國の輿論を一新すべく、排日對抗の宣傳を開始する必要がある。

五

根本的に排日を防止する事を目的とする上掲の二方法は、其の實行が共に困難であるならば、更に他の方法を執らねばならぬ。今日加州に於て、米國市民權を有する日本人は、既に少なからぬ數に上り、而うして最近每年の出産數四千を越へ、其の多數は米國の市民權を得るであらう。今日加州生れの日本人の大多數は未成年者であるが、今後成年以上の米國市民權を有する日本人の數が增加するに伴ふて、日本人の地位は漸次安全になり、今後十四五年も經過したなら餘程鞏固になるであらう。在加州日本人は、其時の到來するのを、一日千秋の思ひで待つ

て居るのである。然る處、米國生れの日本人の市民權剝奪の主張が既に現れて來た。フイーラン等を中心とする加州の排日派は、昨年の夏米國議會に對し、米國生れの日本人に市民權を附與せざるやう、米國憲法追加第十四條を改正する運動に着手し、去る九月共和黨も、民主黨も、其の加州大會に於て、同一の排日條項を政綱の中に掲げる事になつた。今次排日土地法が成立すれば、排日派の次の運動の目的の一は、此の米國憲法第十四條改正に有るに相違ない。此の憲法改正は勿論容易の業でないが、萬々一成功したなら（在加州日本人は勿論のこと、汎く在米日本人は排日運動に對する、最も有力なる防障を失ふ事になるから、日本人の地位を擁護する爲めには、直に排日對抗の大宣傳を起し、排日派の運動に當らねばならない。

六

此の宣傳は、去る大正二年加州土地法問題の起つた當時開始すべきもので有つて、或る方面より當時の政府當局に獻策したので有つたけれども、例の其の日暮しの方針の爲めに、遂に之に應じなかつたし、民間の者も、排日問題に關する理解のない爲め、何等爲す所がなかつた。次に今次の戰爭中、日米親善排て居日撲滅の運動を起すべきであつたのに、再び機を失ひ、遂に今日の有樣になつたのである。何時も乍ら我が朝野が無爲無策で遂に國家の大事を誤るのは長大息の外ない。然し遅れたりといへども尚爲さゞるには優る。今後起るべき米國の排日運動に對抗する爲め、大仕掛の宣傳機關を設け排日派の猛烈にして、惡意ある宣傳——例へば加州排日派は、彼等の主張を理由付るべく、日本人の入國、出產に依る人口增加を大袈裟に吹聽し、白人の前衛地たる加州は、遠からず全く黃化するの虞あるを說いて米國人の對日恐怖心を煽つて居る。——より生ずる米國人の誤解を取去ると同時に、排日が正義人道に、背反し、修好善隣の通則を無視し、且つ米國の不利となる事を明かにせねばならぬ。此の運動の爲めには、噂の如く大隈侯の渡米も妙であらう。或は排日對抗の宣傳の效果を疑ふものもあらうけれども、努力次第では必ずしも絕望ではないのである。米國は我國と異り極めてデモクラチックであり、輿論の勢力が偉大なる國であるから、宣傳の效果も亦極めて多大である。此事は今次の戰爭に於て、英佛の宣傳が遂に米國をして參戰せしめたに徵しても明かであらう。獨り在米日本人の爲めのみではない、實に世界に於ける日本人の將來の爲め、排日問題の解決に努力するは、刻下の急務ではあるまいか。（十月十日）

科學の窮局人生の極致

樂天論

理學博士　新城新藏

日月星辰は天の文章である。有史以來幾千年、我々はこの天の文章を觀て何を學び得たであらうか。秋の夜は空淸く星高し。眼を擧ぐれば廣袤無邊の大宇宙は玲瓏透徹、赤裸々に我が前に展開して居るのであるが、それにも拘はらず天の文章を讀破して其眞意義を悟るのは決して容易の仕事ではない。

はげしき流星落下の現象を見ては、天の崩墜せんことを憂へて寢食を廢するに至つた人もあり、異様なる彗星の出現に際しては、天地の破滅を悲觀した時代もある。一方には天道は正直と云ひ、天は自ら助くるものを助くと安心して居るものもあるが、又他方には天機は神秘なりとし、星占や祈禱や若しくは二三の特殊なる人の媒介によりてのみ其機密を探り得べきものと信じて居る人もある。天道果して是か非かと嘆じて居る人は今日と雖も決して少くはあるまい。

無限にして測り知るべからざる如くに見ゆるがために、恐ろしきもの、神秘的のもの、不可解なるものゝ如くに思はれて居つたのであるが、近世に於ける科學的研究の結果として、天地宇宙の眞相、其構造や成因や進化開展の徑路は次第に明かになつて來たので、幾千年來の宿題は漸く解決の期に達したのである。我々は漸くにして天の文章の眞意義を悟り得るに至つたのである。

天の文章を讀む學問は即ち天文學であるが、今日までに我々の學び得たる所を要約して云へば

我が天地宇宙は甚だ大なること

我々に何等かの作用を及ぼし得る範圍は有限なること、こ

の天地宇宙の間には神秘不可思議なる力は少しも作用して居らぬこと

この天地宇宙は相互の引力で成立して居ること

この天地宇宙は相互の引力によりて進化しつゝあること

等である。以下少しく事實に就てこれを解説して見たい

地　球

先づ手近の所より始むれば、我が地球は半徑六千四百粁の球で、平均比重は五・五。其中央部の半分は比重八の鐵の球で、これを包める外側の半分は比重三の岩石層より成つて居る。山岳重疊、海洋萬里の地形の變化も大觀して見れば、球の表面に於ける細微なる凸凹で、其高さも深さも共に十粁以内である。又是等の海陸の凸凹のために地球の內部に及ぼせる密度の不等齊も僅に約百二十粁の深さに至れば少しも其痕跡を留めない。從て其約三分の一、表面よりの深さ四五十粁の邊が最も無理の多い所で、地震や噴火などの起るのは大抵この邊に起因して居る。

地球を包む大氣は地上約三四百粁までは其存在の痕跡を認むることが出來るが、風や雨や、雲や雷や其他一切の氣象變化の起るのは其底部僅に約十粁の間に限られて居る。飛行機や氣球によりて人間の上つた最高記錄も約十粁であるが、人間の揚げたゴム風船の最も高く昇つたものは約三四十粁まで上つて居る。

二大蒸汽機關

地球の表面は卽ち我々人間の住居であるが、この表面附近に於ける主もなる天然現象は、達觀して云へば、二つの大なる蒸氣機關の作用に伴ふものと見ることが出來る。其一は大洋の水が太陽の熱によりて蒸發し、陸方面に吹き附けられて寒冷なる山岳に遭ひ、凝縮して雲となり雨となり、やがて河流となりて再び海に入るまでの一循環が丁度一の大蒸氣機關に類して居り、熱源は太陽の熱で、風や雨や水流の運動はそのために生ぜる仕事である。他の一は大洋の水が永き時の間に次第に深底下に浸潤し、深く地中に入ると共に地下の高熱に遭ひて、高壓力の水蒸氣となり、陸地方面に於ける裂れ目や其他比較的抵抗の少さき部分を撰んで噴出し、やがて再び海に戻るまで一循環である。其熱源は地球內部の熱で、地震、噴火、溫泉等はこの大蒸氣機關の活動に伴ふ現象たるに過ぎぬ。

斯様に考へて見れば、我々は二つの大なる蒸氣機關の間に生活して居るので、恰も佛者の所謂三界は火宅の如しと云へる譬を其儘現實にした様なものであるが、併しこの大蒸氣機關の作用は、多くの測候所や高層氣象觀測所や地震觀測所等によりて、みな徹底的に觀測し、合理的に吟味することの出來るものであつた、少しも神秘的なる若しくは不可思議なる力は作用して居ない。火宅の中にあつても少しく不安なることはない。

月

月は幾千萬年の昔に、地球が溶岩狀態から固まりかける頃に地球から分れたものであらうと云はれて居る。地球に比し容積は五十分の一、質量は八十分の一で、其平均比重は三・四。全部岩石に類したものより成つて居るであらう。望遠鏡にて見れば、圓きぶつ／＼したものが多數に見ゆるが、これはみな昔活動した噴火口の跡であらうと思はれる。現在は月の表面には水もなく空氣もない。昔し地球から分れた折には定めし水も空氣もあつたであらうが、月の質量の小なるがために水蒸氣の分子、空氣の分子を引き留めて置くだけには引力が足らず、永き時の間にみな飛散し去つたものと思はれる。水も空氣もなき故に、我が地球上に於ける如き二大蒸氣機關の作用もなく、一切の氣象變化、一切の活動がない。月は實に永久閑寂の相を我々に示して居る。

太陽系

太陽は其容積は地球の百三十萬倍、質量は十萬倍で、平均比重は一・四なる尨大なる球である。大體瓦斯體の如きものより成つて居るであらう。表面の溫度は六千度、其内部の溫度は幾百萬度乃至幾千萬度と云ふ程度のものである。この太陽の廻りを水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星の八大遊星、これに附屬せる合計二十七個の衛星、火星と木星との間にある約一千の小遊星、數百の彗星、多くの流星群、無數の浮浪流星などが廻つて居り、是等が相集つて一の太陽系なる團體をなして居る。地球と太陽との距離は一億五千萬粁で、光が通過するのに八分二十秒を要する程である。最外方の海王星までは其三十倍程であるが、彗星の中にはなほ遙に大なる軌道を畫いて居るものがある。

太陽系に屬するものゝ中、肉眼にて見ゆるものは地球と日月の外には水、金、火、木、土の五星で、彗星は太陽及び地球に

近く來た時だけ見える。流星は群をなせるものも、なさゞるものも、地球の近くに來りたる時に、地球に引かれて其大氣中に入り、摩擦のために熱を發し瞬時の間光つて見ゆる樣になるので、流星の我が大氣中に入りて見ゆる數は地球全面にて合計すれば一晝夜に約二千萬と云ふ大數である。流星の大さは勿論大小不同であるが、其平均の大さは約幾百瓩と云ふ程度のものであらうと思ふ。斯の如き流星が幾億萬となく相集まり、流星群となりて太陽のまわりに廻つて居る者が多數にある。流星群の比較的濃厚に密集せる者は彗星として見え、なほ更に密集して一の個體となりたるものは即ち小遊星となつたものであらう。

惑星と星占

五星は東洋でも西洋でも二三千年も前から注意して居つた樣であるが、其運動は太陽の周圍に楕圓軌道を畫きつゝあるものを、同じく太陽の周圍を廻りつゝある地球上から見て居るので、頗る不規則なる運動をする樣に見える。順行、逆行、停留などありて可なり複雜なので、定めしあれは宙宇に惑ふて居るのであらうと想像して、是等の遊星を又惑星とも稱へたのであるが、其實五星の運動は引力の法則によりて一絲亂れず、正しき運動をなして居るので、少しも不規則なる若しくは曖昧なる所はない。彼を以て不規則なり、惑へりと見たのは、實は却て見る人の頭が低能で惑つて居つたためである。散々惑ひたる後に、更に一歩を邪道に進め、複雜なる五星の運動と複雜なる人事界の現象とを以て直接に何等かの關係あるならんと想像し、双方とも理解し能はざるものを兩々相對立せしめ、所謂占星術なるものを案出するに至つたのは其愚寧ろ憫むべきものと云はなければならぬ。

一見不規則に見ゆる運動を、なほ一歩進んで徹底的に研究すれば、今を去る約二百五十年前にニユートンが發見した如くに、凡て天體相互の引力によつて運動して居るものであるといふ宇宙の大眞理に到達し得た筈であつたのであるが、これを星占の目印と見、五行判斷の材料と見るに至つたのは、畢竟力足らずして研究の中道に挫折し遂に自ら邪道に惑ふに至つたので、今日よりして見れば其低能なるは云ふまでもないが、又餘りに努力の足らざりしことを遺憾とせざるを得ない。蒙昧時代の遺物を今日なほ信奉して居る人が少なくないと云ふに至つては啞然として言ふ所を知らない。

太陽の熱は活動の源泉

太陽は其尨大なる質量を以て太陽系の中心體となつて居るのであるが、其尨大なる質量の密集せるがために非常に多量の熱を發生し、其内部は實に幾百萬度乃至幾千萬度と云ふ高熱の狀態に達し、光明赫耀として其熱と光とを四方に發散して居る。我が地球上に於ける百般の現象、一切の活動は殆ど皆其源を太陽から受けたる熱と光とに發して居ると云ふてもよい程である。氣象變化や植物の生長等が直接太陽の熱によつて居ることは云ふまでもないが、植物を食して生活して居る動物や人間の活動も亦太陽の熱に基いて居ると云はなければならぬ。

熟々五千年來の文明發達の徑路を大觀すれば、畢竟如何にせば最も多量に太陽の熱を人生に利用し得るかと云ふ問題を解決しつゝ進み來つたものと云ふことが出來る。

支那、カルデヤ、埃及等に根ざし、今日の文明の基をなしたものは云ふまでもなく農業文明で、是等の地方に於ては、適當の季節に播種し成るべく多く太陽の熱を利用することに成功せるがために文明の源泉地となることが出來たのである。やがて熱帶地方に於て多量の太陽の熱を受けて現出せる植物を利用せんがために交通商業の發達を來たし、更に近世に至りては製造工業によりて多量の食糧を供給せんとするに至つたのであるが、製造工業の動力として用ふる石炭の火力も又は水力も、其起因を尋ぬれば皆太陽の熱に基いて居るのである。石炭は過去幾十萬年乃至幾百萬年の昔に太陽の熱を受けて繁茂せる植物の地下に埋沒して成れるものであり、水力は太陽の熱によりて蒸發せる海水が山地に下りやがて再び海に入るまでの間の落差を利用するものであるので、畢竟石炭の火力は遠き昔に太陽より受けたる貯蓄、水力は至つて新らしき年々の貯蓄を利用して居るものと云ふべきである。

地下に埋藏せる石炭の量にも限りあり、將來利用し得べき水力の量にも限り有り、計算によれば到底百年後の我々の要求に應ずるには足りないので、我々は更に直接太陽の熱を多量に利用する方法を案出しなければならぬ。利用方法としては植物の繁茂を利用するか、微生物の媒介によるか、熱機關を用ふるか、又は電氣的方法によるか、種々の方法があり、其孰れが最も有効なるかは今後の研究に待たなければならぬ。若し我々の努力によりて現在に幾百倍幾千倍する程度まで太陽熱を利用する有効なる方法が案出さるゝならば（そしてそれは確に可能なこと

である)、其方法の如何によりて今日の文明は一時期を劃して面目を新たにするであらう。食糧問題や人口問題の將來は少しも悲觀を要せず、人類の增殖は多々益可なりで、我々の將來は千代八千代、天地と共に窮りなかるべく、マルサスの人口論の如きは眞に一の杞憂に過ぎないであらう。

星辰界

天に見ゆる星は、我が太陽系に屬する少數のものを除くの外は皆一つ〳〵我が太陽と比類すべき程のものである。肉眼にて一つ〳〵見分け得る星の數は約六千であるが、其最も近きものと雖も地球と太陽との距離の三十萬倍程で、光が通過するのに四年半を要する程である。我が太陽を假に現在よりも三十萬倍程遠ざけたとすれば、其光度は丁度七夕の星位に見え、多くの星の中のたゞ一つたるに過ぎない筈である。肉眼にて見得る最も微かなる星まではなほ百倍も遠い。

望遠鏡にて見れば星の數は遙かに多くなるが、併し今日廣く信ぜられて居る所によれば、星の總數は決して無限でない。約十億乃至二十億の一團體を作つて居ると云はれて居る。光が通過するに一年を要する距離を一光年と稱へるが、我が星辰團體は長徑約一萬光年、短徑は其十分一位なる扁平楕圓體狀の空間に散布して居るであらうと思はれて居る。

大きな望遠鏡で見れば、普通の星の外に、渦卷の形狀をなせる渦狀星雲なるものがあり、現存の最大望遠鏡で見得る數は約百萬に達する程である。是等の渦狀星雲の本體の何物なるかは未だ判然しないが、定めし我が星辰團體の全體に比類すべき他の星辰團體が見えて居るのではあるまいかと想像されて居る。渦狀星雲までの距離は餘りに遠くて測定し難いが、凡そ幾十萬光年と云ふ程度のものであらう。

大宇宙。小宇宙

宇宙の廣大なるは實に驚くべき程である。これに比すれば、星辰界中の唯一つの點に過ぎざるべき我が太陽系、其太陽系中の小なる一員に過ぎざる我が地球、其地球の表面に約十數億程群居する人類の一人なる我々の如きは、實に微小なるものと云はなければならぬ。世界を二分して雌雄を爭ひたる過般の大戰爭の如きも大觀すれば蝸牛角上觸氏蠻氏の爭よりもなほ遙に顯微鏡のものである。我々は日常眼前の事物を處理するに當りて熱心努力しなければならぬのは勿論であるが、時に宇宙の廣大

なることを思ひ浮べて、其大局より達觀することを忘れてはならぬ。莊子一篇の寓意は畢竟すると餘りに細目にのみ拘泥することを誡め、全體大局より達觀するの要あることを述べたものと思はるゝが、我々は幸にも天文學の智識によりて大哲莊子以上に悟りを開くことが出來るのである。

　宇宙の廣大なることに驚嘆するのはよいが、これがために人間の餘りに小なることを見て悲觀するのは當を失して居る。我我は立脚地の主客を轉倒してはならぬ。宇宙を斯の如く大なるものと見るのは我々人間が見るのである。我々自らを微小なりと悲觀する代りに、宇宙を斯程まで大きく思ひ浮べ得る程に我我の精神の偉大なることを嘆美しなければならないのである。

　滿天の星を見て、硝子張の天井に銀砂をまきたるが如しと見るのも一の見方であるが如何に其宇宙觀の憐れなることよ。井底の蛙の宇宙觀の如何に憐れることよ。我々は天文學の進歩によりて我々の精神を斯くまでも偉大ならしめ得たことを感謝しなければならぬ。

宇宙引力

　更に嘆稱に堪えないのはこの廣大なる星辰界全體も、我が太陽系も、又我が地球も、皆夫れ〴〵相互引力に依て成立して居る引力團體であることである。是等のものは偶然相集つて來た烏合團體ではなく、相互引力によりて永久離れざる如く相結合せる引力團體である。

　計算によれば我が地球の表面にては、一秒十一粁以上の速度にて動いて居るものは遂に地球の引力範圍を脱出して永久地球以外に飛び去るであらうが、それ以下の速度のものは地球の引力のために楕圓軌道を畫き、永久その引力範圍を脱出することが出來ない。一秒十一粁と云へば、最も速き小銃彈の十倍以上の速さで、そんな大速度のものは我が地球上に存在して居らぬから、現在の地球を形成せるものは永久崩れずして共に我が地球を形成してゐる筈である。

　月の表面に於ては空氣の分子、水蒸氣の分子の運動は、月の引力による極限の値以上に大きくなり得るので、永き時の間に凡て皆逸散し去つて、現在は水も空氣もなくなつたのであるが、我が地球の表面にては空氣及び水蒸氣の分子の運動が極限の値以上になることは殆どないと云ふてもよい程なので、逸散し去ることはなく、我が地球上に於ける水と空氣とは永久に存在するものと見てよい。

我が太陽系に就て計算すれば、太陽より地球ほどの距離にて一秒四十二粁以下の速度のものは、我が太陽のまわりに楕圓軌道を畫き、永久其引力範圍を脱出することが出來ない筈である。實際に於て現在のものは皆この制限以下なるが故に、我が太陽系も亦永久崩れざる引力團體である。

我が星辰界全體に就ては、一秒約百粁以下のものは永久我が星辰界を脱出することがない筈である。多くの星の中には、この制限以上の大速度で動いて居るものが時々あり、是等は或は我が星辰界以外に脱出することがあるかも知れないが、それ等は極めて稀れなる少數で、大多數は皆制限以内なるが故に我が星辰界全體も亦永久崩れざる引力團體である。

引力による進化

現在見る如き我が宇宙は如何にして出來たか、如何に進化し來つたかに就ては學者の意見區々にして一定しないが、予は若干の理論によりて次の如くに考へて居る。

當初には現在の小遊星位の大さの流星が無數に存在し、銘々勝手に無茶苦茶運動をなして普ねく虚空に瀰漫して居つたものとする。勿論是等の流星相互の間には衝突や干渉等が無數にあつたであらうが、相互引力のために、是等の衝突干渉の度毎に聯絡合一の機會を與へ、周圍に比して多く密集し始めた所を心核として次第に大なる集團を形成するに至つたものである。大きく固まつたものが我が太陽及び多くの星となり、局部的に小さく固まつたものが木星や地球の如き遊星となり集まり後れたものが小遊星として殘存して居るのであらうと思ふ。現存の多くの流星や流星群は、これより一段階以前に同様の順序にて小遊星位の大さのものに固まる際に固まり後れた殘物であらう。

中央に出來た太陽は大集團なるが故に多量の熱を發生し四方に熱と光とを放つて居るのであるが、我が地球の如きは小集團なるが故に、熱を發生すること少なく、從て其表面は早く冷却し生物の發生に適する程になつたのである。

太陽の如きもの〻密集は、尨大にして散漫なる狀態より始まり表面の溫度も低いのであるが、次第に密集すると共に熱を發生し表面の溫度も高まるので從つて四方に發散する熱量も多くなり、遂に發散する方が發生する熱量より多くなれば表面の溫度は次第に低下し始め、遂には再び見えない程の低溫度になるのである。物質は不生不滅なるが故に、其實體が永劫に亘り存在して居ることは疑もないが、其光と熱とを四方に發散し光明

赫燿たる星として認めらるゝ間の一生は有限である。我が太陽の過去の壽命は約幾億年と云ふ程度で將來の壽命は約幾千萬年と云ふ程度のものかと思はれる。

我が地球表面の溫度は全く太陽から受くる熱によりて支持されて居るのであるが、今度幾百萬年位の間は太陽の狀態にさしたる變化もなかるべく、從つて地球上の溫度も大なる差違はないであらうと思はれる。地球上に於ける空氣と水とが永く存在すべきことは既に述べたる如くなるが故に、畢竟我が地球の表面は今後なほ幾百萬年の間は生物の住居に適するものと云はなければならぬ。

樂天努力

我が廣大なる宇宙は引力によりて始められ、引力によりて現に成立して居る。換言すれば、宇宙引力は實に宇宙開闢の原動力であり、現存の要素であり、進化の大勢である。斯の如き考を以て天文を觀れば實に麗しく見える。さゝやかなる星の光にも宇宙の眞相も見ることが出來る。

我が宇宙は全然公開的にして少しの秘密もない。何等神秘的の力は作用して居らぬ。從つて我々は神秘的な特殊の人に頼ることを要せない。平凡なる我々人間は全然科學的合理的なる方法により、一歩〱努力することによりて宇宙進化の大勢に順應することが出來る。前途洋々たるが故に樂天的である。樂天努力。是れ我々が天の文章を觀て讀み得たる眞意義である。

鸚鵡のイズム

理學博士　有平糖

此頃ピエル、ヴイエイといふ盲目の學者の書いた『盲人の世界』といふのを讀んで見た。

私は自分の專門として居る科學上の知識從つて其れから歸納された方則といふものゝ成立や意義などについて色々考へた結果人間の五感のそれ〲の役目に就いて少し深く調べて見たくなつた。其の爲には五感の內の一つを缺いだ人間の知識の內容がどのやうなものかといふ事を調べるのも最も適當な手掛りの一つだと思はれた。其れを調べた上でもし出來るならば、『世界中の人間が悉く盲或は聾であつたとしたら此等の人間の建設した科學は吾々の科學とどうちがうか』といふ問題を考へて見たいと思つて居る。そういふわけで盲人や聾者の心理といふものに多大な興味を感ずるやうになつた。

其れで此の間は此の書物を某書店の棚に並んだ赤表紙の叢書の中に見附けた時は、大に嬉しかつた。早速讀みかゝつて見ると中々面白い。丁度自分が知り度いと思つて居たやうな疑問の解釋が到處に出て來た。そして更に多くの新しい問題を暗示された。

併し私が今玆に書かうと思つたのは此の書物の紹介ではない唯此れを讀んで居る中に出會つた妙な文字と、夫について一寸感じた事だけである。

此の書物の第十五章は盲と藝術との交渉を述べたものであるが、其中に、有名な盲で同時に聾のヘレン、ケラーといふ女の自敍傳中に現はれた視感的美の記述がどういふ意味のものかといふ事を論じた一節がある。その珍らしい自敍傳中から二三小節を引用してあるのを見ると、例へば雪の降る光景などが見るやうに空間的に描かれて居る。或は秋の自然界の美しい色彩が盲人が書いたとは思はれないやうに實感的に述べてある。此のやうな光景は固より盲者にとつては何等の體驗にも相應しないヴアーバリズムに過ぎないといふ事を論じ、其れから推論してケラーが彫刻を撫で廻せば其の作者の情緒がよく分るといつた

言葉の眞實性を疑つて居る。

私は此を讀んだ時に何だか少し物足りないやうな氣がした。ケラーの主張が本當であり得るやうな氣がすると同時に、そうであらせ度いといふ氣もした。しかし自分は盲でない。ヴイエイと云ふ優れた盲の學者の說に反對すべき何等の材料も持ち合せない。しかし少くも此れだけの事は云はれると思ふ。卽ち藝術に對する感受性は必しも各人に普遍的なものではないから、ヴイエイが感得しない或物をケラーが感じるといふ可能性は殘つて居る。

ヘレン、ケラーは生後僅に十八ケ月目に重い病の爲に彼女の魂と外界との交通に最も大切な二つの窓を釘付けにされてしまつたに拘らず自由に自國語を話し、其上獨、佛、羅、希にも通じるやうになつた。指先を輕く相手の唇と鼻翼に觸れて居れば人の談話を了解する事が出來る、吾々の眼には奇蹟のやうな女である。匂や床の振動ですぐに人を識別する女である。

併し私が書かうと思つたのはケラーの辯護ではなかつた。ヴイエイがケラー自叙傳中の記述に對して用ゐた Psittacism といふ言葉である。

私は實は此のイズムには始めて出會つたので、早速英辭書をあけて調べて見ると、Psitta-ci（シッタサイ）といふのは鸚鵡の類をさす動物學の學名で、此れにイズムがついたのは、『反省的自覺なき心の器械的狀態』或は『鸚鵡のやうな心的狀態』といふ意味だとある。

私は此の珍らしい言葉を覺える爲に何遍も口の中で、シッタシズム〳〵と繰り返した。其れですつかり記憶してしまつたが其れからは何かの拍子に此の妙な言葉が意外な時にひよつくり頭に浮んで來る。此のやうな私の頭の狀態も矢張此のイズムの一例かも知れない。

そう云へば近頃世上で大分もてはやされる色々の社會的の問題に關する論辯や主張や宣傳中の一二パーセント、或は二三十パーセント、事によるともつと意外に大きいパーセントが矢張一種のシッタシズムの產物ではあるまいかといふ疑が起つた。

秋季美術展覽會が始まつて私も見に行つた。そして澤山の繪を見て居る内に又同樣な疑が起つた。

それからそれへと考へて行くと、日本國中到處に此の妙なイズムが轉がつて居るやうな氣がして來た。

最も意外に感じた事は自分が比較的によく體驗し體得して居るつもりで居た專門の學問上の知識の中にもよく〳〵吟味して

見ると怪しい部分が段々發見された。他人の研究を記述した論文を如何によく精讀した處で、其の研究者自身の頭の中迄滑り込む事が出來ない以上は、其人の得た結果を採用するといふ事には矢張此のイズムの匂がある。

併し其處迄考へて行くと人間の智識全體から自分の直接經驗から得たものを引去つた殘りの全部は、結局同じやうなものではあるまいかと思はれ出した。少くも假りに私が机の上で一例へば大根の栽培法に關する書物を五六冊も讀んで來客に講釋するか。或は神田へ行つて勞働問題に關する書物を十冊も買い込んで來て其れについて論文でも書くとすればどうだらう。つまりはヘレンケラーが雪景色を描き、秋の自然の色彩を叙すると同じではあるまいか。

此處迄考へたが、事によると此の最後の比較は間違つて居るかも知れないと思ふ。もう一度始めから考へ直して見る必要がある。併しもし此れが當を得て居るとしたら結局私は大根栽培法を論じていゝものだらうか惡いものだらうか。もし此れが惡いとなると困るのは私ばかりではないかも知れない。

まあいづれにしても私の大根栽培法が巣鴨の作兵衛氏に笑はれる事だけは確だらうと思つた。

此んな事を考へたのが動機となつて、ふと大根が作つて見たくなつたので、花壇の鳳仙花を引つこぬいてしまつて其あとへ大根の種を蒔いて見た。二三日するともう双葉が出て來た。あの小さな黑の粒の中からこんな美しいエメラルドのやうなものが出て來た。……

私はもう本を讀むのはやめてしばらく大根でも作らうかと考へて居る。（九、十、十、）

太陽系の粉碎と生物の窮局

石井重美

一

吾々人類の將來はどうなるであらうか。天に仁慈にして且つ萬能なる神のあることを信じ、何事もその神に便つて、一切ただ神の御心のまゝとし、善行をなせば善果を報ひられ、惡行をなせば惡果を報ひられるものと考へ、ひたすら神意に添ふことによつて人類の全的救濟を庶幾するといふやうなことは、主として比較的單純な感情生活を送つて居る人々の安心立命の上、並びにまた、それから二次的に導き出される種々なる社會的効果の上などからは、いかにも結構なことであるに相違ないが、併しながら、それだけでは到底吾々の智的要求を滿足させることはできない。つまり、宗教上の沒我的信仰のみによつて、吾吾の全人格を救ふことはできない。

そこで、吾々は、吾々人類の將來に就いて、もう少し理智的に考へて見る必要があるが、その場合、先づ第一に誰の頭にも浮んで來るのは、地球上に於ける生物の生命が、何か地球的若くは宇宙的の大事變によつて脅威されるやうなことがありはしないかといふ點である。

二

地球の表面からもし空氣が無くなつて了へば、生物は勿論一般に生活することができなくなるが、しかしながら、地球は、月や水星のやうに形が小さくなく、從つて、それ等の天體のやうに、折角出來た空氣をも自分の體の周圍に引き附けて置くだけの重力（即ち牽引力）が足らば、自然にそれを空間中に放散消失して了ふといふやうなことがないから、さういふ事情から地球が忽ちその大事な空氣を無くして了ふやうな惧はあるまいまたその空氣の成分に付ても、動物、植物、及び海水の相互間に於ける微妙な調節作用によつて、動物の生活に必要な酸素も缺乏せず、植物の生活に必要な炭酸瓦斯も適量にあるといふやうな具合に、都合のいゝ狀態が續くであらう。

三

それから、曾て地球は、恐らく、其軌道の形狀の變化や、地軸の動搖等の爲に、太陽から受ける熱の量に著しい變調を來して、屢々、氷河時代といふ恐ろしく冱寒な氣候の支配する時期を經驗したことがある。さういふ時期には、何年たつても雪が

解けず、地球の表面は厚い氷の爲に全く閉されて、生物は棲息するに處がなく、且つ想像することも困難なやうな激しい寒氣の爲に、大抵の者は死滅して了つて、餘程抵抗力の强い幸運な者のみが僅かに殘存して餘命を保つて居た。

そんなやうな怖ろしい氷河時代は今後再び此地球を見舞ふことはないであらうか。それは勿論一概に何れとも斷言は出來ないが、さういふ事實は、過去に於て既に度々起つたことで、其原因とも見るべきものが絕對に取去られて了つたといふ譯でないから、將來にも起り得る可能性は言ふまでもなくある。何時起るかと確かに時を指定することはできなくとも、長い時の間には何時か起り得るものであるといふことだけは豫想し得られる。

しかし、現在は、最近の氷河時代がやう／＼退散して、比較的溫和な氣候の時代に進み入つたばかりの時であるから、さう直ぐに新たな氷河時代が引續いて襲つて來るといふこともあるまいし、また、假令いつか、恰度氷河的氣候を構成するやうな條件が完備して、氷河時代が襲來したところで、それが必ずしも地球全體を一寸の隙もなく氷河の原と化して了ふといふ譯ではなく、地方によつては、さういふ氷河の見舞をうけない處もあるに相違ない上に、尙ほ、人智を用ひてかゝる險惡な狀態に對抗し、多少なりともそれを緩和することのできるやうな望も絕無ではないのであるから、之もさしあたりそんなに苦にする必要はないであらう。

四

次にまた、地球上に生活して居る生物は、總て、日光がなければ一時も其生命を維持することができないゆゑ、若し太陽が熱を失つて冷えて、困まるやうなことがあつたら、其時こそ、どんな生物でも皆な死んで了はなければならない。ところが、太陽は、絕えず、非常な勢で熱と光りとのエネルギーを空間に向つて放射して居るので、自然、しらず／＼のうちに少しづつそれが冷えて行き、終には全く熱も光りもない石の塊となつて、冷たい空間の中をたゞ淋しく運行するといふやうな時が來るに相違ないが、併しながら、さういふ太陽の熱の減少は極めて遲々たるもので、現在吾々の所有する智識の範圍內では、夫を確實に證明することができない。從つて太陽が上に述べたやうに熱と光りとを失ひ、その天壽を終へて死期に入り、所謂「暗星」の列に編入せられるやうになるまでには、少なくとも今後尙ほ何

千萬年といふ長い年日を要することであらうから、比較的に極めて短かい個體的壽命を持つた吾々人類は、此點に付ても亦余り杞憂を懐く必要はあるまい。

更に、太陽系が他の巨大な天體と衝突して、其體を粉砕せられるか、或は又、著しい破壊的影響をうける程度にさういふ天體に接近するといふ事も考へられないとはない。宇宙間には何億といふ澤山な星があり、それらが皆非常な勢で空間を疾走しつゝあるのであるから、さうして、吾々の太陽も亦その統率する一切の惑星（地球も其中の一つ）と共に同じやうな運動をして居るのであるから、吾々も、いつかは、さういふ天體の中の或者に接近若くは衝突するやうな機會があるに相違ない。いや吾々の太陽は、比較的近い過去に於て、既に少なくとも一度さういふ機會を經驗したので、其結果現在見られる通りの太陽系が形成せられたのであると信ぜられて居る。

兎に角、一旦さういふ機會が起れば、一切の生物は其瞬間に瓦斯狀體に變化して跡形もなくなるか、或は又微塵に粉砕されて終に死滅して了ふでもあらうが、天文學の教へるところに從ふと、そんなやうな機會は、吾々がそれに付て何ら顧慮を要しない程、ごく／＼稀に生起するものであるといふから、之亦現在の吾々が特別に憂慮する必要はない。

之を要するに地球的乃至宇宙的事變に因由する吾々生物の生命に對する脅威は、何れもまだかなりに長い時間的の餘裕を有つて居るもので、吾々一般人類の實生活上から云へば、夫らは別に取立てゝ問題とする程の事ではないであらう。

五

人類の將來に於ける運命に付ての對外或は對自然關係は斯の如くであるとして、さて次に、其對內關係はどうであらう。

生物學者の中には、生物としての人類は既に進化の絶頂に達したので、之から次第に退化して行くといふやうに考へて居る者がある。米國のコンクリン氏なども、近頃、「人類の個體的進化は既に遠い昔から大體停止して居るので、吾々の手も、眼も、腦も、最早現在の狀態より一層完全なものとなる望は少ないが、併しながら、人類は、其特殊な理智を基礎とした社會的結合の力によつてその缺を補ふことができる。」といふやうな意味の事を云つて居る。

人類の個體的進化が停止したところで、或は又夫が一部分多少退化しかけたところで、系統的にいふとまだ極めて若い吾々

人類のことであるから、それが近い將來に於て忽ち絕滅して了つたり、或は猿よりももつと下等な動物に退化して了つたりするやうな憂は萬々あるまい。それ故、此の問題も亦、一面それに付て勿論十分豫防的の注意を拂ふ必要はありながら、夫が直ちに吾々人類のより高きものに向つての貴重な精進憧憬の念を挫折銷磨せしむやうな性質を有つて居るものと解する必要はない

六

上に揭げたところから、吾々人類の將來に於ける運命は、一に係つて吾々が將來吾々自身をいかに、取扱ふかといふことにあることが判る。然らば、吾々は、どういふやうに吾々自身を取扱つたらいゝであらうか。

現在吾々の經驗して居る社會制度には、不合理な事が非常に多い。一方には、現行制度上の關係から偶然權力階級の位置に置かれたが爲に、何も人類文化の發展向上の上に貢獻すべき能力も素質も有たない者が、徒らに遊惰安逸な日を送つて居るのに、一方には、同じく現行制度上の關係から偶然非權力階級の位置に置かれたが爲に、文化向上の上に多くの貢獻をなし得べき素質を有しながら、當面焦眉の問題たる生活の壓迫を蒙つて貴重な天分を發揮することもできず、その儘恨を呑んで僻陬の地に埋沒して了ふといふやうな者がどの位あるかしれない。若し人類が、其文化的向上といふことを目的としないならば、別にそれでも差支ないかもしれないが、苟もさういふ目的の必要を是認する以上、之は決して輕々に觀過すべき事柄ではない。

其他尙ほ、勞働と報酬とに關する種々なる不權衡や、生活必需品の需給に付ての不合理や、現行社會制度の不備の爲に一般人類の福祉乃至其文化的發展の阻害されることが夥しくある。

かういふやうな社會的缺陷は、人類の種族的堅實性を維持する上から、勿論一刻も早く防去しなければならないことであり、またそれは、社會制度の適當な改造によつて大體之を拂拭し去ることができるであらうが、併しながら、更に眼を轉じて他の方面から之を眺めると、一部の經濟學者や社會改造家の考へるやうに、此の種の社會改造のみによつて、果して人類の一般的平和と幸福とが望まれるかどうか、夫は餘程疑はしい。いや、さういふ改造のみによつて地上に樂園を持ち來すことは恐らく不可能であらう。

七

　いくら社會制度の改造によつて一般の經濟狀態が好良になつたところで、後にいふ動物性の豊富な者が澤山あつて、どうして他人を苦しめて自分だけが樂しまうとか、或はまた、隣人同胞を犧牲に供しても自分だけが不當な利益を占めようなどといふことを、始終考へて居るやうであつたなら、決して眞の平和や幸福は得られまい。自分は、人類の社會は、頭腦の優れた好人物のみを以て組織されるやうにならなければ、到底眞正の、平和な、幸福な狀態にはなれないものと思つて居る。

　また、そのやうに動物性に富んだ所謂敏腕な人達が多く居つたなら、折角改造した新らしい社會制度の維持さへも難かしいかもしれない。さうして、忽ちのうちに社會進化の進路は逆轉して、再び誤つた邪路の方へそれが迷ひ入つて行くやうになるかもしれない。いや恐らくはさうなるであらう。そこで、少なくとも社會制度の改造と共に人類其物の改造といふ事が問題になつて來る。

　いふまでもなく、人間の心の中には、動物性と神性とがあるさうして、其動物性を最小限度に縮少し、神經を最大限度に擴大することが吾々人類の理想であり、また其理想に少しでも多く近づくことが取りも直さず吾々人類の眞正の福祉を增進せしむる所以であらうが、さういふやうな貴重な目的が單なる經濟組織の改善といふやうな物質的方法のみによつて完全に達せられるとは元より信ぜられない。勿論、經濟組織の改善が、斯樣な目的の到達を助成することはあり得る。また、其點からもさういふ改善の重大な意義があるのであるが、今述べたやうな理想に近づく爲には、どうしても神性擴張の爲の精神的敎養といふことを要求しなければならない。即ち、それによつて、吾々は、人類の精神的改造を企てなければならない。

八

　人類其物の改造に付ては、上に掲げた精神的方法の外に、近來漸く世人の注意を喚起するやうになつて來た所謂優生學的の人種改良方法をも考量する必要がある。尙ほ、前記の神性擴張も、單なる精神的敎養といふやうな抽象的方法以外に、此種の具象的方法によつて助成せられることが鮮なくないであらう。

　近世遺傳學の敎へるところに從ふと、人間の素質な餘程固定的のものであつて、周圍の狀況などからは容易に動かされない例へば、本來犯罪的の素質を有つて居る者は、假令どんな境遇に置かれても、またどのやうな訓誨や懲罰をうけても、其根本

的の素質を改變することはできないから、適當な誘因があれば直ぐに再び犯罪を構成するやうな行爲をすることになる。尙ほ此種の素質は、一般に遺傳的の傾向を有つて居るものであるゆゑ、さういふ素質を絕對的に芟除しようとするならば、どうしても、さういふ素質を所有する者の蕃殖を阻害若くは禁止して禍根を未然に斷つといふやうにしなければならない。

此他尙ほ遺傳性を備へたもので、一般民族の福祉の上に（善惡共に）重大な影響を及ぼすやうな形質もかなり知られて居るので、善良なさうしてまた有用な素質は（蕃殖上から）その存續繁榮を助成する一方、不良な有害な素質は反對にその撲滅を企圖し、以て次第に民族全體の素質を向上せしめようといふのが人種改良論者の目的であるが、新らしい事と云へば何でもどし／＼とやつてみる米國では、旣に法律さへ設けてその理論の實行に取掛り、また例の移民問題をもさういふ小立場から考察して八釜敷いことを云つて居る。

兎に角、此問題は、かなりデリケイトな、複雜な問題であつて、人類の蕃殖を、一般の動物や植物に對するやうに、或る一定の目的乃至標準を以て制御しようとするのは餘程困難な仕事であるに相違ないが、併しながら、その問題の擔つて居る重大な性質から考へると、之は決して等閑に附すべき事柄ではなく一時も早く夫に付て眞面目な研究をし、適當な處置を講じなければならない。

優生學によつてどの位人類の素質が改善されるか、それは勿論今明確に豫斷することはできない。また、遺傳學がどの位の範圍まで優生學と交涉をもち得るか、それも將來の研究問題である。併しながら、現在の吾々の知見のみから觀ても、優生學によつて少なくとも或る程度まで人類の素質の改善され得べきことは推量するに難くない。

九

社會制度の改造と精神的敎養（心の改造）並びに優生學（素質の改造）。吾々は此の三つの大旆を翳して、人類の一般的改造の事に從事せねばならぬ。勿論、人間はかなり役坐なものであるから上のやうな方法によつても、果して所要の目的が達成せられるかどうか不明なことではあるが、併しながら、事の成否は兎に角、吾々は、吾々の叡智が導く純眞理想の境地に向つて進む爲めに、一意たゞ最善の努力を盡すべきである。（完）

ヘラクリタスとデモクリタス

賀川豐彦

泣き味噌哲人と笑ひ上戸哲人

ソクラテスを思ひ切り冷やかしたあの有名な喜劇作者のアリストフアネスは、エペソの哲人ヘラクリタス Heraclitus と、アブデラの哲學者デモクリタスの二人をこの舞臺に捕へ來つて槍玉にあげて居る。理想主義のヘラクリタスには『泣き味噌哲人』と云ふ名を奉り、唯物主義のデモクリタスには『笑ひ上戸哲人』と云ふ名を捧げて居る。

ヘラクリタスは世の中の人がよく知つて居る通り、エレア派の哲人として、流動の哲學を說いてくれた第一人者である。彼を古代希臘のヘーゲルに比したのは、獨逸社會黨の創始者フアヂナンド・ラサールである。たしかにヘラクリタスはヘーゲルによく似た所がある。流轉を以つて宇宙を說明し火を以つてその本體としたのは正に希臘のヘーゲルである。

彼はまた『ヌース』(理念)を以つて宇宙の本體と見、一元的に宇宙を見んとする傾向を持つて居た。彼はこんなことを云ふて居る。

『世界には、唯一つの智慧がある。それは自ら意志するが、チュウスと呼ばる可きものではない。凡ての物を貫くこの世界の秩序は神にも人間も是を造らなかつた。それは初めから在り、今あり、後在る、永遠の火であつて、適當な時に燃やされ、適當な時に消されるものである。神は晝であり、夜であり、冬であり、夏である。戰爭であり、平和である。滿腹であり、飢渴である。彼は火の如く變化し、香として焚ぜられる時に、その各々の匂で知ることとの出來るものである。

彼はまた云ふ──

『人間は、物によつて善惡を區別する。然し、神に於ては凡

ての物が善であり、美である。』

彼はまた云ふ――

『凡てのものは有りとしてまた無い。凡てのものは有り、實は何にも無い――』と

これが、彼を悲しましめた理由であるか、どうか知ら無いが、兎に角、ヘラクリタスは現實に對して頗る悲觀的で、こんなことをも云ふて居る。

『吾等が生きて居る間は、魂は死んで居るので、死ぬと魂が生き返へる』と。

近代に於て希臘思想の批評家として天才的であつたと評せられて居る、ゼームス・アダムス James Adams はその名著『希臘宗教の師傅』の中に、ヘラクリタス程眞面目な純潔な哲人は無かつたやうに書いて居るが、彼は全く豫言者的であつたらしい。その哲學はヨハネ傳の哲學によく似た、ローゴス哲學であり、その書き振りも、ニーチエのツロアストラのやうな句調で書いてあるものらしい。

凡て唯心的な理想を追ふ豫言者的の哲人はさうした傾きを持つものである。傳說によれば彼は默想する爲めにその家督を弟に讓り、民衆の愚を罵り乍ら、孤獨を愛して、彼の哲學系統を編み出したといふことである。

泣き虫哲學者は、古代に於ても、或理想を持つて居た。そして、今日に於てもその系統は少しも變つて居ら無い。

ベルグソンの笑とデモクリタス

デモクリタスが何時生れたかははつきりして居ら無い。然し多分、ヘラクリタスと同時代であつたらう。ヘラクリタスは紀元前五三五年頃に產れて、四七五年頃に死んだことになつて居るが、デモクリタスは紀元前四九四年から四六〇年の間に生れたことにせられて居る。勿論判然したことはわから無い。

何にしても、デモクリタスは、人生を物質のみで出來て居るものだと見たことに於ては中江兆民居士や近世唯物論者と少しも變りは無い。

アリストフアネスによれば、デモクリタスは、人生をちやらいんぽらんに見た人らしい。凡てが厳粛なものであるとは見無かつた。物質の戯であるかの如く見たものらしい。それで何でもかでも笑つたものらしい。（傳說には、兎に角よく笑つたと云ひ傳へられて居る）

ベルグソンも、笑ふと云ふことは精神が物質的になる時に起

るのだと云ふて居るが・・・・・私としては、それに反對であつても、デモクリタスの場合に於ては、之は慥かに事實であつた。

凡てが分子の繋ぎ合せだ。人間の知慧と云つた處で感覺から出來たものである。感覺とは要するに分子の反應にしか過ぎぬと考へた。デモクリタスには、神など云ふものは無かつた。眞とか善とか美とか云ふものも無かつた。

彼はかう云ふて居る——

『眞理など云ふものがあるものか、そんなものがあつた所で、
我等はそれを知る事なんか、出來るものではない。
我等は何にも知らない。知る可きものがあるかと云ふことさへも知らない。』

彼は最高善は、精神の平均を失はぬことにあると云ふた。（貝塚澁六さんの云ふところによく似て居る）恐怖や、あまりの大欲、心配事や、悲しみを持ち來らしめるようなことは何でも反對した。それで彼は結婚に反對した。

彼はこんな、立場から凡ての理想論と、唯心論に反對した。

そして彼の弟にも、今日同じ樣なことを云ふて居る。

哲學上の二つの型

泣き上戸に、笑ひ上戸！　ヘラクリタスに、デモクリタス！　唯心論に、唯物論！　理想主義者に、現實主義者！　不變道德論者に、可變道德論者！

この二つの型の哲學系統は哲學史上に於ける永遠の型である。そして新しき社會哲學が現れるに際しても、ヘラクリタスとデモクリタスは兩々相對峙して、決して讓らない。泣き面をして宗敎家は、豫言者的口吻で、社會の墮落を罵り超越的理想を說く。さうかと思ふと、マルクス直系の現實暴露派は、道德を笑ひ、組織を笑ひ、人間を笑殺する。人間一匹の死も猫の首つり位にしか思つて居ら無い。社會は矛盾で一杯になつて居る。笑はざるを得ないのである。

彼は大きな聲で、生を笑ひ、神を笑ひ、死を笑ふ。宇宙は矛盾の赤き笑ひで一杯になつて居るのである。デモクリタスはこんな意味で、今日の日本の或哲學者に善く似た肌合を持つて居た。

泣く哲學と笑ふ哲學

理想派が泣くと云ふのはお可笑なことであるが、然し悲劇の出生から云ふても理想の無いものに悲しむ可き道理はないので

ある。そのまた反對に、理想を消した唯物論には宇宙が滑稽に見え無ければ不思議である。

笑ひは多く想像もつか無い組み合せから起るものである。物質のみが組合されて出來たと考へるには宇宙はあまりに、不可思議に出來上つて居る。笑の出るのは、何の不思議も無い。

理想派の觀念論者は泣く！

唯物史觀の實在論者は笑ふ！

今日の社會はこのヘラクリタス型と、デモクリタス型の社會哲學者で泣き笑ひの兩舞臺を見せられて居る。

神と最高善を説く宗教家は、天と死後とを指して、現實の世界苦から人間を救濟しようとは云は無い。ヘラクリタスの如く『魂は肉體の中に在つて死んで居る』と云ふのである。

その反對にデモクリタスの弟子は、現代に於けるパンの公平とパンの幸福を説く。そして最高善の不必要と神の無能を説く。

二つの領域に殆ど仲間地が無いかの如く見える。

實在としての生命

私から見ればヘラクリタスにも、デモクリタスにも理屈があると思ふ。然し二人とも爭ふ可き點が誤つて居ると思ふ。

私はヘラクリタスのように、法則や理念や智慧ばかりからその哲學を出發するのが、眞違つて居ると思ふ。

人間の究極する所は『生命』である。

私はデモクリタスのように、物質と物質の組織したと考へられる感覺のみから出發するのが眞違つて居ると思ふ。

人間の究極する所は『生命』であると思ふ。

笑ふことも泣くことも初めから有つたものでは無い。悲觀と樂觀とは生命あつて後に起つた問題である。

電氣物質觀と符號としての物質

物質と云ふものが、實在的にあるものでは無い。物質とは人間の感覺の符號を借りた表象である。電氣物質觀が組立てられてからは、電子は精神と物質の合ひの子のようなものだとわかつたが、それは重量のある物質では無い。それは、精神によく似たものである。それを我々が重さのあるもの、擴がりのあるものと感ずるのは、我等の感覺がまだ發達し無いからであると敎へてくれた。

今日まだ唯物論など主張して居る人は、餘程お目出度い人で

ある。

勿論そうかと云ふて、理念や智慧ばかりで世界の解釋が出來ると考へる哲學者、宗教家も、餘程人の善い人である。

電氣は物質でも無ければ精神でも無い。また電氣とよく似てまた違つて居る生命のエネルギーは、たゞ精神でも無ければ、物質でも無い。宇宙はそんなに簡單に片付けるにはあまりに、神秘的である。

生命は、凡てを超越して生え上る。

私の哲學を、唯物史觀で無いと云ふて、笑ふ人がある。私の哲學が唯物史觀であり得ないのは『生命』の哲學であるからである。

私の哲學を、眞の唯心論になつて居ら無い、まだ、經濟學などを八釜敷云ふて、物質的なことを問題にして居ると云ふ人がある。私の哲學が所謂唯心の唯心論であり得ないのは『生命』の哲學であるからである。

私は『生命』の外に、神があるとは思は無い。生え上る力の外に法則があるとは考へ無い。凡ては內在的である。法則と生命とは不二一體のものである。

胡適氏と私の問答

この間私が北京で支那の哲學者胡適氏と會つた時に、胡適氏は『君と僕との違ふ所は、君は神を信じ、僕は神を信ぜざる所にあり』と云ふた。そこで、私は尋ねた。

『神とは一體何だ？ 超越的な、自然の彼岸に隱れた法則のようなものか？ そんなものを己れは信じて居るのでは無い。己れの信じて居るのは『生命』を信じて居るのだ。『生命』は己れを超越し、また己れに內住して居る。己れは、生れたいと思つて生れたのでは無いが、己れは生れさゝれた。

『生命』は己れの中に、考へ、泣き、笑ひ、ものを云ふ。生命は人格であり、また人格を超越して居るらしくも見える。己れの神と云ふのは、直觀の世界に覗き込むこの生命の外に、何ものでも無いのだ。己の云ふ、絕對とは生命と云ふことだ』と云ふと、胡適氏は、そうか、それに就ては、己も考へ直して見ようと云ふた。

死を越えて「生命」は生え上る！

『生命』はヘラクリタスの考へたように二つの魂を持つ事は出

來無い。生命は物質を貫いて動く。物質とも見えるものは生命の衣裳である。死が或個人を奪ひ去ることもあらう。然しその『生命』は過去に去つただけであつて、死が過去の生命と人格を亡ぼして了つたわけでも無い。物質を食ひ破つて生え出た生命は、物質が引き退いて行つて了つた死後に於ても滅亡したとは考へられ無い。

生命は物質より弱いものでは無い。否物質こそ、生命の衣裳であり、生命の溫室であり、生命の貯蓄庫であるのだ。物質が生命と精神の敵であるかの如く考へるのは全くの誤謬である。物質は本體としての生命空間的形式であり、相對的約束であるのだ。

宇宙はエネルギーである。生命はその本體である。生命は進化する。進化とは價値の上進と云ふことである。

宇宙の本體は、生命價値上進である。生命は延び上らんが爲めに、或個體に死を與へる。然し死は進化の前提である。死を

越えて、生命は前進する。

生命は、無生の地殼をさへ破つて延び上つて來たでは無いか、有生の死をなぜ恐れるか！ 死は一つの約束にしか過ぎ無い！

生命は躍進する。死を越えて躍進する。 ヘラクリタス

流動の本體も、デモクリタスの笑ひの根源も、皆、生命の中に溶け入る。

宗教家の天國も哲學者のデング・アン・ジツヒも、生命の中に醱酵し沸騰する。嘗て一物でも、生命を除いて考へられたことがあるか？

デモクリタスの『物質』も『生命』が有つたればこそ見られもし、考へられもしたのである。物質は生命の附錄である。

生命は延び上る！ 物質を越えて延び上る。生命はパンの總計では無い。カロリ量で出來たものでは無い。パンとカロリ量は或約束を充たしたにしか過ぎ無い。生命はその內容を充實さす爲めにパン以外に多くのことを要求する。それは延び上らねばならぬ。甘く食はねばならぬ。樂しく住まはねばならぬ。踊らねばならぬ。飛ばねばならぬ。飾らねばならぬ。それはカロリ量以上の經濟組織を要求する。發明はその生命である。發明は唯物史觀では解け無い。パンは發明する能力を持つて居ら無い。

發明は生命の世界である。生命は容赦なく延び上る。物質を

蹴とし、宇宙の構造を內側から雷のように綻びさせて行く。

生命は、延び上る！ 生命は延び上る。天國を突き抜け、地獄を踏み破り、唯物史觀をも無視して、生命は延び上る。

（一九二〇・一〇・）

地球の死

理學博士　横山又次郎

學者の說に據れば、地球は其の初め高熱體で、之を取り巻く氣體も、今の大氣より遙に濃厚であつたが、宇宙の寒氣に觸れて、次第に放熱するに連れて、その溫度は低下し、その面には遂に固體の皮殼を生ずるに至り、その皮殼が又放熱冷却して、漸次厚くなると同時に、空中の瓦斯も、重いものから順次凝集沈澱し、最後に比較的輕い水蒸氣も亦凝りて、水と化し、陸面の凹所を充たして海となり、陸海共に適順の溫度に降つてから、生物も亦發生するに至つたといふことである。

さて此の生物も、實地の研究によれば、大體初めは簡單な劣等種で、時を經るに隨つて次第に增加進化して、終に萬物の靈たる人類となつて居る。而も此の人類は今は殆ど全世界に蔓延して、その住んでゐない空地ともいふべきものは、屈指して數へる程しかない。して見れば、今は生物全盛の期に入つて居ると言つても、決して誣言ではあるまい。

熟々宇宙間を見渡すに、物質は皆變化しつゝある。生物と無生物とに論なく、皆生老死の變化を受けつゝある。變化は宇宙の原則である。古人が諸行無常と言つたのも、此の大原則を有りの儘に云つたものに外ならぬ。

地球は、前述の如く、生の期を經て、老の期に入つて居る。して見れば、どうしても死の期なかるべからずである。況んや宇宙の原則が之を要求するに於てをやである。

地球現下の狀態では、破壞力と建設力とが其の面に働いて、而も互に鎬を削つて相戰ひつゝある。例へば、大氣は岩石に働いて、之を風化分解しつゝある。して之より生ずる土砂は、水によつて、海中に運れつゝある。海も亦波浪を起して、海岸を破摧蝕しつゝある。此等に對して、皮殼の收縮は、地球の放熱に連れて次第にその步を進めて、遂に山脈を蝟起せしめつゝある。又火山は物質を噴出して、之を地面に堆積しつゝある。

之を畧言すれば、大氣や水は陸地を磨滅しつゝあるに反して、地球の收縮や火山力は山を造くりつゝある。

此の破壞力と建設力とは、今後永く平均を保つて、勝敗容易に決しないかも知れぬが、或る時期に至れば、破壞力は建設力より優勢となるに違ひない。何故なれば、地球の收縮や火山力は地球の內部の熱が高く、この多少膨脹して居る時期にのみ活動すべきものであるからである。故に收縮力が少くなるか、又は無くなれば、山は最早成立せず、火山力が衰退すれば、その噴出物も少なくならざるを得ない。斯くなれば、破壞力は時を得顔で陸面を磨耗して、遂には地球面を全部海洋化するのである是の時に至つて、陸生々物は人類も共に全然滅亡せざるを得ない。

よし陸地の磨滅はないものとしても、玆に一の恐るべきものがある。それは即ち太陽の消滅である。地球面の生物は、皆太陽の溫と光とによつて生活して居る。尤も地球の內部にも溫はある。しかし此溫は生物に何等の影響をも及ぼしてゐない。

生物の恩源たる太陽も、今こそ赫々たる高熱發光體であるがしかし宇宙の原則通りに、早晩放熱冷却、遂に消滅せざるを得ない。曾て獨逸のヘルムホルツ博士は、太陽は放熱收縮の結果今から一千七百萬年の後には、今の大きさの四分の一に減ずると言つたことがある。此の年數は、今日では數倍乃至數十倍しなければならぬ理由はあるが、如何に此の年數を大きくして見ても、それは五十步百步である。便ち太陽は次第に放熱收縮しつゝあるから、その光溫共に漸次弱くなつて、終には吾が地球同樣闇黑無光の天體となる時期がなくてはならぬ。

太陽が減熱收縮すれば、その地球に及ぼす影響は言はずして明である。先づ地球面が水の結氷點まで減溫すれば、生物は或る黴菌を除いて大抵死滅し了るのである。それから空中の雲は雪となつて、皆地面に降下し、河は氷り、海も之に續いて氷るであらう。

溫度が更に一層低下すれば、生物は一の除外例なく滅亡し、大氣中の炭酸も凝集固結して、細粒の雪のやうなものになつて地面に降つて來る。かくて空中に雲も炭酸もなくなれば、地球の放熱を多少にても遮るものがなくなる理であるから、地球の冷却は急激に進んで、地面の溫度は氷點下攝氏二百度にもなれば、今度は氷の海の上に、更に新海洋が出現する。その海は即ち空中の窒素と酸素とが液化したものから成るものである。窒素と酸素とが沈澱してしまへば、大氣は僅に水素とヘリウ

ムとから成つて、その稀薄の皮は非常なものになる。

此の頃に至れば、地球も全く極冷の皮に包まれて、内部の熱などは、極小分量の外、地面には傳はつて來ない。しかし地球面が宇宙間の溫度たる氷點下攝氏二百七十三度まで低下するのは、太陽が少量ながらも、尙多少の熱を發射する間は不能である。

乍去是れは詰まる所時の問題である。便ち太陽も總て暗赤色の光輝時代（今は黄色光）を經て、眞の闇黑時代に入るに違ひない。さうなれば、その面には、曾て地球に見たやうに、薄皮が出來、その薄皮も時が經つに連れて次第に厚くなり、遂に水蒸氣凝りて海となり、その海も亦次いで氷となり、それから空中の瓦斯類も宇宙間の溫度以上で液化固體化等するものは、順次地球面に沈澱すること、地球に見たのと少しも異ならぬのである。只差異ともいふべきものは、太陽は地球より遙に大きいゆへ、物事が皆遙に大規模に行はれて、且地球では、太陽の光線下に行はれたものが、太陽では謂はゞ闇黑界（星光は云ふに足らぬ）で行はれるといふことである。

斯くなれば、太陽系は今日の如く光明なる星系でなく、闇黑の星系と變ずるのである。しかしそれでも尙太陽は今の諸遊星を引率して、今日の如く宇宙間を飛行するであらう。此の際に他の星と衝突の憂は隨分あり得べきことである。衝突があれば之によつて生ずる大熱は、再び無光の太陽をして、赫々たる光輝を放つ新太陽に生還せしむるに足るのである。是れは理窟上から言ふと、地球面の物質が、滅却解體した後その原料で、更に新物質が組み立てられるのと同じである。

今日我が太陽が諸遊星と共に飛行しつゝある方向は、天の北方に位する帝座星に向つて居る。此の星は非常の遠距離にあつて一秒七萬六千里を走る光線でも、之を通過するに十年かゝるといふのである。然るに太陽飛行の速力は僅に一秒五里であるから、太陽が帝座に達するには十五萬年餘もかゝる理である。しかし天には有光の星の外に無光の星が甚だ多い。してその多くは亦滅亡した太陽である。太陽が帝座に達する以前に、此等の一と衝突する機會は可なり多からうと思はれる。

二闇黑太陽が衝突する場合には、よしその衝突は正面的でなく、多少斜であつても、之が爲に生ずる熱は非常なもので、よし二體はその心まで冷え切つて居る極冷體になつてゐても、之を全部氣化せしめて、而もその物質を各元素に還原せしむるに足るとは、數學上の計算で確證されて居る。されば衝突によつ

て新に生れた天體は光輝を放つ太陽である。しかし此の新太陽も、亦前太陽の歴史を繰り返して、滅亡せざるを得ない。是の故に、煎し詰むれば世界は生れては滅び、滅びては生れて居るわけで、是れは生物が生れては死し、死しては生れるのと同樣である。此の生滅は宇宙不滅の法則である

自然科學と精神科學

東大講師　得　能　　文

自然科學及び精神科學の二語は從來慣用の語であつて、自然及び精神の二語が普通一般に用ひられて居ると同樣に、通例の用語としては何等の差支を見ないのである。然るに一たび兩者の關係如何の問題となり、やがては爲學の根本義に觸れるに至れば、其處に重要なる意義を現はし來り、込入つたる議論を生ずることになるのである。蓋し總て學は、其れが如何なる種類のものであつても、皆な精神の所産であるとは今更云ふ迄もないことである。然らば學を自然科學(若くは物理的科學)と精神科學とに別けるのは學其もの丶本質の區別で無いことは明らかである。既に學其もの丶本質上の區別で無いとすれば、此區別は其學が取扱ふものは何であるか、即ち其對象は何であるか、によつて做されるか、若くな其學が如何に對象を取扱ふか、即ち其取扱ひの仕方、即ち方法、の如何によつて做されるか、此二樣でなければならぬ。對象による區別とすれば、自然科學若くは物理的科學は自然即ち物理的のものを相手として研究する學問であつて、精神科學は精神又は心と名づけられるものを相手として研究する學問であると云ふことになる。然る時は自然科學及び精神科學の意義と性質とを明らかにせんとすれば、勢ひ必ず自然とは何であるか、精神とは何であるか、の問題に進まねばならぬことになる。之に反して若し方法の上から區別す

るものとすれば問題は頗る趣を異にしてくる、而してやがては自然科學と精神科學とに別けることと其事が果して適當なるや否やの問題をも喚起するのである。偖て斯の如くに見て來れば、問題は或は他の問題に溯り、或は他の問題に分岐する樣である。然れども今自然とは何であるか、精神とは何であるか、等の問題から始めるとすれば、當面の課題に迄到着するには多大の手續を要するのみならず、此等は自ら別問題を形成すべきものでもあるが故に、此の如き問題に這入込まずして、直ちに當面の問題に就て考察するを適當とするであらう、而して之を爲すには現實的に行はれて居る思想型に就て具體的に觀てゆく方が捷徑でもあり且つ適切でもあらうと思ふ。

科學が順次に哲學から分離する樣になつてから、一は哲學との關係を定める上から、モ一は科學の組織聯絡の上からして、科學を分類する事が必要であると考へられて、初めは或は目的の上からして理論的と實踐的と別けると云ふ樣なこともあつたが、斯樣の見方は科學の分類には適しないと考へられ、科學の分類は事實的に與へられたる研究領域によるべきものと認められ、而して研究領域は大別して自然と精神とに做さるべきが故に、科學は其對象によつて自然科學と精神科學とは大別する事が最も至當であると見られるやうになつた。而して近代に於て此別け方を本として思想の體系を組立てた最も顯著なる學者は予の知れる限りに於てはヴントとディルタイとの二家であると思ふ。

ヴントは先づ科學を形式學と實在學とに別ける、形式學とは數學である、而して實在學を自然科學とに別ける。其言ふ所によれば、此別け方は從來行はれたものではあるが、研究の手段と方法と原理との上から見て最も根本的のものである。固より同一の經驗世界であつて對象の直接的差別は無いのであるが、此同一世界が自然的方面と精神的とを現はす。自然的方面とは我々から異なれるものとして知覺せられるものであつて、精神的方面とは直接に我々に捉へられる我々自らの存在と同類なるものとして現はれるものである。前者を論ずるのが自然科學で後者を論ずるのが精神科學である。自然科學は又た二大別して自然過程の學と自然對象の學と爲す、而して前者は後者に對しては優先的のものである。其と同じく、精神科學も亦精神的過程の學と精神的產物の學とに別ける、而して精神的過程の學は精神科學の一般の領域に跨がるものであつて、同時に一々の精神的產物の說明根據を含んで居る。而して精神的過程を論ずる

學は心理學である、故に心理學は一切の精神科學の基礎である斯くてヴントに在ては、彼れが自ら考へるが如き意味に於ける心理學が總ての精神科學の基礎となり、一切のものゝ說明根據となるのである。是に於て先づ第一に起る疑問は、ヴントの說けるが如き經驗的なる實驗的なる心理學が果して一切精神科學の說明根據となり得るか否かである。例へば論理學や倫理學の如く規範を立てる學が如何にして實驗心理學によつて其基礎を樹立せられ得るか、過程の記述が如何にして規範を立て得るか併し乍ら、此疑問を考へるに先だちて、ディルタイの所說を見ることが順序であらう。

ディルタイは對象による區別に從つて精神科學を說き、而して心理學を以て其基礎の一と做せる點に於てはヴントに類して居る。然れ共ディルタイの心理學は全くヴントの心理學とは異つて居る。蓋しディルタイは直接體驗を重んじ、之を構造的結合態と稱し、特殊的のものは此結合態からしてのみ理解（說明では無く）せられ得る、而して此結合態を現はすことは只だ分析によつてのみ爲し得られると考へ、ヴントの如き構成的心理學に反對し、又たヴントの如き心的因果などを立てゝ因果法的に說明する考に反對して、心的生活を結合態の儘に記述すべきを唱へ、所謂記述的及び分析的心理學を說いたのである。心理學は「其れが見出す所のものを物語る」と云ふのである。而かも直接の結合態は單に個人の體驗に就て言ふのでは無く、人間集團の結合態に就ても言ふのであつて、終には人間的文化と云ふ大きなものに就て言ふのである、是に於て歷史が重要なものになる。デルタイに在ては心理學と歷史とが基礎的のものである。ディルタイはカントやロマンティクと同じく自我若くは主觀を以て現實界の認識の出發點となすのであるが、カントやロマンティクでは自我は時間的に制約せられたる出來事の上に優出し、意味を與へるもの、價値を與へるものとして見られるのである。之と異なつて、ディルタイでは自我は生活結合態と同義であつて一般文化過程の千態萬樣の生活の中の一項として編入せられるのである。又たディルタイでは認識の諸形式は意味ある現實的生活力の一表現に過ぎない、知力で透徹することの出來ない生活力が諸形式の源泉である。彼れの考では我々人間は先づ第一に實行者であり、第二に思惟者である、而して此事を明らかにする眞理の門は歷史である、自然は法則の領土であつて、歷史は目的及び價値の領土である、從つて人間の目的は自然から導き來ることは出來ずして歷史から導かるべきもので

ある。故に我々は自然によつてゞ無く、歴史によつて精神科學の領域に達するのである。是に依て之を觀れば、ディルタイは自然科學に對して精神科學を立て、而して心理學（及び歴史）を其本に置いたのである、然るに其內容に至つては全くヴントとは違つて居る。ヴントでは自然科學と同じ方法を以て心的現象を說明するのである、フッサールの所謂『意識の自然化』である意識の自然化は沒價値觀である。之に反してディルタイは目的と價値とを立て、特に文化價値を强調したのである、是れ則ちヴントとは異なつて思想の深遠なるを見る所以である。然るにディルタイに在ては價値の基礎付けは不十分であり、目的觀の立て方が不足である、是れ蓋しディルタイが文化價値を以て體驗の再構成の基礎若くは出發點と做さずして却つて此等文化價値は心理學によつて證明せらるべきものと考へ、特に心理學を認識批判的に證明せんとはせず、却つて認識論を心理學的に證明せんとせるに職由するのである、ディルタイは心理學を離れたる純客觀的の基礎付けを見なかつたが爲めに目的論の說明が曖昧になつたのである。

　是に於て此等缺點を修正せんとして起つたとも見られ得るのはバーデン派（ウインデルバント及びリッケルト等）である、此派は一種の目的論を說き、價値を樹立せんとするものである。此派は自然科學と精神科學との別け方を取らないものである。ウインデルバントの考によれば、自然と精神との事實的對立は認識の仕方の對立とはならない、特に事實上の分類と形式上の分類とは一致するもので無い、自然科學と精神科學との中間には孰れとも付かぬ經驗學がある、心理學の如きは是である、心理學は其對象から言へば精神科學であるが、併かし其取扱ひ方即ち方法から言へば全く自然科學である、其は『內感の自然科學』である。心理學が方法の上に於て自然科學と一致する點は兩者共に其視點に於ても其目的に於ても等しく一般法則を理解せんとする所に在るのである。之に反して、同じく精神科學と呼ばれるものゝ中で、一回限りの現實態を明らかにせんとする學科がある、其取扱ふ所のものは固より種々あれども、要するに其認識目的は一回限りの現實態に於て現はれたる人生の岡景を其事實性に於て再現し理解するに在るものである、是れ則ち歴史的諸學科である。此の如く別けるのは確實なる論理的概念に本づける方法論上の別ける方である、此區別の原理は認識目的の形式的性質である。一は一般的法則を求め、他は特殊的なる事實を求めるのである。總ての學は實在の認識を自然法則の形

式に於て普遍者を求めるか、若くは歷史的に定められたる形態に於て單一者を求めるか、孰れかである。一は常に同樣なる形式を見、他は現實事件の一回限りの內容を見る。一は法則學であつて他は事件學である。此方法上の別け方は認識の內容を分類するものに非ざるが故に、同一の對象が法則的にも個性的にも硏究せられるのである。而して玆に注意すべきことは、人間の價値決定は一回限りのもの、單一なるものに關係することである、固より總ての事件が歷史的事實となるものでは無く、歷史的事實と云へば其れから或物が知られ得るものに限るのである、換言すれば價値を關係せしめて見たものである、故に學的意識に於ては「事實」とは既に目的論的の概念である。ウィンデルバントの此思想を繼承して遙かに之を進めたものはリッケルトである、リッケルトの考によれば、元來、自然科學ならざる學科を精神科學と云ふは不適當である、自然に對立するものは文化である、文化は價値の附着するものであつて、文化から價値を取去れば單なる自然となる、故に自然と文化との對立は科學の分類の基礎となるべきものである。從つて精神科學と云ふよりも文化科學と云ふ方が遙かに適當である。併かし是は內容の點から言つたもので、形式の點からは自然科學的方法と歷史的方法とに別つべきである。論理的見方からすれば內容上では文化科學であつて方法上では自然科學的なるもの、及び內容上では自然科學であつて方法上では歷史的なるものがある。然れども此爲めに自然科學と文化科學との對立は無くならない、却つて歷史的文化科學を內容上及び形式上の點から截然と自然科學の概念から區別し、尙ほ進んでは、中間のものゝあるにも拘はらず、自然生活の硏究では主として自然科學的方法により文化生活の硏究では主として歷史的方法によることを明らかにし、由て以て經驗的諸科學の根本的對立を定めることが出來る斯くてリッケルトは文化科學を論理的に樹立せんとしたのであるが、此問題に就ては數年來屢紹介せられ論議せられたことであれば今此處に細論するの必要はあるまいと思ふ。又たリッケルトの此の思想に對しては種々の異見が現はれた、予の知る限りに於てはリール、カッシラー、フリッシュアイゼンケーラーメッサー、アスター、等である、然れども此等の批評は多くはリッケルトの思想を誤解するより出しものであつて、決して痛手を負はせるが如きもので無いと思ふ。マルブルヒ學派のナトルプも精神科學と云ふよりも文化科學と云つた方が宜しいと說て居る。

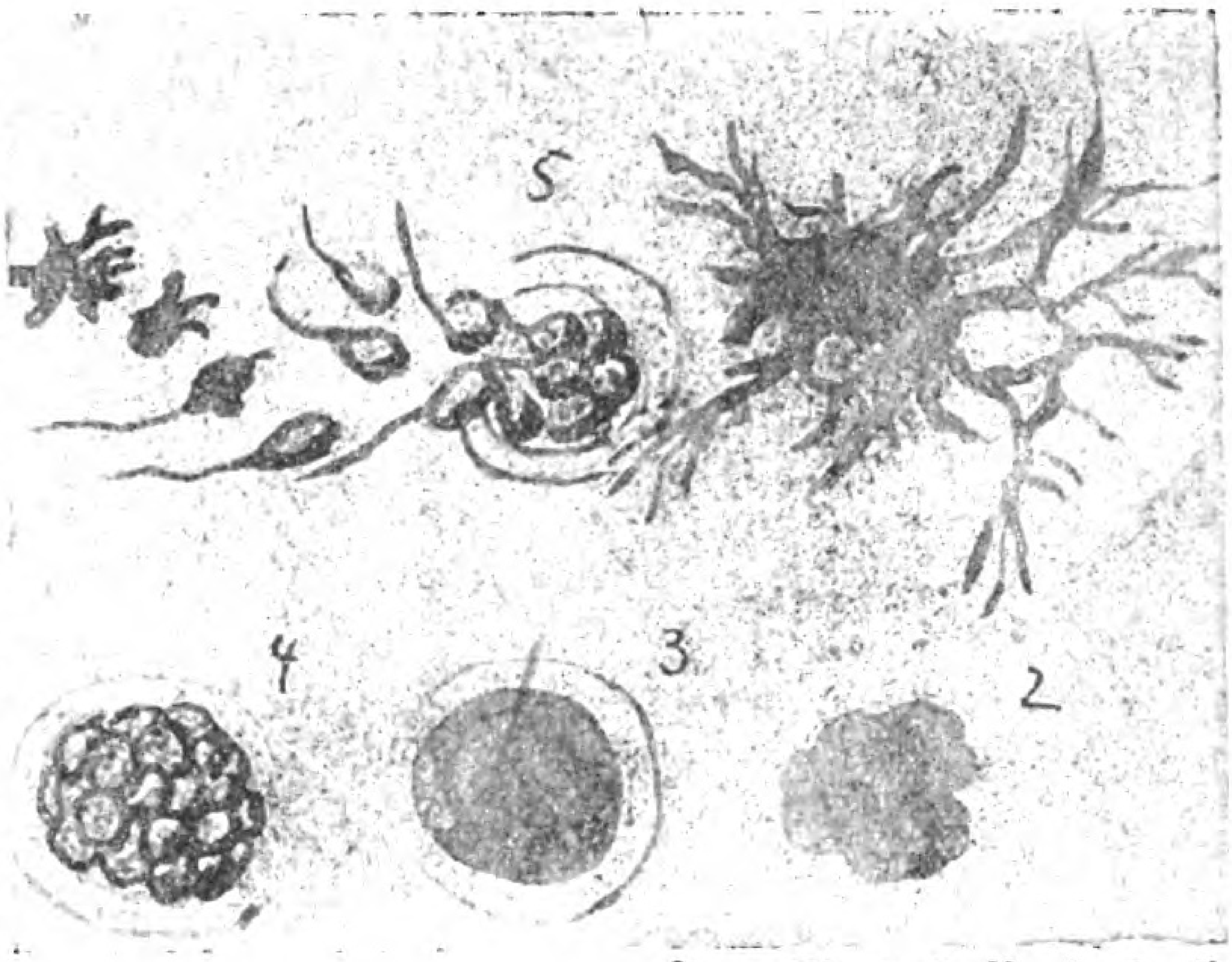
斯の如くして自然科學と精神科學との對立は自然科學と文化科學との對立となつた。然るに文化は精神の所産であるとすれば、否、寧ろ文化を產み出す活動を精神と名づくるならば、其意味に於ては精神科學の話を用ふるも差支はあるまいと思ふ。然れども其場合には精神と云ふは決して彼のヴントが說いた樣な實驗的心理學で云ふが如き意味の精神では無い。眞の意味に於ける精神は文化意識の統一である、而して之を問題とするのが理想主義的意味に於ける心理學である。實驗的心理學は精神若くは心を物的に見るものである。之に反して理想主義的意味に於ける心理學は人間の文化意識の種々の方向が如何にして個人的主觀に於て結合せられるかを論ずるものである。個人の意識に於ては自然的存在のみならず、倫理的及び藝術的存在が互に相交錯して居る、而かも此統一は個人の生活に於ては時々刻々に改まる新らしき課題である、此處には實驗を施さるべき何等の心的品物と云ふが如きものは無いのである。實驗的心理學は精神的價値を立てるには更に何等の交涉も無いものである。

(十月十二日)

生物進化の將來

理學博士　石川千代松

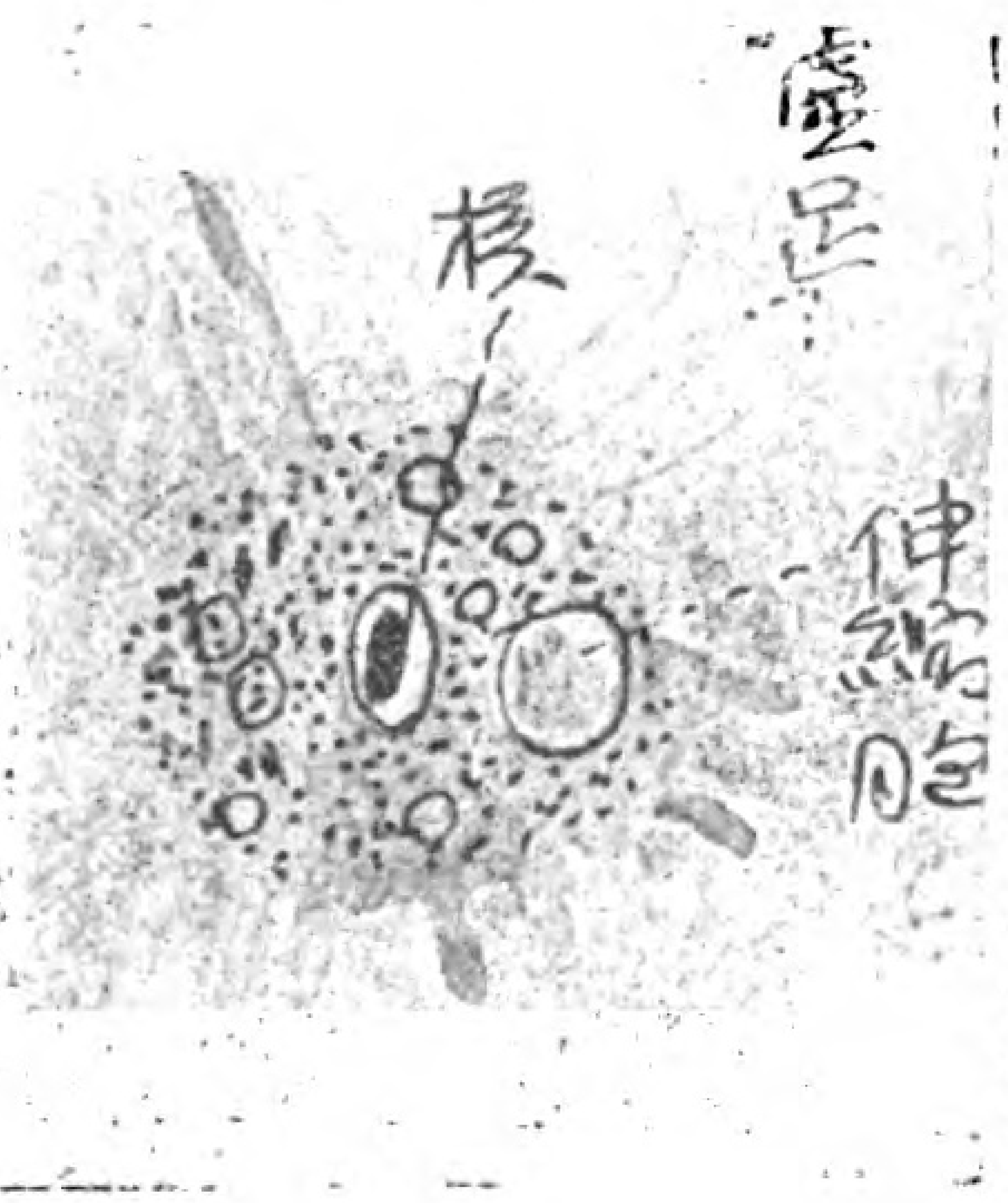
生物進化の將來を知る前に生物は今日迄如何に進化して來たかを知る必要があると思ふ、偖て生物は如何に進化して來たものであるかと問ふて見ると、其一つは分業である事は誰れも唱ふる處である。最初此地球に出來た生物は如何なものであつたかは誰れも知らないが、夫れが原形質の一塊であつた事と此原形質も亦最も簡單なものであつた事も大概考へられ得る事で、

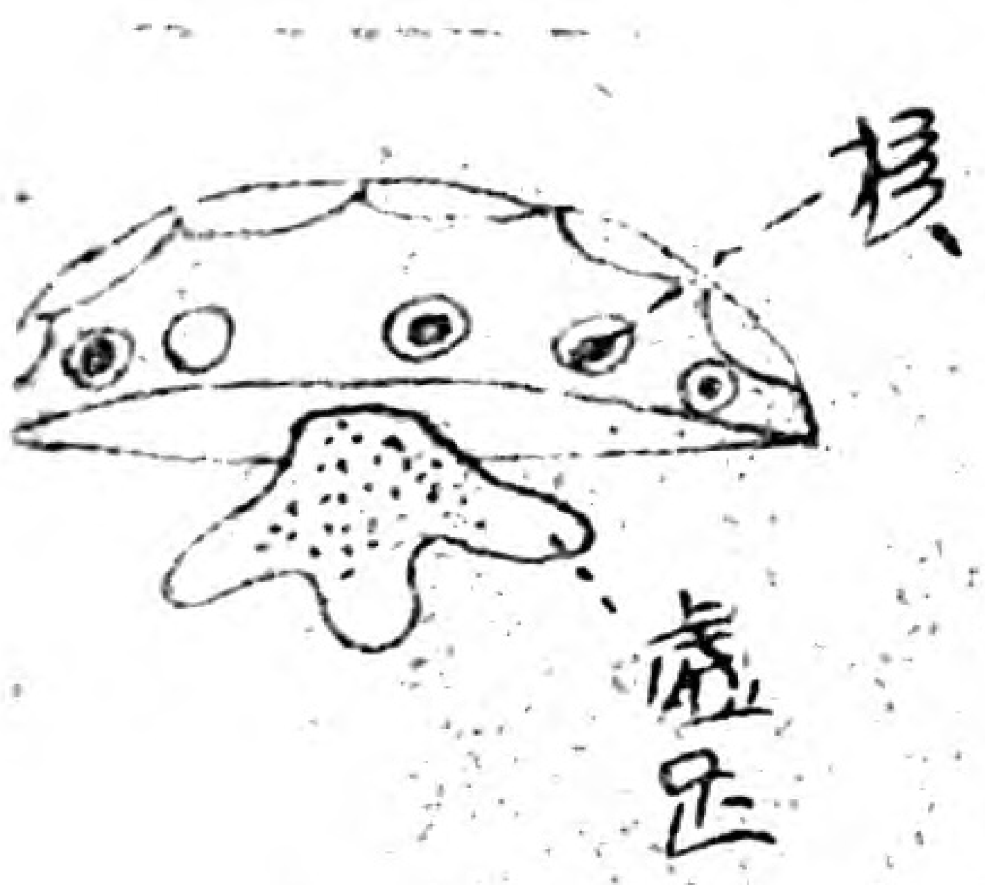


プロトミクサ、アメーバ形のもの、2其球形になつた處、3同上で膜を其多數に分れたもの5分れたものが水中に泳ぎ出してアメーバ形に變ずる處、

誰れも亦左樣に思つて居るのであるして又此原形質塊が澤山の單位から出來て居るもので之れ等の單位が最初の生物では略同一なものであつたらふと云ふ考へも學者が一般に信じて居る事であると思はれる。私が茲に信ぜられると云ふのは今日生活して居る生物で眞に其原形質内に少しも分化のないものは誰れも知らないからである。ヘッケルが想像したモネラは既に古い時から本統に無核のものでないとの事が分つた併し核が原形質の分業から出來たものである事と又夫れが遺傳を司どるもので細胞質が外圍に應化する樣になつたものであると云ふヘッケルの考へは其後事實で證明されて來たのである。

之れは如何であるとしても、核が出來た原形質塊卽ち細胞の有樣である生物は我々が確かに觀察も出來るし又實驗も出來る所のもので之れ等生物の内に動物に近いものもあるし、植物に近いものもあるし、又此二物の中間に位して居るものもある、





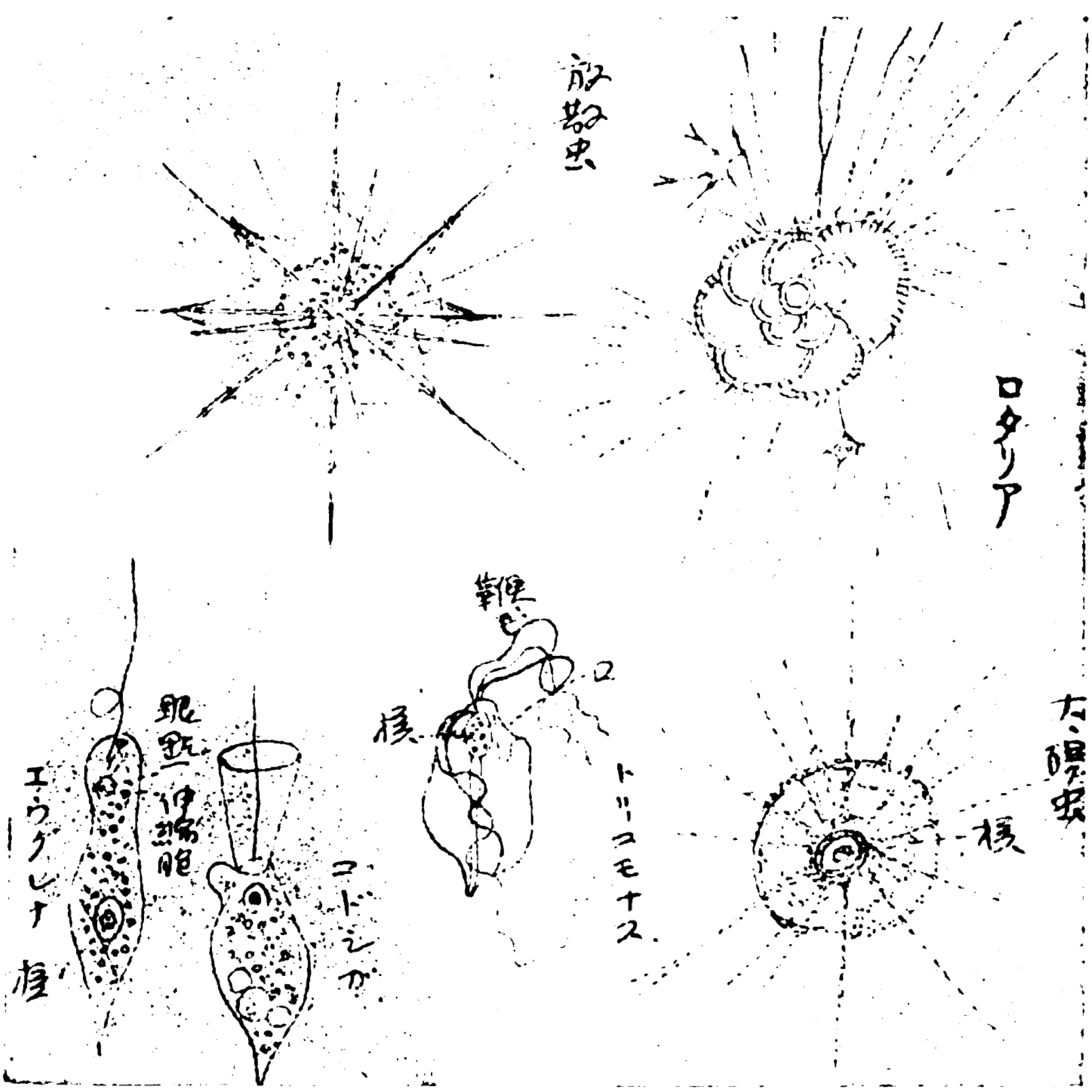
アメーバ

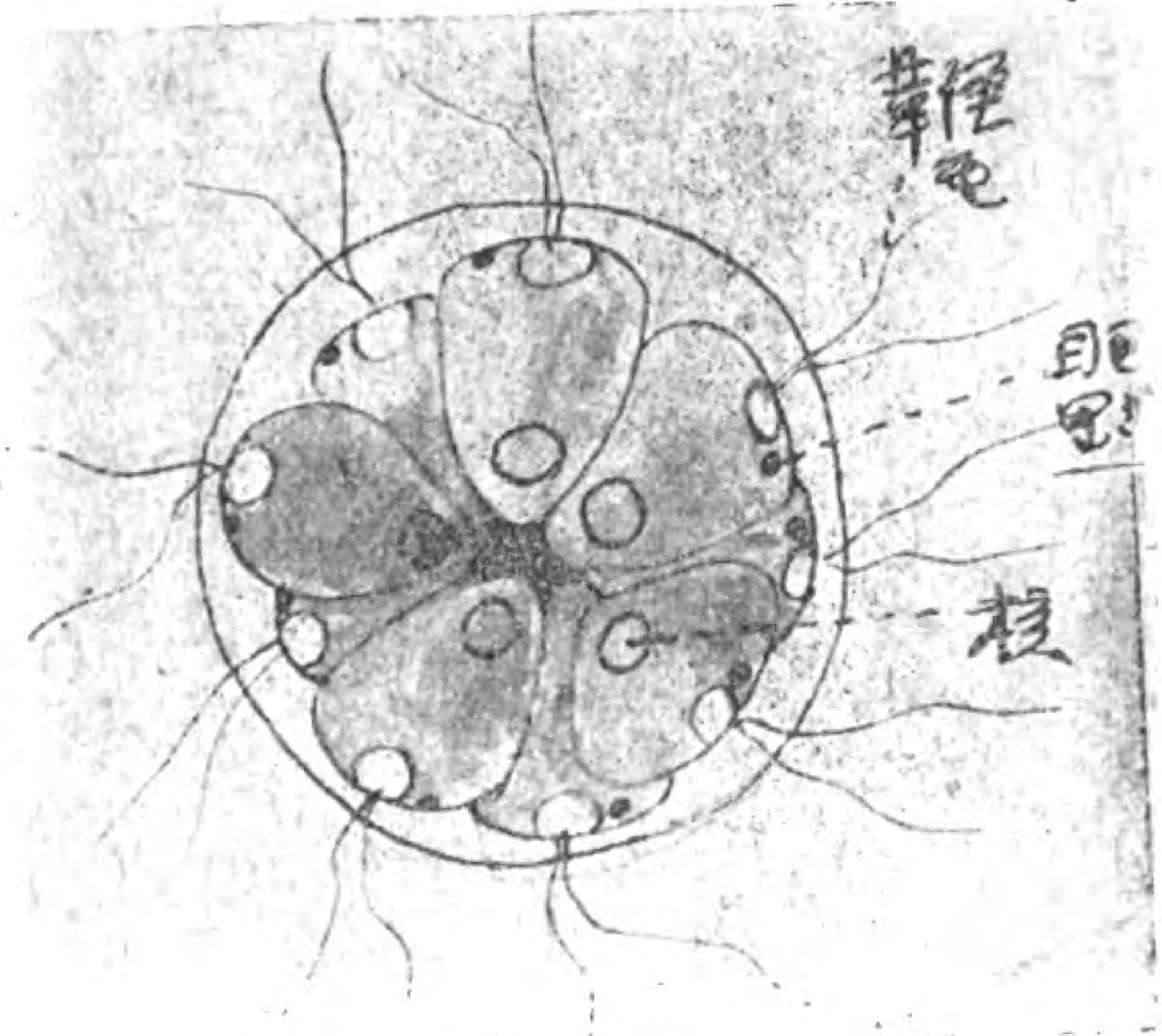
處が之れ等單細胞生物の内で今日動物の内に入れてあるものでは根足蟲類、鞭毛蟲類、胞子蟲類と纖毛蟲類と云ふ樣なものがあつて之れ等は何れも簡單なものから分化して來たものである事が明かに見へる。

茲にプロトミクサ、アウランチアカと云ふ動物があるが、此動物はヘッケルが見付けたもので、一時はアメーバの樣な形ちで水底を這ふて居るが、充分に成長すると、全身は球形になり

其表面に厚い皮膜を生じて暫くの間は少しも動かないが、其內に全身は數回分割して多數の楔形の小體となり、之れが出來ると皮膜は破れて、それ等小體は水中に泳ぎ出るのである。其泳ぎ出した時の形ちは丸で蝌蚪の樣で體の一端は圓く他の端は細長くて鞭毛の樣になつて居る。此の鞭毛の樣な處が運動をして之れ等は水中に泳ぎ出すが、水中に出ると又直きに全身から偽足を出して遂に又アメーバ形となるものである。斯樣なものであるからアメーバ形のものと鞭毛蟲の樣なものとの中間にあるものと見ても差支へないであらふ。して斯樣なものが甚だ簡單な體を持つて居る事は其原形質にはまだ高等なもので見る樣な內外の部分が現はれて居ないし其核も亦一つでなくて澤山の小さなものに分たれて居る事である。

　であるから斯樣なものが一方には段々と發達して行つて普通のアメーバの樣な內外兩層の別出來たもの、で核も一つになり、又其外伸縮胞と云ふ樣なものが出來て來たり夫れから又體の大部分には表皮を生じて、之れが大層込み入つて來て有孔蟲の樣なものとなり、又一方には太陽蟲から放散蟲類の樣なものが出來て

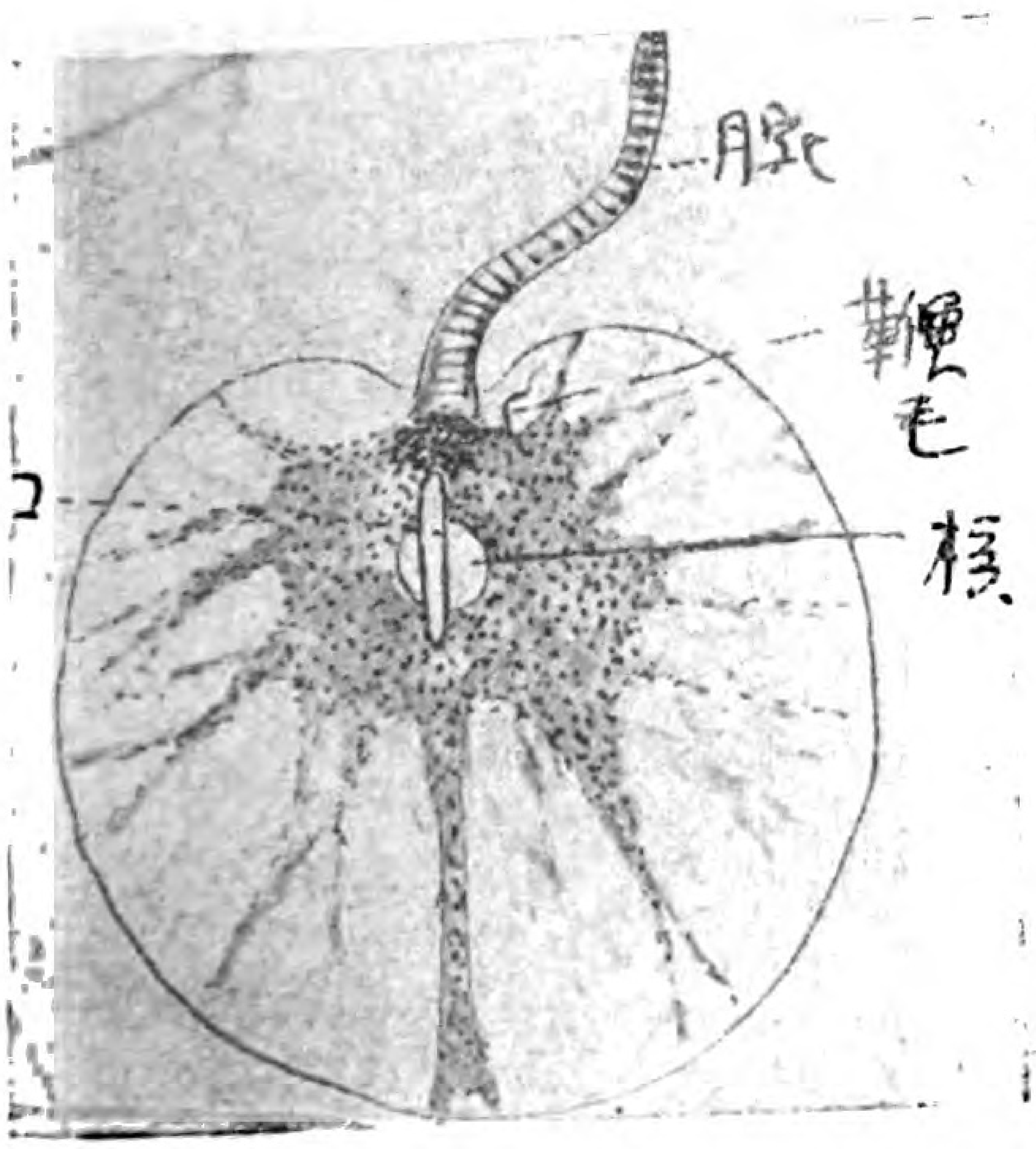




パンドリナ

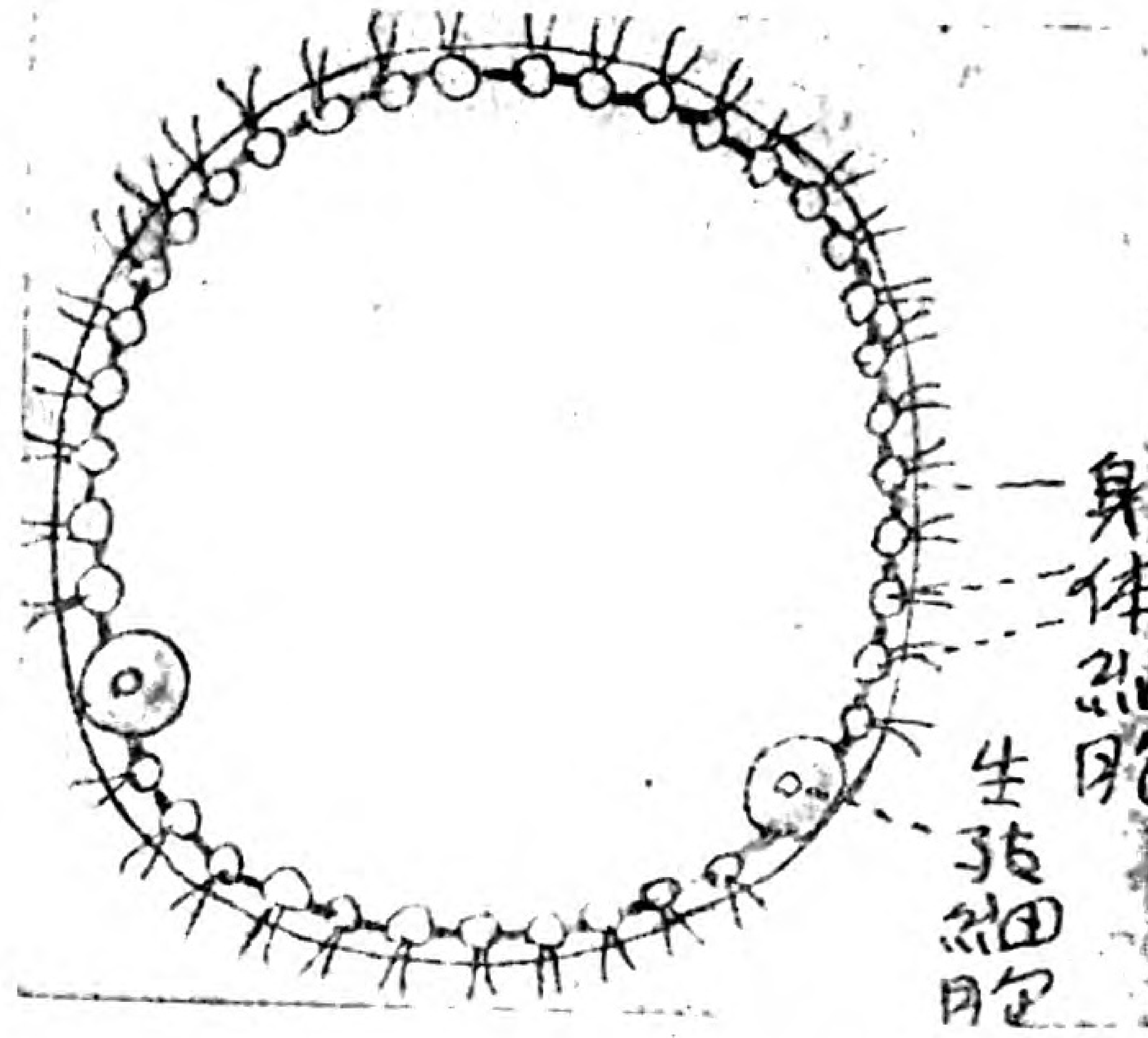
來たのである。

又一方には鞭毛が段々と發達して來てホウグレナの様に全身に薄い皮膜を生じたがまだ幾等かアメーバ形の運動も成し鞭毛は體の前端から長く生し、其根本に口が出來、又其側に一つの紅色の點が出來たのである。此點は光又は温度に感ずるもので之れを眼點と名づける。コドノシガと云ふものでは體の前端に洋服の襟の様なものが出來、之れ等は分體した時に一緒になつて居て、群體が出來るものもある。夫れから又ボルボチナ類になると何れも皆群體生活をして居て、鞭毛は又二本づゝあり、其内でパンドリナでは群内の細胞は十六個であるが、ボルボクスになると細胞の數も澤山で、多いものでは千以上のものもある。夫れからこのボルボクスで面白い事はそれ等澤山の細胞の内で生活の仕事計りする細胞と生殖の仕事計りを司どる細胞とがある事である。此鞭毛類もであるから斯様に段々と發達して行つて、遂には夜光虫の様なものも虫類なのである。此夜光虫は誰も知る通り海面に游泳して居て、夜間光りを發するが、其體は原生動物としては甚だ大きく肉眼で能く見る事が出來、其鞭毛は小さくて全身の移動には用ひられない様になり、唯口の側にあつて食物を口に運ぶ位の事をするものになつたが、其代りに腕と稱さる太い紐の様なものを出して、それで移動をするし、又食物を捕へるのであるがそしてそれは面白い事には其腕内にある原形質には異細胞動物の横紋筋で見る様な構造が見へる事である。



夜光虫

夫れかと思ふと纖毛虫になると此原形質體内



ボルボクス

の分化は尚一層進んで來て、核も明かに生活の仕事を司どる所の生活核と生るこの仕事計りをする生殖核とに分れ、全身の形ちも前後がある計りでなく、又左右背腹の出來たものもあるし、繊毛の内にも色々變つたものが出來、又厚形質内には筋肉の様な纎維の如き部分だの神經纎維の様な部分も出來て非常に分化したものである。

斯様であるから厚生動物は元來は最も簡單なものから始まつたのであらふが、之れが分れて前に云ふた様に色々の方面に向つて進化したのである。して之れ等の進化は詰る處厚形質内の分化で其分化は最も古い時分に起つたもので又夫れが今云ふた各類の厚生動物で其最上に達したものであるだらう。であるから厚生動物は今迄も今後も亦それ以上に發展する事は出來ないであらふ。

併し誰も知る如く、動物の進化は之れで止まつたものでなく厚生動物の内で分體したものが一緒になつて居て、其間に分業を始めたものが出來、之れ等が今日見る處の後生動物の先祖であるだらふ。して之れ等の内では今云ふたボルボチナの様なものが多分後生動物の出來始めたものに最も近いものと見る事が出來やふ。最より今日のボルボクスが之れであると云はない、ボルボクスは又夫れとして發展したもので、之れは又夫れで止まつて居るもので之れが進化して今日の異細胞動物になるとは決して云は



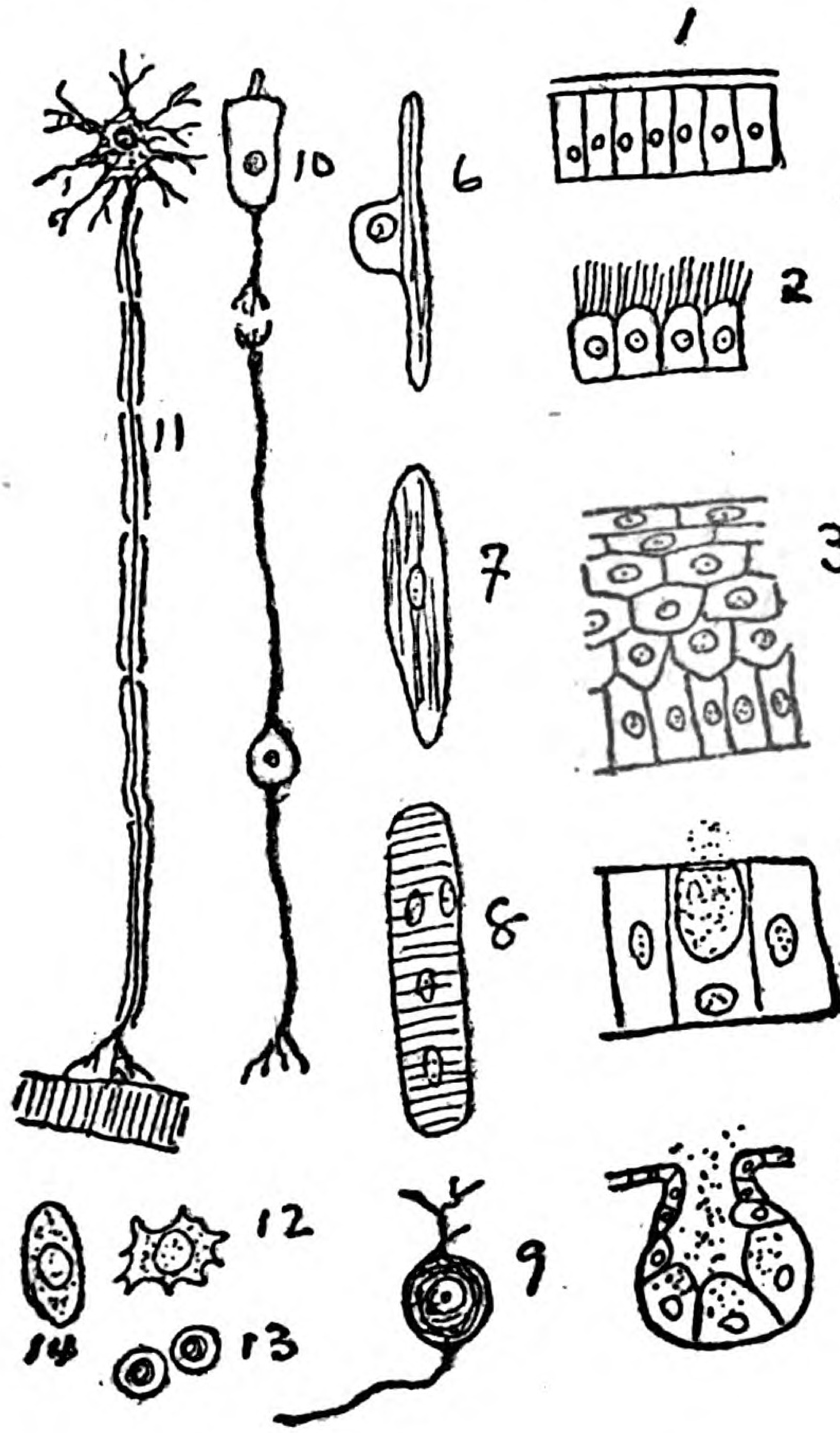
喇叭蟲

ないのである。

併し何んにしても厚生動物は今も云ふた樣に何れも皆古い昔時既に其發達進化の極點に達したもので夫れ以上に進化する事は出來ないのである。

であるから彼等の內で比較的に分化が進すまなかつたものが一緒になつて、其間に新たなる分化が生じて來て今日の異細胞動物が出來たのである。

夫れで今迄は一個細胞內に起つた分化が今度は細胞間に起つて來たので全細胞が生活と生殖に取り掛る事が出來たのである、夫れも亦一個の細胞計りでなく澤山の細胞が一緒になつて一つの仕事をする事が出來る

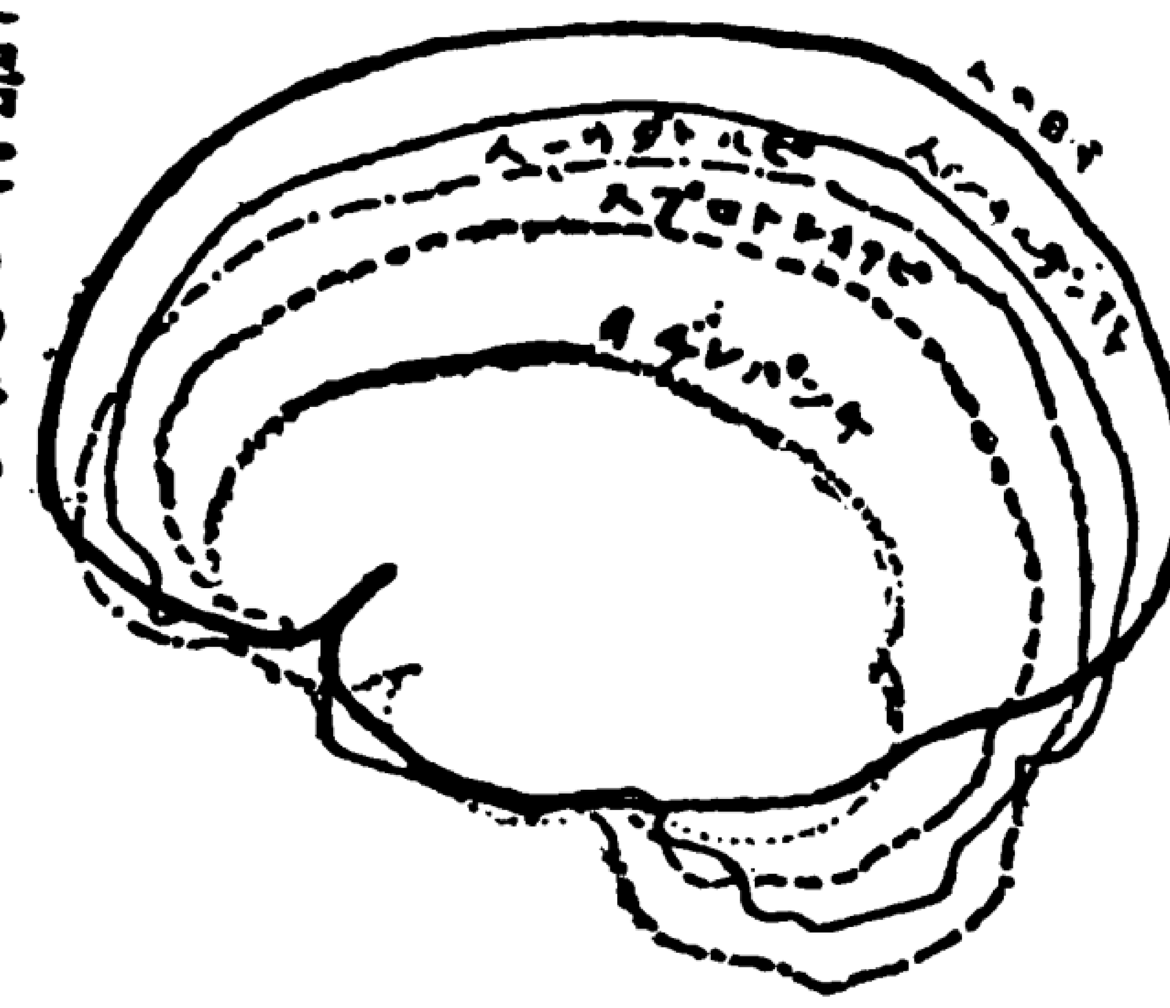


異細胞動物の組織　1單層皮膜組織、2纖毛皮膜3、多層皮膜、4單腺細胞、5胞狀腺、6 7筋細胞、8橫紋筋細胞、9 10 11神經組織、12白血救、13獸類の赤血救、14蛙の赤血球、

樣になつたのである。例之は運動の仕事であるとか感境の仕事であるとか其他各種の仕事は皆澤山の細胞が一緒になつて之れを司どる樣になつたのである夫れで組織と云ふものが出來、器官、器官度と云ふ樣なものが出來て來た。

之れが原生動物から後生動物の出來た路で、之も亦既に既に久しい前に出來たのである。して此經驗は始めに一本であつてそれが後に至つて澤山に分れたものだが或は又始めから澤山に分れたものであるかは別として、今日見る所では少なくとも澤山の經路に分れて居るのである。で誰れも知る如く今日

チンパンヂイ、猿人、ピルトダウン、ネアングーダール人と今日の人間の腦の右側輪廓實物の四分ノ一大



の動物は幾つかの大きな部門に分つてあるが、之れ等を又綱に分け、綱を目、目を科、科を屬、種としてある。屬が我々が今日見る處の門は何れも皆最も古いシルラル紀に既に出來て居たもので、其頃に今日ある處の最も高等の脊稚動物が現はれたのが門としては最後に出來たもので夫れから以後新たの門は出來なかつた、又其下の綱でも脊稚動物丈けで云ふて見ると兩生類と爬虫類とが石炭紀に出來、獸類が三疊紀と鳥類がジウラ紀とに出た丈けで其以後新しい綱は出て來ない、夫れ計りでなく、之れ等脊稚動物の綱の内で既に其全盛期を過ごしたものもある、例之は魚類はデボン紀が全盛で、兩生類はペルム紀で、爬蟲類は中古代の中頃であつたらふ。であつて見ると脊稚動物でも多くのものは既に其全盛期を過ごして居るもので其他の動物でも略同樣である。此も其間に新種はドシドシ出來て行くが之れ等は殆んど皆之れ迄あつた處の種が持つて居た處の形質單位の新なる結合や分離に依つて出來るもので、夫れからして新しい今迄以上に複雜した構造の如きものが出來て來るとは思へないから今日以上に發達した獸類が出て來るとは考へられない。

夫れでは人間はだふであるかと問ふと、今迄知れて居る事實では人間も他の動物と略同樣で今日既に其最上の點に達したものと考へて宜しいものであると思はれる。何れの時に人間が現はれて來たかは今でもまだ問題であるが、何にしろジヤワの猿人が現はれてから今日に至る迄は大層な進化をしたものであるがホモ、サピエンス（Homo Sapiens）が出來てから後吾人は形態上にも精神上にも決して根本的大變化、大進歩が起つたものとも思へない、昔時の支那人、グリーキ人等と今日の我々との間に何にも之れ等の點に於て進歩した處は思へない、唯我々の進歩したのは我々の體格其ものや精神其ものの進歩ではなくて我々が廣い意味の教育即ちエウセニツク（Euthenic）から得た處の知識の結果である。

であると我々は將來に於て最早や進歩する見込みはないものであるか？　と問ひ度くなるが、之れに對する答辯の一には我人の體格も精神も或は今日以上に進歩はせないかも知れないが今日でも何れの人種にても見る樣に優劣が澤山あるから、其優

等の者を標準として國民の大多數を夫れに近づかしめる事が出來やふ、之れは今日歐米各國で盛んに研究して居る所のエウジエニツクスで、之れに依つて出來得る丈け多數の國民の體格と精神の發達を來たし、之れにウエセニツクスでドシ／＼教育を施こして行くのである。之れで吾人々類を向上せしむる一つの方法であるが。之れと同時に人類は又新たに最も有力な方法を取つて來たのである。

此方法と云ふのは人類の社會的生活である。人類の社會的生活は何れから生じたものであるかは別問題として、吾人が社會的生活を始めたのは人類をして總て他動物に打ち勝ち、自然を征服せしめる様にした大きな原因であるに相違ない、之れは今日新たに云はないでも明白な事であるが、細胞體内に起つた分化、細胞間に起つた分化と同様に今度は各人の間に分化が起つて來て、異細胞動物の體内に組織や器官が分化した様に社會内の各人間に今度は分業が起つたので、之れで吾人はドシ／＼發達して來たのである。であるから斯様な社會は細胞の個體や細胞群の個體と同様に一個の個性の様なものである。

誰れも知る通り斯様な個體には社會は人類の他にハチ、アリ白アリ等の昆虫にある。處が彼等の社會と吾人の社會とは大きな相違がある、彼等は第一に社會内の各個體は一双の雌雄から出來たもの卽ち一家族であるのに我々の社會ではさうでない、夫れから今一つ違つて居る事は彼等の社會では各個體が（其極端のものでは）調度細胞群の個體の様に各體の分業が其極度に達し職虫は生活の仕事計りを司どり生殖は致さぬ様になり、又王と女王とは其代りに生殖の仕事のみを司どる様に成つたものである。此點に考へて見ると今迄見た細胞細胞群等に生じた變化が彼等の社會では又同じ様に繰り返されて來たもので我々人類は反つて違つた方向に進んだものであると思はれる。

之れは如何であるとしても、我々が社會生活を始めるのか吾々人類の發展には大きな進歩で、之れに依つて吾人が將來又發展進化して行く事が出來るのは吾人を樂しまする事であるだらふ又理論から云へばウイルソンに依つて唱へられた様に今日地上にある各國人が連合して其間に今日各國内に行はれて居る様な仕事の分業を起したならば、又吾人々間は今日以上に發展する事が出來るであらふ。

之を極めて見ると、動物は（植物も）分業と應化と進化とで簡單なものから段々と進んで來たが、何れのものでも此分業は今日既に其極點に達したもので、又種類に依つては既に其全璧

期を過したものが多く、人間も或は個人としての進化は體格に於ても亦精神に於ても既に其最上點に達したものではあるまいかと思はれるのである。して此進化は初めは單一の細胞内に起り、夫れが細胞の群が出來て共間に起つたので、大多數の動物は之れで止まつて居るが、或る僅少のものでは尚一層進んで來て群棲生活をする樣になつたが、其内でも吾人々類では夫れから社會が出來國家が出來たのである。アリやハチは斯樣に群棲したもの丶間に又異細胞動物の體内に起つた樣な分業が起つて、各個體は既に生理上の個體として見る事の出來ない樣なものに成り全群又は社會が一個の個體の樣に成つた、人間では斯樣な極端な分業は起らないが、知識の發達が出來たので教育が最も完全に行はるる樣になり、個々のものの體格も知識も或は今日以上には發達せないかも知れないが、教育の力に依つて人間全體としての發達は大なるもので、今後も亦エウジエンツフスとエウラニツクスとで一社會又は一國内の個々人をして出來得る丈け向上せしむる事は出來やう、して又理論から云へば全世界の人類が、今後同盟して此方面に向つて進む事も出來やう。併し之れは世界中の人が釋迦かヤソか孔子の樣でない以上は本の理想に止まるものである事は、斯樣な説を唱へ出したんでさへも人種の差別を八釜しく云うて居るではないか。

自然科學と哲學の不可分

醫學博士　永井潜

自然科學を尊重し、其發達と進歩を冀ふことに於ては、醫家としての予は其急先鋒たらんことを期してゐる。併し乍ら醫家にして單に自然科學にのみ自家の根據を置き、他の何物をも省みさる者あらんか、吾人は鼓を鳴らして其非なるを責めねばならない、人を物質視し、器械視するの外、何物をも省みることなき者あらんか、其不合理なること、咒咀禁厭、祈禱の外爲す術を

知らざる巫醫と選ぶ所がないのである。

實在は唯一あるのみである。自然と云ひ、世界と稱し、將た又た精神と唱ふ。斯くの如きは單に名目の相異で、唯一なる實在から見れば決して分割したものではない。唯一なる實在を內的見地より觀察して「心」と云ひ、外的見地より觀察して「物」と云ふ。哲學と云ひ、心理學と云ひ、自然科學と云ひ、醫學と云ふも、畢竟するに唯此唯一の實在を異れる方面より研究するに過ぎないのである。全世界を支配するものは、同一なる大原則、同一なる大原理あるのみ、而して予は此大原則大原理を闡明し、有ゆる科學研究の指南車として、精神的一元論を支持するものである。

精神的一元論、玆に之れに基ける心身竝行作用說は、決して空想的臆說ではない。嚴正なる論理と、愼密なる認識的批判とに依つて、必然に到達したる終局の結論である。吾人は獨り此基礎に立つてのみ物質と精神との關係を根本的に理解することが出來き、專門的に分岐せる種々なる學問が、當然に取らねばならぬ共通の方針を知り、健全なる世界觀と人生觀とを造り、以て人類が有せる最高にして且つ最後の問題たる『生』なるものを解決することが能きるのである。

唯一の實在を『物』と『心』との異なれる見地より觀察したる以上は、完結せる因果律に從つて、物質界のことは一貫して物質的機械的に說明すべく、精神界のことは、常に精神的形而上的に之を解釋すべきで、決して此兩者を混淆してはならない。斯くて吾人は自然科學と、哲學、心理學との領域に井然たる區別を設けねばならぬ。而も此區劃たるや單に方式（メトドローギッシュ）上の分界であつて、唯一なる實在の眞相を明かにせんとするに於ては、必ずや自然科學と哲學心理學とが、相寄り相扶けて進まねばならぬのは勿論である。之を醫學に就いて見るも、外的、生理的、生活現象を解釋するに方りて、物理學化學の上に其立脚地を求めたる輓近基礎醫學は、極めて正當なる徑路を辿つたものであつて、物理學化學以外に立てる、或る不測の原則乃至勢力に依りて生活の現象を說明せんとする『生氣說』の如きは之れを承認する事の能きぬのは當然である。然し『生命』の眞相を根本的に理解せんとするものは、單に之れのみを以て滿足してはならぬ。必ずや哲學心理學の助力を仰がねばならぬ。何となれば內的精神的生活は、到底自然科學に依りてのみ解釋することは能きないからである。

自然科學と哲學との統一調和は、實に刻下の大問題である。而も此の大法を果さんとするものは、單り精神的一元論あるのみである。

凡そ哲學的思想なくしては、眞正なる自然界の研究は行はるべきものではない。偉大なる思想を以て、偉大なる成功を奏したる科學的發揮を檢するに、一として其根柢を哲學的思索に發せざるものはないのである。之れをアトム說に見よ、之を勢力不滅說に看よ、更に之を進化論に見よ、何れも此の事を實證せざる者はない。然り而して哲學は又常に自然科學と手を携へて其進退を共にすべきものであつて、徒らに空想の翼を張るが如きは、決して哲學の本領ではない。必ずや事實と經驗とに基きて、論理的批判的に其論歩を進めねばならぬ。如斯くにして始めて吾人は人類が有せる完極の目的、即ち圓滿具足せる世界觀と、人生觀とに到達することが出來るのである。若し科學者にして哲學を無視し、哲學者にして科學を輕侮するに於ては、其淺薄にして卑俗なるべきは當然の歸結である。

『人』を以て研究の直接の對照とせる醫家中には、醫學は已に堅固なる自然科學の礎地に其根據を置いてゐる。故に何を苦しんでか哲學を知るを要せんやと云ふ者があるであらう。併し乍ら生命の根本的解釋は、單り外的觀察に依りてのみ得らるべきものではなく、必ず內的、心理學的、哲學的觀察と相須ちて完成せらるゝものである。曠世の病理學者ロキタンスキー(Kar Rokitansky. 一八〇四——一八七四年)と共に、新ヴイン學派をして萬鈞の重をなさしめ、歐洲學界の北斗たりし、スコーダ(Josef Skoda 一八〇五——一八八一年)に依りて、始めて活用の途を開かれたる『打診及聽診』なる二大理學的診斷法は、診斷學上に於て空前の恩人たりしに拘らず、治療學上に於ては大に人の子を賊ふたのであつた。是れ抑も何に由來したのであらうか、曰く、彼の診斷學上に於て奇効を奏したる診斷學上の應用は、會々彼をして餘りに自然科學を偏重視せしむるに至りしに外ならぬのである。彼曰く『吾人醫家は疾病を診斷し記載し且つ理解し能ふも、如何に之を治療すべきかは、敢て爲すべきことに非ず』と、彼が此懷疑的無頓着主義は、忽ちにして『治療破壞說』(Therapeutischer Nihilismus)なる風潮を惹起し、『吾人の力の盡すべき所は、智識にありて處置にあらず』てふ語は、有力にして眞面目なる醫家の口を衝いて出づるに至つたのである。嗚呼醫家の務めは果して如斯きものに外ならぬので

あらうか。哀れなる患者よ、汝は好奇心を以て聽診せられ、打診せられ、病名を附せられ、經過を記載せられ、而して解剖臺上に昇され、顯微鏡の標本となりて最後を止むべきものであらうか。曰く否、大に否。

人間思索の根本たるべき哲學と、生命を以て研究の直接の對象とせる醫學との間に、密接なる相關を看出し得べきことは、毫も怪しむに足らざる所である。太古の事は之を姑く措きて、希臘醫學に就て之れを稽ふるも、其根本の思想は悉く之を哲學に仰ぎたることを知ることが出來る。自然哲學者は、哲學者にして又同時に醫學者であつた。ヒツポクラテースに至りて、醫學を哲學より分離し、始めて兩者を獨立の基礎に置いたのであつたが、猶且醫學の船に舵を與へしものは、依然として哲學であつたのである。夫のヒツポクラテース學徒に依りて唱道せられ、希臘醫學の眞髓を成したる『プノイマ說』の如きも、眞の根原たりし者は、自然哲學者竝にプラトーン及びアリストテレースの哲學思想たりしことは疑ひない所である。而してストア學派及びエピクロース學派が起ちて實在主義、物質主義を主張するや、其影響は狹くもアレキサンドリアに於ける自然科學、殊に實驗的醫學の勃興を來し、延いて羅馬時代に於ける固體病理說の出現を促したのであつた。次で哲學に於て折衷の氣運至るや、醫學界に於ても亦折衷醫學派を生じ、終にガレーンに依りて希臘醫學に於ける一大系統を組織せらるゝに至つたが、然も其根據たるプノイマ說は、是亦自然哲學者竝にプラトーン及びアリストテレースの哲學思想を取捨せしに過ぎなかつたのである。

中世紀に及びて世は擧つて超自然的、出世間的思想に惑溺したものであるが、一度び「ルネサンス」に至るや、人心は玆に長夜の眠より醒めて健全なる藝術哲學及び科學思想の萠芽を發するに至つたが、十七世紀に及ぶや、此「ルネイサンス」の氣運に乘じて萠芽したる健全なる哲學思想は、玆に羽翼成りて圖南の大飛躍を現じ、近世哲學の二大潮流たる唯理學派と經驗學派とを現出し、前者はデカルト陣頭に立ち、スピノザ及びライプニツツ其の驍將として大成し、後者は其源をベーコンに發し、ホツブス、ロツク、バークレー、ヒユーム相紹ぎて之を完成した。而してデカルト等の機械說と經驗學派に於ける機械說及び智識論は、相俟ち相應じて自然科學竝に醫學の發達を促したのであつた。而してハーベーの「血液循環の大發見」あり、有ゆ

る生活現象殊に精神作用をも、單に物理學又は化學の力に依りて解決せんとする「キヤトロフイジカー」及び「キヤトロヘミカー」をさへ出すに至り、醫學は漸く哲學の膝を離れて寧ろ大に自然科學に接近せんとするに至つたのである。

十八世紀に入りてより、先きに哲學の媬姆に依りて發育した る自然科學は、今や却つて尠なからざる影響を哲學に及ぼし、哲學思想は痛く物質的機械的に傾き、唯物論、無神論、自己主義等熾んに唱道せれるゝに至つたのである。爾來種々なる曲折を經て十九世紀に至つたが、十九世紀に於ける自然科學の齎らした偉大なる成功は、終に過去の迷夢を一掃して、自然科學と哲學とは、大に接近するの氣運となつたのである。斯くの如く哲學は自然科學の媬姆であつて、決して兩者分離して立つこと能はざるものであり、不可分的に進んで行かねばならぬものである。斯くて哲學と科學との近接握手することによつて、二元論並に唯物論の不合理にして憑るべからざる所以が明かにせられ、以て精神的一元論に到着するに至つた。次で心身の作用上の關係に就ては、心身相互說の採るに足らざる理由を知り、獨り精神的一元論に基ける心身竝行作用の說に依つてのみ滿足なる解決を下し得ることを知るに至つたのである。

「心」と「物」、「精神」と「身體」、「我」と「外界」、「神」と「自然」、噫、是れ、人間に與へられたる、最も遠くして最も近く最も新らしき、大なる謎である。知慧の實を食つた人の子の、小賢しき振舞を嘲るかの樣に、長しへに人生の彼方に橫はつて居る不可思議なる謎である。此「スフインクス」の謎を解いて、至高の月桂冠を頭に加ふべく、由來知識の二大選手として、哲學と自然科學とが相競ひ相爭ひ來つた。而も其の爭は、生命の分野に於いて、尤も激烈であつた。蓋し生命は、「心」と同時に「物」であり、「精神」と共に「身體」を成し「我」と「外界」との對峙を起し、「神」を見又「自然」に接するからである。久しかりし哉其爭ひや、而して、今猶其戰は鬪はれつゝある。彼等の或る者は、進んで、機械說の劍を握つて奮鬪した。自然科學者の多くは夫であつた。他の者は、退いて、生氣說の楯に隱れて安きを求めた。哲學者の多くは夫であつた。而かも、大なる戰鬪の後には、大なる平和が來らねばならぬ。此の重要なる使命を齎らすべく、女神は漸くにして起つた。精神的一元論の女神は、今や自然科學と哲學との間に、同盟を結ばんが爲に起

つた。否、新らしき科學と、新らしき哲學との、溫かき握手の裡に、此の尊き女神が生れ出でたのであつた。

元來、自然科學の本領とする所は、物質界であらねばならぬ。隨つて實驗生理學が、內界精神界を解釋する能はざるは、寧ろ當然のことである。吾人は、毫も、此故を以つて、實驗生理學に對して疑惧の念を懷き玆を去つて、生氣說に趨くの理由を見出すことは出來ぬ。將た又、デュボア、レイモンの述べし如く、自然科學以外に立てる領土を Ignoramus et Ignorabimus となして、放棄する必要もない。自然科學の爲し能はざる所は、宜しく、哲學の助を喚び來りて、主觀的・非物質的・非空間的概念たる、感覺・表象・概念・衝動等の統一的關聯によりて、內的・精神生活を研究し、生命の內に含蓄せる、大なる內容・意義・値價を了解することを、力めなければならぬ。

釋迦、基督の經典も、李白ゲーテの詩集も、ビトーフエンの「シンフオニー」も、ラフアエルの「マドンナ」も、之を純物質的・客觀的に觀察すれば單に文字の雜列である。音波の共鳴である。色彩の結合である。其の崇高なる意義と、其の偉大なる價値とは、到底之れによつて窺ひ知ることは出來ぬ。他の半面を吾人に示す者は、實に哲學である、自然科學と哲學は、分け登る麓の路こそ異なれ、共に高嶺の月を見ねばならぬ。此の意味に於てヘッケルの言の如く、眞正の哲學は自然科學であり、又眞正の自然科學は哲學であると斷言することを憚からぬ。

十月號「國家主義の解剖」の重なる誤

頁	行	誤	正
二	最終	若くは統治者との間の	若くは國民と統治者との間の
三	十	國家の權利は	國家の權力は
九	六	造り上げたとする時	造り上げむとする時
仝	仝	支配階級の不幸を	支配階級の不幸と
一〇	三	意味の是非	意志の是非
一〇	九	政治上の思想主義	政治上の理想主義
一一	一〇	我等の福利	我等の福祉
一三	一二	理想と予盾する	思想と矛盾する
一三	一六	斯様の精神	斯人の精神
一四	五	自己のものとする	自己のものとせむとする
一四	一二	侶と頒を分てば減ず	侶と頒ては分減ず
一四	一六	されば大なるに從ひ	されば愛大なるに從ひ
一五	六	外貌となれば	外貌をとれば
一五	一二	帝國主義を奉仕する	帝國主義を信奉する
一五	一六	虛僞	虛僞
一八	一三	覺らぶる日大	覺らぶる四大
一八	一八	又耳にしたフアウストと共に	又軍鼓の響を耳にしたフアウストと共に
一九	一	多大な一つの戰	重大な一つの戰
二〇	一八	利己的のこと	利己的國家主義のこと
二一	一四	單にその	單にとの



宗教家「この穢土を去て天上の樂園へ行け！」
經世家「天国？馬鹿な！この現世を樂園化するのだ」
科學者「我が太陽系は漸く亡びんとしつゝある 天も地もあるものか」

天地壞散圖

伊東忠太筆

新刊紹介

■明治大正五十三年史論（高須梅溪著）明治大正の五十三年間を第一期維新創業時代、第二期歐化主義全盛時代、第三期國民的自覺時代、第四期個人的自覺時代、第五期新文化創建の時代の五期に分ち之れを政治文學宗教思想の各方面に亘り詳述せる六百二十頁の大册也（定價金三圓五十錢日本評論社發行）

■米國縱横（東孤竹著）著者の米國視察記にして其說く處詳細を極め日米問題の切迫し居れる今日一讀の價値ありと謂ふべし（定價金三圓啓數社發行）

■內面生活の改造（鈴木素風著）改造問題の基調を內面生活――自己の人格に――留き人生久遠の眞理なる創造的人格の理想に邁進しようとするのである、蓋し思想問題の混亂時に於て必讀の文字たるを失はぬ（定價金二圓常盤堂發行）

■新しい主義學說の字引（勝屋英造著）最近思想界に提唱され來つた幾多の新らしい主義や學說を網羅し一般讀書子に頗る便利なものである（定價金三圓實業之日本社發行）

■民衆と宣傳（加藤咄堂著）著者三十年の宣傳生活に依り得たる所を集録したるもの一讀すべし（定價金二圓實業の日本社發行）

■社會問題の改造的解釋（路一協會編纂）路一協會叢書綱將にしてミツスーリ大學社會學教授エルウードの原著を譯せるもの（定價金九十錢博文館發行）

■朝鮮併合之裏面（小松綠著）伊藤公時代以來前後十一年間總督府にあり外事局長として併合の衝に當れる著者の記錄にして一讀すべし（定價金二圓五十錢中外新論社發行）

■白秋詩集第一卷（北原白秋著）本集には既刊の「邪宗門」「思ひ出」「雪と花火」「眞珠抄」「白金の獨樂」「わすれなぐさ」「白秋小唄集」「とんぼの眼玉」等の諸詩集と未刊の三崎詩集「一畑の祭」及び未だ雜誌に載せたまゝ公刊せざる大正五年の諸作並びに、「邪宗門」以前の少年期の長篇を統括したものにて著者の純雅な泪ぐましい思慕に、讀者をして魅せしめるものがある。（定價貳圓八十錢アルス社發行）

■別宴（谷崎精二著）同氏の長篇小說「離合」及び短篇四種が收めてある。しみじみした感じの深い作で、新秋の讀ものとしてよいものである（定價壹圓六十錢アルス社發行）

■文壇往來（菊地寬著）同氏の小說にあらざる著作を殆んど凡て集めたるもので、中にて「レンダ論」「ゴルスワアジーの研究」は可成讀みごたへあるものである。（定價壹圓六十錢アルス社發行）

■アンドレエフ傑作集（昇曙夢譯）昇氏從來の飜譯を集めたるもので、譯者のアンドレエフ論が附いてゐる（定價貳圓二十錢大倉書店發行）

■クープリン傑作集（昇曙夢譯）他にアルチエバセフの諸譯がある。よみごたえのある本である（定價貳圓二十錢大倉書店發行）

■ジヤンクリストフ（ローマンローラン原著豐島與志雄譯）ジヤンクリストフの敬虔にして勇敢な態度におぼえず深き感鳴をおぼえしめる。譯は豐島氏の苦心が充分感ぜられる（定價貳圓五十錢新潮社發行）

■赤い部屋（ストリンドベルヒ原作、江馬修譯）天才の鋭い觀照と批評に强い感じを受ける。（定價壹圓八十錢新潮社發行）

■トルストオイ全集第拾壹卷　アンナカレニナの全譯である。原作者の尤も藝術的作品の最大なものである。中秋夜長に親しむ可き書だ（春秋社發行）

■トルストオイ全集第拾參卷　本書には杜翁の日記、書翰、論文、外トルストイの小傳が附いてゐる。高貴なる著者の生活を知る爲には必讀せねばならぬものと思ふ。（春秋社發行）



生殖崇拜敎の話

ドクトル　上田恭輔

一

滿洲奉天城の北に當て、千古の喇嘛塔既に傾き、異風の伽藍半ば朽たる一箇の梵刹あり、その名を法輪寺といふ、この寺院の內殿に、俗に天地佛と呼ばるゝ、かの有名なる巨大の陰陽佛が祀られてある。

その高さ殆ど丈餘容貌魁偉の男神が、若き女神を擁して、立ながら抱擁して居る姿勢の、金光燦爛たる不思議の黃金佛である。而かも此畸形佛は、拜殿の眞正面に安置せられ、一段下つて、これが兩側に釋迦と阿彌陀の兩尊を祀り、更に一層下つて喇嘛敎の活佛たる西藏の法王の座像が安置せられて居る、言はば、諸佛諸神の中でも、此畸形佛は最高位に置かれてあるのである。（第一圖參照）

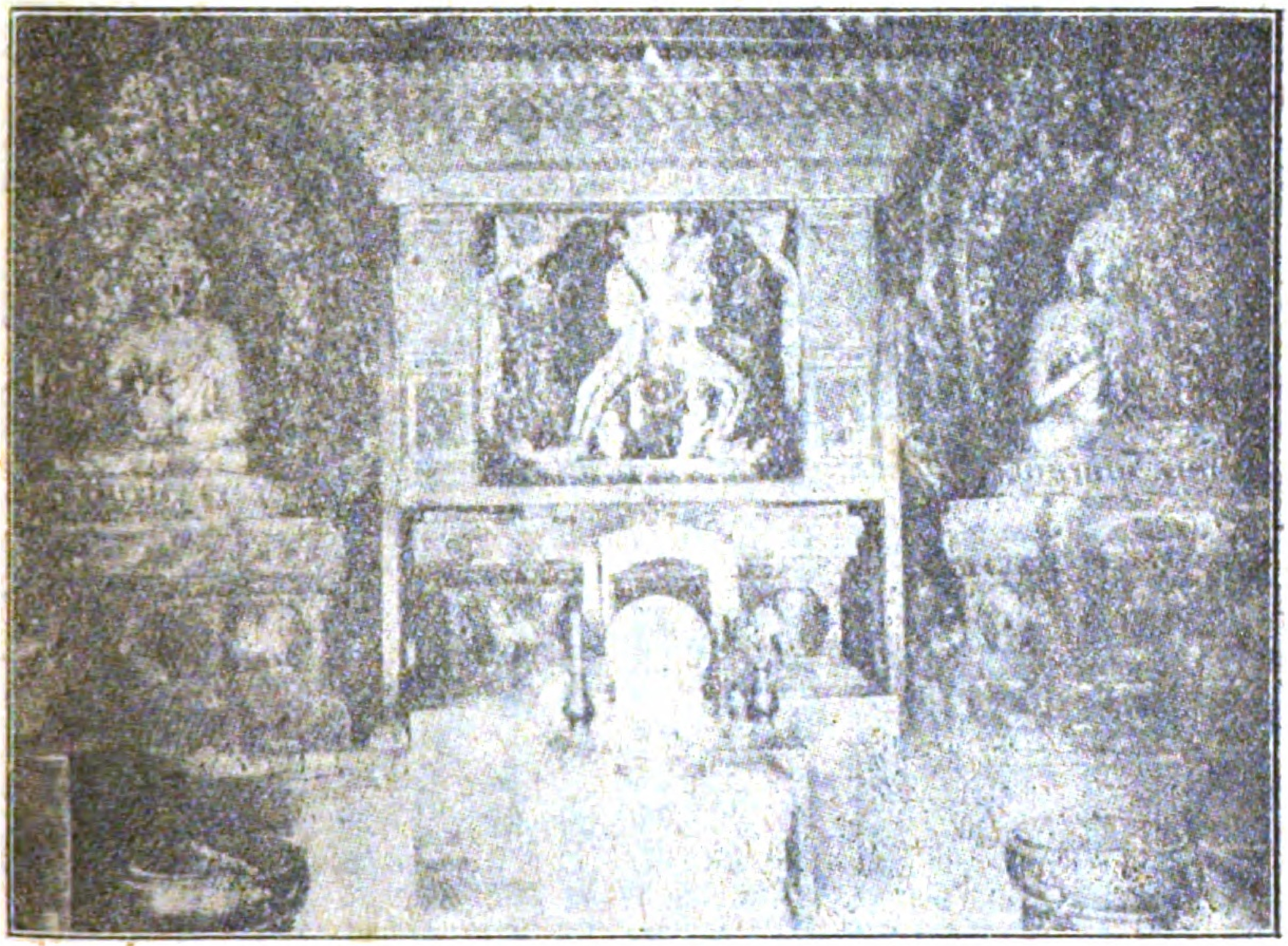
北京の黃寺にも、右と同樣の陰陽佛の外に、或は動物を犯し或は妖獸に穢さるゝうら若き乙女、その他種々の目的物に接して居る、色々の姿勢の怪佛異神が竝祀せられた一堂宇がある。

北京雍和宮。以雍正帝歸依喇嘛敎賜名。奉有歡喜佛。或婦人裸體。與獸魚交媾。或作惡鬼狀。裸體屹立。抱擁美婦人或形似牛。其上有露出陽根之菩薩騎之。或婦人裸體。自背割開。注以馬尾。如是之佛像七八體。又鬼神殿中。奉有惡魔。長丈三尺餘。人身狗面。有角。與美貌女作淫狀。又有惡鬼。手持兇器。閃閃有光。足下踏有裸體男女。是等不可思議之佛像。屬喇嘛敎。

とは「滿淸祕史」の下の卷に載する處であつて、巧に北京雍和宮の內殿を描寫したものである而して一度現場に臨むで、自らこれら奇々怪々の陰陽佛を目擊せしものは、必ずや彼等喇嘛敎徒の愚昧を嗤ひ口を極めて淫神崇拜の甚しきを誹譏罵倒するのが恒例である。（第二圖參照）

乍然人類學及社會學の見地よりこれを評せば如此宗敎は敢て珍

となすべきものではない、叉怪とすべきものでもない、如何となれば、凡そ曾て地球上に棲息したる民族にして、何者か一度は人間の肉を喰ひ、嘗て一度は生殖器を崇拜しなかつたものが何所にあるか。現に文華文明を以て天下に誇る泰西人と雖も、その祖先は、一度は好むで人肉を喰ひ一度は熱心に生殖器を崇拜した事があるのである。この事たるや歴史が説明しサイアンスがこれを立證する。現に當今歐米各都の博物館内に陳列されてある、考古學乃至人類學上の物件が證據立てるのである。巴里ルーブル博物館の一部にも、世界創世以後に於けるあらゆる蠻族が各種の物體に男女の生殖



（第一圖）奉天喇嘛塔内の畸形佛

器を彫刻して、これを愛玩尊崇したものが澤山ある。伊太利の南端ネープル市に於ける、王立博物館の一隅にも祕密室と名付て一般公衆の參觀を許さない部屋がある。明治三十五年の春故小松宮親王殿下の此地に台臨あらせられし日、著者は殿下の扈從者と共にこれを參觀するの機會を得た。陳列品の大部は發掘せられたるポンペー市中に發見せられたる、主として風紀に關係ある、繪畫彫刻の物件を蒐集せしものにして、中には純然たる宗教の色彩を帶び、崇拜の目的たりし各種各樣の生殖器が澤山に排列せられてあつた、同時に、これに依て、古代羅馬史上を飾る、神話的男女の神々が悉

く假面を脱ぎて、それが原形のまゝに於いて露はれ、かれルードヴエユヒ、ホープの徒が、頗る遠まはし的に紹介したる、古代希臘及羅馬人の渇仰せし、醫神の本體が、最も無邪氣に且最も露骨に現出せられてあるのを見るのである。

巴里の國立圖書館の地下室にも、祕密室なるものがあつて、醫師と法律家と社會學の研究者丈が入場を許可せらるゝ一種の陳列室がある、內容の重なるものは、彼大奈翁自らが蒐集せしものなりと俗稱せられつゝある。特種の繪畫彫刻上の物件にして、就中研究上有力なる參考品たるべき、宗教上の意味のものも敢て尠くないのである。

大約地球上の人種は、洋の東西を異にし、文化の程度及時代に於て著數差ありと雖も、畢竟彼等は悉く同一の軌道の上に、同一の歷史を辿つて來たものである。今日キリスト教國民を以て自任し、自分以外の民族を「異教徒」「偶像教徒」將たまた愚昧の蠻族視する處の白晳人種と雖も盡し之が分類中には漏れないのである、（スタンレーホール博士の靑春時代を見よ）

惟ふに原始的蠻族のみならず、彼アリヤン民族の如きもまた、往古はその家庭神中には必ず陽物を祀つて福德を禱つたことがあるのである。（長谷部師の印度宗教實見記）

東洋諸邦の民族皆然り我日本の如きは、古來盛に生殖器を崇拜したる歷史を有するのみならず、往古は家々辻々には必ず、陽物を奉祀せし祠の存在せしことは、敢て昔時の天竺に異ならざりしなり。

過がてに道ゆくわきの辻社
ほだきいさむるもりの古枯　（櫻井基輔集）

「辻々の道祖神、家々の大黑天神の袋持に至るまで黨し言して兩日く」（廣隆寺牛祭の祭文）

「古へ辻祭の御靈といひしは道祖神の事なり、後には石に彫りて道衢に立つ」（明月記）

「辻祭とは岐神の祭にして岐神とは道祖神のことなり」（扶桑略記）

などは、有力なる好例證で大黑天、及道路神は男性の表象である。單にこのことは、過し昔のことにあらず當今尙全國到る處に於て此種の禮拜が行はれて居るのである。依て本問題の如きものも一通聞いて居て決して損はないのである。

二

さて、祖先人類はそも如何なる動機よりして、此奇怪なる物體を崇拜するやうになつたのであらうか。

今これを詳細に說明せんと欲せば勢ひ人類學の見地より說き

始めて、これを宗教史に及ばし、原始時代の人類が、最初は天體即ち主として太陽を禮拜し漸次人智の發達と共に、所謂神話時代の宗教が生れ次で靈魂存在の信仰の發生と共に、森羅萬象一として靈なきものはないと云ふ、卽ち萬物有靈説が起り、これに次でその信仰を形體を以て言ひ表さんと試みたる結果ともいふべき、偶像教の案出せらるゝまでを逐次的に説明するが、順序ではあるが、それを一朝一夕の問題ではない、依てこの問題については更に手を染めないことにする。然し、直に本問題に立入る前提として、第一著に著者が明に斷言して置きたいことは、

「創世の人類は決して卑猥下劣なる觀念よりして畸形物體を崇拜し始めたのではない」

といふことである。

現今最も熾んに且最も露骨に男女の生殖器を崇拜して居る、印度のクリシュナ敎徒についてすら、山上天川教授は、左の如きことを云ふて居る。

「既に男女兩性の相思相戀の觀念を以て宗教的渴仰の情を説明するが故に、其説明の方法が極めて神祕的で且つ兩性關係の比喩に富んで居る。吾人はクリシュナ文學中に、夫婦の間に於ける最も濃厚にしてデリケートなる關係を、最も大膽に且つ最も露骨に説破せるを見る。然り、クリスナ文學中には、吾人の絶對に飜譯を許されない様な男女の關係の露骨な文字を以て言ひあらはしてあるを見出すこと決して稀でない。所謂今日の或一派の自然主義者をして之を讀ましめなば、數百年前巳に印度の社會に於て彼等よりも一層文才に富み一層宗教的である、自然主義の巨人ありしを見て喜ぶであらう。但し此に注意すべきはクリスナ文學の作者は、如何なる猥褻なる文字を弄しても、彼等自身の心は少しも猥褻亂著しなかつたことである蓋し是れ彼等の出發點が熱烈なる宗教信念の上にあつたからである。」(今日の印度二二四)

此點については嚴格なるバーネット博士も同意見を保持されて居るのである。

「名も知れざる幾多の淫祠妖廟のことは言はずもがな、印度到る處濕婆及ビシュヌの宮殿内には、英國人の筆を以てせば、到底これを描寫するを敢てするを欲せざる程の卑猥極る光景を現出せしめたる彫刻を以て粧飾されて居るのを見る、さりとてこれらの風習が必ずしも信徒の淫猥なる性行を意味するものと考へてはならぬ」(バーネットの印度教)

再び問はん、さらば一體どんな考からしてかゝる物件を拜み始めたのであるか。

蓋、原始時代の人類にとつては、凡そ天下のもの、見るとなく、聞くとなく、一として不可思議ならざるものとては無く、其時代に於ける彼等の單純なる頭には、とても解釋の出來ない難問題が澤山あつた。就中直接自分に關係し、而かも最も神祕的に考へられたものが即ち此生殖問題である。分て創世未開の日、廣漠たる地球上に、比較的少數の人類の生息して居つた時代に於ては、生殖といふ問題と相關聯して、繁殖といふ事が最も深く彼等の腦裏を刺戟したことゝ思はれる偶ま彼等の間に死亡する者でもあつた時には、殊更に增殖の必要を感じたであらう。而してその結果が、終に人口繁殖の根本原因なる生殖器そのものを、神祕不可思議物となし、これに對して非常なる敬意を拂ひ、敬意は延びて尊崇心となり、尊崇心は漸次宗教的敬虔の信仰となり、遂には形體を以てこれを現出せしめて、神の如くにこれを禮拜するやうになつたものであると說明し得るのである。而してこの信仰の上に少しく哲學的人智が加はれば玆に純然たる一箇の宗教が出來る、即ち今日の印度に於ける生殖器崇拜教の如きものとなるのである。

「クリシュナ崇拜の信仰は、全く陰陽兩性の戀慕相思より起る愛である。その信仰崇拜の對象がクリシュナ自身と渠が聖妻たるラーダーとの二重になつて居る。然り而して個人の靈魂と神との關係は、一婦人が其戀人に對する性慾的渴仰の念よりして成立すると主張するのである。即ち個人は恰も一婦人が自己の全生命を戀人のために打込み又投げ込むが如くにその全生命を神に奉獻することによりて救はるゝのである。

故に印度の詩人は情緒を言ひ表すに宇宙の創造主に對する賞讃文又は祈禱の形によりて彼等獨特の力強き熱血を注いで居る。彼等の言葉を借りて云へば、創造主なる永久無限の神様は、その温かい懷の中に信者を受取らん爲に、常に廣大無邊なる暖き愛の御手を延ばして、衆生をして、生死無明の大海を渡らしめ給ふから、衆生は一人の女が戀人に走り行くが如く、神様に向ひ燃ゆるが如き、神様の温かき胸に抱かれねばならぬ。（今日の印度　二二二）

などと鹿爪らしく說教するやうになるのである。

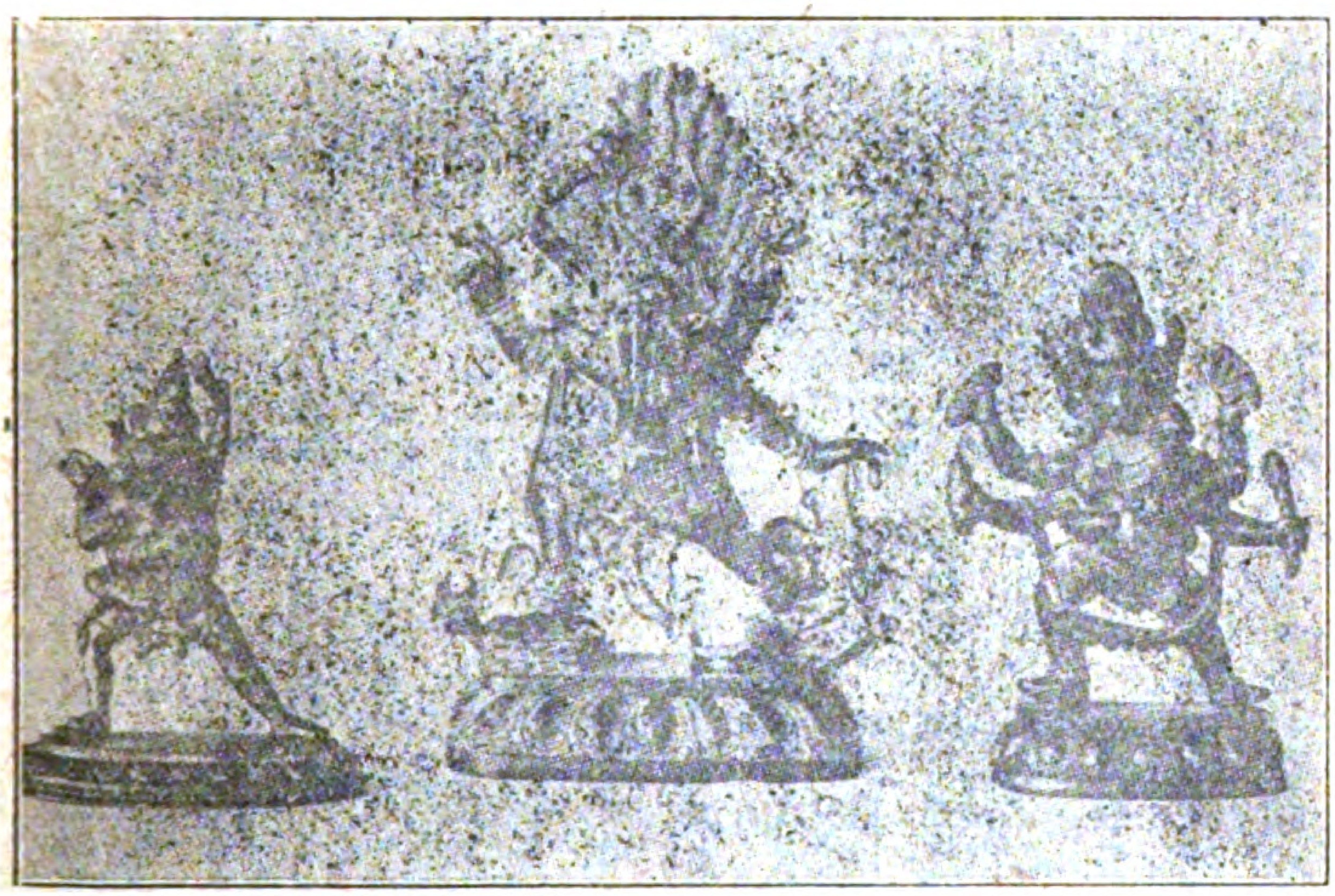
如此、本問題は專ら神聖なる禮拜心から產れ出でたるものであつて、決して色慾の連想がその本源でないことが推論し得られるのである。この點に付ては、嘗て「サイコロジー、オブセツキス」の著者も

「創世の蠻人は、生殖といふ點からして、男子の生殖器を奇々不可思議のものとして、始は恐れ後には尊敬した」

のであると論破したことがある。若しそれその觀念が一層增長し、主として人口繁殖を熱望する志願のその極度に達する場

合は、今日印度に行はれて居る、アッパパンチ教の如き、精液そのものを崇拜する宗教が興り、或は現に西藏、蒙古に行はれつゝある喇嘛教の如く、異性抱擁の佛像を禮拜する宗教が產れて來るのである。（三行削除）

さて本問題に立入るに先ち、順序として、豫め生殖器なる語に對して定義を下しこれが解釋をなすべき必要があると思ふ、然しこれを學理的に了解せんと欲せば少くとも、原腎とか、中腎とかウオルフ管乃至ミュレル管など呼ばれて居る機關までも悉知するに非らざれば、生殖器そのもの〻ことが判らず、また生殖といふことを云はんと欲せば、勢ひ生物繁殖の原理に論及せざるを得ないのであるが、茲にはこれを別箇の問題として、本問題の生殖器とは男女兩樣一括して、單に「人間に具備せられたる繁殖の道具」であると定義して置く。兎角生殖器と云ふとすぐ色情を連想するものが多い様であるが、本問題は、嘗ては某兩性學者が。



（第二圖）北京黃寺（雍和宮）の淫神怪佛

「生殖慾とは何ぞ、これ種を保存する慾望なり、平たく言へば、子を欲する情にして、色慾とは異なれり。」

「原始的動物には生殖慾のみありて色慾なし」

と論斷した通りの意味のものである、須臾讀者は終始一貫その精神を以て本篇を通讀して頂きたいのである。

三

先史時代よりして、世界の民族中如何なる人種が、如何なる方法によりて、生殖器を崇拜せしかを考察するに、既に前述せし如く、

彼等の事跡には、人類學上及考古學上よりして、世界到る處その遺跡を見出され得るのである。畏友八木奘三郎君、先頃「普通人類學」と題する有益の著述ありて、一本を惠送せらる、その内の一節に曰く。

「男女の陰部を摸して、或目的に供する風は、往々、諸人種の間に認めらるゝ事なるが就中、禁厭若くば宗教上の意味に用ゐたる例は殊に多きが如し、是等の事柄に就て、余の友川口米吉君は、昔て本邦の古俗を記述されしことあり、右の文によれば、塞の神、道祖神、幸神、粥杖等は皆生殖器に關係ありといひ、又女子の分は又別箇の表示物ありて共に崇拜の實例あることを述べらる、斯る風は古く希臘に盛行し現時印度に熾なることを附記せらる」

著者は不幸にして未だ山口氏の著述を繙いたことがない、幸神、粥杖についてどんな風に研究せらしかを覗ひ知るよしも無い、單に自分は自分獨歩の立脚點よりして、本問題を研究したる結果を發表しやうと思ふのである。反覆す、本問題は人類學上毫も珍奇の問題ではない、寧ろ陳腐に屬し、この事柄は、先史時代にありては、世界全土の諸民族の間に行はれたる風俗であつた。嘗て、スタンレー、ホール教授は

「生殖器崇拜の風習の發芽の當時は、最も森厳高崇なる宗教の祭典として盛んに禮拜し居られしものなりしが、時勢の變遷と共に、漸次敬虔の念を減じ專ら性慾的感情を刺戟すべき、一種の秘密手段となるに至るまで墮落せしかば、別に一層高尚なる新宗教の出現と共に、右の風習は自然に消滅するに至りしなり、これ主として、人口の繁殖と共に、天然に惠まれたる自然の樂土は悉く彼等を收容する能はざるに至りしが爲、彼等は漸次北方に移住し始め、また酷烈なる天候と戰ひ、生存上の競爭に迫はれ、もはやこれまでの如き、懶惰放逸の生活を爲す能はず、寧ろ專心如何にして存在すべきやの問題に囚はれ、これと同時に衣服を纏ふの必要を生じ、それやこれやの情實のもとに、彼等の心理狀態に著敷き變化を來らし、終に露骨なる生殖器崇拜觀念をも一變せざるを得ざるに至らしめしなり」

云々せられたることがあるが、その實生殖器崇拜の風習は人智の發育天候の一變、生活周圍の情態の變遷によつては容易に消滅しなかつたのである。之に反して、有史時代に這入てからも、尙依然としてこの慣習を繼續して居つたことは記錄がこれを證明する。

太古彼の有名なるネブカデネザル大帝が昇天の勢を以て、バビロンに君臨して居つた頃はバビロン大帝國の文華は殆ど隆盛の極度に達し、ニネベの都の繁華は、今日の倫敦を凌駕すべしと激稱せられし程、文物發達して居つたにも不拘、當時本問題の畸形物は、依然として全土に渉つて崇拜せられ、到る處壯麗華

美を盡せし宮殿を營まれ、バビロン及フエネシヤに於ける本山には、神女と號して、幾多の窈窕艶麗なる妙齡の釆女が、神殿に隷屬して居つて、彼等は神に仕ふ勤の第一著として、その大切なる、Jus Primae noctis を神官に獻げて、彼等が終生の德と心得しのみならず、是等の釆女の間には、今日印度のシヤクチ敎の宮殿に行はるゝ處の祕密典禮に同じきことが實行せられて居つた。かるが故に或一派の學者は、バビロン及フエネシヤの巫女は、これ今日の賣春婦の本源なりと叫んで居るのである。それはさて置き、右ニネベの都の畸形神は、當時隣邦列強の諸民族の間に羨姿の大目的となつて居つたとは今日これを考ふると可笑い樣である。

其後間もなくザークセスの治世となり、流石バビロン帝國の盛運も次第に衰頽に傾き、この機に乘じて埃及人は大擧してバビロンに侵入し一擧にしてニネベの大都を屠り、萬古不朽を以て天下に誇つて居つた、諸の營造物を忽ちに蹂躙し盡して、當時バビロン民衆の崇拜の中心となつて居つた、最高神社の本尊を奪取して、數十人の兵士に擔がせ、凱歌を奏して引上げた。而してその本尊なるものが、即ち本問題の畸形物男子の陽根を形どつたものであつた、而かも數十人で運んだと云ふからには如何に逸物であつたかゞ偲ばれるのである。

畢竟此樣なことも、科學の見地からは、如何に巧に創世民族の心理情態が言ひ表はされてあるかゞ判る。即ち彼等の單純なる頭腦では、何んでも彼でも頭拔て大なるものが、大きい丈それ丈エライと考へたからである、試に涅槃の釋迦の像の如き、普通佛の臥像は側にひれ伏して居る像よりも數倍大きく畫かれてある、天國曼陀羅中の阿彌陀尊の如き、或は支那各地にある孔子廟殿内の孔夫子の如き周圍の諸尊に秀でて主要佛體丈が思ひ切つて大きくしてある、奈良の大佛、鎌倉、長谷の觀世音みな同じ考から來たものである。モニヤ、ウヰリヤムの說によれば、太古の印度には、全國に亘つて、十二箇所の主腦的大自在天宮が存在して居つて、その寺院内には、雲を突かん程の巨大なる大理石の陽根が祀られてあつたとのことである。而して就中拔群の巨物はグジヤラトに於ける蘇摩那陀と、ウジヤイニの摩訶伽羅とベナレスの毘首吠須婆羅の三尊であつたと云はれて居る。三藏法師も入竺當時陽物崇拜の盛況を讚歎して

「外道天根を拜すその高さ百尺」

と叙述して居る。三岡識略にも

「滿洲遼陽城中亦有古刹。膜禮者祇千門焚禱。不得闖入有范

生者。設法入之。見內體巨人二長各數丈。一男子向北立。一女南面共類。赤體交接。備極淫褻。土人呼爲公佛母佛。崇奉其謹とある。この如くにいづれも皆巨像である。

セミチック人種は同じ白哲人の中でも、有史の初より比較的純正なる崇教觀念を保持し猶太教であれ、回々教であれいづれも極端なる非偶像敎であつて、苟くも偶像を尊崇する民族なれば、誰かを問はず、これを不倶戴天の敵の如くに嫌惡したものである、依て舊約全書にも將た哥蘭の中にも、嘗て彼等が生殖器を崇拜した時代の跡を認め難い。さりながら翻てこれを考ふるに、彼等が獨特の宗教上の典禮たる「割禮」なる儀式は、抑も那邊より起因したるものたるかを考窮せねばならぬ。

抑も割禮なるものはその意義に於ては、元服祝又は加冠の分類に屬し兩者共に男兒の成人祝の典禮である、而して割禮はその最も元始的にして而かも最も露骨に男子の成育を表出せんとを試みたる儀式である。蓋し割禮とは、男子の龜頭包皮環狀切截式のことであつて、これに依てセミチック人種もまた依然として、その始は生殖器崇拜民族であつたことが斷定できるのである。如何となれば、龜頭包皮環狀切截式典は古今を通じ原始的民族が、彼等の祕密結社內に於て行ふ處の各種の儀式典禮中最も神聖にして且最も重大なる典禮の一に數へられ、彼等蠻族中苟も青春期に達したる青年は先づ第一に「男子集會所」內の女陰陽根を祀りたる祭柵の前に於て割禮を行はれ、而して後始て彼等もまた祕密結社の一員たるの資格を有するに至るのが通則である。現時尚右の習風を行ふて居るのは、今回の戰役に於て我版圖に這入た、マーシャル群島及其附近の列島の蠻族並に南米亞非利加の生蕃である。（フオン、デル、スタイネンの「中央ブラジルの蠻族」ウエブスターの「原始時代の祕密結社者」等參照）。況してや

「古代各種の神話の如きも殆どその總ては生殖及繁殖に關係せしものならざるはなく、若し兩性に關する性慾の觀念なかりしならば恐く理解し得べからざるもののみなり而してあらゆる宗敎もまたその原始的と種族的たると將たまた基督敎たるの如何を論ぜず、いづれも性慾的意識の土臺の上に建設せられ、漸次時と共に洗錬せられしものたるの形跡あり。」（スタンレーホール青春時代）

と喝破したる學者もあることであるから、セミチック人種たりと雖も、一度は同じ經驗を味つたものであることが推論し得られると思ふ。

アリヤ民族になると、彼等は最初より熱心なるリンガ敎徒であり、ファリコ崇拜者であつた。リンガとは梵語にしてその原

意は表章の義なれども主として男根の意味に用ゐ、ファリコスとは希臘語にて陰莖の義なり。

阿梨那人の家庭には、男女の兩陰具を祀り、中には小さな御廚子の內に、兩陰具を形造りたるものを頸に懸けて自分の守り本尊として居つた。東にあつては印度人、西には古代の希臘、羅馬の民族皆共に盛んに此畸形物を尊拜した。（第三圖參照ホール博士の青春時代を視よ）

使徒保羅が、亞典維（アデン）のアレオ山頂に於て、偶像崇拜攻擊の大演說をやつた頃は、丁度希臘羅馬の全土に亘つて陰陽兩物體は種々の名稱と樣々の形體のもとに、華麗壯嚴を極めたる宮殿の內に祀られて萬民の尊崇を受て居つたのである。當時天下の誇として居つた、古今無比壯麗絕倫なりと誇稱せられて居つた宮殿に奉祀せられてあつた、エペソのダイヤナ女神の如きも、蓋し今日の印度のシャクチ敎の分類に屬して、一種のカーリー崇拜の外ならないのである。又當時葡萄收穫期に於ける、バッカス神の祭日には新酒に醉ふたる半狂亂の男女の群衆は、裸體のまゝで Phallikos（ファリコス）を擔いで市中をあばれ廻つたものである。而してファリコス卽ち巨大なる男子の陽根である。これからして生殖器崇拜のことを英語では Phallic Worship（ファリク ウォーシップ）と云ふやうになつたのである。



（第三圖）阿梨那人の守本尊

泰西の學者哲人は、古代の希臘、羅馬人が、バッカス祭の如き馬鹿げたお祭をしたのはつまり生殖力といふことを尊重した結果であつて、ファリコスを擔ぎ廻つたのは生殖繁殖の力を言ひ表すには、此以上のものはないと考へたからであると說明して居る。勿論當時希臘の文明は或點に於ては今日に劣らず、學者の思想は著敷卓越して居つたから、彼等が先代のバビロン人フエネシヤ人の如く露骨にも實形を模倣したる物件を禮拜する

が如きことは割合に少なく寧ろ之を詩化し、種々なる美神を案出してこれを崇拜したものである。然しながらその精神たるややはり生殖と繁殖とが一大目的であつて、これに色々の神話を牽强附會し其時代の人間には如何にも尤もらしく、また有難く感ぜしめるやうな神樣としただけである。

ルードウエニヒ、ホープの「古代醫術の研究」に載するところによれば、古の羅馬の男子が、不能若くば勢力衰萎を喞ちて、熱心に祈願をこめたる神には、スピガス、プレマ、ペルツレド、ペルフキカ等の男女の數神があつた、而して此等の神々の神話の美なるにも不拘その實體は悉く生殖本位のものであつたことは、ネープル博物館内の祕密像がこれを證明する。

また當時「親愛なる女神」(ボナデア)と通稱せられ、專ら羅馬の婦女子の敬崇の的であつた、羅馬アヴエンチン山麓に奉祀せられたる男子禁制なる疑問の祕密神の如きも、丁度朝鮮の婦女が、姙娠を切望して、女陰に似たる石を崇めて之に祈願を込むるの風習あるを知らば（今村鞆氏の朝鮮風俗集參照）容易に解釋し得る問題である、いづれも我國の鹽竈、粟島明神の部類に屬し、悉く生殖と女の帶下の神樣である。かくの如くにして、祖先人類の腦裏に染み込んだる、生殖尊重の觀念と、先入主なる天體崇拜の信仰とが混同して、玆にアポロとかヴエナスとか呼ぶ、男女の美神を創案し、國民舉つてこれが崇拜にこれ努めた。

古來西洋の美術界に於て、完全無缺理想的美人のモデルとして尊重せられて居る、巴里ルーブル博物館内にある、メロ一のヴエナス、或は羅馬の皇室博物館の內殿に恰も神樣であるかの樣に、一段高い所に祀られてある、メヂチのヴエナスの如きもつまり生殖器崇拜に關して有力なる參考材料である。

元來ヴエナスと云ふ美神には、複雜な詩的神話の隨屬せられて居るにも不拘、此神は素と、ヴエナスゼニトリツクスと稱せられ、譯せば「萬民の母」とか或は「生殖の本源」とも名づくべきを適當とする、古代羅馬の家庭神の一である。つまり女子の生殖器を美化せしめたる神樣である。その初はバビロンに興り、シリヤ、エヂプト乃至フエネシヤに傳布し、後希臘に輸入せられ、希臘人の手を經て、轉じて羅馬人間に傳染し、羅馬帝國の擴張と共に、當時隣邦到る處に擴がつたと傳へられて居る先年、米國ペンシルヴアニヤ大學派遣の、バビロン古跡探檢隊の手によりて發掘せられたる物件の中にも、一箇のヴエナスの小銅像があつた、而してその靑銅像メロ一、メヂチの石像の如き美貌美體を備へず、寧ろ男子かと思はるゝ程の醜女(しこめ)であり、

同時に立派に陰部の彫刻してある裸體像であつた。而かも此種のヴヱナスは、廣く當時の小亞細亞諸邦にも傳播せられ、白人(アリヤン)以外の民族の間にまで崇拜されたるものと見えて其後同地方各地に於て、多少變形のものとはいへ、殆ど同形にて、丁度陰部の處に、菱形のものが刻まれてある、大小各種のヴヱナス像が發掘せられたことがある、而して恰も當今印度、西藏乃至蒙古地方に於て崇拜せられて居る、カーリー女神に彷彿たるものである。その異なる點は前述のヴヱナスには立像の外に腰を掛たものもある、これに反し、カーリー女神は多く片足で立ち、舞踏の姿勢の裸體立像にして（第四圖參照）若し然らずんば、濕婆大自在天の懐



（第四圖）印度西藏及蒙古のカーリー女神

に抱かれ半ば眠りたる細目を以て濕婆の胸上より男神の顏を覗ふ如き姿勢の裸體婦人によりて表出せられて居る、恐くはこのいづれともに白哲人種の家庭神の一であつたであらう。この點につきて、長谷部隆諦師記して曰く。

「抑もシャクチ派の奉ずる根柢の要素は女性の生殖機關其者を崇拜することにある。

其經典タントラの示す所を見るにシャクチ崇拜の第一義たる最上の形式は、即ち裸體婦人そのものを直に讚美し、敬慕し、且つ渇仰する事にあり、殿堂中に、自己の面前に全く衣服を脱せる裸體婦人を立たしめて、其に依りて日々勤行を修する事になつて居る。

而して此等の宗徒は、各自其家庭にありては、女神像の代表とし

て

一、金屬製の三角形を拜するか然らずんば

二、銅皿の内部に三角形を畫きたるものを禮拜するにあり」。

と。これに依てこれを考ふるに。ヴエナスと云ひ、カーリーと云ひいづれもこれ女陰崇拜に外ならず、換言せば山上教授の女根崇拜と名付られたるものである。

「シヤクテイ宗とは、シワ神の相方たる女神を、其本尊と仰いで居る、此派の信者は、單に理想化したる女根を崇拜するのみならず、生きた實物をも亦彼等が、渇仰崇拜の對象となされて居る」

とは今日の「印度六五頁」に記されたる處なり。

シヤークテイ教これを直譯して、精力崇拜教となす、此宗門は比較的近世、濕婆教即ち男根崇拜教に對抗の目的を以て、印度に唱道せられ始めたる、一の新宗教ではあるが、恐くはその根柢起源は最も古く、その精神、その習慣は、既に遠く釋尊降誕の以前に於て、廣く印度在住の阿梨那族の間に行はれ居りて、前記のヴエナス、太古の埃及のオシリス、イーシス、と共に同時代に屬し、同族のものであると思惟せらる。而して、これに對抗すべき一大勢力なる、陽物崇拜教に至つては、その起源更に古く、印度にありては、既に耶蘇紀元前に於て實行せられ、中世紀に至つて隆盛の極に達し、現に今日尚熾んに勵行せられつゝある。

四

昔、玄弉三藏、經を求めて天竺に到るの日、此種の宗教の隆盛を記して曰く。

「婆羅痆斯國、天祠百餘。外道萬餘。多事ニ大自在天根一也。大城中。天祠二十所。天根高百餘尺」

而して堀謙德氏これに解釋を付して曰く、

「プラナ經に依れば、濕婆は、世界の破壞力を代表し、破壞は再生再興を豫想するが故に、陰陽崇拜の一形態となり、男根を以て之を表示する習慣を成せり」。

と。更に、現今印度を風靡するリンガ崇拜教につきては、長谷部師は、かくの如く説明せらる、

「與事自在の濕婆自在天は、絡み合へる、捲毛の虎の皮を以て身體を掩ひ、紐と前掛の目的に使用せらるゝ、多の蛇を纒ふて居る、而して此破壞神は、半開半閉にして、少しく濕へる兩眼を有ち、酒に醉へるが如き態度の外容を持する人物に依りて、代表的に標章せらるる事なるが、斯る偶像を信奉する者は頗る稀にして、此派の多くの

崇拜者は、彼のリンガ即ち男女の陰部を以て標章するものを、一般に拜する事、最も普通なりと云て可い、此にリンガと云ふは多くの場合に於いて、ヨニーと呼ぶ婦人の陰部を形取たる、圓形の臺石の上に、圓柱形の石片を置きたるものを云ふなり、但し斯る一種の陰莖崇拜が、此派の信者に取りて、決して些少の猥褻的觀念を伴はざるは大に注意す可き點で有らう。濕婆神崇拜の儀式は、猥褻物信仰の最も普通にして、又古代の形式である、多の考古學者の研究に依れば濕婆自在天の信仰は、既に基督數紀元前の印度に在りて、リンガの形を取りて一般に流行せしものと認められ居るなり、而かも獰惡狂猛なる神を陰莖の標表に依りて、崇拜する事實は蓋しアリアン各種族國民の、原始的家庭中に行はれたるものらしい、從て希臘の神なるバッカス及び埃及人の神たるオシリスなども、何れ此種の形式物に依りて、崇拜せられたるものであらう。

家庭神の間に、必ずリンガの偶像を祠り印度各地方の一寒村と雖も、此神の崇拜堂を有せざるもの殆ど皆無といふても不可ない程である」。

と。されば、本問題の宗教としての本家本元は、寧ろ白皙人種である、而して最も極端にこれが實行に努めたるものは印度人である。彼は希臘羅馬の民族の如くに、生殖問題を詩的美化せしむることを心付かなかつた程、熱心なるリンガ崇拜者であつたから、却てこれを卑猥挑情的のものとなし、最も露骨にその實形を模擬し、尚これに厭き足らずして、之を人格化せしめ、之を春畫的となし、甚しきに至ては前記シャクチ宗の祕密典禮の如く、宮殿に隷屬する釆女によりて、壯嚴無比の神聖たらざるべからざる神殿に於て、實地にその教理を實行するが如き、墮落の深淵に沈淪するやうになつたのではあるまいか兎に角生殖器崇拜教は、亞梨那族の西遷と共に東歐に傳り、その信仰は東遷して、印度西藏を經て、蒙古に移り、轉じて、東洋諸邦よりして我日本またその餘波を蒙つたものと思はれる。

朝鮮の如きは、神話、古口碑の裏面に、この信仰の跟迹顯著なるものあり。支那の古典未だ深くこれを探究するに至らずと雖も、比較的近世のものにありては鄭所南心史に曰く、

「元人。于幽州。建佛母殿。鑄佛裸形。與妖女合。淫狀種種。纎毫畢具。即此可證。其穢跡至明嘉靖時而滅。」

と。而して、留青日札載は、これが例證を掲げて、

「嘉靖十五年。大善殿有鑄像。極其淫穢鉅細。不下千百。夏文愍公言。建論焚之。以請焚宮。並付諸火。其像號歡喜佛。乃元之遺製。」

と。然れども、明朝に至て、必ずしも此信仰の、支那全土より驅除せられたるにはあらず、現に今日尚歡喜天に對する信仰の消滅せざるのみならず、此に類する生殖敎は依然として勢力を保持するあり、今日支那到處に禮拜せらるゝ娘々廟の如きも、亦その本源を一にして居るものである。

外國のことはさて置き翻て我國の事跡について之を考ふるに、石器時代の遺物に徵して、邈古既に生殖器崇拜の行はれ居りたることは、人類學及考古學上より之を證據立得る先史時代のことは問はずもがな、文獻の徵し得べきものとしては、劈頭第一、我が高天ヶ原の建國史上、磤馭盧島の神話を引照せねばならぬ。於能碁呂島の篇に曰く、

「伊弉那岐、伊弉那美、妹妋二柱の神、乃ち此島に天降りて、天瓊矛を島の上に衝立て、國中の天の御柱と立てたまひ、此柱の周圍に、八尋殿を立てめぐらして、共に住みたまふ。時に
伊弉弉那岐尊は、伊弉那美尊に、（以下數行削除）
「吾と汝と共に夫婦に成りて、國土を生まんと思ふは如何に」
とのたまへば、
伊弉那美尊答へて、
「其善からん」
と白したまふ。」（高木文學士の譯文に據る）

而して、此對話に次で鶺鴒の話あり、その後蛭子の命の產出となるのである。

降つて、人代の御代となりては、美和の大物主の神が、勢夜陀多良比賣によりて、初めて生殖の道を開き給ふ記事がある。

古事記、神武天皇之卷に曰く、

「大久米の命の申さく、兹に神の御子なりと申す媛女あり、其神の御子なりと申す故に三島の湟咋の女、名は勢夜陀多良比賣、その容姿よかりければ、美和の大物主の神見めでて其美人の大便に入れる時に、丹塗矢になりて、（二行除削）爾るに美人驚きて立ち走り、いすすぎ、斯くて其矢をもち來りて、床の邊に置きしかば、忽ち麗はしき壯夫と成りて、即ちその美人に娶ひて、生せる御子は、富登多多良伊須須岐比賣の命といふ。」（中村文學士の譯文に據る）

抑も、此種の神話たるや、一見頗る荒誕無稽、寧ろ不敬に近き嫌なきにしもあらずと雖も、その質殆ど之と同一同形の神話は、古來南洋諸蠻族の口碑に存し、又朝鮮人の間に傳說せられ而かもその產るゝ處の小供は各民族の神話を通じて皆女の兒である。現に最近に、臺灣總督府蕃族舊慣調查會より配布せられたる報告書の第一卷に於ても、臺東「ぷゆま」生蕃の神話として略ぼ大物主の命の生殖神話と同系のものゝ登載せられたるあ

り、

「パパトランにブントウスと呼ぶ農夫ありて、一人の娘ありけり、或日トウガルに住める某と呼ぶ者、鍋にて作りし針籠を賣りに出でしもパパトランにては、一人の買ふものもなく、遂にパパトランに來りて、ブントウスの家に就きて、買はんことを求めたり、娘は何心なく、籠の蓋を探りしに、中より、‥娘は氣絶せん許り驚さしも、人に知らるゝ事を虞れ何氣なく籠は不用の旨を告げて返しけり。それより娘は懐胎して、遂に一人の女兒を生めり」

云々の如きは、確に前記、美和の大物主の生殖神話と、その源流を一にして居ることは明かである。また朝鮮人間の明姬の口碑及我が古事記に載する處の天之日矛の尊に關する逸話は如何。

「新羅の國に阿具沼といふ沼があつた、或日この沼のほとりに、一人の賤の女が晝寢して居た。ところが、突然日の光が、虹のやうに、其の女の陰の邊を射たのを見た男がある、この男は其後始終女の容子に注意したが、女はこの時から自然に姙んで、やがて一箇の赤玉を生むだ、でこの男は女に頼んで、その赤玉を貰つていつも包むで自分の腰につけて居つた。

この男は、山の中に田を作つて居つたので、或日、人夫等の食物を牛に負はせて、その山の中に入つた。すると、丁度そこに例の王子天之日矛が居た、そしてお前は何の爲に食物を牛に積むで山に入るか乾度その牛を殺して食ふのだらう、こんな事を云つて、突然その男を引捕へて獄に投じやうとした。男は驚いて實はかく／＼の次第と辯解したが、とても赦されない。仕方がないから遂にかの玉を出して赦を乞ふた。王子は妙なことから、珍しい玉を得たので、喜んで家に歸つて、自分の部屋の中に置いたところが、不思議にもその玉は、忽ち化して、美しい少女となつた」、（佐野文學士の譯文に據る）

とは、とりもなほさず、前記生蕃神話の換骨脫體である、同一の本源に出でて、一は朝鮮系となり、美和の大物主の如く、一は南洋系となる。而して一層これを美化し、また日本化したるもの、これ即ち竹取物語なり。

古來、我國の建國史については、國體上、これが批評的研究を許さず、偶々、比較的大膽なる批評的研究を試みる、幾多の篤學者なきにしもあらざりしが、その論ずる處、悉く頗る隔靴搔痒の憾なき能はず、明治の聖代に至つて、稍眞象に近き批評を試みたる者ありしも、恰も、耶蘇教徒國に於て、バイブルに關して高等批評を爲すものと同樣の結果を來らし、悉く、或事情のもとに失敗に終つてしまつた。

さりながら、吾人をして忌憚なく言はしめば、我國の建國史

上には前篠に引照せし事蹟の如きもの、即ち生殖崇拜の風習を美化して、巧にこれを人格化せしめたるもの、敢て珍らしくないのである。たゞに我邦の建國史のみならず、創世民族の神話中には、必ず此種の生殖神話の生存は免れ難いのである。ホール博士の喝破せし通り世界の民族、特に歐洲白色人種の建國史上、人口繁殖篇は悉く東洋とその軌を一にして居るのである。

五

推古帝以降、佛教の輸入と共に、或が國古代民族の生殖觀に加ふるに、漸次印度思想の混入するあり、徐々時と共に、神とも付かず、佛とも付かぬ、樣々の生殖神が夥しく現れ始めた。この事を始て組織的に研究したものは、今を去る約二十餘年前我が國在住の外國人の同好の士の相集つて、主として日本の事物を研究して居る、亞細亞學會の年報に現れたのが、恐くは我が國に於ける、斯學研究の嚆矢であると思ふ。而してこの報告に依れば、勢州二見浦の夫婦岩の如き、作州苫田郡大野村土居のオホヒトサマの如き、讃岐の石楠樣の如き、悉く生殖神系に屬し、就中その顯著なるものは、日本全土に亘つて、遺跡を認め得べき「幸の神」であるとのことである。

さらば、幸の神とは果して如何なる神であるか。遥歩色葉集神社拾遺抄等に依れば、

「幸の神は、さへの神の誤にして、色々の異名あり、「道祖神」「塞の神」、「岐の神」、「くなどの神」、「手向の神」、「舟玉」、「興登明神」、「道陸神」などの數稱あり、信濃地方にては「道六神」とも書す、往古は全國到る處に、否、寧ろ、村々、辻々、家毎に祀られたる神なりしに似たり。」

かの奇文を以て、天下無比の稱ある、廣隆寺牛祭の祭文の如きは、明かにこれが證明を爲すものと云はざるべからず。

「讀書丹弃
謹啓、維 南瞻部州、大日本國應永九年、無射十二ノ天、朝日ノ豊登、夕日ノ豊降坐ス中ニ、銀ニ花榮、金ニ實結、天門開キ開ケテ、地戸和合シタル今夜、當寺ノ常附、四番大衆殿ヲ二花ノ嶽ヨリモ高ク、志ヲ五薬ノ底ヨリモ深クシテ、恒例不闕ノ迎ヘシテ、摩吒羅神を敬祭シ奉ル事アリ、祭神明ヲハ、招レ深計コト、瘟鬼ヲ敬ノハ、除レ災ノ基ナリ、　中略　辻々の道祖神、家々ノ大黒天神ノ袋持ニ至ルマデ、疎シ、晉シテ而白ク、云々
應永九年九月十二日夕書之」

扶桑略記、二十五卷には、さいの神のことを岐神と書して左

の如く說いて居る。

「天慶二年九月二日丙午、近日東西兩京大小路衢刻二木作神一相對安置、凡厥體像髣二髴丈夫一、頭上加冠、鬢邊垂レ纓、以丹塗レ身、成二緋彩色一、起居不同遞各異レ貌、或所レ作女形對二丈夫一而立レ之、臍下腰底刻二繪陰陽一、號曰二岐神一。」

宮川南谿また彼が「東遊記」中にも、幸の神のことを敍述して詳かなり。

○幸の神のこと

出羽國、溫美の郡のあたりの街道の兩方に、岩の聳えたる所には、幾所ともなく。必ず岩より岩に注連繩を張り、其注連繩のもとに、木にて細工よく、陰莖の形を作り、道の方へ向けて出しあり、其陰莖甚だ大にして、長さ七八尺ばかり、太さ三四尺周りも有るべし餘り怪しからぬもの故、所の人に尋ぬれば、是は往古より致し來れること、中々疎略にはせず、たとひ、御巡見使、又は御目付等の御通行の節も、此の儘にて、若き者の戯れなどにあらずと云ふ、また注連繩に紙を結びて多く付けたり、是は如何なる故と問へば、これは此あたりの女よき男を祈りて、ひそかに紙に結ぶことなりと云ふ、誠に邊國古風のことなり。

京都の今出川の上にある、幸の神といふは、いかなる神にてましますや。すべて田舍には色々の名は替れども、陰莖の形の石陰門の形の石を神體として、所の氏神杯にいはひ祭りて崇び尊む所多し、日本の古風にや、神代の卷にいふ所、或は舊記等の古事杯、古くいひ傳ふる事多ければ、神道の諸家にかゝることも有るべしと思ふ。

と、而して、此京都今出川の幸神こそ、これ卽ち、俗間に云ふ出雲の神なる緣結の神樣のことである。古來出雲の神と云へば、誰も彼も出雲の大廟のやうに心得て居るやうであるが、出雲大社は俗民の緣談とは全く沒交渉であり、緣結の出雲の神とは事實別體の神々を奉祀してあるのである。和訓栞に

「往古は婚禮の仲人をサイの神と呼びたり」

と記しあるを見ても、緣結の神は幸の神のこと、卽ち生殖器神であることが判る。然るに、近來東京よりして出雲大社の神殿に於て、結婚の式典を擧ぐる風習が起つて來て神社の方にてもこのことを有力なる財源として居る樣である。出雲大廟も主尊『杵築大神宮、素盞烏尊之子、天下經營百穀守護、又爲二醫家太祖一大己貴尊。』こそさぞ迷惑に思召すなるべし。

蓋、昔、京都今出川の上、一條以北鴨川に沿ひたる町を、出雲路河原と呼び、俗稱これを出雲路と稱して居つた。當時この邊に、最も有名なる道祖神の祠ありて、京師の人はもとより、畿の內外の諸民及遙に遠國の者までも、專らこの神に詣り

て良縁を求めたるもの丶如し曾我物語に

　いづもぢの神に誓ひ淺からず
　　妹背の中は變らじとこそ

といふ句あれば、また源平盛衰記の七の卷に、實方中將が奧州名取郡笠島の道祖神に蹴殺さるゝくだりに於て、その道祖神が

「コレハ都ノ加茂ノ河原ノ西一條ノ北ノ邊ニオハスル出雲路ノ道祖神ノ女ナリ」

と名乘る點よりしても、明に出雲の神とは、出雲路の幸の神のことであることが判る。その外に尚有力なる好例證は幾等もある、今一寸名前を思ひ起せないが、此事を考證して、加茂の河原一圓の詳細なる地圖を掲げた書物がある。それにも不拘出雲大社の神官が婚禮の主宰を爲すなどは、その無識を公示するものと言はねばならぬ、それは別問題として、幸の神について研究を要する點は、此神は男性の神であるか、或は女性の神であるかの問題である、如何となれば、前記源平盛衰記によれば、笠島の道祖神は、己自ら女なることを名乘り居るにも不拘十訓抄には

「大年の神の男莖形に和きたまふは笠島の道祖の神の陰相を好み給ふに同じ」

云々の句ありて、此神或は男性にあらざるやを疑はしむるの餘地がないでもないからである。然し、松浦靜山公、嘗て幸の神を諷せられたる句に、

　陰陽儼相向　　每惹路人嘲
　左右多孫子　　何時恣接交

と云ふこともあり、また煙霞綺談、甲子夜話などに、

「備後國、今津宿のはづれ、田中に石の群轉ず、其中に、二大石ありて相對す形男根と女陰の如し、又二石の傍に、紙の小旗多し、其故を問ふに、男女陰處に病ある者、祈りて驗あれば、この旗を立つと云ふ」

などの記事よりして考ふれば、道祖神には男女兩樣あるのかも知れぬ。「奧の荒磯」と題する閨秀紀行文あり、安永年間、松前家に降嫁せられたる、京師の花山院の姫宮に宮仕せし、小磯某女の松前旅行日記なり、この書また東北地方に於ける幸の神崇拜の風習を畫き、金性大明神てふ名稱の下に、左の如きことをしるすあり。

「十六日

[illegible]といふ所に、金性大明神とてわづかなる社あり、人々詣ふでた

る[illegible]此神は男子の性を祭りて、[illegible]
旅の憂を暫し忘れて笑ひあへり。」
と、これによりて金性明神とてしの幸の神は確に男性なることは明かであるかくの如く、昔に生殖器を尊奉したる神社は、全國到る處にあつた和訓栞に
「昔、常陸國高道祖村、道祖の祭には、大なる男根を木をもて造り、鳥居に掛けたりといへり」
と雖も、かくの如き祭典は豈太古のことのみならんや、現に昨春の東京朝日新聞紙上に於て、「猥稀なる男根祭」といふ題目のもとに左の記事が載せられてあつた、
「愛知縣、東春日井郡味岡村大字大久保一色では、毎年舊正月十五日、綾社、田縣神社の祭禮に、長さ三尺周り三尺、檜造りの男根に高の半丸をつけ、女の人形を添へて、神輿をかつぎ廻り、大正の今日にも盛むにやつて居る。」
「右の田縣神社の神體は、日本武尊三世の孫、竹田王と大荒田の命の女、玉姫である。この神社の石段を上ると、石や木で刻まれて大小の男根數十箇、恰も地から生えたやうに、奉納されてある、是は花柳病や子の無い女の奉納したものである。」
先頃當地の遼東新報紙上にも、こんな記事が載せてあつた。
「此頃軍港矢の山腹の深林の内に、毎夜十一時頃より、小さな燈が見え[illegible]に[illegible]と消える非常に神秘となつて、人々皆狐狸の仕業となし、若き娘共は、日が暮れると外出しないやうになつた、所で土地の警察から、一夜密行巡査を待伏せしめし所、丁度十一時頃になると年の頃四十七八の女と、三十五六の男が白裝束で、咒文を唱へながら、山を登つて來て例の場所に來つて、携へ來りし提燈に火を點じ經文を讀み始めた、依て捕へて詰問して見ると、彼等のいふ所に依れば、此等の不思議なる男女は四國にある、石槌明神なるものに信仰して居るとの事であつた。」
而して、石槌明神なるものもまた、幸の神の異名であるとのことである。
如此、生殖器崇拜の風習は、古今に通じ、我が國全土に亘つて、到る處に行はれることは、前述の記事によりて殆どこれを證明し盡したと思ふ。然し、今少しく、立入つて、幸の神の側面觀とも云ふべき點について研究して見やうと考へる。藤原爲忠朝臣集に

神さむき田中のもりの辻社
ほたけをはやす聲きこゆなり

といふことがある。「ほたけ」また「ほだき」共に幸の神の祭典行事である天野政德隨筆の一の卷に
「出羽國秋田にては、正月十五日、城下の十二三歳の男子、長頭巾に

くゝりて拵きて、ホイタケ棒といふ物をもちあつまりて、塞の神に
是をさゝげて祭る。」

而して、このホイタケ棒をさゝげてほたけを唯すことにつきて骨董集に曰く

「此ホイタケ棒、羽州にては、毎年正月十五日、道祖神にをのこらは、是を持ちて集るを祝儀とす、祭りはてゝ是を燒く、昔は女の腰を打しとぞ、そのいさみ歌に曰く

さいの神のくわんしんいの
井のすみに龜七つ
若君樣も十三人
お姫樣も十三人
孫彦やしや子
つれ孫おほまご
これんやのやかたの
御ちぎやうは
萬石萬石數しらず
四方の藏ら錢と金とが湧くやうに
わざと祝ふて
ほうゑたほうゑた

さらば、このホエタケ棒なるものは果して如何なものであるか、またどんな形をしてをるものであるかを研究して見るに、これが濫觴は朝鮮古來の年中行事の一である、即ち正月十五日の典禮である、然し蝦夷のアイノ族にも殆ど同樣の儀式の存在して居つた樣であるから、兩者いづれから傳來したものか、又は我祖先自ら固有の慣禮であるかは斷定し難いが、ホイタケ棒とは、とりもなほさず粥杖のことである。且又道祖神の祭日を、正月十五日と定めたことも、これまた粥杖の故事から濫觴したことも判るこのことを遺憾なく、詳細に説明したのは古今要覽稿である、曰く

「かゆ杖、もとはかゆの木といへり、正月十五日粥をたきたる木を、男兒これをたづさへて、新婦のある家にゆき、新婦の腰をうつまねひをして、子を孕むまじなひとなす。

西國にては、棒にてうつといひ、東國にては男根の形に削てうつともいへり小枝を用ゆるは本儀にてあらぬ形など造れるは、俚人の意巧にいづるなるべし。

上野の國人の話に云ふ

かこみ一尺四五寸、長さ三尺程の男根を、紙もて張り貫きに造りて正月十五日に、去年めとりし新婦新夫をうつ、打人は、近隣よりあつまるといへり、これを大てこ祝といふ。

又白赤の木といひて、柿澁に墨をまじへて、瓢箪に入れて、携へ來

りて、夫婦のものにかくることもありと云へり」

右の記事は簡なりと雖も、ホイタケ棒の由來因緣を能く描いて居る。

近時、ホイタケ棒祭の如きは、餘程偏境の寒村でゝもなくば見られない樣になつたが、往古は啻に僻村の野民の間に行はれたものではなく、上は皇室貴族よりして、社會の上下を通じてこのことは盛むに行はれて居つたのである。宇津保物語、今昔物語乃至宇治拾遺の如き文獻に徵してこれを知るを得べく、而かも上流に行はれたる粥杖すらも、既に一種の畸形物であつたことは狹衣物語がこれを證明する、

「十五日には若き人々、玆、かしこにむれ居りつゝ、をかしげなるかゆづゑひきかくしつゝ、かたみにうかゞひ、又打たれじと用意したるすまひおもはくどもとりどりをかしう見ゆるを。」

然し、この粥杖の行事は、地方によりては、その根本義を忘失して、一種變體の年中行事となつて居る處もある、即ち越中卯坂明神の尻打の祭の如きものゝ類である。

いかにせんうさかの杜のみをすれば
君がしもとのかずならぬ身を

とは越中の國、婦負郡、鵜坂神社の祭日に於て、神官祝詞を宜へながら、殆中の女子に、其年内に、逢ひたる男の數を懺悔せしめ、實木杖を持ちて、その數だけ、女の尻を打つを歌ひたる詭き者の涕の聲である。

古は伊勢の神宮にも「よめたゝき」と稱して、正月粥杖の行事ありしこと、和訓栞にのせたり。酉陽雜俎中の

「北朝婚禮ニ婿拜」閣日婦家ノ親賓タル婦女畢集リ各以」杖打」婿爲ニ戲樂ニ」

などの如きも、皆同じ源流のものであると思ふ。

前記粥杖のこと玆に幸の神の行事の如きは、當今都會に於ては、全くその影を潜めたといふてもよい、然しその實、吾人の殆ど想像できない物件の上に、今尚依然としてその形骸を留め、種々の假名假裝のもとに、その本體を匿して居るのである。遠碧軒記(上の一)に

「御寶祭に、わくの中に鉾を立てゝ四人して舁ぐ、これを「寶の鉾」は幸の又鉾と云ふ、道祖神のこととなり。」

云ひ和訓栞には

「信州諏訪明神の年中行事中の三月の酉祭の御柱もまた幸の神の鉾なり。」

「同松本の城下、正月に市井の衢の中央に長さ十間餘ばかりの大柱を

中心として松竹を以てその首をかざりこれを幸の神といふ。」

などと記されてある。

六

さて、今日常識よりしてこれを考ふるも、凡そ創世以降古來人類の崇拜せしもの、その數擧て數ふべからずと雖も、苟くも萬物の靈長たるべきものが、事もあるべきに何が故に生殖器の如きものをかくまでに禮拜するのであるか、その愚や嗤ふべくその醜や厭ふべきものであると思ふのである。乍然翻て再びこれを考ふれば忽ちにして彼等未開朦昧の蠻民の心理狀態は、吾人と大に趣を異にして居つたことが思ひ起されるのである。

嘗て、著明なる兩性學者なるヘベロックエリス曰く

「野蠻人は生殖器を一種不可思議のものと思ひて非常に畏懼したものである、分て男子の生殖器は最も神聖なるものとして敬虔して居つたのである。」

と、これ實に、事の眞相を穿ちえたる千古の名言でありまた本問題を解決し得べき唯一の鍵であるといはねばならぬ。蓋、古代蠻民の口碑傳說の中には、彼等が如何程陽侯を、神聖視して居るかを證明し得べきものが澤山ある。啻に創世蠻族の間のみならず、比較的文明の感化を蒙りたる中世紀に於て、否甚しきに至つては、科學全盛の今日の社會に於てすらも。尙依然として、生殖器に對する祖先遺傳の心理狀態が、吾人人類の腦裡の一隅に、潜伏して居ることを摘發し得べき例證が尠くないのである。曩に孤島生なる人あり、遼古創世の代突然別箇の太陽の出現して今まで夜なりし時刻に現はれて、地上を照らせしかば爲之晝夜の區別消滅し、諸民安眠を得る暇なく、人畜草木一として苦痛を感ぜざるものなきに至る。玆に於て、當時の豪人、勇猛の士相計つて、遂に太陽退治の大遠征を企圖するありし、肉躍り血湧く、壯烈無雙の大敍事詩の、臺灣生蕃界に傳說せらるゝことを發表し、同時に、其時代に於ける蠻族の、生殖器特に陽物に對する信仰の如何に重大なりしかを、遺憾なく披瀝せられたることがある。

(前節省略)玆に於て、後發隊は、父等に代はり、前程に向ふ程に、猶容易に目的地に達する能はず、其のうち一行亦皆漸く老ひ來り、其背負ひたりし嬰兒は、今は早や、腕力逞しき青年とはなれり、此青年は。父を輔して、前進することまた幾年にして、遂に目的地たる、天界に達し得たり、仰ぎ見れば、彼魔日の光輝は特に人を射その熱は身を焼けんばかりなり。然れども、一行爭ぞ躊躇せん弓に矢つがひ、狙を定め、満身の力を籠めて、等しく射發ちけるに、こはそも不思議、矢は正しく目ざす魔日に命中しながら、偉大なる反

絲あるのみにて、皆はね返されぬ。斯くの如く、幾度射るも、同じく其効あらざりければ、さらば今は最後の秘法ともいふべき、秘ねて用意せる鰐の陰莖を取り出し、之を矢の根に縛り付け、窃に拜し神に禱り、一念を籠めて打發ちけるに、果して其矢は、深く魔日を射貫き、血は瀧の如く迸りて、忽ちに一行中の老人等は其血に醉ふて死する者さへあり、同時に魔日の肉片は、八方に飛散りて、恰も大山の噴火に異らず少時にして、永く人界を苦めたる惡太陽は漸次其光線を失ひ、其形影のみ、淡く殘して天堂に亡せにけり。

於是、世には再び晝夜の別を生じ、萬物皆生氣に復するに至る。而して此の時此一行の射殺したる太陽こそ、これ即ち今日の月にして、その飛散りたる無數の肉片こそ、これ即ち今日の星なり、現に今、月の面に認めらるゝ黑影は其時の矢創に外ならざるなり。

父子三代の大事業なる、太陽征伐行動は、今や全く其目的を貫徹するを得たり、即ち惡太陽亡びて、萬物蘇生す、玆に至て一行皆勇（いさみ）躍りて歸途に就く。

往路は始終二箇の太陽に苦められしも、歸路は晝行き夜休み、途々蒔き置きたる、種々の穀物果樹は、穗豐かに、枝もたゆまん程に實り、糧に不足すること無し、急ぎ急ぐ程に、途次屢々白骨の累々たるに會す、是なん歸還せる翁等の途中に斃れたるなきがらの跡なりと知り皆齊しく涙を絞らぬ者こそ無かりけり。

斯くて全く故鄕なる、ヒンシパカンに歸着したりし時は、一行また既に老ひたり。さるからに故鄕にては、誰一人として一行を見識れるものなく、唯だ怪訝の狀を以て之を迎へければ、一行は今山の者を集め、太陽征伐の來歷を語り、父子三代にして、漸く此大目的を遂し得て、今日凱旋せし旨を懇諭せしかば、始て之を了合し得て其の努力と奮鬪とによりて、かゝる大事業をなし遂げたる、此等偉大なる翁等の功德を陳謝せざるものは一人もなく、子々孫々此恩德を忘れざらんことを誓ひつゝ、頌して曰く

見る ミタ　太陽 ヲゲ
見る ミタ　水 タシヤ
感謝 マラハン　太陽 ヲゲ
感謝 マラハン　水 クシヤ

即ち

日を見る毎に
水を見る毎に
吾等が祖先の
恩德を感謝す。

との意なり。次で凱旋祝の爲に、一大歡迎慰勞宴は催され、隊員は皆神の如くに尊敬せられたるこそ、道理至極のことどもなりけり。」

而して孤島生更に附註して曰く、

「熊の陰莖は彼等蕃人にとりては、熊を以て獸類の王と爲すが故に、諸獸の主たる熊の陰莖は、隨て威效最も絕倫、頗る偉力あるものと信ぜられをれり、蓋し、彼熊は、其容貌を以て、頗る威嚴あるものと見做され居ればなり。此處蕃族思想の躍如として表現せるを見るべきなり。」

又蕃族通の談に依れば、

「右の頌辭、ミタ、ワゲ、云々は、アタイヤル族中に於て、今尙最も神聖なる祈禱語として用ゐられて居るとのことである。」（臺灣日日新聞所載）

右の如き、陽根に對して森嚴なる敬崇の心念を保持するもの、豈獨り臺灣の生蕃のみならんや。これ實に創世未開蠻族の一般心理情態にして、毫も奇となすべき事柄ではない、比較的豊かに文明の恩澤を蒙りたる、東洋諸邦近時の諸民族にして、今尙依然として此種の信仰を保持するものにあるに於てをや。

「朝鮮人は、癩病に罹つたものが、男子の陰莖を食すれば、特效ありとして、自分の病氣を癒す爲に子供を惨殺することがある。尤も四五歳なる子供の陰莖は、藥效最も顯著なりと云ふからである」。（京城日報畿湖風俗（二））

と云ひ、今村鞆氏またこれを證明して

「迷信に基くものは、癩病乃肺病の重患者が、小兒の陰莖を喰ふときは全快すと信じ、欺いて小兒を連れ行き兇行を敢てするもので刑典にも明文がある、此を見れば、古よりあつたと見える」（朝鮮風俗集一四六）

と云はれた。又朝鮮人は、一般に虎の陰莖をもつて起死回生の靈藥と心得支那人の如きは、古來、膃肭臍（おつとせい）即ち海驢、海豹の陽具を以て、無上の强勢補腎劑と確信して居る。我が國に於ても、これに類する迷信ありと見え、海村栽筆人の卷に

「産後の血しぼりに、男莖を用ゆること祕事也、或罪人を誅する時外科醫ありて、官吏に乞ふて、彼等の陰莖を截り去る、別に製法ありて産後にもまた金瘡にも用ゆといへり」――

中古、婦女子の帶下（こしけ）を病む者、多く紀州名草郡蚊田の淡島又は粟島明神に詣ふで祈願をこむ、遠國にありて參詣できざるものは、明神の神符を頂きこれを煎じて飲めば病いゆと信じ、また地方の道祖の神に祈りて、病氣全快の時は一莖の小陽具を神前に獻ぐるの風習あり、而して所異なりその名を別にすと雖も、此種の神の多は男子の性を祀りし神ならざるはなし。

かれ、藤原長房は、學者を以て許され、また自ら志士を以て任ぜし人なり、而かも、彼が著す所の「さへづり草」中には「貽貝（いがひ）と松茸（まつだけ）」と題する左の如き妙論を載せたり、

「天は陽にして男也、地は陰にして女也、山は地より秀で陽也、男也海は地よりくぼまりて陰也、女也、されば父の恩は高き山にたとへ、母の愛くしみは、深き海にたとふ、人は小天地といへるまたむべ也かゝれば、山に生ずる諸の菌草は海に生ずるもろもろの貝は、(二行削除)海水かわきぬれば、貝魚産せず、女、月水とゞまれば子を生ぜず」云々。

これ實、に苟くも學問あるもの、否單に常識あるものゝ議論としても、如何にも、不思議に思はるゝ程の珍説である、精神家を以て自任するものゝ言としては、寧ろ狂氣の沙汰と極まれん程の愚論ではないか。さはさりながら翻てこれを考ふれば、これまた明に、吾人の腦裡の那邊にか、遺傳性生殖器崇拜性心理作用の存在しつゝあることを曝露したものと見做さなければならないのである。換言せば、一箇の單純なる子孫繁榮を切望する信仰は、延びて、最も無邪氣なる一種の生殖器崇拜となり、この信念は深く腦裡に銘刻せられ、古今上下を通じて、民族的遺傳性心理狀態として、その存在を持續しつゝあることを推測し得るのである。

七

泰西の文物の輸入と、科學的智識の增進とにより我が國民一般の心理狀態は、一大革變を來らし、當今は露骨にも男女の生殖器を禮拜するが如き愚民は、全くその跡を根絶せしものと想像し得べきなり。然るに、事實はそれに反して、大正聖代今尚依然として、此種の神佛の盛んに繁昌して居るのを見るとは、全く驚くべき事柄ではないか、その舊形と異なる點は、單に信者の信仰が、聊か變形して、寧ろ繁殖のみを求め、富貴を願ふことを主なる眼目となし、之と共に神佛の方でも、一層高尚なる外觀を粧はなければならない樣になつた丈である。かの近時喋々せらるゝ處の「曲線美」とは、果して何の謂であるか、何か故に、西洋美術に於ては、特更に、裸體美人の油畫、裸體男子の彫像が、他の繪畫彫刻と同樣、若くはより以上美術上の價値があるのであるか、此點について、少々極端の議論なりとはいへ或者はかやうなことを言ふて居る。

「宗教は性慾の變化なり。美術もまた性慾の變形である。曾て歐洲佛國の博物館に行くと、古代蠻人の彫刻物が陳列してある。其の内に彫刻したもので、彫刻されて居るものゝ形は、女の生殖器である、これ男子が狩に行き、一夜を家を離れた山中で明す場合焚火の側らで、退屈凌ぎの手仕事なのである。彫刻された形が、女の生殖器であるといふ事は、面白い現象で學者はこれに依つて野蠻人が

如何ともすべからざる、一夜の性的衝動を誇めたので即ち生殖のエナジーが、美術と變化したのだと言つて居る。種々なる美術や藝術もこれを解剖して見ると、皆その基礎は性慾に源を發したものでこを要するに、外形が如何に崇高であつても、凡ての藝術は、性慾の變形したものに過ぎないとは、現今多數の學者の一致する所である。宗敎も藝術と同じく、性慾の變化したものであらうか、宗敎の起源は、人類の恐怖とされて居るが、これは唯結果から推斷したもので自分は矢張性慾の變化したものだと思ふのである。」（人性の科學的研究九六頁）

かゝる議論は兎も角に、現今我が國にありては、今日の印度に行はるゝ所の、濕婆宗或はヅルガー崇拜教の如き露骨極端なる男女の精根禮拜は、第一國法これを許さず一般の民心もまたこれを避厭する樣になつたことは、既に前述の通りである。さりながら生殖器崇拜の精神は未だ尚全滅したとは云はれないのである。その精神が、立派なる衣裳の下に匿れて、依然として生殖器崇拜は實行せられつゝある。現在全國に亘つて、各地に散在する神體頗る曖昧なる、多種多樣の妖社淫祠はさて置き、此種の禮拜の最も顯著なるものは、とりもなほさず、かの歡喜天聖天樣といはねばならぬ。關西に於ては、大和河内の境上に鎭在します、生駒の歡喜天東都にありては、竹屋の渡に臨み遙に墨堤を睥睨する、今戸待乳山の聖天樣、これが我が國現今の生殖崇拜の東西兩大關である、毎年正月十五日の大祭には、兩都の隨喜熱心の信徒神前に群集し、二股大根を獻げて、冥福を禱願して居る。素より歡喜天は古來祕佛と唱へられてある、隨て渇仰の善男善女未だその本尊を知るものはない、その點よりして當今の聖天渇仰者の中には、歡喜天に向て全く方角違ひの願かけをして居るものもある樣である。然ながら、昔は歡喜天聖天とは果してどんな神樣であり、また何の目的を以て、これを信仰すべきかは、人々皆略ぼこれを意識した上で、信心して居つたかの樣に思はれる筋がある、勿論、この事を例證しうべき、文獻の徵すべきものとては皆無である、只だ僅に過去三百年、元祿の古より、近く文化政に降つて、民間に膾炙せられてあつた俗謠そのものに依て、稍これを想像しえられるのである。

「幾夜か愛にすみだ川、往來の人に、名のみ問はれて花の影、水に浮かれておもしろや、河上遠く降る雨の、晴れて逢ふ夜を待乳山逢ふて嬉しきアレ見やしやんせ、つばさ交して歸るゝ夜は、いつしか更けて水の音」

とは、これも誰も知、杵屋勝三郎の都鳥の妙句である。更に

溯つて、寛政年間より一層古く、元錄當時の長唄中には、待乳山と河内の生駒山とは、不斷男女逢引の形容詞に用ゐられて居るやうである。

「君に逢ふ夜は待乳山、手にふれて、いつしかも見ぬ紫の、ねに通ひゆく轉寢の」云々

は、元錄十六年板の長唄集「松の葉」に載せたる春日野の文句ならずや、

「宵のなさけに醉ひうかれ、河内通ひに、生駒山其高雄の若楓見んとばかりに契りつゝ」

とは同じ頃流行せしといふ長唄「小むらさき」中の一句なりその外「あだ枕」乃至手枕曰く何々、悉く同じ樣なる艶辭を以て充たされてゐるのである。

さらば更めて問はん、歡喜天聖天の御本尊とは、果して何樣なる神にましますかと、答へて云く、これ即ち印度の神樣である、その初敎は婆羅門敎の大魔神なり、後佛敎に歸依して、敎の守護神となる、此神梵語にては、その名を毘那夜迦と呼び、十萬七千の眷族を有す、彼初は佛敎に對して、魔王中最も猛烈に敎の障礙をしたものである、然るに十一面觀世音菩薩の化身によりて、後には金剛曼荼羅中金剛部の主尊となり、同時に歡喜天と呼ばれるやうになつた。學禪鈔に曰く

「魔羅、醯羅列王あり、

天野信景翁註して曰く

魔羅即ち梵語なり、譯して障魔といふ、彼俗世戀愛の神となる、國語マラ、その始は僧侶の隱語なり。

章安疏云

魔羅、秦語也、譯語、能奪命、或云惡者、又云多愛欲、陽物に此號を取りしも、一切の障害是より起る故か。

（鹽尻卷之七一）

彼專ら牛肉と大根を食ふ、國中牛少し、民、死人の肉を以て供す、死人少し、生人の肉を用ゆ、此時國中大臣人民四兵を發して、其王を害せんとす、時に王、大鬼王毘那夜迦となり、諸毘那夜迦を以て眷屬となし、空に飛むで去る、其後彼國中疾病行はる、此時大臣人民、十一面觀音を念ず、爾の時觀自在菩薩、大悲心に薫じて慈善根力を以て、化して毘那夜迦婦女身と爲り彼の歡喜王の所に往く、彼王婦女を見て、慾心熾盛、彼の毘那夜迦女に觸れんと欲し、其身を抱く、時に障々形、之を受くるを肯ぜず、彼王即ち愛て敎を作す、是に於て、彼女曰く、我障女に似たりと雖も、昔より以來、能く佛敎を受け、袈裟を得汝若し實我か身に觸れんと欲せば我敎に隨ふべし、即ち我の如く、盡未來世に至つて、能く護法を爲すや否や又我

に從つて、諸行人を護りて障礙をなすこと莫きや否や、又我に依りて、已後(いご)、毒心を作すこと莫きや否や、汝是の如うに我を受けば、親友と爲らん、時に、毘那夜迦の言く、我縁に依て、今汝等に随ふ(また)今より已後、汝等の語るに随ひて、佛法を守護せん、乃ち毘那夜迦女、笑を含むで、相抱く、時に、王歡喜を作す。（密教字彙の譯文に據ふ）

歡喜天聖天一名を象鼻天と云ふ、象頭權現のことなり、その本尊は、人體にして、その頭は象形なり。使咒經に曰く、

「其頭は象にして、體は人間、夫婦二身相向ひ之を抱かしめて、ち、左手に大根を取り、右手に歡喜團を持つ」（第五圖參照）

と、卽之、待乳山の聖天竝に生駒の正體なり、而して、本論卷頭に揭ぐる處の、奉天喇嘛寺の陰陽佛と異形同性の佛である



（第五圖）聖天樣の正體

のである。さる程に、我邦に於ても、生殖器崇拜の風習は、その本源を遠き古に發し降つて大正の聖代未だ尙絶滅するに至らないことが判る。

何事にも注意した、明治初代の政府は、この惡風を撲滅せんことを欲して、猛烈なる布令を出したことがある、明治五年三月發布太政官布令に曰く、

「從來遊女屋其外客宿等ニ祭リアル金精明神儀風俗ニ害アルヲ以テ自今早ク取捨テ踏潰スヘシ」

而して金精明神なるものにつきて、和訓栞に曰く、

「コンセ樣とはさいのかみのことなり、さいの神は幸の神と書く、男女を幸し、婚を結ぶ神なり」

と、然れども、右大政官御布令の云ふ處の金精明神なるものは、聊かその趣を異にし、確にこれ一箇の物件を指すのであ

る。「取捨テ踏ミ潰スヘシ」なる辭句よりしても略ぼその物件が想像できるのである。即ちこの金精明神は、丁度起上り小法師風に出來た、金箔塗りの張子の陽物のことであることが判る。此物件、比較的近年までは、毎年正月、地方の歳德神、川崎大師の縁日、また關西にありては二月初午伏見稲荷、舊暦正月、大阪難波の十日戎に於いて、恰も酉の市の熊手同様、年々歳々次第に大形のものを購め來つて、これを神棚に陳列し、彼等所謂水商賣を營むものゝ間に於て、縁起を祝ふたからである。

「正月十日大阪南今宮村戎社詣あり此日を俗に十日恵美須と云ふ……社頭には生鮭と小寳を專らとし其他米差取　鉢木　槌　及小兒の弄物の金箔烏帽子等前に恒例の賣物として恐ぬき製の陰莖に金箔をおき或は辨がら塗の物を賣る」云々（守貞漫稿下之卷二十三篇）

更に最近の報道に依れば、飛驒の國の如き今日尚比較的文明の風潮に浴することの尠い偏境にありては、金精明神は依然その舊形を維持して尚勢力を保留して居るやうである。

「靈屋の金精様は、飛驒國、吉城郡坂下村、字靈屋といふ別天地にある、最下段に十一面觀世音中段に金精祠、上段に村社御嶽神社がある、金精の本體は、巨大なる石棒で、實は赤色の石より成り、鍔を有して、一見男莖に類するので古來金精様と名付けられたのだが惜むらくは中央以下折損して居る。其外古石塔婆の缺けたのや、自然の男莖形の石など雜居してござる、さて余の實見した時も蠟燭に火を點じてあつた、是は一年中一日たりとも、缺く事が無いくらゐに信心者から奉納するので、越中能登邊から遥ばる參詣するものがあるさうである。」（飛驒文壇第一卷四號李坪道人稿）

さて以上詳論する處によつて、此最も奇怪なる生殖器崇拜の風習は古今の世界各民族を通じて、各時代各種族に播布せられてあつたことを證據立て得て餘す處ないと思ふのである。只殘す處は、抑も何が故に、かゝる奇風は、かくまで大勢力を以て全民族の間に普及するに至つたかの一問題である。

現今の印度の生殖器崇拜教徒は「陰陽兩性の交合を以て理智妙合の奥儀となし、涅槃の理想境」（今月の印度二三二頁）として、何等の恥づる所なく、最も眞面目に、頗る熱き信仰を以て全く宗教的にこれを崇拜して居る。而して女陰崇拜の情況につきては、印度宗教實見記の著者これを描寫して曰く、

「此等の祕密的儀式は、稍獸的行爲に近くこれを考ふる丈にても身震ひがする程にて、從てその情況を詳細に說き明すことは、到底不可能なるのみならず、敢てこれを說述せんと欲せば、必ずや道德制裁の範圍を超え直に法律に觸るゝ恐れが有る程であるから、玆には、その儀式なるものは、單に彼徒は、その目的を遂行せん爲に、婦女子を使用し、男女兩性間に存する、不潔醜汚のあらゆる形式を表示して。その式典を行ふこととなることを云ひ置かば充分なり　さりながら彼徒は、普通當人ならば、殆ど滑稽、否寧ろ不倫の甚しきものと

しい、飾めざるを得ざる式典を實行するに當て、可笑極まる甚猥褻なる態度を以て、これを行ふことである、蓋し、此等の男女両性の合體を崇拜する信徒に取りては、かゝることを以て、最も神聖にして、毫も悖德の行爲にあらずとの、確き信仰を有することにして此一點はまた識者の最も注意する事柄である」

と而して、吾人の將に言はんと欲する處は、畢竟かゝる奇怪なる崇拜風習の、因て以て起る所は、太古未だ開けず、金錢財寶以て富となさゞる日、民皆專ら子孫の繁殖增加を禱願した、その狀殆も今日の阿非利内地の蠻族の如し、而して、同じ子孫を授かるならば、一層立派なる、一倍健全なる、彼等が理想的の男女佛に肖らんことを切望した、その希望の熱心が熱して、遂には生殖の本源と見做すべき機關そのものを尊崇するやうになるのである。

それと同時に人口未だ稀薄、四面に强敵を控へ甚だ不完全なる武器を採つて、巨獸大蛇に拮抗せざるべからざる創世の社會にありては、偶まその内に一人の死亡者を出すあれば、これかれらに取りてゆゝしき一大事であり、また社會上容易ならざる大損害であつた。此點よりして、死といふ觀念はたえず生殖といふ聯想を呼起さしめ凡そ有力なる社會を構成せんと欲せば、[illegible]々益人口の增殖を計らねばならないといふ考を起さしむるやうになるのである、この觀念が太古の埃及人が棺桶を新郎新婦の前に置て、結婚の式典を擧ぐるやうな風俗を生ぜしめ、昔の希臘人か石棺の周圍に春畫を彫刻し、これを以てその父兄をるやうな慣習となり。

「支那の上古にも、柩の四方に、蛤の殼を塡み是へ人物を畫き置きしとなり。古きより漢人の畫きし蛤を掘り出せしこと、略史にも見ゆ其畫皆春情ありとぞ」（畫譚雞肋）

「漢代の塚を發けば、墼磚、甃甓俱に、男女私褻の狀を繪くあり」（景德鎭陶錄卷之五）

かくの如くにして、人口增殖の熱望は、男子に割禮を施し、またタルボートの「創世民族間の婦人の秘密」に記されたる如き、女兒の成人を急ぐ典禮が案出せられ、古の天竺の、如意足行と名づくる、處女穿孔式の如きものも生れ、またプンサヴアナと呼ぶ子種授與式の如き奇怪なる典禮も産れて來るのである。而して此 Mors janua vita の教理が今日、男根と骸骨とを以て代表されてある、大自在天濕婆明王を信仰するやうになつたのである。而かもこの先天的心理狀態が、知らず識らずの間に年と共に、民族的一箇の遺傳性となり、其終局に本論の如き生殖器崇拜教が濫觴されたのである、而して度々繰返すが如く、その信仰の間には、寸毫の卑猥不潔の概念の挿まれて居らないことが結論しえられるのである。（完）



露國の女子國有と性的戀愛

醫學博士　羽太鋭治

露西亞の過激派が『女子國有』を敢てしたと云ふ電報が、幾度か新聞に掲載された。

近頃の新聞にも、次の様な電報が載つて居た。ウランゲル軍將軍司令部附デーリーテレグラフ通信員はオデッサに於ける過激派の恐る可き殘虐なる行爲を報じたり、是けデニキン軍の一將校の語る所にして彼は其妻女及び義妹が國有とせらるべきを聞き兩者と共に無蓋のボートに乗りて逃れたるなり、彼等の友人なる幾多の少女は取押へられて國有となりて支那の戰線に送られたり、此の婦人國有は猶太人の手先に依りて秩序的に行はる、而して毎月若干の週間を定めて其週間を自由戀愛週として其筋より布告すと云へりと。

斯うした事柄が果して實行されて居るか何うかは頗る疑はしいが、併し婦人國有と云ふ事が過激派の一部の人の間に唱へられて居るのは事實であると信ぜられる。

二三ヶ月前にも、又先月も既に他の雑誌に飜譯されて掲げられたが、過激派の一婦人の手に成る『女子社會有法案』と云ふものを見ると、左の通りである。

一、十八歳以下の總ての女子は、地方保安委員に依つて完全なる體役免除を保證せらる。

二、十八歳以下の少女の面前に於て猥褻の言語を使用し、或は彼女を犯さんとする者は、革命的正義に依つて嚴罰に處せらる。

三、十八歳以下の少女を犯す者は國事犯人と目し、若し其の被害者と結婚せざるに於いては二十年の懲役に處す、

四、被害女子は本人の希望に依り、加害者と結婚せざるの自由を有す

五、十八歳以上の總ての女子は國有財産となす。

六、既に十八歳に達して未だ結婚せざる總ての女子は、保安委員會中●自由戀愛局に登録せらるべきも●とす。

七、自由戀愛局に登錄されたる者は十九歲以上五十歲以下の男子市民中より夫を選定すべき權利を有す。（此場合男子の承諾を要せず、又その選定されたる男子の妻は之に對して異議を申立つるを得ず。）

八、自由戀愛局に所屬して、選定自由男子同盟（？）なる者を常設すべし、

九、男子も亦十八歲以上の女子の中より妻を選定すべき權利を有す。

十、夫及び妻の選定は一月一回に限り許可せらるゝものとす。

十一、自由戀愛局は自治體なるべし。

十二、十九歲以上五十歲以下の男子は登錄されたる女子の中より、國家の利益の爲め、其の女子の同意を得ずして妻を選定するの權利を有す。

十三、斯く結婚より生じたる子供は國家の所有に移さる。

（國務委員會は此の提案に依り、出來得る限り詳密なる法律を作成すべく斯くて古來の背德たる賣淫と惡德とを一掃すべし。）

それから、ソビエツト政府は從來の結婚制度を破壞したと傳へられて居る。そして果して斯ういふ法令が行はれて居るか何うか知らないが、次に抄錄する樣な法令が公布されたと傳へられて居る。

一、十七歲以上三十二歲以下の女子を所有する權利を廢止す。

二、女子の年齡は出產證、旅券、若しくは證人の證言に依つて決定せらる。若しそれらの文書なき場合は、其の容貌に依り委員會之を決定す。

三、本會は五人の子供を有する女子に適用せず。

十四、本會に依つて國有財產と爲されたる總ての女子は一ケ月二十三ポンドの手當を受く。

十五、妊娠せる總ての女子は產前三ケ月、產後一ケ月公共勤務より免除せらる。

十六、生兒は一ケ月後より教育所に移され、十七歲に至るまで公費を以て教育せらる。

十七、惡疾傳播の罪を犯したる者は嚴罰に處せらる。

十八、健康を傷ひたる女子はソビエツトに訴へて年金を受くることを得。

十九、本會を承認し及び支持せざる者は人民の敵として、反無政府主義の敵として其の責を負はさるべし。

古代フエニシヤに於ては、國家が女子を所有し一定の年齡に達したものを美人と醜婦に分ち、美醜共に又是れを幾つかの等級に分ち、美人は是れを富める者に賣り、醜婦には持參金を附與して貧しき者に嫁せしめた、それが貧富の懸隔を甚だしから

しめざる爲めの一種の社會政策であつたらうが、此の場合に富めるものが美人を購つたり、又貧しき者が持參金附の嫁を覗つたりすることをも、過激派流に云へば自由戀愛と云ふ事が出來るであらう。

併し金錢を以て購はれたり、撰定された女子の自由意志を束縛したりするものは、決して自由戀愛と云ふものではない。

ナポレオン法典には『女子は子を生まんが爲めに男子に與へられたものである、女子は男子の財產である、男子は女子の財產ではない。女子は男子に子を與へるが、男子は女子に子を與へない丁度樹木が庭師の財產である樣に、女子は男子の財產である。』と云ふ樣な事が書いてある。

斯うした思想は單にナポレオン法典の中にばかり書き現はされて居るのではない。古代希臘の法律に據ると、女は男子に服從すべきものである事が規定されて居る。希臘殊にアテン人に於ける女の實際生活を見るならば、女子には些の自由と云ふものがなく誠に憫然なものであつた。即ち上流社會の女子は家庭にのみ引籠り、女同志でのみ交際する事が許されて居たが、他の男子と交際することは毫も許されて居ない。で、女子の室は二階又は家內の奧深くに在り、主人以外の男子は假令何人でも女子の室に入る事を禁ぜられ、若し男子の來客があれば、女子は皆な居室に隱れ、決して他家の男子に顏を見せなかつた。外出するに際しても女子は決して獨りで外出する事がない、必ず女奴隷を伴に連れねばならず、其の居室に在つても、尙ほ必ず嚴重に監督され警衞されて居た。

女子はこんな風であつたが、アテンの男子は何うであつたかと云ふに、上流の男は數人の妾を蓄へ、又藝妓（ヘテーレー）に狎れ睦みなどして戯れて居つたもので、女子は啻男子の所有する玩弄物に過ぎなかつた。

羅馬法にも良人は自己の權內に於て、妻に對する生殺與奪の自由を持つて居つた。羅馬人も女子を男子の玩弄物と心得、夫は妻の所有主であつて、女子は獨立の意志を有せざる者と云ふ思想を以つて、女子を束縛して居た。

斯う云ふ思想は洋の東西を問はず瀰漫して居たもので、女子は徹頭徹尾性慾の對象として、物品扱ひにされて居るに過ぎなかつた。それで女子を他人に贈與した例も決して乏しくはない

支那の歷史を繙くと、歷代帝王の興る每に、功臣に女を賜ふて其の勞を慰めた例が極めて多い。西洋でも斯る例は少なくない。我が國では何うであらうか、少しくそれを調べ て見やう。

彼の源三位頼政が、怪獣を射止めた恩賞として、帝より二人の美女を賜つたことや、新田義貞が、後醍醐天皇より勾當內侍を賜つたことや、又後村上天皇が楠正行に勅して、辨內侍を賜らんとしたことなどは其の二三の例であつて、尙ほ此の外にも數多くの例がある。

永い間男子に屈服して來た女子も、遂に永い夢から醒める時が來た。

近世主義の第一人者ルーソーが、『民約論』の卷頭に『人は生れ落つるや自由である、而かも到るところ鐵鎖につながれて居る』と筆を起して、彼の理想とせる社會制度を描いたものや、彼の教育觀――自然に歸れと云ふ主張の上に立つ教育主義――を力說したところの『エミール』を手にして婦人の自覺を叫んだものは、或は宮廷生活に依り、或は又サロン生活に依つて時の文士若しくは哲學者と交はり、時代思想に觸れて其の思想を擴大しつゝあつた一部の佛蘭西婦人であつた。

佛蘭西革命時代に巴里に在つた一英國婦人が、『人類の一半が如何に教育され、如何に自由にされても、他の一半の不自由、無教育では何とも仕樣がない』と、婦人の權利の擁護の爲めに痛烈なる叫びをなしたのは、これが英國に於ける近世婦人運動の第一聲であつた。

佛蘭西革命の思想は自由、平等、博愛に胚胎して居る。併しルーソーにしても女子も亦男子と平等なものとはして居つかつた。否女子は男子に對して從屬的位置にあるものと說かれた。それが『民約論』や『エミール』を手にした女性に依つて女權の擴張が絕叫され、幾人かの女權論者が血をさへ流すに至つた女權運動が可なり行はるゝ樣になつた時、イブセンやズーデルマンの作品は是れ等近代に於ける婦人の自覺に强烈な刺戟を與へた。

イブセンの『人形の家』は、當時の人々の頭腦に如何に强烈な刺戟を與へた事であらう。

『人形の家』のノラの解放の宣言、それは從來の女は人格なき一個の物品として男から取扱はれ、性的奴隷として無自覺な生活を送つて居たのから醒めて、『妻であり母である』ことをも擲つて、『何よりも第一に人間になる』と放言する程、自分は一個の人格を有する人間であることを自覺したのである。從來の女は妻たることを婦人第一の務めとして來たのであるが、醒めたるノラはそれを第二となして先づ人間たることを第一に心掛けやうとした。そして人間たることの上に於て男性と女性とが

差別的に待遇さるゝことを拒絕しやうとしたのである。

斯樣に女子が一個の人間としての權利を獲得しやうとし、男子と女子とを意識的に差別的に待遇さるゝことを拒絕し、そして平等の權利を享けて自由に人生を享樂して行かうとする、男女對立の理想、兩性の機會均等の理想を實現しようとする熱望から、女性のある者は其個人性があまり發展し過ぎて、『美しき女性の影』をさへ消滅して了ふことが生じた。

『ヘツダ・カブレル』などを見れば、個人性が女性の美しさを壓倒した婦人の有樣が、まざ〳〵と目の前に浮んで來る。ヘツダが結婚後に於て、其の良人の姓を名乘ることのなかつたのはまだしも、懷姙したのにたゞ氣がむしやくしやして、父の遺愛のピストルを的もなく發射したりして悶えて居る。

斯うした覺醒した、婦人の悲劇に就て、エレン・ケイは、多くの醒めたる婦人は人の妻乃至人の母たることを拒まうとすることを痛嘆し、『過去に於ては男子はその惱みとその疲勞、その失望とを醫すべく、その愛する女のもとに到り、清く澄んで居る波の中に入つた樣にそれ等のものを洗ひ去り、靜寂な森の中に入つた樣にそこに平和を見出したものであつた。併し今日では女子は却つて惱みと疲勞と失望とを以つて男子を迎へる。』と云ひ、そしてエレン・ケイは性的道德の中心は戀愛であることを說いて居る。

古い時代に於いてはプラトーンの如き、又近代に至つてはショペンハウエルやトルストイの如きは、性的戀愛をば男女が結合的關係に對する欲望、即ち色慾と解釋して居た。

併し性的戀愛は、是等の人の說く樣な色慾そのものばかりではない。それは十九世紀に入つてから、靈肉一致の性的戀愛を求める聲が非常に高まつて來て、カアペンターの如きは、戀愛は肉體、精神、情緒及び心靈上のあらゆる人性の複合體であるといふて居るが、カアペンターよりももつと明瞭に且つ徹底的に性的戀愛の新意義を闡明したものはエレン・ケイである。

ケイ女史は、性的戀愛は靈肉一致のものであつて、單に人間が新らしい人間を生み出す衝動の謂ではない。即ちショペンハウエルなどが考へた樣に、種族保存の本能の發現とばかり見る事が出來ない。これに依つて己れの自我を向上させることにより、其の間に生れて來る小兒の生命——從つて種族の生命——を向上させるものである。そして斯る人格的な肉的な戀愛の最高典型は、道德的にも智識的にも、同じ平行線にある男女の間にのみ、存立し得るもので、かゝる男女が互に自己を完成する

爲めに、愛し合ふ狀態であるとなし、そこに戀愛の自由を設いて居る。

こゝで話題が逆轉して、女子國有と所謂共の自由戀愛週間なるものに戻る。

古い時代から女子は男子の所有する玩弄物であると見られたが、それが個人の所有であつても、又國有であつても、自由意志を毫も顧みないものに、自由戀愛なるものゝあらう筈がないジョージ・サンドが從來の結婚に對して、『法律に依つて許されたる凌辱』であり、また『神への誓約に依る賣淫である』といふて居るが、若し過激派が自由戀愛週間なるものを實行して居るならば、それは公認せる賣淫であると云ふを妨げない。

イプセンの『海の夫人』は戀愛の自由に就て鮮かな問題を投げ掛けて居る。

こゝに其の梗概を述ぶれば、那威海岸のさる町に住むヴァングルといふ醫師の妻エリーダ、これが即ち女主人公で、非常に海を愛し海に慣れ、毎日海に浴するのを唯一の樂みにして居る。彼女は燈臺守の娘で、其昔或る海員と婚約をした、その海員が世界の隅々から手紙をよこして、還つて行くから待つて居て呉れと云ふ、[illegible]を申込んだがそんな事は[illegible]受付けないで、還るから待つて居て呉れとばかり云つてよこす。

エリーダはヴァングルの許にかたづいては來たが、それは後妻としてゞあつて、殊には自分も餘り年の違はぬ娘さへある爲めヴァングルには眞の愛情を捧げるには距りがあつた。其の上彼の海員の事を考へると何となく濟まぬ樣な氣がして、何となしに心は其の男の方にのみ引きつけられて居るのを感ずる。それで氣が鬱して健康もすぐれない。ヴァングルはいろ〳〵にいたはつて呉れるが、エリーダに取つては彼の男の遠くからの誘惑から脫して、平和の家庭を樂しむ事は何うしても出來ないのである

或る日、還つて行くと云つた海員は遂に還つて來た。そしてエリーダを連れに來た。エリーダはヴァングルを振捨てゝ去らうとする。

エリーダはヴァングルに『私達は今迄嘘を言ひ合つて居たのだ一緒になつたのは二人の不幸であつた。あなたは私を買つたのだ。私はあなたに買はれて來たのだ。』と云つて、ヴァングルは直ちに彼女の心を諒解して、『私は此場で今迄の取引を帳消にする。今こそお前の自分の行くべき道を選ぶがいゝ、十分にお前の自由を以て選ぶがいゝ』と云つた。エリーダは餘りに潔いヴァングルの言葉に驚いて、『ほんとうにさう仰有るの。』と聞いた

『ほんとうだ、是れ程深くお前を愛して居るのだもの』とヴングルは云ふた。そして更に『お前は今こそ全く私の繋累から自由になつた。お前のほんとうの生涯が正しい道に戻るのは今だ今こそお前は自分の行くべき道を、自由に選擇するがいゝ、そして自分で責任を負ひなさい』と言葉を加へた。

エリーダはヴングルを見詰めて『自由に――そして自分の責任？　責任もですか？』、それで何もかもがらりと變つて了ひます』此時汽船の鈴が鳴る、海員は早くゝゝと急き立てる、が、エリーダの心機は一轉した。エリーダは海員に向つて嚴然たる調子ではつきりと云ふた。『斯うなつた以上、もうあなたの方へは行きません』。海員は『私の意志よりも強いものがこゝに在る』と嘆息して失望して去つて了ふ。

エリーダは愛を感じて居ない良人を捨てゝ、昔の戀人の許に走らうとした瞬間、自由と責任とを與へられて、良人に對して今迄更に感じなかつた熱愛を感じたのである。海に憬れたエリーダ、自由に憬れたエリーダ。彼女は海を與へられ自由を與へられた。解放されたのである。解放された以上責任も亦其身にかゝつて來る。他からの束縛から脫すると同時に自制的な道德が内から發する。今新らしくエリーダをヴングルの腕に投ぜしめたのは、この内發的な道德、眞の愛である。

自由戀愛は無拘束な眞の愛より生ずるものである。撰まれたものに肉體を提供すべき義務を強制する所に、自由戀愛なるものがあらう筈がない。性慾の對象として個人の所有である如く女性を解する所にも自由戀愛は見られないが、生殖作用の爲めに女子を國有とする所にも自由戀愛は見られない。

しかも、それが猶太人の手先に依りて秩序的に行はれて居ると傳へられて居るのは、誠に皮肉である。

國家を失つた猶太人が、これまで異教徒の手に依つて幾多の殘虐の犧牲に供せられた。それが今國家組織の支離滅裂した露西亞の可憐なる少女を殘虐な犧牲に供せんとして居るのは、彼等に取つて永い間の復讐だとして居るかとも窺はれて、そこに民族と民族の反目が怖しく描き出される。殊に猶太人の民族的見解は、他の民族に迫害され辱められて來ただけに他の民族との反目が激しく、ともすれば他の民族との間に流血の慘事を演ずる。今果して過激派の女子國有が猶太人の手先に於て行はれて居るか何うか知らないが、只そう傳へられたゞけでも深い皮肉を感ずる。



今日は帝劇、明日は三越

＝近視・遠視・斜視・亂視（三）＝

元祖・日本一のユウモリスト　貝塚澁六

一

「今日は帝劇、明日は三越。」私は此の定文句を職業的に實行して見るほど、それほど幸福なユウモリストである。ユウモリストとは馬鹿の異名である。幸福なとはお目出たいといふ事を意味する。

何は然れ私は白いエプロンの女給さんに案内されて、午後の五時頃、薄暗い一等席の、「ぬ」の廿二といふ金四圓の椅子に腰かけた。正面の舞臺はパツト明るい。芝居はもう始まつてゐた「……入りにし人のあとぞ戀しき」と美しい靜御前が、赤い欄干などのある、鶴が岡八幡の舞殿で舞つてゐる。琴だか、三味だか、鼓だか知らないが、兎にかく好い音色の音樂が聞えてゐる私は先づ之で夢の世界に入つた。

然しどうも困つた事には、床几に腰かけた立烏帽子の頼朝將軍が少々薄ノロに見えて仕方がない。其の側に坐つてゐる御臺政子の前も、之では後に迚も尼將軍などいふエライ後家さんになれそうな人物とは受取れない。白衣に緋の袴をはいて色々のウチケカを着た下げ髮の女中さん達は只だ奇麗でいゝが、梶原畠山、其他の諸大名は如何にも安つぽい木つ葉武者のお揃ひだ。

舞が終ると、御臺が何やら平凡な執成しの諫言をする。大名

達も何やら一向引立たない口上で意見を言上する。「然らば成敗許すであらう」と薄ノロ將軍が間の抜けた裁斷を下すが、それでも靜は有りがたいと見えて平伏して御禮を申上げる。

番附を見ると、靜は初瀨浪子君の役で、此の場では一番精彩を發揮してゐるが、何だか只だ、花やかな髪飾りと綺羅びやかな衣裳との間に、鮮かな眉墨のある眞白な顔が美しいばかりで、敢て將軍の前に於いて飽くまで義經を慕ふといふ、凛とした白拍子振がサッパリ見えない。私の入つた夢の世界は餘んまり香ばしいものではなかつた。

舞臺が廻ると、今度は杉の木立に花盛りの櫻が一本交つてゐるといふ好い景色で、そこに將軍夫婦が大勢の武士や女中を連れて出て來る。御下向と相見える。御臺の絹笠やカツキや、女中達の色々のウチキや、其外、太刀持の可愛らしい小姓や、薙刀を持つた厳めしい警固の侍士や。口さへきかねば皆な難がなくて、賑かで奇麗でケバケバしくていゝ。總て役者は口をきかずに只だ奇麗に着かざり、そして見物は頭を働かせずに只だ目ばかりで見てゐたなら、嘸かし芝居といふものは面白いだらう。

そこに出て來る墨染の西行法師は、赤い顔に目の光つてゐる所が少し外のへボとは違ふ。さすがに守田勘彌君だ。

頼朝公の一行が西行を連れて花道にはいつてしまふと、あとは梶原景茂が、命乞を恩に着せて靜を口說く場面になる。「判官殿にまみえてより」と氣焰を吐いた筈の靜もサッパリ振はず、「報いのほどを覺えて居れ」と捨ぜりふの梶原も安つぽいこと此上なし、そこで「國勢調査」の廣告の幕がおりた。

二

「好かつたわねえ」といふ、少し甘えた聲が直ぐ私の前に聞えた。先程から折々私の視線の邪魔になつてゐた束髪の持主が即ち其の發聲者であつた。あれでも「好かつた」のかなアと少し憫然に思ひながら、其のお姿をよくよく見卒ると、何がさて堂々たる御拵へらしく、羽織は何か知らぬが蔦の紋が鮮かに白く、それを中心にして柔らかな二條の線が右左の兩肩に流れ、其の頂上には袷の小紋に半襟の藤紫が輕く重なりあつて如何にも恰好のいゝ複雜な二重の曲線を作り、其の二重の曲線の廓の中から眞白い襟足の抜け出てゐる所が、誠に寸分の申分もない（と御本人の自信された）當世風の奥様と御見受けした。只だ其の少し流行おくれの大束髪を、二割方乃至三割方壓迫するか、

君しくばイッソのこと、それを平べちやに押しつぶして七分三分に掻き分ける所まで進化させるかの必要を忠告する、親切な友人のないのが少し不思議に感じられた。

「出ませうか」「ウム」といふ會話の結果として、其の奥樣及び其ハスが立上つたのを見ると驚いた。奥樣は確かに五尺二寸タップリといふ背恰好だが、ハスは之に反し、五尺の男子と號するには餘ほど骨の折れる、而も痩せぎすの小兵である。

私は此の兩君のあとについて廊下に出た。廊下には勿論多數の貴女紳士が悠々として歩みを運んでゐる。其の間には藝奴もゐる、半玉もゐる、學生もゐる、小商人もゐるが、また其外、存外田舍者らしい風采の男女も少なからずゐる。マーブルの大圓柱を撫でまはして見たり、澁澤さんの半身像を物珍らしげに打眺めたり、敷物の柔かい足ざわりを態と草履でこすつてためして見たりしてゐる人達もある。

大束髪の奥樣は少し疲勞を覺えたといふ樣子で、廊下につゞく正面のホールのオットマンに腰かけた。讀者諸君の中にはオットマンなる者を御存知ない平民もあるだらう。抑々オットマンとは、土耳其風の椅子で、日本語に圓臺椅子とも譯し、(私は何分にも博識なものだから、ツイ講釋をする癖があつて困るのですが)そもそも此オットマンの構造を云へば、數個の椅子を背中合せにして縛り合せたといふ形で、勿論全部やわらかな絨物で包んであつて、腰掛の處はバネ入りでフウワリとなつてゐる。

扨奥樣は其オットマンのフウワリの上にユサリと腰かけて、フエルトの草履の足先を輕く組合せて、大束髪が後ろのモタレにさわらぬ程度に於いて、少し斜めに全身をもたせかけ、「あなた、あなた」と、ハス君をも其の隣りに掛けさせようとした。然しハス君は掛けなかつた。彼は暫くでも其の細君を下瞰するの地位に立つ事を喜ぶ者の如く見えてゐた。彼は瀟洒たる白茶色の脊廣服を着て、輕快な身のこなしを以て金口のシガレットに火を點じた。彼は確かに好男子である。チヤプリン髭の口元に絶えず愛嬌が浮かんでゐる。少しチヨカチヨカするといふ批難は免かれないかも知れぬが、當世才子として、相當の働き者として、優にあの大束髪を支持するの腕前を有する事は寸毫の疑ひもない。

「オあなた、お辨當の注文しておいて下さいな。東洋軒が好いわ。」奥樣はハス君に命令した。ハス君は早速心得てチヨカチヨカと彼方に行つた。

三

二幕目は先づ頼朝公が西行を呼んで歌物語をする處。西行の白い目が凄味を帶びて光るのが少し好い丈の事。其の舞台が廻ると、醉ひどれの漁師が女房を困らせ、子供を泣かせてゐる。そこに西行が出て來て、先刻頼朝から貰つた銀の猫を「晩の酒のしろにせよ」と無雜作に呉れてやる。

「それにしても武門の行末、如何なる物を得ようとするのか」といふ、新らしがつた西行の獨白で幕になるが、其の新らしさがチツトも身にしみなかつた。それでも奥樣は矢張り感嘆の溜息をつきながしてゐた。

「あれ何でせうねえ」と、奥樣は今おりた幕を眺めながらハスに聞いた。「天使さ。エンゼルさ、樂器を持つて星の中を踊つてるんぢやないか。サ行かう食事に。」

「幕間廿分」の札が掛つてゐる。見物は大抵みな席を立つた。私も又兩君のあとについて行つた。

一階北側の食堂が奥樣のお好みの東洋軒である。秋草を畫いた二個の大提灯が柔かな明るい光を放つてゐる。兩君は自分達の名札のある丸いテーブルを見つけてそこに陣取つた。八十錢の日本料理のお辨當がチャンと兩君を待受けてゐた。

「隨分こゝのもまづくなつたわねえ」と、奥樣は吸物を一口なめたばかりで下に置いた。「そりやねえ、一と頃のようぢや無いさ。でも、此の芋なんかチョット旨いよ。食べて御覽」と、ハス君は執成しがほに云つた。

「あなた飲み物は？ビールでもそういゝませうか。」「ナニ、後に外で飲むよ。」「そう？」「其の方が好いよ。」「そう？ちやそうなさい。」こんなお睦まじい會話の中にお辨當が濟んだ頃、幕明の知らせのベルが氣ぜわしく鳴りだすと、そこの食卓も、こゝの食卓も、皆ドヤドヤと立つて行く。我が白茶服の紳士も又少しチョカチョカ癖を發揮して、背の高い細君を仰向きがちに顧み顧み出て行つた。

四

「少しダレたわねえ」と三幕目の終りにはさしも感服屋の奥樣も聊か不滿の意を漏したほど、それほど三幕目はまづかつた。兩君は此の幕間を費すべく二階に上つて行つた。私も同じく其あとについて行つた。

奥樣は先づ白牡丹の店を大ぶん念入りに御覽ある。ハス君は

其の間に喫煙室に行つて、誰やら知合の人と出會つて、輕快な調子で話しながら例の金口をくゆらした。「御同伴ですね」と、向ふの紳士が少し横目を白牡丹の方に使ひながら云ふと、「イヤ寧ろ御隨伴といふ仕合せです、ハツハ、ハツハ」と小い體に不似合な大きな聲で我がハス君は笑つた。

やがて兩君は廊下正面の中央亭バアの前に暫く立たずんで、バアのうしろの大食堂をチラと覗いてゐた。「あそこに居ますよ、あそこに。ソラ西洋人の隣に」と奥様は少し身をからめてハス君に寄りそつた。

兩手をポケツトに突つこんで、小さな體を威勢よく踏んばつてゐたハス君は、急に其の愛嬌のある口元を少し尖らせて、「オあれか。そうだ。然しあの男は何だらう。お前知つてるか。」「いゝえ、知らないわ。誰でせうねえ。」「變だなア。」變ですねえ」「行つて聞いて見るか。」「馬鹿おつしやいよ。」「だつておかしいぢやあないか。」「ほんとにおかしいわ。」

何が變で何がおかしいのか私には勿論分りようが無かつたが兩君も結局分らないものとアキラメをつけたと見えて、おもむろに歩みを北側に移して、奥様は御婦人用便所、ハス君は男子用便所に入つた。便所の中まで御供をするわけにも行かないので私は暫く兩君に別れて三階見物と出かけた。

私は三階が好だ。三階はこゝの平民階級だ。花月の大食堂は別として、壽司がある、汁粉がある、蕎麥がある、おまけに接待の麥湯もある。麥湯を一杯御地走になつて、その前の欄干にもたれると、直ぐ直下に二階のバアを見おろす事になつてゐる。上から見るとバアの光景は一層奇麗だ。大ランプの硝子すだれは水のやうに輝いてゐる。四方の圓柱に取りつけたトーチ形のランプは赤い光を放つてゐる。其外種々樣々の電燈の光が亂れあつて、全く此の空間を晝のように明るくしてゐる。バアの上には、左手に薄赤いイチゴソーダ水の入つた、綺麗な大きな硝子壜がある、右手にコヒーと菓子とがある。丁度今、一人の背廣の紳士はまじめくさつて、長い麥藁で其ソーダ水を熱心に吸つてゐる。コヒーの方には七八人の男女が群がつて、中にフロツクコートの白頭紳士と、丸髷紋付の老婦人とが、如何にも其の場所柄に不似合なので目立つてゐる。よく見てゐると、例の兩君も其の群の中に交つてゐる。大束髮の傍らに小兵の白茶服が立ちはだかつて、少々氣障な姿勢で以てコーヒ茶碗を右手に持つてゐる。大束髮の背面が折々少し搖れて見えるのは、今や奥様カステラの一片を召上り最中らしい。

それから私は三階の見物席にはいつて見た。天下の大勢を察せんと欲せば高處に登臨するが一番だ。三階席から一階席を見おろすと、今は幕間で半ば空になつてゐる其の一階席の全面が餘ほど遠い處のように、狹く小さく見えてゐる。一口に三階席と云つても、其中が又、尻上りに五段階を成してゐるが、其の最も後ろの最も高い處に登つて見ると、もう餘ほど天井が近くなる。帝劇の裝飾中、最も評判の高いのはマーブルの大圓柱と意匠構造の精妙を極めた天井とだと聞いてゐるが、其の天井の美觀壯觀を熟視する爲には、是非とも三階の見物人となる必要がある。其の意味に於いても私は三階が好だ。

尤も、三階の上にまだ四階がある。四階は入口からして全く別で、一切他の諸階と交通を遮斷されてゐる特殊階級だが、苟くも天井研究に志ある人士は須らく四階の見物人となるべきである。私は數年前、久しぶりで地方から上京して來た友人輪井影一君を觀迎する爲、特に同君を此の四階に案内した事がある。丸で之は高い山から谷底を見るやうだと云つて笑つたりしたが兎にかくそれでも舞臺に於ける瓜や茄子の花ざかりは大體見える。只だ舞臺の奥の方にゐる人形が見えなかつたり、又人形が少し俯向いて藝をする時に其の顏が見えなかつたりする不便はあるが、ナニそれ位の事はさして意とするに足りない。現に輪井君は私の其の觀迎に大滿足の意を表して、あゝお蔭で天井がよく見えたと云つてゐた。

五

斯くの如く、年中花ざかりの春のやうに思はれる此の歡樂の海の中にも、矢張一般社會と同じように、階級の別が存じてゐる。只だ實質上の下層階級が空間的の上層階級になつてゐるだけの違ひである。などゝ小理窟をこねまはして折角のお芝居見がだいなしになる。姑く特殊國の四階を忘れ、更に見物席の事を忘れて、一階から三階にかけて廊下をぶらついてゐる分けは先は此のところ自由平等の理想的歡樂鄉である。第一、こゝには空腹らしい人間がない。次に汚ないといふ程の着物を着た人間がない。又苦勞心配を顏色に現はした人間がない。夏でもそんなに暑くはない。冬は固より寒さ知らずである。そして皆んなが此の佳麗な雄大な建築を我物顏にして、ブラリブラリと往つたり來たりしてゐる。若し實際しばらくでも、此の建物以外の社會の事實を全く忘れる事の出來る人があるならば、其人は眞に幸福な人である。この幸福といふ言葉もお目出たいとい

ふ事を意味するかどうか、それは別問題としておく。

私は此のついでに思ひだす事が一つある。それは監獄の事だ監獄は云ふまでもなく不自由な處だが、然し平等な處である。看守と囚人との人種別はあるが、囚人だけについて云へば、最も多く平等の實現された社會である。囚人中にも極々少しの階級差別が無いではないが、社會の階級別の甚だしいのに比べると、殆んど絶對平等と云つてもいい。そこでは始終空腹を感じてゐない者は一人もない。然し纔かに生命を繋ぐだけの最も粗惡な食物は全く只平等に配布される。着物は、少し新らしいのと古いのと、少し色のいゝのと色のさめたのとの別はあるが、然し皆な一樣に柿色染である。そこには善人が一人もなくて、皆が惡人である。尊敬される人と輕蔑される人との別がない。皆が輕蔑されてゐる。そこには働く人と働かぬ人との別がない。皆が働いてゐる。そこには樂をする人と苦しむ人との別がない。皆が苦しんでゐる。そして其の皆の者が、其の無趣味な、殺風景な、絶えず人を壓迫する、夏は馬鹿に暑い、冬は堪らぬほど寒い、堅牢無比な大建築を我物顔にして、毎日々々ヒヨロリ〳〵と生活してゐる。其の苦痛の平等の有樣が、丁度帝劇に於ける安樂の平等の有樣に似てゐる。安樂と苦痛とは固より比べ物にならぬが、何んとなく平等の愉快を感ずる點は確かに似てゐる。

只だ一つ全く違ふ點は、帝劇の見物が屢々帝劇以外の社會を忘れ得るに反して、監獄の囚人が寤寐にも監獄以外の社會を忘れ得ざる一事である。

六

オヤ、話が飛んだ横道にそれた。扨それから「コメデー薔薇のいらへ」といふ、活動寫眞めいた西洋物の一狂言があつた。貧乏の辛さに泣きとほして、世間の冷酷無殘に反抗した少年がとう〳〵大泥棒になつて盛んな氣焔を吐く所は大ぶん面白かつたが、結局、神樣の有りがたさを聞かされて改心するので興がさめた。然し此の狂言には、女優が馬鹿に澤山さん出て、賑かに踊つたり刎ねたりするので、女[illegible]劇氣分の溢れた所があつた。そんな無邪氣な所だけ見せて呉れたらと思つた。例の奥樣は此の狂言中、大變面白さうに笑つたり泣いたりしてゐた。

最後に「邦枝完二作、史劇明暗錄」といふのがあつた。之は昔の殿樣に近代思想の魂を入れて見たといふ、近ごろの流行型で、勘彌君が大ぶん得意らしくやつてゐた。兎にかく私には之が一番面白かつた。「何んだか變な筋だわねえ」と、奥樣は御意あた。――「明日は三越」

時評

室伏高信

英國の炭坑罷業問題

一

英國の炭坑夫罷業問題は過去三ケ月に亘つて全英國の人心を脅しつゝあつた。この間にあつて幾多の斡旋もあり曲折もあつたが遂に豫期されたとほり同盟罷業の實現をみるに至つた、いよ〳〵罷業が宣告されたのは十月十六日の夜のことであつて私がこの論文を書いてゐる時には罷業後二日間の經過が報導されてゐるに過ぎないのであるからこの罷業の前途がどうなるのかはもとより輕々に見當をつけべきではない。しかしこの二日間の罷業において知られてゐるところに見るもこの罷業の實際上の影響の重大なものであることは明らかである。既に罷業後二日にしてロンドンに大示威運動が起つた。この示威運動は二萬の失業者によつて行はれ終に警官隊との衝突によつて騷動と化するに至り、その壯大なる威力は南阿戰爭以來初めて見るところであるとさへ傳へられてゐるのであるが、しかしそは炭坑夫罷業運動の全體から見ると單なる前衞戰に過ぎないものである。既に罷業の後二日間において報導されてゐるところによればこれによつて失業者は八百萬に達すべしと見做され、石炭の產出は皆無となり、英國港灣において船舶の出航するものは絕無の姿となり、勞働者にして現に怠業狀態にあるもの百三十萬、またこの罷業の結果として失業者となるべきもの八百萬人と計算されてゐるのであるから、この罷業の繼續される場合に英國の全產業に如何に重大な影響を及ぼすものであるかは想像にあまりあるところであるが、今日までの報導の範圍においては、罷業はウエールスは勿論のことニユカツスルにおいても、ヨークシヤイアにおいても、ノツチンガムシヤイアにおいても、ダービーにおいても完全に行はれてゐるのであつて、この罷業が一ケ月間繼續すれば坑夫の失ふべき賃銀總額は二億五千萬圓に達するであらうとされてゐるのである。しかしこの罷業が單なる產業の一時的萎微に終るとすれば、また單なる勞働者の賃銀喪失において終るとすれば、罷業の中途において何れの側が屈服

するにしてもそはまた單なる經濟問題であるが、この炭坑夫罷業の意業をかくのごとき單なる經濟的範圍において考へることは英國における現代勞働運動の要求を並に炭坑夫組合の英國勞働運動のうへにおける位置を無視してゐることである。

二

勿論この同盟罷業の直接の原因をなしこゐるものは賃銀問題をその一つの重心としてゐるのである。卽ち坑夫一人當り成年は一シフト二志、少年は一志最低年齡のものは九片賃銀値上げを要求してゐるのであつて、この賃銀値上げは生活費並に炭坑業の利益における數字上の根據に基礎をもつてゐるものである。彼等の說明してゐるところによれば生活費は戰前に比して百五十五パーセント騰貴したに對して坑夫の賃銀は一週三十二志三片より五十志に騰貴したのであるからその騰貴率は生活費に相應してゐるわけであるが、坑夫の賃銀は實は戰前において非常に割合の低かつたことはサンキー報告においてさへ認められてゐるところであるから、今日炭坑より生ずるサープラスが多額に達しつゝある時に賃銀の値上げによつて彼等の生活標準を高めることは當然であるといふのである。如何にも今日炭礦業から生ずるサープラスは每月六百萬磅に達してゐるから、坑夫側の要求たる賃銀値上げに要すべき二百二十五磅を差引くも尙ほ三百七十五磅のサープラスが每月政府または資本家の手に入るわけであつて、この點から見れば坑夫の要求は當然であり、そは純然たる經濟上の基礎のうへに立つてゐるものである。しかしこの要求の背後に、指導者としてスマイリーあり、ホッヂスあり、組合の指導原理あり、更に全英國の勞働運動の存在することを指摘しなくては、この賃銀値上げ運動の眞實の意味を捕えることはできないのである。

三

この同盟罷業の指導者はロバアート・スマイリーそしてフランク・ホッヂスである。スマイリーはスコットランド生れの坑夫であつて六十二歲の今日に至るまで尙ほ勞働者の生活を捨てないところの純然たる勞働者であり、無學なるレーユンと稱せられるほどに勇氣と實行力とに富める現代世界における最も代表的な勞働運動者の一人である。彼れは直接行動の福音を說きながらも、彼れは必ずしもサンヂカリストではない。しかし彼れは決して英國流と稱せられてきた舊式勞働組合の指導者のご

とくに單なる賃銀問題またはその他の勞働條件の改善のために戰つてゐるところのクラフト・ユニオニストではない。彼れは實に英國の全勞働運動の急變しつゝある現代の主潮を體現しつゝあるところ、革命的勞働運動の中心人物である。彼れの立場は次のごとき彼れの言葉によつて最もよく理解することができるであらう。彼れ曰く

炭坑夫は一致して土地の國有を贊成するものである。彼れ等はこう信ずる。政府は單に石炭の統制をなすに止まらず、進んでこれを國有に移すべきことを。勞働者が炭坑を管理し且つ所有することのサンヂカリストの思想はこの國の炭坑夫には深い根據をもつてゐない。彼等は若し炭坑が國家によつて所有され且つ統制されるとすれば、勞働者はその管理のうへに、大に發言權をもつだらうと期待してゐる。

彼等の生命の安全は、彼等が管理のうへに代表されることの要求を正しきこととする。

私は恐らくは大抵の人達よりも。この國の組織的勞働者の見解を試めすべき無類の機會をもつてゐる。何となれば私は過去三年間をイングランド・スコットランド及びウェールスの個々における民衆の會合において演說することに費してきたからである。これ等の集會においての多數は、勞働組合の保護のもとに召集された。さうして討議された主要な問題は、組織的勞働者によつて多年の間獲得せんとしたものであり、更に戰後の大改造運動によつて獲得すべきものであり、かくして大英國は土地は現在の持主から徵收、人民の利益において使用せらるべきである。炭山、鐵道及び工場は有用なる商品の生產のために使用せらるべきものであつて單に資本階級の幸福を建設するために使用せらるべきでない。

これによつても知られるとほり、スマイリーの求むるところは最早や英國の產業を資本家階級の利益のために――勞働者の絞取のために運營せしめるところの制度を維持することではなくして、新社會制度の創造である。フランク・ホッヂスは坑夫組合のセクレタリーであり、年少の身であるが、彼れの才能は夙に勞働界に認められてゐるところであつて、スマイリーによつて實際的人格的に指導せられる英國の炭坑夫組合に理論的指導を與へるものはこの年少のフランク・ホッヂスである。彼れの理論は彼れの最近の著書としての『炭坑國有論』またはその小冊に『炭坑業の勞働者管理』によつて明瞭に說述されてゐるのであつて、今日における英國炭坑夫組合百萬の精神はこれ等ホ

ッヂスの數著のうちにその指導原理を見出すことができるのである。彼れの指導原理とは彼れの前述の小冊子の卷末において明白にされてゐるとほりギルド社會主義そのものである。彼れはサンヂカリズムの非難者であり、國家社會主義の非難者であり、そしてギルド社會主義において産業民主々義の實現を期待するものである。このことは彼れが同時にナショナル・ギルド同盟の指導的人物の一人であることによつても明瞭なことであるが、彼れはオレーヂ・ホブソン等によつて發見されたギルド社會主義を彼れの率ゐるところの坑夫組合の指導原理となすために彼れの全力を捧げてゐるのである。そしてこれ等の指導者の精神はまたたゞに彼等の精神であるばかりではなくして坑夫組合の指導的精神となつてゐることは現代英國勞働運動のうへにおいて最も顯著なる事實である。坑夫組合は一昨年の會議で次の如き決議を通過した。

『この會議の意見では、炭礦の歷史において、本産業全體を個人的所有並に統制から勞働者と國家とによつての共同統制並に管理を伴ふ國家所有に移すことが明らかに國民的利益である……』

即ち炭坑の國有を一方に要求するとともに他方においては炭坑業の自治的經營を要求してゐるのであつて、この精神に具體的の方法を與へたものが昨年の『マイナアス・ビル』である。『マイナアス・ビル』に從へば炭坑は國有に移さるべきものであるとともに、その統制をなすべきものは二十人の委員から成立すべき『國民炭礦會議（ナショナル・マイニング・カウンシル）』であつて、この國民炭礦會議委員のうち十人は坑夫代表者となし、他の十人は專門家、議員、商業者等から成立すべきものとされてゐるのであるから、大體においてギルド社會主義の方法が採用されてゐることはいふまでもない。かくのごとくにして百萬人の組合員を有する英國の坑夫組合の根本精神はギルド社會主義の原理であつて、彼等の行動の一切はこの原理から離れては全然不可能である。今回の同盟罷業原因のうちにもこの原理の發現をしての要求の方面を見ることができるのである、といふのは今回の坑夫の要求の一部は前述のとほり、賃銀の値上げであるが、彼等はこの賃銀値上げのほかに他の一つの要求をもつてした。それは家庭用石炭の値下げである。彼等のいふところに從へば、そして同時に三角同盟の表著きしてゐるところに從へば、家庭用石炭は一噸につき十四志二片だけ引下げるのが當然であつて、これによつてサープラスの減少額は毎月三百〇七萬磅に達するが、しかしこの三

百〇七萬磅と賃銀値上げに要する二百二十五萬磅をサープラスから引き去つても尙ほ一ケ月のサープラスは六十八萬磅に達するといふのである。そして何故に彼等が家庭用石炭の値下げを要求してゐるかといふのに、これは無論一般の生活費を引下げる目的に出でたものであつて、これによつて彼等の賃銀引上げの要求に對する一般世間の同情を買ふうとする政略的の意味もないとはいはれないのであるがしかしギルド社會主義の原理を採用しつゝある坑夫組合が一般消費者の立場を考へてゐることは當然であつて、スマイリーがその三角同盟への陳述書のうちで彼等の要求が一般消費者の負擔を輕くするの條項を含むでゐることを指摘して、今日まで行はれてきたあらゆる組合の要求中最も非利己的の運動であるといつて誇つてゐるとは彼等がこれによつて「ギルド社會主義の原理としての生産者の双方の利益を考量することが至當であることに一致してゐることの事實を暗默のうちに誇つてゐるものでなくてはならないのである。

四

私たちが更に注意しなくてはならないことは今回の罷業の背後には英國の全勞働者があるといふことである。今日のところでは三角同盟がどういふ政策に出るのかも未だ明らかではないが、三角同盟は既に坑夫組合の要求を至當なりとするの決議を通過してゐるし勞働組合議會もまた同じく坑夫組合の要求を至當なりとしてゐるのであるから、彼等坑夫組合の要求が英國の全勞働者の同情をえてゐることは明らかであつて、今回の罷業はこの全英國勞働者の支持のもとに、その最大の組合としての坑夫組合によつて實行されてゐるものであると見なければならない。英國の勞働組合議會は今年の春に直接行動に反對の投票を與へたのであるが、彼れが直接行動に反對の投票を與へたのは彼れが革命に反對の投票を與へたのではなくして、トーマスが雄辯に語つてゐるとほり、それは議會的方法によつて直接行動と同一の結果が得られるものと確信したがためであつた。爾來數ケ月その間に英國の勞働運動が日一日と赤化しつゝあることは何人も否認することはできないであらう。この傾向は八月中旬の勞働組合大會が波瀾戰爭の危機に勇敢に挑戰したことによつて最もよく代表せられた。この會議においてトーマスは、彼等自身の行動を解してこれ明らかに英國の全憲法組織に挑戰するものであると述べた。卽ち革命への道であることを明らかにしたのであつた。否、英國においては既に社會革命は大半行

はれたといつてもいゝのである。といふのは既に勞働組合會議の威力なるものが議會の威力を壓迫し今や政府の權力と對抗しつゝあるからである。かくのごとき勞働運動の渦中において今回の同盟罷業が宣せられたのであるから、この罷業の意義は重大であり、之は社會革命を促進する一の方法でありそしてその成敗は全英國の社會組織の基礎に關するものであるといふことができるのである。だからスマイリーが今回の罷業に際しランカシヤイアにおいて述べたことは事實である。スマイリー曰く、今回の罷業は英國の歷史あつて以來最も重大なものであると。（十月廿一日）

第二回東京新聞職工罷業問題

一

私たちはつい近頃のことである、伯林に新聞職工のストライキがあつたといふことを、東京の各新聞紙によつて知らされたのであつた。伯林、然り伯林においてゞある。私たちは私たちの故國から遠く離れた伯林において新聞職工のストライキのあつたことを東京の各新聞紙の海外電報によつて告げられてゐたほどに、東京の大新聞なるものは『正確な、敏速な、そして公平な』報導機關であつた。然り私たちはこの『正確な、敏速な、そして公平な』報導機關から啻に伯林のストライキについても報導をうけべきことを期待してゐたのであつた。しかし私たちはこの『正確な、敏速な、そして公平な』報導機關から更に遙に手近かな、痛切な、緊要な、そして費用と手數とのかゝらない一事件の報導をうけなければならない權利の持主であつた。この一事件とはいふまでもなく東京の各新聞社に起つた印刷職工の罷業問題がこれである。平常多辯なる新聞紙は遂にこの事件について一切沈默を守つてゐた。伯林の新聞職工罷業の問題の報導者としての東京の各新聞紙は、十五社の新聞社中たゞ一つの『萬朝報』を除いては、東京新聞の罷業問題については一切を沈默のうちに葬り去ることが『正確な、敏速な、公平な』報導機關の責任であると痛感したところの新聞紙であつた。然り、この場合においては啻に雄辯は銀であり、沈默は金であつた。彼等をして『沈默の金』を自ら確く信ずるところあらしめよ、私たちは雄辯の銀によつて、天下とともに、天下のことを語ることなくしては、私たちの平常の自己吹張に對して自ら心に耻づるところなきわけにはゆかないのである。

二

私は先づこの事件の大體について語らなくてはならぬ。昨年の夏、天下を騒かした東京各新聞の同盟休刊事件なるものは未だ私たちの記憶から消え去ることのできない印象の深い出來事であつた。その事件は新聞社側の聯合の結果職工側の全敗において局を結んだのであつた。そしてこの時の職工團體としての革進會は職工側の全敗とともに瓦解の餘儀なきに立ち至つたのであつた。しかしこの事件は職工側の全敗と革進會の瓦解において局を結んだのにもかゝわらず、この事件は少くとも二つのものを今日にまで殘してきた。その一つは八時間二部制の實行に關する新聞社の責務であつた。他の一つは現代の新聞紙なるものが階級鬪爭の面前において彼等の演じつゝある役割の眞に如何なるものであるかといふことを明らかにした點であつた。この二つの點は昨年の新聞同盟休刊事件においても問題の重心であつたが、今回の罷業事件においても矢張り同一のことが繰返されてゐるのであつた。といふのは昨年の新聞同盟休刊事件は新聞社側の資本聯盟のために職工側の全敗に終つたのであるがしかも尚ほ新聞社側においても一つの公約を與へずにはなられなかつた。この公約といふのは八時間二部制の實行に關するものであつて新聞社側は『近き將來において』この八時間二部制の實行をなすべきことを職工側に約束してゐたことはその當時から天下に隱れなき事實であつた。この事實は彼等の同業社の一人であり、從つて資本家側の一人である『萬朝報』が卒直にこれを承認してゐることによつて一層の裏書きを得るに至つた。『萬朝報』は十月十九日の社說において述べて曰く

新聞工側にありては是れ(八時間二部制)は昨年來の問題にして昨年八月一日各新聞社の職工一致して各社に賃銀增加及び其他の要求を提出するに當り、八時間二部制は實に其要求中に含まれたる一條項なりき、當時東京の十六新聞社は之が爲に新聞聯盟を組識し新聞を休刊して、新聞工の要求を拒絕したり、後新聞工との間に協定成るや、ある新聞社は八時間二部制に關し『時機を見て近き將來之を實施すべきこと』を內約せり、即ち今回新聞工が八時間二部制の要求を提出するに至りたるは實にこの內約に基くものなり。

約束は明瞭である。不幸なる職工側はこの約束によつて纔に彼等の慰めるそして彼等の面目とを繋ぐことができると考へてゐたのであつた。今回の事件に當り、職工側から發表された聲

明書もまた昨年の記錄を追憶して更く『吾々は慘敗した。一週間に近い休刊と云ふ未曾有の痛快事を僅かの紀念として。吾々は一時降伏した。吾々の首要々求である八時間二節制の近き將來に於ける實現の公約を、僅かの條件として。』何といふ痛ましい追憶であらう。彼等はこの『僅かの條件』に彼等の賴みがたない賴みを繋いでゐたのであつた。そして慘敗後の彼等は、彼等の團體としての革進會を解散するの止むなきに至つたのにもかゝわらず、一度目醒めたる階級意識は彼等を再び資本主義の絞取の前に結合せしめないでは置かなかつた。彼等は早くから革進會に代るべき團體としての正進會なるものを組織してゐたのである。そは實に都下各新聞社職工の約半數即ち約六百人の會員を包容するものであるが、今年の八月一日、彼等は彼等の慘敗紀念日を期して京橋の川崎家に大會を開き、そして彼等の素志を貫徹すべきことを、滿場一致をもつて決議したのであるが、この決議もまた失敗に終るべき運命のもとに置かれてゐたことが三ケ月とたゝないうちに明らかにされた。即ち新聞社側は昨年の勝利以來、堅く資本家聯盟としての新聞聯盟なるものを組織して、益々資本主義的精神を昂奮せしめ、彼等の公約は全く忘れさられたるがごとくであつた。職工側が八月一日の紀念日において決議したところは實にこの新聞社側の公約不履行について、彼等の良心を刺激するがためにほかならなかつたのである。正進會は進んで新聞社側に書面をもつてこの公約の履行を要求した。この要求に對して何人か不當であるといふことができるであらう。しかし資本家はこの場合にも矢張り最賢明なる彼れ一流の政策に出でた。雄辯は銀であり、沈默は金であるといふことが即ち彼等の最良の政策であつた。彼等は『沈默』をもつて答へた。職工側がこの場合に何等かの他の手段に訴へた時に、職工側の態度は果して挑戰的な、または不當な態度であるといふことができるであらうか。否、この場合にも私たちは而ほ『萬朝報』から聽かなければならない一事件が加つてゐた。『萬朝報』は前掲の論文中に曰く、

　各社の新聞工が最近此要求（八時間二部制勞働）を提出するに至りたる動機は大阪朝日大阪每日の同盟たる東京朝日及東京日々の兩新聞が兩社相互の競爭上、及び東京の諸夕刊新聞に對する競爭上、兩社の新聞工を前日の午前八九時より翌朝の二三時に至るまで十五六時間の酷使をなしたるに發し、各新聞社は實に其餘波を受けたるなり。

私はこのことの事實であるか否かを正確には何ともいふこと

はできない。しかしかくのごとき事件が若し事實であつたとしたらこれ實に由々しき人道上の大問題である。かくのごとき由々しきそして忌はしき大事件が、同業者の口によつて天下に公表されてゐる時に、これに對して一言の辯明をもなすことなくして新聞紙は尚ほも己れの責任を完了したといふことができるであらうか。兎もかくもかくのごとき事情のもとに、新聞工の同盟罷業が再び始まつたのである。それが最初に火の手を擧げたのは報知新聞社においてゞあつた。報知社の職工は九月廿三日、三日間の回答期限を附した八時間二部制の要求を提出した。資本家側はこれに對してブラックレッグの方法をもつて答へたために端なく工場内において不幸なる一事件が起つた。即ち氣に逸つた職工側のあるものは活字臺を轉覆するの擧に出でたのである。實にこの點は職工側の訓練の不足を暴露するものであつて、かくのごとき行動は、八時間二部制といふことのごとき穩和すぎるほどの穩和なる要求と兩立することのできない革命的行動である。しかしかくのごとき發行の責任も、果して暴行者その人の全責任であるか、またはその挑發者の責任であるかは尙ほ研究を要する餘地があると思はれる。しかしこの事件に對して報知社は直に警官をもつて答へた。職工の重立つたもの九名は警官のために拘引された。それと同時に東京各新聞の資本聯盟が再び資本主義擁護のための戰ひを始め出した。各社の幹部は直に聯合協議會を開いて、極力正進會の撲滅をなすべきことを決議した。そして猶ほ各社職工が正進會の指導のもとに同盟罷業をなす場合には、正進會員を一人も含んでゐない東京日日新聞社をして各社の新聞を印刷せしめるといふ内相談までもしてゐたのである。このことはわれ／＼から見ると彼等の營業上の競爭觀念から到底實行のできない内相談であるとは思はれるが、しかしこのことを傳へ聞いた東京日日の職工連は、資本家の階級的結束の前に彼等もまた階級的結束をなすことがソリダリテの唯一つの道であると考へた。そして彼等もまた正進會と同じく十月八日八時間二部制を即時實施すべきことの要求をなしたこの要求は直に拒絶に會つて、同社の文選工は罷業を行つた。それから讀賣新聞の職工もまた八時間二部制の要求をなして拒絶された。『朝日』においても同じであつた。『やまと』においても同じであつた。また『萬朝』と『時事』においても同一の要求が職工によつて行はれた。その結果は『萬朝』は直に職工の要求を容れ、『時事』は來年一月を期して實行すべきことを約束した。この二つを除くと、他の全部は無條件に職工の

要求を拒絶したばかりでなく、報知は三十八名、日々、讀賣は共に十二名。朝日は二十四名の職工を馘首し、そして各社の工場は戒嚴令のもとにおけるごとく、數十名の警官が彼等の天職たる資本家側の擁護の任に當つたのであつた。事件はこれだけである。事件はかくのごとくにして終つた。事件はかくのごとくにして再び職工側の失敗において局を結んだ。そして職工側の要求を承認した唯一の資本家——萬朝報は資本聯盟から除名されて今正に苦境に立つてゐる。

三

新聞職工罷業問題は昨年も今年も職工側の失敗において終りを告げた。しかし職工側の失敗は必ずしも同盟罷業そのものの失敗ではない。職工側はこの二つの同盟罷業によつて一錢の賃銀をも加へることはできなかつた。また萬朝の場合を除いては勞働時間のうへにも何等の得るところもなかつた。そして彼等のあるものは失業と、從つて饑えと、そして牢獄とをもつて報いられ、また彼等のうちの大部分は今尚ほ晝夜兼行の苛酷なる勞働を賣ることによつて彼等の人格そのものとそして肉體とを資本主義の貪慾と專制との前に賣り喰ひしつゝあるものであるが、私たちのように、現代の新聞紙の眞實なる社會上の地位と任務と目的とを知りぬいてゐるものにとつては、この職工側の痛ましき現實の前に立つて、平常は社會の木鐸なりと自ら稱しつゝある天下の諸新聞紙、そして平常は輿論の指導者なるかのごとくに自ら稱しつゝある天下何千人かの新聞記者の諸君に對して、私は今更らしく何事をも非難し、何ごとをも求めようとはしない。また八時間勞働の要求の正當であることはあまりに明瞭であり、これに對する新聞社側の拒絶、ブラックレッグの利用、ブラックリストの使用これ等の事實が良心ある人間生活においての不名譽な事實であることもまたあまりに明白である。しかしかくのごとき種類の同盟罷業がかくのごとき種類の結果に終つたことも、同盟罷業そのものとしては決して失敗に終つたものではないといふことを述べた。私はこの同盟罷業が一般に與へたる效果を信じてゐるからである。その效果とは何か。この點もまた詳述すべくあまりに明瞭であるが、新聞紙は今日まで、少くとも昨年の休刊事件に至るまで社會の木鐸、公平な輿論の代表者といふ一枚看板をもつて通してきた。しかし昨年の同盟休刊以來この一枚看板は彼等自らの手によつて取りはづされた。彼等は資本勞働兩階級の激烈なる鬪爭の渦中に立

つて、彼等が明白確實なる資本主義の辯護者であるといふことを、そして彼等それ自身がまた明白且つ無慈悲なる資本家であるといふとを、天下公衆の前に、自らの手によつて天下公衆の面前に裏書きを與へたのである。このことは新聞紙が公平な社會の木鐸であると標榜してきた彼等の一枚看板、そして同時に新聞記者自身の迷信と、世間一般のものの迷信とを一拂し去つたことに於いて、重大な意義あることである。この意味からいへば二回に亙つての職工側の失敗も、それの文化的意義からいふと、決して失敗に終つたストライキではなかつたのである。今日以後、天下の新聞紙は宜しく公々然勞働の絞取を謳歌すべきである。天下數千の新聞記者は彼れ自らが被絞取者でありながらも、彼等の主人のエクスプロイテーションのために、彼等が日日勞働しつゝあるものであることの明白なる事實を自ら匿くすことはできないのである。　（十月廿一日）



（創作）



一つの恐怖

田山花袋

Kはぐら〱と眼が眩むやうな氣がした。何が何だかわからなくなつた。かうして山の中の温泉場の二階の一室に身を横へてゐる、それだけはわかるけれども、またさつき女中が來て、湯を取換へて行つたのもおぼろげながら記憶に殘つてゐるけれども、それ以外には、何も彼もぼんやりして了つた。Kは餘りに疲れた。

Kは何時間、さうやつて、兩手を後頭部に組み合せて、空虚な眼を天井に仰向けて眠るともなく覺めるともなくじつとして身を横へてゐたかを知らなかつた。

しかし、ある期間經つた後、かれはすつくと身を起した。(かうしちやゐられない……かうしちやゐられない!)かう言つて自から頭を振つた。(まご〱すりや、俺は駄目になつて了ふ。亡びて了ふ。……… 折角これまで堪へ忍んで來た艱難も何も彼も無駄になつて了ふ。………)かう續いてかれは思つた。また、頭がぐら〱した。家の柱や、長押や、鴨居がぐる〱廻るやうな氣がした。

譬へて見れば、底の底の底に、落ちてゐるやうなものだ……。もうとても人

生の烈しい巴渦の中に生息してゐることが出來ずに、避くべからずに底の底に沈んで來たやうなものだ。自分のゐるところは、山の上の上の旅客などは滅多にやつて來ないやうな高い溫泉場の一室ではあるけれども、しかも、そこが人生の底の底――もう何うすることも出來ない底の底なのだ……。

(母さんが死んだのさへ、俺には堪らない打擊であつたのに、それだのに、何故、お前まで死んだのだ……。辛い世の中に唯一の慰藉であるお前まで死んで行つたのだ。兄を一人この廣い世の中に殘して死んで行つて、それでお前は好いと思ふのか)

この溫泉場に來た當座は、いつもかう心の中に獨語して、母のことを思つたり、妹の夭死を嘆いたりしたものだが、今はそれさへ、さう思ふことさへ、かれには堪らなく重荷になつて行つた

Kに取つては、何と言つて好いかわからないほど辛い人生であつた。かれは幼くして父に別れた。そして幼い妹と共に、賃裁縫などして暮してゐる母の細い瘦腕のもとに成長した。あまつさへ、かれは豪くならうとする志を捨てなかつた。母も亦かれに豪くなることを激勵した。かれが中學校にも滿足には行けない身で、高等學校に入學し、また誰も學資の世話を見て呉れるものもない身で、その學校の寮舍に在學したことだけでも、それだけでも、いかにかれが人生に、實生活に、また學業に刻苦精勵したかといふことがわかつた。かれは新聞配達もした。牛乳配達もした。學校の寮舍に入つてからも、人の嘲けるのをも思はず、いろいろ内職めいたことをした。否、その學資が十分でなかつたために、その學資をつくる時間に學課の時間を取られて了ふために、他人が一年で成功するところをかれは二年も三年もかゝつて漸くやつて來たのであつた。何んなにかれは苦しんだであらう。また何んなにかれは人生の不平均を怒つたであらう。時には、全く絕望して、何うしてももう再び起つことは出來ないと思はれたやうなことも一度や二度ではなかつたのである。(學校なんか、何うでも好い。學士の稱號なんか何うでも好い。もう手近なところで滿足して了はう)かう思つたことも度々であつたのである。しかも、その時には、いつも母が、妹がそのつゝかえ棒となつた。意氣地なく倒れ

やうとするかれのつゝかえ棒となつた。そして何遍となくかれはそこから起き上つた。であるのに……であるのに、もう大學に入るばかりといふ今になつて、あらゆるつゝかえ棒からかれは離れなければならなくなつた。かれは何のために勉強したらう。また何のためにかれは刻苦したらう。母がゐればこそ、妹があればこそ……。母の喜ぶ顔を見たいと思つたればこそ、妹の娘になつて行くのを十分に保護したいと思つたればこそ……。それだのに、それだのに、この二月には流行感冒で母親が死に、この八月にはチブスでその妹が、一緒に母親の死を泣いた妹が、そのまゝ死んで行つて了つたではないか。否、そればかりではなかつた。貧しいかれは、その跡仕末や何かについても、常に世話になる親類達から夥しい侮蔑を受けなければならなかつた。かれはすつかり悲觀して了つた。何のために勉強するのか、何のために刻苦するのか、自分にもはつきりわからないやうになつて了つた。かれは前の方にのめるやうにして、または傷いた獸がそのかくれ場所を求めるやうにして、この山の中のさびしい溫泉場にやつて來たことを思ひ出した。

『何故、お前は死んだんだ……。せめて、お前だけでも生きてゐて呉れれば、さうすれば、俺にも生命があつたんだ……俺の今までの苦勞も努力も、水の泡にならなくつても好かつたんだ、何故、お前は死んだ?』

溪流の咽ぶやうに流れてゐる岸を歩きながら、Kはひとり言のやうにそれを口に出して言つた。

『俺が、俺が、この辛い、苦しい世の中に生きてゐたつて、何になるのだ！ 俺が、大學を卒業して、世の中にいくら用ゐられるやうになつたつて、それが何になるのだ！ お前がゐずに……また母さんがゐずに――』かう思ふと、ひとり手に顔の皺がよつて、嗚咽が胸にこみ上げて來た。

Kはその山の上の溫泉場に來てから、既に一週間を經てゐることを思ひ出した。少し休んで來やう。あまりに疲れた。かう思つてかれはやつて來たのであつたけれども、しかもその疲勞は容易に醫され得たとも思はれなかつた。またその

悲哀の重荷も、いくらも脱却し得たとも思はれなかつた。かれはいつものかれと違つて、人とも口をきかず、湯にも碌々入らず、蒼い顔をして、寝たり起きたり、またさびしさうに散歩したりしてゐるかれを他人か何かのやうに其處此處に發見した。

恐らく、さういふ風に客觀的に、自分で自分を觀察するといふことは、つひぞこれまでにはなかつたことに相違なかつた。Kはつくづくその自分が、そのあはれな姿が、さびしさうに、或は溪流の畔、或は白樺の林の中、或は温泉場から山へとのぼつて行く路の附近に彷徨つてゐるその身が、可哀想に憫れに思はれ出した。時には、それが自分でなしにさうした不仕合せな人の姿か何かのやうに思はれたりなどした。

本當に不仕合な男だ……。あらゆるものから見放され、あらゆるつゝかえ棒から取離され、何處に行つても、親身にこの身を思つて與れるものゝないその男！　全くひとり限りになつて了つた男！

自分より一年上であるSといふ男と、Aといふ男とが、本を讀みに――靜かに本を讀みに、矢張、この山の温泉場に來てゐたが、來た當座、Kはすぐ懇意になつて、二三度話しをしたことがあつたが、その専心に勉強してゐるさまも、かれに勉強は刺戟せずに、却つて空虚といふことを思はせた。（いくら努力したつて、仕方がない……）かうかれは思はずにはゐられなかつた。

SはKに言つた。

「でも、さう言つてもいかんよ。努力と勞働とは、人間とは、切つても切ることの出來ないもんだからな……」

「それは、さうだ。さうに違ひない。僕だつて、つい此間までさう思つてゐた。しかし、今は僕にはもうさう思はれなくなつて了つた。情けないと思ふね」

「何うしてだね？」

「何も彼も空虚になつちやつた。何れが本當だか、何れが虚僞だか、それさへわからなくなつて了つた。何故、僕等が

かうして生きてゐなければならないのか、それすらわからなくなつちやつたんだから——』

『それは困るね。何うかしたんだね。餘り勉強しすぎたんだらう？』

かうSはKの顏を見るやうにして言つた。

『でも、その中には、何うかなるだらう。何うか解決がついて行くだらう。何うも仕方ない……、かういふ風になつて了つたんだから——』

『疲れたんだね。さういふ時には、じつと落附いてゐるに限るね……。なアにぢき治るさ』

此頃でも、Kは、SやA達が、本を持つて行つて、眺望の好い山の上だの、靜かな林の中だの、谷川の畔の石の上などで一生懸命に讀んでゐるのを見た。しかし、Kは何も言はなかつた。言葉をすらかけなかつた。向うで此方を見た時には、爲方なしに會釋はするが、さうでなければ、そのまゝ默つてその傍を掠めるやうにして通つて行つた。

近在のもの、または山の向うのもの以外には、滅多にこの山の上の溫泉にやつて來るものもないのであつたが、何うした風の吹き廻しか、女は人の細君、男はそれより五つ六つも年下といふやうな二人づれが、ひよつくりこの溫泉にあらはれたので、いつとなしに、それが滯在してゐる人達の噂の種となつた。

SやAは頻りにそれを面白がつて話した。

『何うも、僕はあの男見たやうな氣がする……』

かうAが言ふと、Sも、

『さう言へば、僕等の三年ばかり前にゐやしなかつたかな』

『何うも、僕もさう思ふんだが……。たしかにゐたと思ふがな。勿論、卒業はしないがな』

「たしかにゐたよ」

かう言つてAは笑つて、「無論、女房ぢやないね。誰か人の嚊に相違ないね」

「さうらしいね」

「たしかにさうだよ。何うも、口のきゝ方が自分の嚊ぢやない……、それに、何うだ、あの戯け方は？ 女房ならあんな眞似はしやしない」

「矢張さうかな……。里に近い温泉場では露見の虞があるので、それで、こんな山の上までやつて來たのかな？」

「さうだね。たしかにさうだね……… 何でも、あの隣の室では、隨分えらいところを見せつけられるッていふ話だぜ――」

「それから、此間は、夜中に二人して、湯の中でふざけちらしてゐたつて言ふぢやないか」

「厄介な奴等だな」

かうは言ひながらも、AやSを始め、滯在してゐる浴客連に取つては、さうした噂の種がないよりはある方が好いらしかつた。皆なは笑ひながら、その二人についての話を持寄つた。

しかし、その二人づれはそんなことに頓着してはゐなかつた。ことに女の方は、さうして若い男を自由にしてゐるのを見得か何かのやうにして、平氣で歩いた。谷川の岸でも、林の中でも、山の上でも、何處でも二人は手を組んで歩いて行つた。

「馬鹿だな、彼奴は？ よく耻しくないな………」

かうまたAは言つた。

と、Sは、「でも、さうばかりも言へないぜ！ あゝいふ年を取つた奴は、離れられないつて言ふぜ！ 彼奴、あゝやつて、くつゝいてゐるのは、見得ばかりぢやないよ」

『さうかな……よく君は知つてゐるね。』こんなことを言つてAは笑つた。

Kにはしかし、さうしたものは何でもなかつた。さうしたものを目にしても、Kは何とも思はなかつた。寧ろKにはさうしたことを面白がつて、つまらなく騒いでゐるAやSやその他の人達の氣が知れないやうな氣がした。

それでゐながら、いつともなしに、Kの心や體が、そつちの方に引寄せられて行つてゐるのをK自身すらも知らなかつた。Kは唯重苦しさを感じた。世間から來る重荷の上に、更にある不可解の重荷を積み上げられたやうな氣がした。頭が夥しく眩惑した。

かれのまだ本當に知らない性慾の領土――それが厭な、厭な、何とも言はれない光景をかれの頭の中にひろげて見せた。と、黄い粉が、夕日の光線の前にわびしく舞つてゐるやうな埃（ほこり）が、かれの眼の前を通つて行つた。矢張山や、川や、林がかれの體を壓迫すると同じやうに、それがかれに重苦しい辛い感じを與へた。

Kは頭を押へて暫しそこに立つてゐた。

『とても、駄目だ、とても駄目だ！』

かうKは自から呻くやうに言つた。堪へられないさびしさが次第にかれを襲つて來た。

しかしそれは二三日前からであつた。谷川の岸を歩いてゐたかれは、俄かにその大きな石や、烈しい瀬や、折れ曲つた渓が自分の體を目蒐けて流れ落ちて來るやうな氣がした。否それはかりではなかつた。あらゆるものが、山が、林が崖が、路が、そのいろいろなものが、すべて自分を犇々と十重二十重に取卷いて、如何に出やうとあせつても、もう再びとそこから出ることが出來ないやうに、頻りにその計畫を進めてゐるやうな氣がした。一種の恐怖が何處からともなくやつて來て、烈しくかれの心を脅かした。

かれは谷川の岸にある大きな石に腰を寄せて、額を兩手で抑へて、長い間じつとしてゐた。

そこにSがやつて來た。

『何うかしましたか？』

『いや――』かうKは言つたが、後頭部を片手で抑へて『何うも、頭がわるくつていかん』

『めまいでもするんですか』

『何だか、かう地面が凹んで了ふやうな氣がしていけない。何か何だか、丸でわからなくなつちやつたやうな氣がするんだからね』

『それはいかんね。醫師に見て貰つた方が好くないかな……』

『なアに、それほどのことはない。少し落附けば好いんだ……』

かう言つてKは靜かに明るい日影の中を旅舍の方へと歩いて來た。

旅舍に歸つてから、かれはぐつすり熟睡した。そして再び眼がさめた時には、いくらか氣分が淸々してゐるのを發見して、安心した。かれは長押にかゝつてゐる手拭をつかんで、そのまゝ廊下を浴槽の方へ下りて行つたが、ふと、氣がつくと、矢張、その湯氣の籠つた燈火の中に、いつも見る黄い粉が、また夕日に榮えた埃塵のやうなものが簇々と巴渦を卷いて舞つてゐるのを目にした。頭がまたぐら〳〵とした。かれは湯に入らずに、そのまゝ室の方へともどつて來た。

『これはいかん』

かうまたかれは叫んだ。

これはとても此處にかうしてじつとしてはゐられなくなつたのではないか。最早浮ぶ瀬もないやうな深い暗い淵に沈みつゝあるのではないか。こゝが、この山の中が、かれの最後の土地となるのではないか。かう思ふと、かれはズウンと

深く底の底にその身が押し落されて行くやうな氣がした。冷めたい汗が氣味わるく絞るやうに體中から出て來た。

その夜も、かれはぐつすりと丸で死にでもしたかのやうになつて熟睡した。

やがて何も彼も生物のやうにかれには見え出して來た。柱も、庇も、鴨居も、欄干も、山も……。殊に、吃驚させられたのは、翌朝、その二階の欄干から正面に見えてゐた大きなA岳の姿が、丸で大入道のやうに恐ろしく動き出したことであつた。否、そればかりではなかつた。周圍をめぐつてゐるあらゆる山岳が、寄つてたかつて、かれを壓迫するやうに、かれを刻々に襲つて來るやうに見えた。(一刻も早く、一刻も早くこの山の中から遁れ出さなければ駄目だ……)から何處かで誰かがかれを促した。

(一刻も早く、早く……)

からまた何處かで言ふ聲がした。

『もう歸るんですか?』

かうそこにやつて來たSとAとは言つた。

Kは默つてゐた。Kの眼はギラギラとSとAとの上に光つた。

『餘り急ぢやありませんか』

『でも、もう歸ります。何うもいろいろなものが私を脅かしてしやうがない。此處にゐると、山でも、川でも、樹でも、皆な動き出して來るやうな氣がするんですから――』

『頭が疲れてゐるんですな』

『さうです、さうです――。もう二三日も此處にゐると、私は何うなつて了ふかわからないやうな氣がしますから、何

としても、もう歸ります」

「東京に歸つても、何うかと思ひますけれど、さう思つたら、お歸りになる方が好いかも知れませんね」

「氣持もわるいんですか？」

かうAが傍から訊いた。

「いや、氣持のわるいことは、ちつともないんです。唯、いろんなものが私を脅かすやうな氣がするんです。それもそんなことはないといふことは、ちやんと、理性ではわかつてゐるんですけども、何うもしようがないんです。何しろあのA岳が動き出して來るやうな氣がして爲方がないんですもの」

「ふむ」

かう言つて、Sは心配さうにKの顔を見た。

「こゝの醫者に見て貰つたら、何うです？」

「いや、それよりも、一刻も早く此處を出て了ふ方が好いと思ふ………。その方が好い………」

かう言つて、Kは行李にいろ／＼なものを詰めた。つゞいて、Kは旅舍の女中を呼んで、宿錢の勘定をして貰つた。女中もそれと知つて、驚いて、

「お歸りになるの？」

「あ、もう、歸る………」

「何うして、そんなに急に………。電報でも來たんですか」

Kはしかしその理由は話さなかつた。唯一刻も早くその勘定をして來て呉れることを命じた。かれの周圍を取巻いたSもAも女中も、矢張、山や樹や川と同じやうに、絶えずかれを脅迫してゐるやうにかれには思へた。

Kの顔は、誰の眼にも、わるく蒼白く昂奮して見えた。眼もイヤにギヨロ／＼と氣味わるく光つた。

『大丈夫かね、君』

此方に來てから、Aは心配さうにSに言つた。

『さアね。何うかしてるね。……… しかし、僕の見たところでは、さう大したこともないと思ふけれど。つまり疲れてゐるんだね。落付いてやすむと好いんだけども――』

『山や空が動き出してゞも來るやうな氣がしてるらしいね。大丈夫かしら?』

『そこまで、あの山の上まで送つて行けば大丈夫だらう』

で、AとSとは、荷物を持つてやつたりして、その山脈の背になつてゐるあたりまで送つて行つた。Kは頭を低れて默々として歩いた。こつちから言葉をかけても、單に受答へをするだけで、すぐ深い沈默の中に入つて了つた。否、そればかりではなかつた。をり／＼低頭き勝の顏をあげて、こつそりとあたりを見廻すやうにしたが、その時にはKの顏は全くあるものに恐ろしく壓迫されたやうにオド／＼と筋肉を顫はせてゐるのが見えた。K自からにしても、一刻も早く、この山から遁れなければならないと思つてゐた。

Kの內部の光景が、さういふ風に、不整、不安、不調をきはめてゐるに拘らず、また、いざと言へば、何うなつて了ふかわからないやうな恐怖に滿されてゐるに拘らず、あたりは、明るく、靜かに、落附いて、そしてしんとしてゐた。ともすると、秋の初めに不意に起つて來る凄しい風もなければ、妖怪か何かのやうに恐しく黑く捲きあがつて來る雲もなかつた。A岳の上に一片靡いてゐる白い雲も、動きさうで動かずにじつとしてゐるのをかれ等は目にした。次第に、かれ等は山脈の背のやうになつてゐるところへと近づいて來た。

そこには、夏中は、溫泉場から茶店が出てゐて、わざ／＼高い山を越してやつて來る浴客達を迎へるやうになつてゐたのが、つい、この近くに下りて行つて了つてからは、組み立てた柱が、板が、雨風に曝されて、すつかり捨てられたさびしさをあたりに見せてゐた。かれ等はそこに行つて休んだ。

遠く前に展げられたT川の峡谷をSは指すやうにして、

「あれがT山だね。それから、此方に大きく見えるのもY岳だ。そら、そこがU町だ……」

しばし、かうやつて眺めてゐたが、今度はKに向つて、

「何うだね？　ちつとは好いかね。かうひろ〴〵した眺望を見たら、少しは氣も晴々するだらう？」

「…………」

Kは何か言はうとしたが、しかも言はずに、唯ちよつと頭を振つた。Kは一刻も早く、このAやS達からも遁れなければならないと思つた。

Kはすぐその支度をした。

「もう、行くのかえ？」

「何うも有難う……もう行く。ぢや、さようなら」急いでKはSやAの持つて來て呉れた荷物を取上げた。

「大丈夫かな——」

「大丈夫だ、大丈夫だ」

かう言つたまゝKは遁れるやうに阪を下つた。Kは一散に走つた。振り返りもせずに走つた。漸く恐ろしい脅迫から遁れて來たやうに——。しかし、暫らく來た時には、恐ろしい疲勞と恐ろしい悲哀とがかれの目を眩(くら)ますやうにした。かれは林の中に入つて、その避難所を求めた。



喧嘩別れ

近松秋江

一

女はこれから寢ようとしてゐるところへ男は遲くから門の扉をとん／＼叩いてやつて來た。

先達てから息をも繼がせぬほどの炎暑が此の一兩日少しゆるんで雲の多い空に風が吹いてゐた。女は五月の初に產れた子供がやつと三十日生きてゐるかゐないで死んでしまつたので、その赤ン坊のことが、やがてもう四五十日にもなるのだが、いつまでも頭の底に膠着いてゐて、夜ひとりになどなると、漸く一月しか此の世の空氣を呼吸しなかつた小い者の果ない生命のことや、そのいぢらしい顏容のさまが明歷と眼に見えて思ひ出された。そして一人で流れ出る淚をそつと寢卷の浴衣の袖で拭いてゐた。

しかし產れた子の本當の父親が誰かといふことは彼女自身にも確かと判斷がつかなかつたが、指を折つて受胎當時の前後のことを考へてみると、どうしても旦那の子とは思はれなかつた。けれどもそれが旦那の子でなくつて內證の男の子であつても彼女にとつてはどちらでもよいのであつた。彼女は今の旦那も決して嫌ひではな

かつた。博士といふ肩書を有つてゐる社會上の地位からいつても、物質上の條件から云つても、自分の世話をしてくれる人としては何一つ不足もなかつたし、第一一生さうしてゐても生活に不安を感ずるやうな憂ひは少しもなかつた、女の方でも元はその旦那に慕れてゐたのであるが、旦那の方ではそれ以上に女に慕れてゐた。

　旦那には腎臟病の痼疾があるので、どうかして不快なことなどあると、屢く女とさし向ひの時女から色々この先の不安などを訴へられて、

「俺はお前をそのまゝにしては死なれない。」と、云つて、女の一生の事を心配してゐるやうな口調を洩してゐた。さうした旦那の心はよく解つてゐながらも妾といふ境遇にはどういふものか、いつまで經つてもこゝが最後の落着き場といふ安心が得られなかつた。出來ればさういふ境遇から解放されたかつた。そして自分で何か女にふさはしい商賣でもはじめるか、さもなければ好きな男と晴れて夫婦になつて日蔭者でない日を送りたかつた。女は今の旦那の世話になる前に七八年も世話になつてゐた男には廓内で藝者屋を出さしてもらつてゐたこともあつた。本當はその藝者屋をもう一遍やつてみたいのが何よりの望みであつた。先の經驗があるから、此度こそは失敗しないといふ自信があつた。若いのや年をとつたのや多勢抱妓を置いて、姐さんねえさんといはれながら明るい御神燈の火影に簞笥や鏡臺をずらりと並べて一と頃のやうな華やかで陽氣な月日をどうかして送つて見たかつた。道を歩いてゐても餘處の藝者や若い女の子などを見ると彼女は、あゝいふなのを抱えてみたいとか、それにはどれだけ金がかゝるとかすぐそんなことを考へたりしてゐた。

　けれども此度の旦那にそんなことをいふと、旦那は言下に女の提案を否決してしまうのであつた。今の旦那は、さういふ浮氣稼業の性根がいつまでも女に殘つてゐるのを又此の上なく氣にして嫌つてゐた。

「これほど俺がいひきかしても、お前にそんな考が何時まで經つても取れないのが俺には不滿だ。そんな事ぢや仕方がないぢやないか。」

旦那の考では、そんな詰らぬ事を考へないで、ちやんと眞淑にして堅氣を守つてさへゐれば一生々活の不安は感じさせない。それで不足のいひやうはないではないか、といふのである。

そんな意見の衝突が度重つたり、女の束縛された意思が自由を欲する我儘が變に昂じたりして、「え丶詰らない、自分の好きなことをさしてやれ。」といふ棄て鉢ちの氣分から、自分の方から呼び出しを掛けて一年ほど前から逢つてゐるのが內證の男であつた。尤もその男のことは、三四年前から今の旦那の世話になるよりずつと前藝者屋を營んでゐた頃から人知れず私かに思つてゐた男であつた。でも幾許浮氣稼業をして來た者でも、いつでも旦那といふ者は定つて一人しか持つてゐなかつたから、一人定つた人があるのに、內證でそんな男をこしらえたりするといふことは、彼女は三十になる今日が日まで素人の人妻と同樣に最も愼むべきこと丶思つてゐたのである。

旦那との折合が惡かつたり、そして若し旦那と奇麗さつぱり切れてしまへば、すぐ明日の日から心を勞せねばならぬ生活の問題などの勞苦から彼女がいよ〳〵その男と逢ふ機會をつくるまでには種々な複雜な心づかひやら感情が入り組んで、それが爲めにもい丶加減神經が混亂してゐた。彼女には、自分の身體を自分一人の自由にすることの出來ない生れ落ちるとすぐ貰はれて發育された養ひ親がまだ二人とも生きてゐた。幼い時から半玉にやられたり妾になつたりしてゐるのも彼女の自由意思でなくて、育ての父母を樂に過させねばならぬといふ義務の觀念からであつた。

初め思ひ切つて男と逢見をする前後には彼女は何處か高い處から眼を瞑つて飛び落ちる時のやうな氣持ちがしてゐたが、一面にはさうした良心の苦痛はあつても、もしそれが發覺してそのために旦那との關係が破裂するやうな場合に到達しても、それならば又却つてそれで可いといふやうな大膽な覺悟をももつてゐた。そこへ思ひもかけずいつか懷姙してゐた。それが內證の男の子であつても彼女にはその子のために惡い父親であるやうにも思はなかつた。子供が出來た丶めに自分の自由は今までよりも尙ほ遙かに束縛されたものになつて來たが、またそのために自分の境遇が一層安定したことにもなつた。いよ〳〵懷姙と知れてから彼女は、まだ海の物とも山のものとも付かない生まれる子が男であるか女

であるかといふやうなことをわけもなく空想して樂むことがあるかと思ふと、まだ十七八の時に一度經驗のあるお產の時の苦痛を思ひ起して不安な恐怖に襲はれたりしてゐた。又どうかするとその爲に旦那との關係が一層切り離すことのできないことになつたのに、いひやうのない壓迫を感じて寧そ今のうちに劇しい藥を用ゐて見ようかなどと思つてみることもあつた。

女は時々逢つてゐる男にそんなことを打ち明けてゐた。

「あなた、この子をどうかして頂戴。」女は甘えるやうな調子でいふ。

「どうかしてとは。」

「私、子供なんか入らないんですもの。……ほんたうに思ひ掛けもない……」とわれながら呆れたやうにいふ。

女は自分にもう子供が出來やうなどゝは全く思ひがけもないことであつた。

「入らないことはない出來たらちやうどいゝぢやありませんか。博士は悅んでゐるでせう。」

「うゝむ、あの人は變だ〳〵と云つてゐます。これに六人もあるんですもの、」と、小指を見せて、「もう子供なんか欲しいと思つてゐませんもの。」

「それでも貴女との關係がそのために一層確實にされたわけだから滿足してゐる筈です。あなたゞつて境遇が安定したわけです。それに樂しみぢやありませんか、段々成長してどんな者になるか。」

「母つてばねえ、女の子だといゝと云つてゐるんですよ。」女はさもそんなことをいふ母の心のうちを透視て卑むかのやうな口調になりながら、

「やつぱり私で味をしめてゐるものですから。…………………どんな子が生れたつて、あんな人の手にはかけないから。」

男は笑つてゐたが、

「そりや男の子の方がいゝさ。」

「ねえ。」

「大きくなつて何をさしたつて樂しみぢやありませんか。博士にしようと、役者にならうと。」

男が遠い先きのさきのことを、さも今眼の前に見てゐる事實のやうに話すので、女もそれに釣られて樂しい空想を描いてゐた。

二

でも女から見ると旦那の博士も内證の男も、男は二人とも同じやうに死んだ子供に對しては腹の立つほど、それは冷淡であつた。旦那はそれくらゐ慕れてゐる女でありながら自分が外妾を置いてゐることを飽くまで世間に秘して置きたいために自分の庶子として認定することを絶對に拒んだ。そして旦那と女の母親との間に劇しい口爭があつて出產屆などが遅れたりしたうへに遂に六十に近い女の親達の子として屆けられた。それでも名は博士が自分の名の一字を讓つて付けてくれたが病氣になつて死ぬ時でも何とも思つてゐる風はなかつた。たゞ出產前後から死ぬまでの費用は默つて出してくれた。そして難產であつたうへに產後の良くなかつた女の健康が追々回復期に向ふとゝもに旦那はもう新なる要求を以つて女に迫つた。勿論それには赤ン坊のことはどうであらうとも女自身に對しては愛情の伴つてゐることは爭はれなかつたから、女も自分の健康の回復するとゝもにそれは拒みはしなかつたけれども、まださま〲と記憶に殘つてゐる出產の苦惱を思つてそれが恐ろしいやうに思はれた。そして亡くなつた赤ン坊のことがいつまでも忘られなかつた。旦那に死んだ子の話をするといつもそれを嫌つて同情して聞いてくれようとしないのが女には物足りなかつたが、女が淺墓な人間として卑んでゐる母親は、

「死んだ後は早いといふから、お前そんなに氣を落すものではない、また出來るよ。」と、事もなげに云つてゐた。

そんなことを云はれると、彼女はまた一人欲しいやうな氣もするのであつた。けれども何と思つてもやつぱり死んだ子のことはどうしても今の彼女の胸から取り消すことはできなかつた。鼻の恰好や眼の切れなどが旦那にも母親にも云へないことだが女ひとりの考へには、どうしても內證の男の子に疑ひなかつた。その父親はちやうど赤ン坊が死ぬ日の晝間偶然久し振りに訪ねて來た。出產の一週間ばかり前に訪ねて來た時に、此方から何とか云つてやるまでもう當分訪ねて來ることはもとより、手紙なども人手に渡るといけないから越さないやうにといひ含めて置いたのであつた。

女はその時別れ際にひよつとしたらもうこれが別れじまひになるのではないかといふやうな心細い氣がして、ほろりと淚が溢れたが、赤ン坊が生まれてからも一時自分の產後の模樣がどうなることかと氣づかはれたりしてゐたが、それが良くなると此度は赤ン坊の方がやうやく七夜を過ぎる頃から發疹したりして優れないので心に掛りながらも男のところへ通知してやるのを一日遲れに延ばしてゐた。生まれた當座はそれは何處に一つかすり傷さへない奇麗な赤ン坊で風呂に入れてやつたりするとよく笑つてゐたが、顏や體中に吹き出物がして醜くなつてしまつたので、來て見てもらふならばそれが癒つてからにしようと思つてゐるところへ男が來た。

そしてその晩から俄に樣子が變つて夜中になつて遂に死んだのであつた。女はそれを實の父子の因緣だと思つて、ひとり心の中で恐ろしいやうな氣がしてゐた。男はあれからずつと今日まで顏を見せなかつたのだ。

旦那はつい近處で自分の經營してゐる病院に手が隙いてゐると暇を盜んでは必ず一日に一度は女を見にやつて來るのだが、今日は晝間來て暫く話して行つたのでもう來さうにはないし、それに今日は久し振りに頭髮を洗つたので氣分が何だかさば〳〵したやうに輕くなつた。所在なさに寢ようかとも思つて座敷の間に床を展べて蚊帳まで釣つてみたが二階の窓を開けて置くと涼しい夜風が冷々と蚊帳を吹き拂ふほどに流れ込むので寢るにもまだ惜しいやうな氣がして起きながら次の間の鏡臺の前に坐つて姿見にじつと我が顏を映してみると、產後の窶れもゝう目に立たぬほどに健康を回復して薄く白粉を施した顏は思ひなしにか今日は自分ながら少し若くなつたのではないかと思ふくらゐに顏の色澤が冴え

て見える。それに今夜は紫陽花の大きな模樣を置いた派手な中形を着てゐるので、それだけでも樣子が若く見えた。女は産後のせゐか此の間から掌先きに何だか蚊の喰つたあとのやうな小い物が出來て掻いくつていけないので、それに輕い藥品を塗つたりなどして少しのことにも顔や手足の皮膚を咎めぬやうに庇ひながら靜かな氣分に浸つてゐるところへ男がやつて來た。

門を叩く音は階下にゐた女中のお竹もすぐそれを察したと思はれて、彼女はみし〳〵階段を踏んで上つて來ながら、それと合圖をするやうに通じた。

「いゝのよ。お前門を開けてすぐお二階へと、さういひ。」

女は何だか嬉々するやうな氣持ちになつてゐた。男はすぐ二階に上つてきた。

「よくゐらしつたわね。私これからもう寢ようかと思つてゐましたところなの。」

「えゝ、今日はめづらしく涼しいもんですから、ちよつと來てみる氣になつて、もう先達つてから一度來てみたいと思つてゐたのですけれど。」

「さう。今日あたりお涼しいからきつと貴方がゐらつしやりはしないかと。今ちやうどそんなことを思つてゐたところでした。……氣まぐれやさんだから、氣に向いた時にいつやつてお出でになるかわからない。」女は笑ひながらいふ。

「それより子供が死んださうぢやありませんか。その見舞ひに來たいと思つてゐたのです。」

「えゝ死にました。ちやうど貴方が坊を見に來て下すつて、お歸りになると、二時間か三時間かしてからどうも樣子が變だと思つて急いでかゝりつけの小兒科の醫者を迎へにやりますと、すぐ來てくれましたが來て見てもうこれは不可ませんといひましたけれど、それでもといつて注射を二本もいたしました。あの小さい身體に二本も……」さういつて。

女は涙聲になりながら、紫陽花の模樣のある派手な浴衣の袖口でそつと眼を拭きながら、

「でも、あの時、……親子の縁といふものは不思議なものですねえ、……蟲が知らして別れに來て下すつたんだと私思

ひました。」

　女は赤ン坊の話をし始めると、留め度もなくそのことを繰返してゐた。

「醫者が來て見た時にはもう死んでゐたのです。子供を持ち扱ひつけないといふものはねえ、死んだ者を一生懸命抱いてゐました。」さういつて、女は涙の滲んだ眼で笑つたりした。

「それでも、母の處からも多勢使つてゐる職工などが手傳ひに來てくれて、あんな赤ン坊を大人の死んだと同じやうにして葬つてくれました。時々お墓まゐりをしてやりたいんですけれどつい遠いもんですから、死んだ時にいつたきり、つい四五日あとに久し振りに參つて來ました。」

「お墓は何處にあるのです。」

「お墓は麻布のお寺にあるのです。」

「東京にあるのですか、それぢや横濱からは大變だ。ぢや私がお代參に一つまゐつてやらうかな。」

「お代參ぢやありません。坊のところへまゐつてやつて下さい。」

「でも、も少し大きくなるまで生きてゐたのなら何とか愛情が生じたかも知れないが、此の間見たゞけでは愛情などゝいふ感情は少しも起りやうがない。寧ろ醜ひ、氣味の悪いくらゐのものだ。……それにあれだけぢやまだ何方に肖てゐるかわかりやしない。」男は眞面目にいつてゐるかと思ふと、仕舞にそんな憎らしいことをいふ。

　女は止むを得ず苦笑を洩しながら、

「でも貴方だつて死んだと思へば少しは坊が可愛相だといふ氣になるでせう。」

「さうですねえ、何ともありませんなあ。たゞあなたがその爲めにさうして悲んでゐるのを見てゐると、少しは貴女が氣の毒だと思ふくらゐのものです。」

「ですから男は薄情といふんですわ。」

「私だけぢやない。博士は何と云つてゐるです。」
「うむ、あの人は問題ぢやありません。」
と云つたが、女はふつと氣を換えて、團扇をとつて男の方を大きく煽きながら、
「お暑いでせう。お羽織をお脫ぎになつては。」
「そんなに落着いてゐてもお差支へないんですか。」
と女は團扇で輕く打つ眞似をして、わざと呆れたやうな顏をしながら。
「あゝら……お歸りになるつたつて、もう電車の間に合ひませんでせう。」
「どうも濟みませんねえ。」
「だつて御自分が今時分おいでになるからいけない。」
そんなことをいひながら男はふと奧の座敷を見ると、そこには女がひとり寢の薄い夜のものを延べてあるのが靑い蚊帳を透かしてちやうど水の底から覗くやうに見えてゐる。夜の更けるとゝもに開放した二階の窓から冷いやうな風が絕えず流れ込んでゐる。表の街路から深く入りこんでゐるので、四邊はもう犬の聲さへ聞へぬ靜かさである。
「貴方何か召上る物は？　お中がお空きになつたでせう。」
「いや、ちつとも欲しかあゝりません。」
「さう。」と、女は考へるやうにいつてゐたが、「ほんとうに。此の邊は靜ではよござんすけれど、その代り不便で、ちよつと何かさういはうと思つても遠くまでいかなければならないので。」
「ほんとに何も入りませんよ。」
「さう。ぢや、もうお休みになつてはいかが？　お疲れになつたでせう。」
「えゝ、さうしませう。」

「貴方かまはず先きにお休みになつてゐて下さいまし。私あとでちよつと頭髪をいひます。」さういつて、女は立つていつて蚊帳の釣り手を二たところばかりはづして寢床の模様を變へたり淡紅色の夏蒲團を淺黄模様の麻の掛け蒲團に取り換えたりして、洗濯をしたばかりの白地の單衣に扱帶を載せて持つて來て、

「これにお着更へなつて。……褌はずそこへ脱いでお置きになつてようございます。私あとで形付けますから。」

「ぢやお先きへ失禮。」

と、いつて、男は蚊帳の隅に行つて着物を脱がうとしたが、ちやうど開放した窓の處からもう西に傾いた十三日ばかりの月影が驅けるやうに動いてゐる多い雲の切れ目から顔をのぞけて蚊帳の中まで優しい光を射込んでゐる。

男はそのまゝ蚊帳の裾をまはつて窓の方にゆきながら、

「あゝ好い月だ。」とひとり言のやうにいつて、窓に凭れかゝつていつまでも月に照らされる雲の空を眺めてゐた。涼しい夜風が隣家の庭から塀の上まで伸びた芭蕉の葉をさら／＼と揺つてゐる。

女はそれから、そこらを氣の濟むやうに形付けて男の脱いだ着物を疊んで亂れ籠に入れて蚊帳の外に置くと、此度は次の間の鏡臺の前に座つて、梳いてゐた洗ひ髪をさつと束ねにかゝつた。子供の掌先のやうな白い柔い指尖が器用に、香氣の高い房々とした黒い髪を手捷しこく取り扱つて年齢に相應したおとなしい束髪の形が顔を上品に見せた。

「もうお休みになつて、私すぐまゐりますから。」

と、女は鏡に顔を映しながら男の方に聲をかけた。

「まだ寢ませんよ。蚊帳の中からお月様を見てゐる。」男は蒲團の上に横はりながら返事をした。

女は髪をとり上げてしまふと、二いろ三種化粧品を用ゐて淡さり白粉を施して、やつと鏡臺の傍を離れた。

三

男はその翌日朝歸つていつたが、半月ばかりしてまた一度前と同じやうに來て泊まつていつたきり、その頃になると毎年行く山の温泉場にいつたと云つて繪葉書などを越してゐた。旦那の博士も偶にやつて來たが又持病の腎臓が良くないとかで一と頃のやうに毎日來るやうなことはなかつた。女は何と云ふわけもなくひとり取り殘されたやうな寂しい心持で夏を送つて秋を迎へた。男から繰り合はせて一日温泉に遊びに來てはどうかなどゝ云つて來たので、遠くもない處でもあるし女も一時その氣になつてゐたが、やつぱり愈々出やうとすると、苦しい時間や日取りの都合などが思ふやうにならなくつて、男に約束の日の朝になつて中止の電報を打つたりしなければならなかつた。それに養女がいつでも今時分になると定まつて一週間くらゐ伊香保か湯河原へ行くことにしてゐるので、自分よりもそつちを出してやらねばならなかつた。それに又今まで二三年も置いてゐた女中のお竹が此度郷里の方で嫁に行く話が定まつたので、その代替はりなどで何だかだと氣を使ふことばかり後からあとから出來てきた。お竹は、今の男に逢曳するやうになつた時分のことから、その頃自分が旦那と向ひ合つてゐると直ぐ言ひ合ひをはじめて果てはひどい口喧嘩をして旦那が歸つて行たりするのを何度も内にゐて見てゐるので、自分が好くないことをしてゐるのを、何にも深い譯は知つてゐなくつても、智惠相應に同情の眼を以つて見てゐる風があつた。それだけに此方からも恩と威とを以つて、そんな弱いことのあるのをも弱い事と思はせないやうに巧くまるめて居つたのだが、これまで堅く口留めさしてゐた秘密を、そのお竹がいよいよ去るといふ最後になつて、迂濶り口を滑べらしてしまつたので到頭今までお竹の知つてゐる限りのことが、仲介者にまで發露れてしまつた。それは最初から旦那との仲に立つて女と双方のことを一切引受けて口を利いてゐる小野といふ博士の處へ出入りの洋服屋であつた。小野は、お竹が暇乞ひに行つた時にかねて胡散に思つてゐた女の秘密を、巧に鎌を掛けて彼女の口からすつかり訊き知つたのであつた。そしてお竹の去つたあとで彼は女の處に來て、そのことを話して、

「私は今まで知らん顔をしてゐましたが、あの時からもうそれに相違ないと家内と二人でいつてゐたのです。まあ旦那が知つてゐないからいゝやうなものゝ、貴女の爲によくないことです。」小野は穏かな調子でそんなことをいつて女に忠-

告をしてゐた。

それは一度、今年の一月だつたか急に好い家が見付かつたといつて女が今の處に移轉して來た當時。男がそれとまだ知らずに先の家に訪ねて來て分らなかつたので、次から次を訪ねて先の家の借り主は小野といふ洋服屋だと訊いて、その小野の家の入口まで訪ねて行つたことがあつた。その時からちやうど店に居合はせた小野と小野の女房とはその、訪ねて行つた男と女との關係に深い疑ひを持つてゐたのであつた。

その時も、女は、男がまだ知らしてもやらないのによく探ねあてゝ來たと思つて、あとでそのわけを訊いて、ひどく秘密の露顯するのを危んでゐたが、それきり深くそのことを心に留めてもゐなかつた。それで小野がすつかり自分の秘密を何から何まで知つてゐるのを一寸驚いたが、差當り生活の憂ひはなくつても旦那に對して平常自分がいろんな不足を感じてゐることは始終のやうに小野に向つて愚痴を並べてゐるので、そんなことで小野の前で弱い顏を見せるのは不可ないと思つたから、女は急處を突かれても努めて平氣を裝つて困つた風を露はさないやうにしてゐた。

「でも、時々金を借りに來るといふぢやありませんか。」小野は笑ひながら訊ねるやうにいふ。

「うむ、そんなことありません。」女は、自分が好きで關係してゐる男を、委しい事情を知らない小野などに詰らない人間のやうに一圖に思はれるのが何より心苦しかつた。

「だつて汽車賃とか電車賃とか持たないで來るとかいふぢやありませんか。」

女は、それをいはれて、思はずはつと顏が赤くなるのを覺えた。そして一寸いふべき口が利けないやうな氣がしたが「そんなことまで彼の女がお話して?」と、いひながら彼女は、お竹がそこにゐるなら、何と云つて怒鳴り付けてやつても足りないと思つたくらゐ腹が立つたが、それも滿更根もないことでもなかつた。

まだ寒い時分に男が夜遲く來て門を叩いた時に、間惡くちやうど其晩母親が父親といひ合ひをしたとか云つて來て泊つてゐたところだつたので、女中が氣を利かして門の處までそつと出ていつてそれをいふと、男はその時汽車賃の持ち合

はせがないからどうかしてくれと女中を通してさう云つたので、彼女はそれを持つて自分で門の處まで出ていつて、
「貴方、あんな女中なんかに云はないで何故私を呼んでさう仰有らないんです。」と嗜めるやうにいつたことがあつた。その時つく／＼あの人はあんなことをしてくれなければよいのにと思つたのであつたが、小野の口振りによると、お竹の奴めその事まで針ほどの事を棒のやうにいつてゐるらしい。
「えゝ、それは一度そんな事もないではなかつたが、何にも困つて私の處へ金を借りに來たわけでもないんです。」
女は事もなげにさう云つてゐた。
小野にしても、女の關係のある男の事をさう意地わるく追窮して訊かれないやうなわけもあつた。それでそんな話は好い加減にして小野もあまり口を利かなかつたが、今までは用事のほかに餘り話しになど來たことがないのに、その話があつてから小野が來るか、女房が來るか夜になるとやつて來て格別用もないのにいつまでも話し込んでゐるやうなことがつゞいた。
その頃から又旦那の足が今までにない遠くなつたのも彼女には不安の種であつた。病氣が良くないといふことであるが、向うから旦那自身が出掛けて來るほかにはその間の消息を知る術がないのが、さういふ時に彼女の境遇の頼りなさを熟ゝと思はせられた。小野の口振りでは女の過失を旦那は知つてゐる風は少しも見えないといふのであるが、それでも、平常うるさいほど毎日顏を見せて居つたものがぷつゝりやつて來なくなると女はそれからそれへといろんな取り留めもない事にまで氣を廻はして旦那の心事を疑つてみなければならなかつた。その頃の彼女はさういふ不安に鎖されて毎日のやうにわれと我が身を苛まされてゐた。小野に話して一度旦那の處へ樣子を見にいつてもらつたが、病氣は本當らしいといふだけで、旦那に會ふこともできなかつた。
そんなことを思ひ詰めて病的になつた女の神經は先から先のことまで空想して夜一睡も出來ないやうなことが珍しくなかつた。もし旦那との關係がこれきりになつてしまふやうなことがあつたら、どうして此の先きをやつてゆかうとい

ふやうなことが眠られぬ頭にあり／＼と見えて來た。そして何だか高い處から底の知れぬ奈落の底にでも落ち込んでゆくやうな不安が犇々と身を襲ふた。

四

その年の夏は八月の半ばから九月にかけてずつと雨天がちであつた。殊に彼岸前後から毎日のやうにびしよ／＼降りつゞいてゐた雨が何か一と荒れしなければ、そのまゝではとても濟むまいと思つてゐると、案のとほり九月の三十日の夕方から恐しい暴風雨になつて、徹宵荒れ狂ふた嵐はたつた一夜の中に神奈川から東京灣の方にかけて海ぞひの町や漁村に何千人といふ死人を出すほどの大きな海嘯があつたといふ號外が、昨夜そんなことがあつたのを少しも知らぬ顔に美しく晴れ渡つた靜かな秋日和の日影を、もう朝のうちから氣たゝましい鈴を鳴して表の通りを彼方でもこちらでも賣り歩いてゐるのが聞えてゐた。

その日の晩遲く夏中東京にゐなかつた男が又ひよつこり門の戸を叩いて訪うて來た。もう先達つてから山の温泉場を引揚げて歸るやうなことを云つて來てゐたので、今のやうな場合にこれまでの通りに突然やつて來られたりすると困ると思つたので、五六日前にも、その日に歸る序に途中で下車して一寸寄るかも知れぬといふやうなことを云つて來てゐたので、その日には雨の降る中をわざ／＼ステーションまで出掛けていつて、二た汽車を待つてゐたが確乎したあてのないことなので、遂に斷念して戻つて來たのであつた。

女は、その時もう寢かけてゐる時だつたがとん／＼門の扉を叩く音がしたので、すぐそれと察したが、先の時分と違ひ女中も變つてゐるので、後暗いことをして、また此度の女中にまでも氣を兼ねなければならぬやうなことをするのが厭であつた。そしてどうしようかと思つたが、そのまゝにしても置けぬので家の中から只今明けますと返事をしてみても戸外までは聞えぬと思はれて戸外では休み／＼いつまでもとん／＼叩いてゐる。女は荒い縞の銘仙の寢卷のうへに温

袷を被つて音を立てぬやうにそつと階段を下りていつて靜に入口を開けて門の内まで出てゆきながら「只今あけます。」と、先づ聲をかけて、とん／＼叩くのを止めさせた。

外に立ちあぐんでゐた男は、卑屈したやうに、

「どうも濟みません。」と、薄暗い軒燈の明に女の顏色を窺ひながらいふ。

女はもうその時ぷり／＼腹が立つて仕樣がなかつた。そして外した門を片手にしたまゝ、暫く默つて立つてゐた。男も女が默つてゐるのでやつぱり默つて立つてゐると、女は、

「さあ、お入んなさい。何してゐらつしやるの？」と少し慳貪に云ふ。さういはれて、男はわざとらしう一層卑下したやうに、「どうも遲くから濟みません。」と、いひつゝ門を入つた。

「あなた、もうこんなに夜遲くなつてお出でになるのは止して下さい。……それに女中も先のとは違つてゐるのですから。」さういひ／＼、女は先きに立つてすぐ二階に男を案内していつた。

そしてそこに坐りながら、

「貴方あんなにとん／＼門をお叩きになつては私ほんとに困つてしまうわ。隣家ぢや電報かなんかと思つてゐるかも知れないけれど、夜遲く何事かと思つて外聞がわるくつて。」

「どうも濟みません。」

「此の間もお歸りになるといふお知らせがあつたから私雨の降る中をステーションに行つて三時間も待つてゐました。たうとうお歸りにならなかつたと思はれて、來る汽車を覗いて見たけれどお眼にかかれなかつた。」

「私昨日やつと雨の中を歸つて來ました。歸つてすぐです、あの暴風雨が。……貴女また何故ステーションへ行つて待つたのです？」

「でも貴方が又突如に此家にお出でになると、私困ると思つて。」

「それはさうですけれど。今までだつてさうぢやありませんか。」
「今までは今まで〻すけれど、貴方もうすつかり分つてしまひましたよ。」と、低聲にいつて、女は胡散な顏をしてみせた。
「分つたつて、吾々の事が？」
「さう。」と、女はその事を男に話しながら、「わかりや分つたつて仕樣がありません。どうせ何時かは知れずにゐる道理がないんですもの。だけどあんなことをあの時お竹になんかに仰有らなければいいのに、私そんな事を小野になんか云はれるのが一番厭です。」
「あの時のことつて、汽車賃のこと？」
「え〻、私を呼び出して仰有ればい〻のに。」
　それを云はれて、男はさすがに羞恥を感じてゐた。
「あの時お母さんが泊つてゐると訊いたもんだから、貴女を呼ぶのは不可ないと思つて、お竹にさういつたんだが、まさかそんなことまで饒舌つてしまはうと思はないから、しかし貴女も隨分女中には氣を付けてゐたのでせうが、巧く小野はお竹の口を捲つたものですなあ。」
「そりやあんな十九か二十の田舍者ですもの、認か者の小野の夫婦が女中の口を捲らうと思へば譯はありません。小野も私の爲に心配してゐます。」
「情夫(いろをとこ)なんかこしらへてはいけないつて。」
「え〻、……きつと貴方が來るからだと思つてでせう。此の間うち雨の降るのにいつも夜遲くから來て話してゐました。昨夜も來てゐました。……今晩はもう此樣なに遲いから今まで來ないところをみると、もう來ないでせう。貴方が來てゐる處などを小野の奴に見付かるのが私厭ですから當分私の方から手紙を差上げるまでお出でにならないやうにして下さい。」

「えゝもう來ません。此處に私がやつて來るといふのがそも〳〵善くないことなんだから。」男は口の先きばかりで云つてゐるやうな調子でそんなことをいふ。
「それに私これから先き自分のことがどうなるか分らないんです。」
「どうなるか分らないとは？」
「あの人ずつと一と月ばかり來ないんです。」
一と月も來ないことはない、二十日くらゐにはなるかも知れないが女は少し大仰にいつた。
「あなた。何か私に好い仕事はないでせうか。」女は謎のやうなことをいふ。
「好い仕事つて、どうするんですか」
「あの人長く賢臓が不良ないんですからひよつとしたら死ぬかも知れない。とても一生今のやうにかうしてゐることは出來ないと思ひますから何か私に出來さうなことはないかと思つて。」
　男はそんな事を聞いて、たゞ笑つてゐたが、
「そんな取越し苦勞をするのは、少し早過ぎますよ。大丈夫死にもしないし、さうしてゐれば何とかなります。……若し私との事が博士に知れたのかと思つて心配したが、それさへ知れなければ少しも心配ないぢやありませんか。」
　さういふと、女も笑つてゐたが、
「知れたつて構やしない。知れたつて私を思ひ切つてくれるやうな人ぢやないから。……貴方は東京で方々知つてゐらしやるでせうが、どこか女中におく處はないでせうか。」
　男は眞面目になつてそんな話の對手にもならうとしなかつたが、女は頻りに自分の身の上のことを云つてゐた。
「女中つて、貴方が自分で？」
「えゝ、」と、女は笑ひながら、「でも私のやうな者はもう藝者にはなれないし、それにかう年を取つて、もう二度と厭で

す。まだ私の初めて出た時分だとそんなでなかつたのですが、近頃は段々一方がひどいんださうですから。」

女は氣が迷つてゐるやうにそんなことをいふ。男は故意と笑つて見せた。

「戲談でせう。」

「いえ、本當よ。……紅葉館は近頃あまり聞かないやうねえ。」

「私はあんな處をその實はあまり知らないが、東京中に紅葉館の女中ぐらゐ厭な奴はないと思つてゐる。えらさうな面をしやがつて、女優といふ者が出來ない頃は藝者でもない、あんな者が一寸眼新しかつたが、もう時勢遲れですよ。」

男は、ふつと話の序に平常思つてゐることと思はれてそんなことをいふ。

「さうねえ。ほんとに時勢遲れといふ氣がしますねえ。」

女は額を顰めるまねをしてゐたが、

「末廣は好い家ですわねえ。そのうち又行つてみたい。」女は仕舞をひとり語のやうにいつてゐたが、

「そのうち東京へ行つてみませうか。もうお天氣は定まつたでせう。」女は何だか氣がぐら／＼してゐるやうである。

「えゝ行きませう。」男は誘ふやうにいふ。

「こうと、明日はいけないから、明後日行きませう。私、歌舞伎座が觀たいと思ひますわ。久し振りに梅幸と羽左衛門の玄冶店がどんなに好いかと思つて。」

それで明後日女が東京に出掛けてゆく相談は定つたけれど、もう男が明朝までそこにゐることは拒んだ。

「小野はもう今夜來なくつても、また此度の女中につまらない氣がねをしたりするのが厭ですもの。明後日東京に行きますからその時で好いぢやありませんか。」と、甘えるやうに拒んでゐたが、終に仕方なくなつて、

「仕樣のない人ねえ。」と、いつて、奥の間に入つていつた。

それから一時間ばかりゐた男は遂に電車の間に合ふやうに歸つていつた。

五

翌々日も十月初の空はよく晴れてゐた。東京の市街はまだ此の間の浸水の後で、人は平常のとほり出盛つてゐても、夏の名ごりを思はしめるやうな暴風のあとのチカ〳〵とした日が乾いた地を照り付けて何となくそのあたりの道路が殺氣を帶びて荒寥としてゐた。けれども彼等の一日にはそれは何の影響もなかつた。その日は新橋驛の待合室で待ち合はすことに約束してゐたので、女は丁ど約束の十二時までにそこにゆくと、男は未だ來てゐなかつたが、間もなくやつて來た。多勢の人込みの中から此方へ顏を向けて近寄つて來ながら、眼だけで合圖をするやうに挨拶しながら、低い聲で。

「あなたも一昨日は氣が付かなかつたでせう。私もあとで氣がついたのですが、先日の荒れで芝居は何處も中止でせう。」

「えゝさう。」女もあたりに氣をくばりながら低聲でいふ。

それで、どうしようかといつて暫く待合室の隅の方に突立つて考へてゐたが、まだこの間の天災の怯えから動悸の靜まらぬやうな心地でゐる東京の市の中では何處に行つてみようといふやうな面白い處も思ひ當らないので、

「ちや、あなたの氣に入りの末廣にでも行つてみませうか丁ど午時でもあるし。」といつて、何だか浮き立たぬやうな顏をしてゐる女を引立てるやうにいふ。

「えゝ。」と、いひながら、女はそのまゝ男の後について待合室を出て來たが、往つたり來たりしてゐる人込みの途切れたところに來ると、どう思つてか、女は甘えたやうな、むづかるやうな調子で、

「あなたは一體私を何と思つて？」と訊く。

「何と思つてとは？」と一足前に進んでゐた男は女と肩を比べながら勞はるやうに聲を和げて、問ひ返へした。

「私を貴方の何とお思ひになつてゐらつしやるの？」女は故意にか本當にか眞顏でさういふ。

男はそれで微笑しながら、

「どうして？……妙なことを訊くぢやありませんか。……それはねえ、かうして多勢のゐる中を二人で歩いてゐると、知らぬ者は夫婦と見るでせうが、いくら私の方ではさうなりたくつても、事情が許さないんですから、淋しいのは外見だけで、貴女はさある立派なお方の思ひ者に違ひありません。それを私が斯うして一緒に歩いてゐてはどうも濟みません。」

さういふと女は默つたまゝ、かうしてゐるのがやつぱり好いのだといつてゐるやうに一緒に電車の方に歩いて來た。

今時分にはいつも客が立て込んでゐるにもかゝはらず、とり屋では、めづらしく座敷が隙いてゐると思はれて階下の廣いところに通されたが、半としも前に二人で二階の小さい座敷に通され時の女中がよく顏を覺えてゐて廊下をゆく時にちよつと笑顏で挨拶をしたりした。

「貴方のお好きな物を何でもさう仰有つたらいゝでせう。」と、いつて、不斷から女は食べる物の風味は解つても、自分では食べることにさう興味を持たなかつた。

京都産れのまだ若い女中が傍に付いてゐて鳥を煮たり物を運んで來たりした。女が少しも箸を持たうともせず何だか沈んだやうにして默り込んでゐるので、男はそれには觸らぬやうにしておいて、その京都者の若い女中を對手に彼地のことなどを話しながら鳥の煮たのをつゝいてゐた。香ばしい松茸の風味が懷しい京都の匂ひを運んで來てゐるやうに思はれた。段々話してゐる中に若い女中があちらで長く居つた身寄りの家が男の長く滯在したすぐ近處であつたり、一方の知つてゐる人間を片つ方でもよく知つてゐたりして若いまだ生な女中との話がはづんだ。女はその間もたゞ默り込んだまゝ沈んでゐた。と、見ると俯向いたその眼にはどうしたのか涙が滲んでゐる。何か此處で氣に入らぬことでもあるのか、まさか若い女中と二人で面白さうに京都の方の話をしてゐるので、それが氣に障つたのであらうか、まさかそんな野暮な女でもないし、初心でもないのだが、どうしたのだらうと、男は不思議に思つて氣に懸りながら、傍で怪訝な

顔をしてゐる若い女中の手前があるので、わざと陽氣に、
「どうしたのです？　少し食べませんか、今丁ど煮え加減ですよ。この松茸を食べて御覧なさい。こゝの家こそ京都の松茸ですよ。」
まるで子供を賺すやうに涙には氣の付かぬ風にいふと、女は鼻をすゝりながらちよいと顔を上げて、
「えゝ、あなたどうぞ足るほど召上つて。」といつて、そのまゝまた俯向いてしまう。若い女中も様子が知れぬのでたゞ
「どうぞお上りやして。」と、いひながら、割箸を採つて鍋に新しい皿の物などを入れてゐる。やがて女中が一寸立つていつた間に男は、
「どうしたのです？……何か氣にかゝることがあるのですか。」と、一段聲を優しうして氣嫌をとるやうにいつてみせた。男は女にさういふやうな態度を見せられるのが好きであつた。或は女もそれと同じやうに男のゐる處で涙ぐましいやうに思ふ存分ないてみたかつたのかも知れぬ。けれどもその時は全然女の嬌飾ばかりではなかつた。彼女は自分ではまだ氣付かなつたが、丁度その前の月から又受胎してゐたのであつた。妙にヒステリイのやうになるのも一つはそのせゐであつた。そしてたゞ譯もなく自分の身が頼りないものゝやうに思はれて仕様がなかつた。

　そして女中の去つたあとで男に優しい聲を掛けられると、今まで人前をつとめて抑へてゐた涙が玉のやうになつてほろ〱と一時に大島の袷衣の膝に落ちてきた。それを見てゐることは男にも悪い心地でもなかつたけれど、涙のゆゑが解らないので、對手の氣をはかりかねたやうにたゞ凝乎と見てゐるほかはなかつた。すると女は手にしてゐた小さい手帛で眼を拭いて、
「どうぞ私に構はないで、貴方好きなほど召上つて下さい。何か欲しいとお思ひの物があつたら、遠慮なくさう仰有つて下さい。」
「いや、私はもうこれで澤山ですよ。折角御馳走になりながらあなたが浮かぬ顔をしてゐるのを見ると　私も何だか胸

に支へるやうな氣がして來た。」男は少しすねたやうにいつた。すると女は、きつぱりとした聲になつて、
「私は何でもないんですよ。」と、いひながら、すつかり涙を收めてしまつて、
「あなた足るほど召上つて下さい。」
餘りさういはれると、男は、何だか長い間餓えてゐた者に御馳走を振舞はれたやうで一寸好い氣持はしなかつたが、
「もう澤山。」と、いつて、遠うに箸を措いてゐた。やがてまた先の女中が入つて來て、
「もうお上りしまへんのどすか。」と、いつて、そこらの物を一つづつ下げていつた。女中が去つてしまふと男は、腹一杯食つたあとの怠い快い心地になつて、女の膝の方に近く肱を枕に寢そべりながら少し戯弄ひ氣分で下の方から覗くやうに女の顔をそつと見上げてゐた。さうしてゐると女が何かいふであらうと思つて待つてゐたが、女は又もとの通りいつまでも默つたまゝ眼に涙を滲ませてゐる。
外の屋根と家との間から少しばかり隙いて見える蒼空から明るい秋の日が男の枕してゐる座敷の端に一ぱい射込んできた。丁どその蒼空の隙間くらゐの廣さの小庭の土が日蔭に黑く濕つて、八つ手が表の方から響いて來る騷がしい物の音を遮るやうに靜かな葉を翳してゐる。もつと何處かへ行つて見たいやうな氣がして來た。東京まで出て來たのであるから、無論女もそのつもりでゐるのであらうと思つて、今に女から何とかいひ出すかと待つてゐたが、女はそれもいはない。それで男の方から、
「これからどうします？」と、曖昧な問ひをかけてみた。すると女の方でも、
「貴方は？」といふ。
さういはれると、男の方でも仕方なく、
「私はもう内へ歸つてもいゝのです。」と、いつた。
「さう。」と、女はたゞ濕つたやうな低い聲を洩したのみで、そのまゝ又沈默してしまつた。

前にはそんな場合になると、必ず女の方から「あなたこれ切りでお歸りになるの。」とても歸れないでせうといはないばかりに積極的な行動をとつたものであつたが、今日も一昨日の樣子では、そのために自分からいひ出して東京に出て來たものであらうと、男の方ではもうそのつもりでゐたのだが、どうも少し勝手が違つてきたやうである。女自身でも無論そのつもりであつたのが、かうしてゐるうちに何となく取り付くところがないやうひとりでに唯氣が沈んで來るのであつた。

仕舞にはやつぱり男の方から堪え切れなくなつてきて、遂に本心を吐いた。

「いゝ天氣ですねえ。どつかへ行つてみませうか。」

「いや！」

女はまた、たゞさういつたきり涙をすゝつてゐる。それで男はまづく腹の底を見せ損なつたのを誤魔化さうとするやうに、少し仰山に心配さうな顏をして、

「あなた今日どこか體が惡いんですか？」

「いゝえ、どつこも。」と、いつて、頭振りを振る。男も少し腹立たしくなつて來たので、思ひ切つたやうに、

「ぢや、もう歸りませう。」と、少しむつとしてみせた。さういへばまだ何とかいふだらうと思つたが、女は、

「えゝ、かへりませう。」と、いふ。

それで遂に立ち上つて鳥屋から出て來た。日本橋の大通りは先刻とちがひ少し砂塵をまじへた風が起つて、まだ晝過ぎるやうな厭な日がギラ／＼照り輝いてゐた。二人は暫く白木屋の前の人崩れの中に突立つたまゝ、これからどこへ行くといふ當もないので銘々別々な思案をしながら口も交はさずひつ切りなく往きちがひ駛せちがう電車や自働車の絶え間を見てともかくも向う側に橫切らうとしてゐたが、いつまで待つてゐても容易に踏み越してゆける機會がなかつた。

それで女は、一寸の隙を見付けると勝手に、

「私とにかく」と、獨りごとのやうにいひながら、危く電車と電車との途切れを走り拔けるやうにして柳屋の前の側に渡つていつた。今日はどうしても男の方の決斷が後にあとになるので、彼は自分の弱味を感じながら、さうなるとやつぱり女を追掛けてゆきたい氣になつて、彼もそつちへ電車を横切つた。すると女はそこで男を待つかと思つてゐると、そのまゝ待たうともせず、颯々と丸善の店の方へ人道を步いて行く。男も仕方なく又その一步遲れた後から蹤ひていつた。女は大島の袷衣の上に錦紗の羽織を着てゐたが、ずん／＼急ぎ足に行くので下に着てゐる友禪の長襦袢の裾が傍をゆく者にも眼に付くほど蓮つ葉にちらついてゐる。向うから步いて來た三人づれの中年の男達も擦れちがひさま横眼に女の顏を見て去つた。男は後からそれを見ると一層今日このまゝに女を去なしてしまうのが惜しくなつて、足を速めて女の肩とすれ／＼に步みながら、

「ちよつと。……あなたこれから何處へ行くんです？」と聲をかけた。すると女は少しく步を緩めながら、

「私？……」と、思案するやうにいつて、此度は「私内へ歸ります。」と、何度訊くのかといつたやうな調子でいひながら、また颯々と步き出した。すると男はます／＼かへすまいとするやうに「ねえ、何處かへゆきませう。」と、露骨にいつたが、女は、

「いや。」と、最後の言葉を砂塵の立つ風の中に殘してすた／＼松屋の角まで行つて、そこに客待ちしてゐた車屋に東京驛まで行けといつた。

男はそれを見るとやうやく諦めたやうな忌々しい氣持ちで、そのまゝ道を引返へした。そして先刻島屋で女に強請つて紙入れの中から取り出さした拾圓札を一枚懷中にしてこれで何處へ餘斎を漏しに行かうかといふやうなことを考へながら人道をまた柳屋の角まで戾つて來て人崩れの中に立ちまぢつて近い處や、向うの方を往く餘所の眼につく女をじろ／＼見てゐた。そこへ吳服橋の方からチヤン／＼ベルを鳴して來た電車が止つたので、ふらりとそれに乘つた。

六

それから一週間ほどして男は複雜な好奇心からまた夜遲く女の處の門を叩いた。この前の晩のやうに長く待たせないで女は家の中から、

「只今！」と、返事をして自分で入口の戸を開けて出て來た。

男は門の外に立つて、女が門を外づして扉を開けてくれるのを一刻も待てないやうな心地で胸を躍らしてゐると、女はやがてごと〱いはして門を外づして扉を一枚開きながら夜目にも凄いほど眞青な顏になつて、突如、

「あなた何の御用でこんなに夜遲く私の處にゐらつしたの。……人を馬鹿にして、……いゝえあなたの心はちやんと解つてゐますよ。そのくらゐのことの分らぬ私ぢやありませんよ。ほんとに人を馬鹿にしてゐるよ。」と、男の現金な欲望を腹の底まで見拔いてゐるといふやうな皮肉な冷笑を浮べてゐる。

男はわざと事もなげに輕く笑で誤魔化さうとするやうに笑ひを交へながら、

「さうぢやありませんよ。」

「さうですよ。貴方の思つてゐるくらゐのことは分つてゐますよ。私の處に御用があるなら晝間ゐらしつて下さい。此の間もさういつて置いたぢやありませんか。こんなに夜遲く何の御用でゐらしつたのです。」

「さうぢやありませんよ。」

「いゝえ解つてゐますよ、そのくらゐのこと。」女はまるで別な顏のやうに險相な眼で冷笑つてゐる。

「さうぢやありませんよ。……あなたの顏が見たくなつたのです。」

「ふゝ、人をどこまで馬鹿にしてゐるよ。」聲の音まで、ほかの女かと思ふやうに急き込んでゐる。

男は、狂犬に吼え付かれたやうな心持ちで暫くそこに突立つたまゝ躊躇つてゐたが、「何の御用ですつて、先日貴女

は私に頼んでゐたぢやありませんか。あの時嘘でせうといつたら、いゝえ眞面目ですと、自分の將來の事を相談してゐたぢやありませんか。あれは私に戯弄つて云つた事ですか。」

　すると女はやゝ氣を靜めたやうに、

「そこに立つてゐないでお入りなさい。人の迷惑をも察しないで。」

　それから二人はいつものとほり二階に上つて來たが、そこでも女は又いつまでも嚙み付くやうに壁の色を變えて同じことを繰返へしてゐた。

「もう貴方に用はないんですから、これつきり私が手紙を出すまで來ないで下さい。」

「來るなと云へば來ませんよ。けれどもあなたが此の間どこかへゆきたいと云つてゐたから、私は本氣で心當りを一二訊いて見たこともあります。」と、男は好い加減な事をいつた。すると女はそれを鼻の先で笑ひながら、

「私もいつまで此處にかうしてゐられるか解りません。養母達がこゝに一緒になるか、それとも私の方で此處を疊んで彼方にゆくか。近いうちにどちらかに定まる筈ですから。」女の方でも半分くらゐは嘘をいつた。

　男はそんなことをいつて女の氣分に絡みながらも正直であつたから、それを本當に受けた。そしてぢやこれからは今までのとほり都合よく女に逢ふことは出來ないのだなと思ひながら、何となく寂しい氣持ちになつて、ふいと五六寸襖の明いてゐるところから奥の間の夜具などが見えてゐる。男は突如前に坐つてゐる女の膝のうへに置いた片手を捉へやうとすると、

「何をなさるんです？」と、突き放すやうにいつて、すつとこの手を後に引く。さうなると男はもう無遠慮にぴたと傍ににじり寄つて、兩手で女の肩から胸を犇と横に抱いた。そして房々として束髪の頸筋の眞白い化粧のあとを見るともう耐らなくなつて、嚙みつくやうにそこに口をもつていつて、白い肉が紅くなるほど強く□□□。と、女は堅く抱き締められたまゝ、從順に男のするまゝにさせつゝ聲を搾つて泣きながら、

「私は養母さへなければ貴方といつまでも斯うしてゐてもいゝんです。母のために貴方を思ひ切るんです。」

さういつて、快い男の口の觸覺を頸に感ずる間中泣いてゐた。（おはり）



碎かれたる小さき魂

武者小路房子

一

幼い時には母が二人あつて、父も二人あるなどと云ふことを、何か自慢のやうに思ふものであつた。

私はいつもそれを自慢してゐた。そして私は、私の本統の父母よりも、母の姉夫婦に當る人たちになじんでゐたのであつた。

私は伯母夫婦にも、お父ちやん、お母はんと呼んだ。そして父も母も私には二人づつあることを信じてゐたのであつた。

鬚の生えてゐる父には、よびかけることさへこわかつた。又母もきびしくてこわかつた。その父と母との間の幼い記憶が、東京の家にあつた。その家の門の中に、澤山毛蟲がゐた。いつか人からこわいものは、と尋ねられると私は直に、毛蟲と母ちやん、と答へた。

やがて北陸の市中にある伯母の家に歸つた時のうれしさ。

私は車から下りると、籠から離された小鳥のやうに、廣い臺所へかけていつた。料

理人も、女中たちも、私には懐しい人々であつた。

私はそれからの人々の眞中につつ立つて、東京の自慢をした。みんな私の江戸つ子に感心して喜んだ。私は嬉しかつた。

私はかうして、こゝで育つたのだから。ほんとに私の幼い時の記憶は、すべてが、こゝの伯父の、膝の上、肩の上であつた。

家號をK樓と云つて、料理屋であつた。K樓の直ぐ横に小學校があつて、私はそこの幼稚園に入つた。

まわりをきれいに剃りこぼつた、おかつぱさんに、びち〳〵するやうな眼をしてゐた。まゆもそつてあつた。先生がいつも抱いてくれた。私は時々、乳をのみに、母のところへかけてかへつた。七つの春になつても、まだあとのなかつた私は、周圍の寵愛を一身にあつめてゐた。

叔父は暇さへあれば、私を膝にのせて、土藏の三階座敷に、數々の料理を前に、あぐらをかいて、ちび〳〵と酒をのんでゐるのであつた。そして私に、はやり唄や、藝當を覺えさせた。私は得意で、その頃流行の「しらん顔」などと云ふ唄を、上手に唄つてほめられたものであつた。

一年生になつて、始めて市外の小山に、遠足のあつた時は、大きな仕出し箱に、先生の割籠をつめて、印し半纒の男衆にかつがせ、自分は扇子をぱちつかせながら、私の横についていつた。

私は紫の紋縮子の男袴をはいてゐた。K樓の父は、私にとつては本統に都合のよい、何でも私の云ひなりにしてくれて、私をなめるやうに可愛がつてくれる、いゝ人であつたのだつた。

それだのに、いつのまにか、私と母の家と云ふのが、近くに出來て小さな妹がそこに生れた。しかし私の家が、K樓をおいてよそにあらうとは、思ひ及ばぬことであつた。

小さな家には十五六の姉さんが來てゐて、女學校へ通つてゐた。その人は田舍訛りでおぢさん、おばさん、と父と母に

よんだ。學校がお休みになると田舎の家にかへつて、ゐなかつた。

めつたに家にゐない父が、私を田舎へつれてゆくと云つた。丁度夏休みであつた。

私は姉さんに逢える樂しみで承知した。

私は父の膝にのつて車にのつた。

車はいつまでも走しつた。

二

町はづれから川に沿つて、長い〳〵堤の上を過ぎると、急に山の間に入りこんだ。山の間からやう〳〵車が出ると又そこに、ぐるりと山が取りかこんでゐた。やうやく一つの山のすそからその穴を出ると、又前と同じやうな穴に入つた。そしてその山の上から上から山がのぞいてゐた。

川はだん〳〵激しい音をたてゝどこまでもつゞいてゐた。

私は不思議なものを見るやうに、山を見たり、川を見たりした。

父とは一言もしやべらなかつた。二三度道端にある茶屋に入つて、お茶をのんだり、御飯をたべたりした。

一番あとの茶屋を出ると、大きな峠にかゝつた。その峠を一直線に下りると、廣い〳〵平地が見えた。

澤山の家根が見えだした。

「町へ來たや」

父がやさしい聲で云つた。私はうなづいた。車はやがてある家についた。

私はすぐその家が料理屋であることをしつた。そこの人が、代る〳〵私を見に來た。そして皆、父に私の顔がそつくりだと云つてほめた。父は得意そうに喜んでゐた。程なく、また父につれられて別の家に行つた。

そこにはやさしい年とつた藝者と、若い妓が二人ゐた。そしてその日はそこに泊つた。あくる日、早馴染になつた若い妓たちに別れをおしんで、年とつたお芳と云ふ女につれられて又車にのつた。

その町を通りすぎて、淋しい田舍の道をしばらくゆくと、小さな川が門の前を流れてゐる大きな家についた。

車の音がすると、大ぜいの聲がきこえて、姉さんや、背の高い叔母さんや、小さな私位の女の子や男の子や、嬉しそうに迎へてくれた。叔母さんは大そう喜こんでくれた。私もすぐ馴れてしまつた。あくる日送つて來たお芳がかへる時、叔母さんは少し心配したが、私は少しも淋しがらなかつた。

その家は何か私に、安らかな感じを與へてくれたのであつた。

私は大勢のいとこたち、生れて始めて一の家の中に、大ぜいの友達と遊ぶうれしさに毎日夢中で暮した。

叔母さんの家は隨分威張つてゐて、村の人たちは大方家來であつた。それで村の小供たちをも、私のいとこたちは呼びすてにしていばつた。村の人等も代る〴〵私を見に來た。そして誰も、旦那さんに生きうつし、と云つて私をほめた。叔母さんは自慢そうにした。

私は勝手に家の中をとびまわつた。そして我儘にしてゐるのを叔母さんはいかにも嬉しさうにした。

私が忘れてゐるころ、ひよつこりと父が入つて來て、私をつれて少しはなれた村のある家につれていつた。

白い塀の壁が遠くから見えて、石垣でとりかこんだ、大きな門の中の、暗い家に私はつれてゆかれた。

そこには氣味の悪いやうなおばあさんと、私には馴れやうもないやうな人等がゐた。私はしほれて、父のそばから離れずに、早く叔母さんの家にかへりたがた。そして、その日の内に叔母さんの家にかへつた。私はもうゆくのはいやだと云ふと、叔母さんは笑つて、

「あれはお前の家だのに」と云つた。私にはわからなかつた。

そして二三日たつと又、父につれられて母の家にかへつた。

それから夏がくると毎年田舎に行つた。

私は叔母さんの家のいとこたちよりも、私の方が我儘をした。いとこたちは、皆叔父さんに似て大人しかつた。私は叔母さんによく似てゐた。その事はその家に生れついた叔母さんの自慢であつた。叔母さんも氣位の高い、勝氣な人であつた。叔母さんも、私の父も、この家で生れたこと、兄さんがあつた時分に、父は養子に行つたこと、その行つた先きが、私の嫌いなあの家で、兄さんがなくなつたので叔母さんが養子を貰つて後を嗣いだことなど話してくれた。叔父さんはいつも默つて烟草ばかりのんでゐた。

御盆がくると賑やかな御先祖祭りがあつた。夜になると村中の人が提灯をさげて、御墓に詣るのが見えた。裏に松山があつて、その麓が御墓場になつてゐた。村の人たちは叔母さんの家を「母屋（おもや）さん」と呼んでゐた。そして大ていお墓はそこにあつた。

私たち小供は、てんでに大きな芋の葉に、いろ／＼野菜をのせて、お墓の前に供へた。お線香と蠟燭とをつぎたして歩いた。一つ一つのお墓に手を合せた。その中に私の祖母のお墓もあつた。さう教へられた。しかしその祖母の墓は、いとこたちのお祖母さんのお墓とは違つてゐた。

お祖父さんのお墓だけ私たちには同じで。祖母さんのお墓は別であつた。それで私は、自分一人のお祖母さんのお墓の少しわれかゝつてゐるのが氣になつた。特別に丁寧に、おがんだ。このお墓におまいりさせるために、父が私を田舎へよこすのだらうと、小供心に考へた位であつた。

祖母さんは私のことを、大事の／＼たつた一人のこの家の外孫だと云つた。そして私の我儘を此上なくよろこんでくれた。

私は父の家と云ふのに行くのを隨分いやがつた。それだのに、私は田舎に行くと、すぐそこから迎ひの人が來た。私

が餘りいやがるので叔母さんはいとこの一人をつけて、その日のうちに、かへれるやうにしてくれた。私はしぶ〳〵いつて、御飯をたべると、すぐ歸へらうといとこにせめた。

そこの人達は何も私達には、感じることの出來ない、他人のやうな人ばかりであつた。父も私と一緒に行つては、一緒に歸つた。そして父は町にばかり行つてゐたのであつた。

叔母さんは、私がすぐ叔母さんの家にかへりたがるのを、よろこんでくれた。そして叔母さんも、私のきらいな家にゐる人達を、好いてゐないらしいやうに見えた。それで私たちはよろこんで、あんな家、と云つて惡口を云つた。ほんとに門ばかりきれいで、なかへ入ると、暗い家であつた。

私はいとこたちと、畑へ行つてとうもろこしをとつて來てたべたり、門の前の川の中へはだかになつて入つたり、とんぼをとつたりせみをとつたりして、日の暮れるのも忘れて遊んでゐたのであつた。

三

K樓が燒けて、此度は少し離れたところに、前よりも三倍も廣い家が建つたところには、母の家も靜かな邸町に移つてゐた。

私の學校もその近くの方へ移されて、そして先生に呼ばれる名前まで變つてゐた。

母は私に、その名前は母の名前である事を敎へられ、今までのはK樓の名前であることも知つた。

私は學校から歸ると琴のけいこに通つた。琴の師匠の家は、K樓の前を通つて行かれた。それでかへりにはK樓へかへつた。

私がかけこむと、私が「お母はん」と呼ぶ伯母と、「お父ちゃん」と呼ぶ伯父とは、ほく〳〵してむかへるのであつた。にげた小鳥がもどつて來たやうに。

私が又かへらねばならない家が、別にあるなど〻どうして思ひ出されやう。

私はそのまゝそこにとまりこんでしまふのであつた。

二三日たつと母がむづかしい顔をして迎ひにくる。姉と妹が少しあらそつて、私はつれてかへられる。そしてきまつて叱られ、時にはせつかんされた。けれども私は又、にげていつた。伯母は私をなだめながら、夜になると私をつれて、母の家までおくつてくれた。

伯母も私も涙をこぼしながら別れるのであつた。

父はめつたにゐなかつたけれども、たまに家にゐる時はきゆうくつでたまらなかつた。

私は母のすきをねらつて、直ぐK樓へ出かけた。そして臺所の帳場で、出入りする大ぜいの藝妓たちの話しや、女中や男衆の話しの中にゐる方が、自分の家らしくのんびりして、自然であつた。淋しい家に、母とくらすのが一番私の苦痛であつた。

それでも學校ではいつも御褒美を貰つた。小學校を出た時も一番だつた。高等科は市内の八つの小學校から集るので、少しむづかしいやうに思つたが、やつぱりすぐ級長になつた。そして二年生になる時の卒業式には總代に選ばれた。そのことは、もう女學校をやめてお嫁にいつた姉さんのことや、學校のことに熱心な母をよほど嬉しがらせたやうだつた。

私はその日は朝の内に湯に入つて、きれいに白粉をつけて貰つた。桃割れに銀の丈長をかけて、びら〳〵のついた大きな前さしをさした。牡丹色の綾羽二重の重ねに、赤いゑび茶のカシミヤをはいて、金絲で縫とりした緋縮緬の襟の下には、箱せこの銀の簪がだらりと下つてゐた。高い塗のぽつくりの鈴を鳴らして、學校の門を入ると、運動場のブランコに遊んでゐた生徒の二三人が、顔を見合せて意地惡そうにこそ〳〵とうわさをした。

先生の一人がびつくりして私を教員室につれていつた。校長さんの前へつれてゆかれて、受持の先生や、女の先生が

よつて來た。先生たちはにこ〳〵笑つてゐた。女の年とつた先生は、級長さんがこんななりをしては困りますね、と云つた。私はにつと笑つてゐた。少しやんちやらしい氣持ちになりながら。

先生は箱せこや簪をぬきとつて、襟を引つこめた。しかしその頃流行した目のさめるやうな牡丹色の着物がいかにも引立ちすぎた。それで小使がよばれて、遠くもない私の家へ羽織をとりにやられた。

母はわざ〳〵使ひが羽織をとりに來たので、寒いためと思ひ心配しながら、着物にふさわしいものを持たせてよこした。

先生等はがつかりして、その羽織を眺めた。古代紫のその長い袂には、岩の上に酒呑童子が、赤い大きな盃を上げてゐた。

牡丹色の上に着せた紫は、特に美しかつた。が、ぬがしてみると又着物も目立ちすぎた。

先生たちは笑ひ〳〵もてあまして、とう〳〵羽織を着て式に出る事になつた。

四

私はいくつもの褒状と、お菓子の包みを持つて、學校の門を出ると、直ぐにK樓へいそいだ。

大きな正面の玄關には、下足番が札をそろへゐた。私が威張つて入つてゆくと、勢よく「いらつしやい！」と聲をかけた。

「あら孃！」と女中の一人がかけてきて聲を上げるとばた〳〵と皆かけて來た。

伯母も伯父もほう〳〵云ひながら出て來た。それらの人々は、私の手に持つてゐる褒状を鬼の首でも取つて來たやうに驚嘆し合つた。

「離屋に、お父さんが來てなはる、早ういつて見せて來しまいか」と伯母が云つた。一棟離れた座敷の襖を開けると、

二三人の客があつた。伯母は一寸立膝をして、

「へい、嬢が一番で」とあらたまつて云つた。客の一人が、

「ほう。えらいのう」と云ひながら、免狀を手に取つて眺め、次の客に渡した。

父は默つてゐた。私は伯母の後ろに立つてゐたが、急に臺所へかけ出した。

女中たちが私をとりまいた。私は今日の着物の出來事を勢づいてしやべり出した。皆、一々聲を上げてよろこんだ。羽織のことは特別に皆をよろこばせた。伯父はもう夢中で、御ほうび〱とさわいでゐた。もうそれはお酒のさいそくであつた。

伯母が出て來た。何か興奮してゐた。

「お前たち、まあみんなきいておくれ」と皆に云つた。

「默つてゐなはつてもよつぽど今日は嬉しかつたにちがいない。旦那はんが、あんなうれしそうな顔しなはつたことは、見たことがない、何と云つても可愛いゝにちがいない。」

女中たちは皆感動しながら、私の顔をみつめた。

K樓もその頃は、一番頂上であつた。新築の廣間には、いつも絶間のない宴會があつた。泉水に白鳥や、あひるが賑やかに鳴いてゐた。夏は宇治からわざ〱大きなのばかり螢をとりよせて、幾千となく庭に放つたりした。子供のやうな伯父は豆に働いてゐた。節期がくると、小座敷のならんだ、庭向きの一番端の座敷に、帳場を設けて、花帳をさげてくる大ぜいの藝妓等に拂ひをした。

私は囃子道具のある藏の二階で遊んだり、女中部屋に入り込んだり、夜はそつと、廣間の廊下から踊のすき見をしたりした。

さうしてK樓にゐる時だけが、私はのんきな氣持ちでゐられた。

しかし、その家も燒けて仕舞つた。三度つゞいての火災に、もう立ち上る見込はなかつた。私は學校から歸つてくると、母の部屋に屏風を立てまわして、伯父が眞靑な顏して、仰向けに倒れてゐるのを見た。

それから私のゆく家はなくなつた。

私の朝起きる頃には母はよくねてゐた。私は音のしないやうな臺所へいつて、女中に膳を出して貰つた。そしてそつと玄關を出て、小ばしりに門を出ると、何かのがれたやうな、淸々した感じがした。

或る日の夜、母は早くから床についた。時々女中などの手代りのない時には、母の實母が來てゐた。その日も女中がゐなくて祖母がゐた。祖母は私にいろ〳〵物語りをしてくれた。お銀小銀の話しを私は好んでして貰つた。祖母は每日寺院にゆくので、澤山の法話などをしつてゐた。邸町の夜はしづかで、人通りもなくしんとしてゐた。

五

その內門のあく音がした。玄關の鈴がなつて、思ひもかけぬ父が入つて來た。

祖母と私はハッとして立ち上つた。祖母は母が少しかげんが惡くて、早く寢た、と云ふことを、云ひわけのやうにおど〳〵と告げてゐた。父は醉つてゐるらしかつた。母の部屋へ入つて何かひくい聲で話しかけた。聲がこわかつた。急に母の叫び聲がした。祖母と私がかけてゆくと、父は木枕で母をうつてゐた。

祖母は泣きながら父の手をおさへた。私は泣き叫ぶ母を抱くやうに引づつて、祖母の床につれていつた。祖母が妹を抱いてつれて來た。父は玄關へ引き返して誰かと話をしてゐるやうであつた。父のあとから、藝妓らしい女が入つて來て、座敷へ通つていつた。しばらくして手が鳴つた。そして「茶をもつて來い」と云ふ父の聲をきいた。

祖母は私に茶道具を渡した。私はかぶりをふつた。祖母はしづかな聲で云つた。

「お父さんへの義理じやで、持つていつておくれ」と云つた。私は持つてゆかねばならぬものゝやうに持つていつた。父の前にと、女の前にと。

母の泣き聲はきこえなかつた。

又ある日、私が學校から歸つてくると、母の部屋から母の泣き聲がきこえた。私の足音をきくと、母が私を呼んだ。私がそこへゆくと、父が正面に坐つてゐて。母は泣いてゐた。「お父さんが暇を出すと云ひなる。お前はどうする」と云つた。私は悲しい事のやうに感じて、袂を顔にあてゝすゝり泣きをはじめた。

父はそのまゝ立ち上つて出ていつた。

私は小供心にも何か自分の身の上の不安を感じて、心が落ちつけなかつた。伯母の家はその後、場末にこして、私一人では行けなかつた。一度行つた時、伯父と伯母は、私の父を少し恨んでゐる樣子であつた。私にはまだ何事もハツキリしなかつた。たよりない心が、學校のことに熱心にさせた。いつの間にか、十三になつて、私は女學校へ入つて行つた。

夏がくると相變らず、父が私と妹を田舍につれていつた。田舍の叔母の家の子供等も、だん／＼大きくなつて、中學校へ通ふ兄とその妹二人と小さな弟と、近くへ嫁入した姉と、より集ると賑やかだつた。

私はもうそのころ、本屋へ一人で買物にゆくくせがついて、新聞の小說をよみだしたり、西洋の詩人の名さへ覺えてゐた。いたづらな、いつも先生を困らせるやうな元氣のいゝ小娘になりかけてゐた。宙に迷つた魂のやうに、夢中に本を讀み出した。そして、今までわからなかつた自分の身の上などが、だん／＼はつきりとしてゆくのであつた。

母は妾なのだ。

自分は私生子なのだ。

あの田舎の私をきらいなおばあさんが、父の本妻で、父はあの家の主人なのだ。

そして父は母を愛してはゐない！　としか私には思へなかつた。

何と云ふ私は運命なのだらう。

私の母はまあどうしてそんな運命をつくつたのであつたらう。

だん／＼私は母の話しすることが、のみこめていつた。

六

K様の伯母はほんとにきれいな人であつた。伯母の着るものは、すぐ藝妓たちの流行になるほどであつた。背の高い、少しいかついやうな姿で、ぬけるほど色の白い、富士額の面長で、眼がわけてうるんで優しかつた。

生れた町は、田舎へいつた時通つた、あの峠の下の町で、そこで東の大関と云はれた評判娘であつた。十五の春に望まれて、古い町家へ貰はれて行つた時には、黒縮緬の止袖に、紫の鹿の子をかけた丸髷で、袂のふり許りが赤く美しかつたと、祖母が私に話してくれた。赤いものやしな／＼したやうな風がきらいで、白粉をつけた事はなかつた。

弟が三人、妹が二人の總領に生れた伯母は、まづしい兩親の苦勞が氣になつて、一人落ちついて嫁入りしてゐる氣になれなかつた。一年たつた十六の時、女の子を生むと、その家を出てしまつた。小供はすぐ死んだ。

私の母は男二人をはさんで生れた。どの姉兄も人並以上に大柄なのに、私の母許りは並よりも小さかつた。いつも額に青筋を立てゝ、近眼の眼がするどく光つた。性質が陰氣で、物云ひが角々してゐた。

もう一人の妹は、福々とした丸顔の、心だての柔しい、物云ひのおつとりとした人であつた。祖母も母にはいつもて

あましてゐた。

母は姉をも、母をも恨んでゐるかのやうにさへ見えた。私にはそれが不服であつた。

祖母のとまる時は、いつも佛間に私と二人で寢た。祖母は、夜明の寺院の鐘が鳴り出すと、きつとひくい聲で稱名をとなへながら、枕をもだげた。そしてこそ／＼と身仕度をして、朝事に參るのであつた。

祖母が新しい供花を持つてかへる頃は、丁度朝の御飯であつた。

母はいつも本などよみ耽つて夜ふかしをするので朝はおそかつた。私は祖母と一緒に朝の御飯をたべて、學校へいつた。

夕暮れになると、又鐘がなつた。

祖母は夕飯がすむと、しづかに佛前で讀經をした。私も必ずうしろに坐つて木魚の音をきいてゐた。

或る晩私はきいた。

「お祖母さん、あの御位牌はだれの、小さいあれ、私と同じ生れた月日がかいてあるわ、」

祖母はほゝ笑んだ。

「あれはお前と一緒に生れた赤ちやんのやわいの」

そして祖母は私に、母は八ケ月で生れたのであんなに少さいこと、それに大きな／＼お腹で苦しそうだつたことを話してくれた。何かしら私は神秘な感じをうけた。

私と同じに生れた、私と同じ人間がもう一人ゐるかもしれなかつたのだ。どこに今ゐるだらう。私の半分はどこにゐるのか、私の影、私の片われ、私はいつもそれを感じた。

七

私もうす〳〵ながら、母の運命を感づいていつた。母も何かと私に打ちあけるやうになつた。

伯母は母よりも、おとなしい妹を愛してゐた。母は陰の方で。陰氣に豆袋の新聞の字をよんだりしてゐるので、伯母はきらつた。

母は云つた。

「私は十三の時から糸をくつて母の手助けをして、一人前の働きをした。十五の時から姉さんの家によびよせられたが、姉は、妹ばかり愛して、私を愛してはくれなかつた。妹に赤い簪をさしてやつたり、美しい前掛をしてやつたりした。私はそんなものほしがりもしなかつた。豆袋の字をよむのが樂しみだつたけど、それさへいやがられた。」

不幸な母よ！　私は母のために一生どんなにしてもいゝと思つた。

父は思へばいやな人だ。

さう思ふとたまらなかつた。學校でよばれる自分の姓が、門に出してある父の姓とはちがつてゐるのも氣になつた。

「お母さん、お母さんと家を出ませうよ、私何でもするから。商賣をすればいゝわ」と私は云つた。

「お父さんにお前たちをおいて子供がないのだからね、何と云つてもお前たちばかりだから……それになか〳〵世の中を渡るのは大變なものだから」と母は云つた。

私はさう云ふ母の顔をみつめた。

何と云ふ淋しい顔だらう、ほんとに消えてゆくやうだ。そして怒りばかりだ。

母は祖母にさへやさしくなかつた。女中にも、だれにも、ほんとに母はいつも怒つてゐた。

母の事を考へるのは、私にはつらかつた。それは人間の生命について、だん〳〵と幼い心を洞窟のやうな世界にさそ

いこんで行つたから。

空想の世界が、私の心に開けた。はてもなく華やかに、自由な世界が、幼い私の心に開けていつた。西洋の女優の姿がいつも私の心にあつた。詩人の物語りなどが心にひゞいて行つた。

いつか、父につれられて來た八重と云ふ藝妓は、もう座敷を引いて、家にも出入りするやうになつてゐた。K樓もいつか場末を引き上げて、料理屋などの多い町に旅館を始めた。私は又ゆく家が出來た。しかしもう以前と同じにはなれなかつた。伯母も伯父も、私を丸で高いところに咲いた花のやうにしてゐるのであつたから。伯母の家でも八重によく出逢つた。八重の家はすぐその近くであつた。私も遊びにいつた。川沿ひの土藏作りで、元やはり料理屋であつて八重はそこの一人娘であつた。それで人形のやうな容色を賣物にして、家事は餘り仕込んでなかつた。家には母親代りの八重の伯母と、丸子と云ふ藝妓時代に客との間に出來た娘との三人ぐらしであつた。

八重は自分の伯母をぼんさんと呼んでゐた。くる〳〵と頭をすつて黑い頭巾をかぶつてゐた。

私はその家にも自分の家では見られぬ落ちつきを感じた。丸子に對する八重の母親らしい樣子、ぼんさんに對する言葉などにも、私は感心した。三人で御飯の仕度をして私をもてなした。その座敷に父は心地よさそうに横になつて、川を眺めてゐた。

私は二階に上つて、川の流れなど眺めながら、しらずに涙がこぼれた。私にばかり家のないやうな氣がして、丸子がうらやましかつた。

八

母は八重が訪ねて來たりする時、露骨に額に青筋を出していやな顏をした。私はそれを隨分いやに思つた。八重はい

かにも落ちつき拂つて奥さん、奥さんと母の機嫌をとつた。母があまりけんどんな答へをしたりすると八重は私の顏をチラリと見てにが笑ひをした。私は八重の態度から母に對する侮蔑を感じて八重に對しての腹立ちよりも、母の態度に腹が立つた。どうしてもつと愛想よく出來ないのだらう、上品におとなしくしてゐられないものか、もつと餘裕を以て上から出られないのかと思つてはがゆかつた。餘りに素人くさい母の仕うちに私は時々胸を惡くした。

何と云ふ不似合な境遇に、自分の運命を置いたのであらう。

祭日などになると私の家に四人の女が集る事があつた。

狸のやうな田舍のおばあさん、それに田舍の町にゐたお芳、そして八重、私の母はそれらの女に交つてゐなければならない。

おばあさんはさすがに自分の優越な位置を感じて平氣でゐる。お芳は生れつきの柔しい性質から皆の人にへり下つてゐた。八重はみなを呑み込んで若さと利口さを利用してゐた。その間に立つて私の母はまるで憤怒そのもの丶やうに皆に角立つた。

お前たちと、私は一緒にされるのか、みんな私を馬鹿にするがよい、私は自分の魂を、すつかり臺なしにされてゐる。お前たちは一たい何を私の夫に拂つてゐるのか、みんな利用してゐるのではないか、私は一緒にされたくはないのだ。

母の怒りに燃えてゐる眼はそんなことを語つてゐるのだらう。私の心には母のさう云ふ心が不思議な大窓のやうにうつつた。

憐れな母よ。私にも大方想像はつく。私の生れる次までは夢のやうな日がつゞいてゐたのであらう。そして氣のついた次には、のがれられぬ運命に身を置いてゐたのであつたらう。それはいかにも母には不似合な繁雜な身の上であつた。

母はあからさまに私を自分の楯にとつた。私も又母の楯になるのを自分のつとめにした。田舍のおばあさんにしろ、外の女たちにせよ私の小ざかしいのには遠慮をした。そして母はそれを唯一の武器に使つた。私は母のためには父を憎みさへした。しかしその父はいつとはなしに年をとつた。そしてだん／＼家に多くゐるやうになり、私たちの姉妹の上に父らしく近づいて來た。そして父はだれにもまして父らしく私はよき父をそこに見出してゆくのであつた。私は天と地の眞中にぶら下つて生きてゐる自分の姿を見た。父はいゝ人だ、しかし母は、と思ふとつらかつた。何もしらぬ小さな妹のことを思ふと、これからさきいつか私の夢みてゐたやうな、一軒の營みが自分の家にも行れてゆくやうになることは嬉しく思はねばならなかつた。

Ｋ樣の伯母も時々尋ねて來た。私は伯母に逢ふ度に涙ぐんだ。

「私はお前の子でなかつたのか、私はお前の子でゐたいつたのに」と心の中でつぶやいた。伯母も私の顏さへ見れば涙ぐんだ。（終り）



縁きり

久保田万太郎

茅場町の大將はせつかちだ。用さへすめばぐづ〳〵してゐない。——今日も、その通り、話すことだけ話すと、『これから茶屋町へ廻る。』さういつて、さつさとかへつて行つた。

おくり出した佐介とおとめは、旦那のすがたの露次口へ消えるのをみて、ぼんやり、座敷へかへつた。

『着物を出してくれ。』

佐介は立つたまゝ、ふり返つて、おとめにいつた。

『着物。』おとめはけゞんな顔をして『どこかへ行くんですか。』

『うむ。』

『どこへ。』

『りう雀のとこへ行つて來る。』

『りう雀さんとこへ。』

『來月の上席（かみせき）の相談だ。』佐介は押へるやうに『來月から、何とか少し、目先をかへる算段をしなければ。——今のまんまぢやあ仕樣がない。』

おとめは、默つて、目ばたきをした。

『今日、茅場町のもそれをいふんだ。』
『だつて、それは。』おとめは肚に落ち兼ねる體で『茅場町さんが無理だわ。』
『どうして。』
『さうぢやありませんか。――茅場町さんと茶屋町の持てあましものばかりをいつも此方へ廻して寄越すんぢやありませんか。』
『それは仕方がない。――こゝは場所が場所なんだから。』
『幾ら場所が場所だつて。』
『それは俺にしたつて。』佐介は唾をのんで『新灘といふ看板がある。――茅場町が新灘ならうちも新灘だ。茶屋町が新灘ならうちも新灘だ。粒選のいゝ藝人ばかり並べてえ。――だが、そんなことをして、高い錢をとつたら、なほ〳〵客の來なくなるばかりだ。』
『そんなことをいつたつて、それは。』
『いゝから着物を出してくれ。』
佐介は無理に話をうち切つた。
おとめは不承無精に箪笥をあけた。銘仙の萬筋の袷と、染めつ返しの、鼠縮緬の兵兒帶とを出した。
『帶はそれでない方がいゝ……。』
『それでない方。』おとめは佐介の顏をみて『それでない方つて。』
『博多の、あの。――あれを出してくれ。』
『だつて、りう雀さんとこだけなんでせう。』
『ことによると、かへりに、きん樣のとこへ廻るかも知れない。』

『きん鋏。』

『日本手品のきん鋏だよ。』

『あゝ、あの。』

『工合が悪くつて寢てゐる。』すぐに、また、かぶせて『今度はむづかしいかも知れないつてうはさだ。』

おとめは、簞笥の、うへの抽斗から茶献上の帶を出した。

『この帶を、さう、ざらに締めたら、あなた。』

『だから、さらには締めないやな。』

さういひながら、佐介は、茅場町の先代。——先代の旦那が形見に呉れたその帶を手にとつた。

おとめは、今度は、下の抽斗から洗つた足袋を二三足出しかけた。

おもてへ出て佐介はほつとした。——同時に、だが、氣取られはしなかつたらうか、その心配が頭をもたげた。

用があつて出るのに不思議はない。誰に遠慮もないこつた。——さうは思つても、傷もつ脛の、今日に限つて、うちを出るキツカケがつかなかつた。朝飯の箸をおくとからいろ〳〵工夫した。だが、いゝ智慧がでなかつた。——と、そこへ茅場町が來た。

茅場町の來たのは近くかはつた組合の規則についてだつた。その話のあと、世間の景氣のまた悪くなつて來たこと、それにつれて手を締める必要のいろ〳〵起つて來たこと、だが、藝人たちはまだ氣がつかず、相變らずのさばつて始末にいけないこと。——そんなやうなことを立續けに饒舌つた。——勿論佐介は、とき〳〵たゞ返事をするばかりだつた。

饒舌るだけ饒舌つて、ちきに、茅場町はかへつて行つた。——途端にふと案じがついた。こゝだ、さう思つて、佐介は、

『着物を出してくれ。』

思ひ切つておとめにいつた。

『どこかへ行くんですか。』と訊かれたときには、まだ、どこへ行くとも考へてゐなかつた。『どこへ。』と疊みかけていはれたとき、とつさに、『りう雀のところへ行つて來る。』といふ知慧がでた。——行くさきが定まれば、あとは何うにでもましくなへる。

『來月の上席の相談だ。』さうはいつた。『來月から、何とか少し、目先をかへる算段をしなければ。』さうもいつた。——だが、それでは、まだ、いひ足りないやうな氣がして『今日、茅場町のもそれをいふんだ。』と、茅場町を引合に出した。

それはいはなくつても好かつた。いつて反つて惡かつた。餘計なことをいつたばかりに、『だつて、それは。』とやり返された。

なぜ、あのとき、向うのいふなりに默つてゐなかつたらう。なまなか『どうして。』といつたばかりに、筋をいはれ。それをいひ解くために要もないことをいろ／＼いつた。——『新瀧といふ看板がある。——茅場町が新瀧ならうちも新瀧た。茶屋町が新瀧ならうちも新瀧だ。』といふやうな、いはれない、辻褄のあはないことをくど／＼いつた。

行きがゝりとはいへ不味かつた。いつにないこつた。——おそらくは、おとめに、そわ／＼した、調子の外れた自分がみえたらう。——おとめはへんに思つたちがひない。

帶の詮議にしたつてさうだ。いつもは何でもおとめ任せ、兵兒帶だらうが、角帶だらうが、そんなことに頓着しない。——それを今日にかぎつて選り好みした。——おとめは可笑しいと感じたらう。

だが、おはまは、角帶をしめ、自分が始終堅氣らしくきちんとしてゐるのが好きだ。——だから無理に角帶をしめた。

『ことによると、かへりに、きん蝶のところへ寄るかも知れない。』

ぬけ〳〵とよくもいつた。茅場町がかへり際にいつたことがさそくの役に立つた。——蹉跎よくいつたから、おとめも、これは疑はなかつたらう。

だが、きん蝶といふ爺さん、自分がまだ茅場町に厄介になつてゐる時分には、カンカラ太皷を叩いて、白紙を燭臺で燃したり、ふき流しの中から傘を出したり、江戸まへの仕事のあざやかなところを旺にみせてゐた。その後、自分が茅場町の世話でおとめと一しよになり、番場のいまの寄席を持たして貰へるやうになつた時分には、旅に出てゐて、更にうはさを聞くこともなくなつた。——先刻の話だと、久しく九州へ行つてゐたのが、煩ひついて、去年の暮に此方へかへつて來、そのまゝずつと工合が惡いらしい….

『だが、あの爺さんも、もう、七十だらう。』

佐介はさう思ひながら、ふと空をみ上げた。——梅雨にちかい空は、からつと晴れながらも、なほ、不安心な、たよりない雲を動かしてゐた。

佐介は吾妻橋をわたつた。電車通りを避けて、わざと、花川戸の裏通りを山の宿のはうへあるいた。——貸舟屋の露次だの、荷揚場のかげだのに、隅田川の、ふかく濁つた水のいろがあつた。

『旦那どちらへ。』

よびかけられて、佐介は、ギクりとした。
『…………』
あわてゝふり向くと、それは、この下席、毎晩自分のところへ來る若い前座だつた。
『何だ、三平さんか。』
『どちらへお出かけです。』
『一寸馬道まで。』
『馬道。――りう雀さんのところで。』
その前座は、りう雀と同じ上野の師匠の手ものだけに、佐介とりう雀との附合を知つてゐた。
訊かれた佐介はこまつた。
『近所までついでがあるから。』
『それなら、且那。――りう雀さんは今日はうちにをりません。』
『ゐない。』
『へえ。――今日は師匠のところの運座で。』
『運座とは。』
『このごろ、師匠のうちで、とき〴〵、上下(じやうげ)だの、ものはだの、都々逸だのと運座をやりますんで。』
『さうかね。』
上下とか、ものはとか、都々逸とか。――そんなものは佐介には用がなかつた。面白くも可笑しくもなかつた。
『で、君は出かけるのか。』
『へえ、お手傳ひに。』前座は擽(くすぐ)つたく笑つて『十時といふのを少し遲れまして。』

『こゝまで來たものだ。』佐介は一人言のやうにいつて『留守を承知で行つてみよう。』

『さうで御座いますか。』

『ま、行つといで。』

『へえ、有難う。』前座は頓諂に頭を下げた。

そのまゝ右と左にわかれた。

『言譯が出來た。』佐介は自分にいつた。

『りう雀がゐないとなれば。――行つたけれど逢へなかつた、さうでなければ、ゐないと聞いたから途中まで行つてよした。――うちへかへつて何うでもいへる。』

で、四五間あるいて、佐介は、うしろを振返つた。――細双子の青つぽい唐棧がらを着、緣のかへつた鳥打を高慢にかぶつた前座の何にも知らずにすがたがあつた。

佐介は急いで横町へ曲つた。――角のところに、色の褪めた洋服を着た飴屋が、これはまた古めかしい紙風琴を抱して、子供をあつめてゐた。

『わづか半年。――思へばうすい緣だつた。』

紙風琴の、その、さびしい、可歎しい音色が、ふと、おはまのはうへ佐介を誘つた。

『なぜ、あんな、鄙猥なことをあのときしたらう。』

佐介に今更のやうに悔まれた。

それは二月のはじめのこと、りう雀にさそはれて、梅見がてら柴又の帝釋さまへ參詣に押出した。連中は、りう雀を

先立に、魚藤、榮床、通信社の吉岡。——長い附合の肚の底まで知合つたものばかりだつた。誰に遠慮も氣兼もなく、好きなこと、勝手なことをいひ散らしてあるいた。——で、かへりに川甚へ寄つた。

佐介の外は、りう雀でも、魚藤でも、榮床でも、また、吉岡でも、飲み手が揃つてゐた。日が暮れて、燈火がついても、誰一人かへらうといふものがなかつた。素面でさへいゝ加減機嫌がいゝのを、酒が入つて、いよ／＼機嫌がよくなつた。女中を、屢々そこにゐたたまらせないほど腹を抱へさせた。——九時すぎて、電車がなくなるといはれ、驚いてはじめて腰をあげた。

元來、佐介は、酒のみが嫌ひだつた。これは酒のみの親父を持つていろ／＼泣きをみせられたからでもあるが、酒は出世のさまたげになる、子供の時分に誰からかいはれたことを固くさう信じ、國にゐるときでも東京へ出て來てからでも、一切酒つ氣のものを近づけなかつた。——そのお蔭には、十年といふもの茅場町の厄介になつてゐる間、これといふ縮尻もなく、とり立てられて、とにかく今日にまでなつた。——だから、自分のことにして、酒を飲む奴がとかく莫迦にみえた。

そのくせ、つきあふ友だちは、りう雀のやうな、魚藤のやうな、榮床のやうな、飲助ばかりだつた。

「錢をこしらへる奴は違ふよ。」

勿論、その手合からは、あべこべに甘がられた。

甘がられてもよかつた。何といはれても好かつた。强情に宗旨をかへないでその手合と近しくした。——といふものがその手合は、皆、自分よりも苦勞をしてゐる。世間をわたつて來てゐる。——つきあひ損がなかつた。

だが、その晩は、どうしたわけか、佐介も酒のみのその機嫌のいゝ渦のなかに捲きこまれた。業平で電車を下りて、飲直しの相談の出來たとき、佐介も故障をいはなかつた。——吾妻橋をわたつて、いさくさなしに南千住行の電車に乘つた、

大門を入るとき、佐介といふ役者の一枚ゐることが、どの位、その企畫に花をそへたか分らない。

『前代未聞の椿事だね。』手を打つて、皆よろこんだ。

何のことはない、佐介は、「明烏」の若旦那の形ちだつた。——だが、實をいふと、當人、吉原は始めてゞはなかつた。——茅場町にゐた時分、下足の市公といふ奴に引張られて、忘れもしない、荒川の花見のかへりに一度來たことがある。

そのとき、遊びの味を知つて、なるほど惡くないものだと思つた。これなら若いものゝ陷るのも無理はない。——さうも思つた、が、泊るつもりの、とろ〳〵として眼を覺ましたとき、『失策つた。』と自分で自分にいつた。すぐに仕度をし、市公を殘して、二時すぎに茅場町にかへつた。

あくる日、散々市公に厭味をいはれた。何でもいゝから、もう一度附合へといはれた。佐介は怯毛をふるつて、當座出來るだけ市公のそばへ寄らない算段をした。——そのうち、いゝ鹽梅に市公は、不始末をして首になつた。

『彼奴、いまはどうしてゐるだらう。』

仲の町をあるきながら、佐介は、人知れず市公のうへを思つた。

京町に榮床の馴染のうちがある。——そこへ主人は押上つた。

すべてが「錦の袈裟」を思はせ、「突落し」を思はせ、「居殘佐平治」を思はせる光景だつた。藝妓が二三人來て三味線を彈いた。半玉が太皷を叩いた。榮床の清元を序開きに、りう雀のつんつらつん、魚藤の大津繪、吉岡の立山甚句。——藝盡しがはじまつた。盃がそのあひだを縫つてそれからそれと動いた。

いつもなら、一人、仲間外れにされるはずの佐介が、その晩に限つて、誰とも工合よく折合つた。わけもなく面白がつた。出來るなら自分もその三味線の厄介になりたかつた。何かやれ〳〵と無理にいはれたのをしほに、高座で始終聞覺えの都々逸を、臍の緒切つてはじめて人の前でうたつた。

醉つてながらも、皆、眼を見張つて驚いた。寢てゐたりう雀はむつくり身體を起した。榮床は何でも飲めと盃をさした。――何にも知らない藝妓たちまで一しよになつて囃立てた。

佐介は頭腦がぐら／＼した。續けて、都々逸をこつそりうたつた。そのあとさのさぶしをうたひ、米山甚句をうたつた。――半分夢中で自分のまへに注がれてあつた盃を飲み干した。

さうなるともう後は亂軍だつた。魚勝が立つと、頬冠りをし、じん／＼端折りで「權兵衞が種蒔きや烏がほじくる」と踊り出せば、榮床がそのあとを承けて「紀伊の國は音無川の水上に」としやく／＼り出る。――と、吉岡も負けない氣で、ふら／＼する足を無理に半玉と二人で「奴さん」を踊り出す。――りう雀の眞似をして、佐介は、箸で皿小鉢を叩き散らした。

障子のそとからりう雀に呼ばれて佐介は眼を覺ました。みると、もう、夜が開けてゐた。――佐介はいつその部屋へ連れて來られ、いつそこへ横にされたのか、まるで知らなかつた。

顏を洗つて外へ出た。七時だつた。狐の落ちたやうな顏をして、五人は、鐵漿泥溝の縁をぶら／＼歩いた。

魚勝だけ途中でわかれ、あと四人は、平野で朝飯を喰つた。

佐介は何だか夢のやうだつた。昨夜のことをはつきり思ひ出さうとしても思ひ出せなかつた。唄をうたつたり、皿小鉢を叩いたり――そんなことをしたやうな氣もするがうそのやうな氣もする。――何か考へると頭腦が痛かつた。

それは佐介ばかりでなく、りう雀でも、榮床でも、吉岡でも、寢不足の、氣のない顏をして、昨日の半分も口を聽かなかつた。――誰の顏にも止せば好かつたといふいろがよまれた。

そこを出ると、また、一人減つた。りう雀は小松橋から左へ切れた。――殘つた三人は、目的もなく、公園のはうへあるいた。

生憎、また空のあかるい、きまりの惡いやうないゝ天氣だつた。

『どこかに晝すぎまで寢かして吳れるところはないだらうか。』

吉岡が、なかば嘆息するやうに、しみ〴〵かういつた。

『贊成だね。』榮床はすぐに應じた。『この時間に今更うちにかへれもしない。』

『この近所に知つてる待合でもあれば誂向きなんだけれど。』

『さうだね。――湯に入つて、ぐつすり一寢入し、起きて一杯飮む。――そのうちに日が暮れる。――燈火(ひ)のついたのをみてうちにかへる。――さういふ寸法に行けばいふところはない。』

『それは贅澤だ。』吉岡は打消すやうに『そんな贅澤はいはない。――湯に入れて、一二時間寢かしてさへ吳れゝば俺はもうそれでいゝ。』

二人の話を聞いて、佐介は、誰の考へも同じだと思つた。行きつくところへ行けば、榮床だの、吉岡だののやうな道樂者でも、自分のやうな素つ堅氣でもかはるところがないと思つた。――自分も、先刻から、このまゝではうちへかへれない、おはまのところへ寄つて、一寢入して、それからぼつ〳〵かへつて行かう。――そのうちには昨夜の言譯をするいゝ知慧も出よう。――さういふ段取をつけてゐた。

佐介は早く二人とわかれたかつた。だが、りう雀や魚藤と遊び、どこまでも同じ方角へかへる二人だつた。――欺罔(ごまかし)はきかなかつた。

昨夜の仕事がだん〳〵自分にかへつて來た。唄をうたつたり、皿小鉢を叩いたり――紛ひもなく自分のしたことだ。――佐介は寂しい氣がした。

幾分でもその不始末を取返したい、取返さなければ後までいはれる、さう思つたとき、

『君たちが默つてて吳れゝば。』佐介はいつた。『湯に入つて、ごろ〳〵出來るところへ連れて行くがな。』

『ほう、心當りがあるかね。』吉岡がいつた。

『茶屋小屋じやない。――素人屋だ。』

『素人屋。』榮床は不思議さうに『この邊に誰がゐるといふことも聞かなかつたが。――氣塞なところぢやあるまいね。』

『何にも遠慮のないうちだ。』

『そんなら好いが。』

『その代り饒舌つて貰ふと困る。』佐介は念を押して『世間に知れると少し都合が惡いんだから。』

『はてね。』

『何者だらう。』

『來れば分るよ。』さういつて、佐介は、さきに立つた。

公園を拔け、藪から、猿若町へ入つた。憲兵屯所の裏の、縫泊屋と荒物屋の狹い露次を曲つて、突當りの古ぼけた格子のまへに、間もなく、三人は立つた。

佐介は默つて格子をあけた。障子をあけて若い女の顏が出た。

その顏をみて、榮床も、吉岡も、のけ反るばかりに驚いた。――それはさうだらう、ついこの三月ばかりまへまで、佐介のところの木戸にすわつてゐたおはま。――ゐるとゐないでは新籾の上りが違ふとさへいはれたおはま。――親が病氣で無理から國へ呼びもどされたはずのおはま。――そのおはまの顏だのだ。

『昨夜といひ、今日といひ。――此方とらはすつかり鼻毛を拔かれた。』榮床が口惜しさうにいつた。

佐介は苦笑をした。

かへりにも、また、饒舌つて呉れるなとかた〳〵いつた。大丈夫だよ、心配しなくつてもいゝよ、榮床でも、吉岡でも、立派にさういつた。――それが十日とたゝないうちに、りう僧に知れ、魚藤に傳つた。言葉の端々にそれが出た。

よばれるたびは佐公は生命が縮つた。

飛んだことをした。氣のついたときは遲かつた。いつの間にか、猿若町は、榮床だの、吉岡だのの遊びに行く足溜りになつた。

もしおとめの耳にでも入つたら。――おとめの耳に入れば茅場町へも筒拔だ。――これはいけないと思つた。

そこで、佐介は、今度の別ればなしを持出した。事をわけて話した。――おはまは、泣入りながらも、よく、自分のいふことを聽分けて吳れた。

あんなぶねんなことをしなかつたら――榮床だの吉岡だのを連れ込まなかつたら、こんな恐しいことにはならなかつたらう。――さう思ふと、佐介の眼からも、自分の仕損ひをくやむ泪が流れた。

佐介は、五重の塔の手にとるやうにみえる裏通りを馬道に出、公園を避けて富士横町のはうへ拔裏ばかりを選んだ。――路のうへの日のいろが、いつとなし、しら〳〵と陰つて、昨日の祭禮の名殘をみせる提灯のかけがところ〳〵に寂しかつた。

前にも一度來たことがある。その天麩羅屋はすぐに分つた。

「入らつしやいまし。」

屋臺のかげに、長い箸をあつかつて立つた主人が、佐介のはうをみて、愛想よくいつた。

「連れが――。」といひかけて、佐介は、沓脱のうへをみた。うらはいろの鼻緒をかけた吾妻下駄は見覺えのあるおはまのものだつた。

「先ほどからお待ちになつてらつしやいます。」

飛白の上つ張を着た小婢がいつた。

『お待ち遠。』さういひながら、佐介は、二階じかの座敷の、奥のはうへ入つた。

おはまは、ちやぶ臺に手をかけて、ぼんやり何か窓のはうをみてゐた。

『よつぽど待つたかい。』

『いゝえ、十五分ばかり。』

おはまは、佐介のはうを向いてにつと、さびしく笑つた。

四五日まへにも逢つてゐる。——だのに、佐介には、半月もあはなかつたやうな可懐しさが感じられた。

『出さきへ、生憎、茅場町のレコが來たもんだから。』

佐公は、さも、それが妨げにでもなるとやうにいつた。

『あゝ、さう。』

『何か誂へて呉れたかい。』

『いゝえ、まだ。——あなたがみえてからと思つて。』

『ぢやあ早くそいつたらいゝだらう。』

『えゝ。』

おはまは手を叩いた。小婢を呼んで、これがわかれになる食事の、二いろ三ろの下物（さかな）をたのんだ。

『それにお銚子とね。』佐介がつけ加へた。

『お酒を上るんですか。』

『あゝ飲むよ。』佐介は小婢（こをんな）の立つて行くのをみ送つて『今夜立てば、當分もう逢へないんだ。』

おはまは、默つて、眼を伏せた。

『で、汽車の時間は。』

『矢張五時半のに定めました。』おはまは襦袢の袖くちでそつと眼を拭いた。『七時半のだと、十時すぎでなければ高崎へ着きませんから。』

『さうだ。――女一人だから、あんまり遲くないはうがいゝ。』

『えゝ。』

『ちやうど一時だ。』佐公は時計をみて『二、三、四、五。――あと四時間ある。――何か。まだ、用が殘つてるかい。』

『いゝえ、もう何にも。』

『なら、腹が出來たら、どこか少しぶらつかうや。』

『えゝ。――でも、お天氣が。』おはまは、心配さうに、また、窓のはうをみた。

『晩までは大丈夫だ。』

さうはいつたものゝ、佐介も、憂惧なやうに、矢張、窓のはうへ眼を向けた。

間もなく膳が運ばれた。（九年十月）

好奇心

徳田秋聲

不思議な其の手紙が、外の手紙と一緒に舞込んで來たとき、稼山は食後の煙草を燻らしながら、ぼんやりしてゐた。九月末の或日の晝であつたが、その日は特に日曜であつたので、四人の子供たちはみな其傍にゐた。そして活動の話をしたり、歌劇の話をしたり、または壁に倚りかゝつて、歌祠を口吟んだりしてゐた。或ものは「どつかへ行きたいな」とそこに寢轉んで外を眺めながら呟いてゐた。末の小い子がよち／＼と、餉臺のまはりをうろつきながら、愛いらしい片言交りで何かしやべつてゐた。

先刻から空虚な顏をして、この移りかはりに著かへさせる子供の著物のことなどを考へながら、何うしても買ひに行かなければならないものがありながら、その頃の都合がつかなくて、毎日〻〻冷氣になつてゆく此頃の陽氣などを氣にしてゐたのであつたが、今更らのやうに、めき／＼大きくなつて行く子供たちを眺めまはしてゐた。するうち彼女の目は自然にいたいけ盛りの幼兒の方へ移つて行つた。稼山もさうであつたが、妻は殊にもその幼兒に深い愛を感じてゐた。それは四十に近い自分に産れたしかもそれが生死の境をくゞつたほどの難産であり、これが最後と想　される女の子であつたからであるのは勿論だが、一體に小粒に産れついた其の樣子や、彼女は彼女としての特色をもつてゐる。愛らしい神のやうなその顏や口の利き方などがひどく可憐なものに思はれてならなかつたのであつた。かゝる幼兒については母親の責任といふことはまだ考へられる必要はなかつた。で、たゞ嘗めついても飽足りないやうな愛情を感じてゐた。どんな氣分のくさ／＼する時でも、この幼兒を抱きあげると、心の底から和ぎ慰められずにはゐられなかつた。

「この子がもし偶然として死にでもしたら……」

彼女はその堪へがたい寂しさをも想像した。

糅山とても、幼兒に對する愛は、妻のそれに決して劣らなかつた。この愛らしい幼兒のために、まるで白痴のような眞似をさせられても少しも厭はなかつた。どんな小煩いことでも言ふがまゝにしてやつた。責任感や義務感から來てゐるのではなかつた。飯を食つたり寢たりする事にも、それに比べれば多少の努力は加はつてゐると思はれた。

さうして糅山夫婦の晝の茶の室は、とにかく現在幸福に充されてゐた。

朝の間は曇つてゐたが、十一時頃から雲が剝がれて、外は快晴であつた。空が蒼々と晴れわたつて、庭木や花壇のダリアのうへに、絖(ぬめ)をすかしたような、秋らしい陽光が耀いてゐた。糅山は、その美しい空を眺めながら、この頃の郊外を想像してみたり、又は淺草あたりの遊び場所を目に浮べたりしてゐた。

すると其處へその手紙が來たのであつた。

一つの手紙は、田舍の友人から就職口を賴んで來たのであつたが、今一つは轉居の通知、そして其の三本目の手紙を何心なく手に取上げたとき、彼の頭腦はふと或期待を感じて、急に不安に曇つた。勿論その豫感も、手紙の封を切つてから、初めてそれと明白に判つたので、封書を見たときの感じは、極めて微かなものであつた。ちやうど障子に遠い鳥の影が差したかのやうに。それは八坂民吉といふ差出人の姓が、ふと遠い昔しに知つてゐた女を想出させたのであつたが、これも八坂といふ文字を見て、ちらりと古い其の記憶が頭腦に閃めいたに過ぎないので、お民といふその女の名なぞも、全く頭腦のどこかに下積にされて、久しい以前から思出しもしなかつた。

手紙には御無沙汰の詑などが書いてあつたが、あれから長いあひだ北海道へ行つてゐて、この頃ちよつと東京へ歸つて來たが、事によると又田舍へ行くことになるかも知れないから、久しぶりでお目にかゝりたいと思ひます。實はこちらからお伺ひする筈ではあるが、それも反つて御迷惑かも知れないと思つて、おいでをお願ひする譯である。お役所の

歸りにでもちよつと來て頂けるなら、大變好都合でございます。お許し下さるでせうかどうでせうかと、文章は一寸と長いが意味はそれだけの事であつた。そして其のお終の所に、其の所書きがして簡短な道順までが書加へてあつた。

棟山の目はその文字のうへを一息に走つた。そして内容が略わかると、急いで、しかし何のこともなささうにわざと落着いた態度で、手ばしこく手紙を懷收めて、前に投出しておいた。勿論その手紙を讀まれたところで、それが大して問題になるような内容を含んでもゐないのではあつたが、其を説明しなければならないだけでも、棟山にはばかゝしい煩はしさであつた。で、彼は警戒を怠らない目を以て彼女の顏を見て見ぬ振をしてゐた。

處で妻は、手を出しさへすればいつでも其の手紙を取上げることのできる近さにあつて、膝や肩に絡はる子供に氣を取られてゐた。その上、十三になる一番上の子供が、何の氣もなしに其の手紙をひよいと取りあげたので、棟山は何かこの場の平和を破るような導火線に、火が點ぜられかけてゐるような際どい不安を感じた。子供はまるで何も彼も知つてゐて、わざと惡戯に棟山の氣を苛立たせでもしやうとしてゐるやうに、その手紙の表を見たり、裏返したりして暫らく手から放さなかつた。のみならず今度は中味を引出して、ちよいと披いて讀みさうな風であつた。棟山はすつかり其の方へ氣を捕られてしまつた。

すると幸ひなことには、その時遠くの空でプロペラの音がして來たので、「飛行機、飛行機」と叫んで、彼等はみんな緣側へ出てしまつた。妻も遙かに其の方へ氣を補られてしまつた。

それで棟山も漸と助かつたのであつた。

それから三四日たつてから、或日棟山は、會社の歸りがけに、郊外にゐる其の女の家を訪ねてみた。

棟山がその女と交渉をもつてゐたのは、恐らく今から十二三年も前のことであつたであらう。彼はその頃二十二三の

年輩で、學校を出てから、或鐵道會社の運輸事務に係はつて、著實と潔白を以て、上役に信用されてゐた。勿論彼には田舎に相當の財産もあつたうへに、一兩年以前向へた妻の實家が土地の素封であつたところから、何處の會社でも、時とすると官廳の公職に在る人たちの間にすら、昔しもそれを何うすることもできなかつた通りに、今も殆んで賄賂が當然のことと認められてゐる仲間では、彼の潔白が甚く彼等に厄介視されてゐたのも當然で、それだけ彼は自分の職務に自信を以つてゐた。

左に右彼はさう大した敏腕家といふほどではなかつたが、重役に信用されてゐたことは事實であつた。彼は時々出張を命ぜられた。そして東北の或町の定宿で、そこへ助けに來てゐた、宿の親類の娘と二年越しの戀に落ちてゐた。

その頃彼はまた蜜月の甘い夢から全く醒めてはゐなかつたが、しかし旅へ出る度に、何かしら解放されたような秘密な安易を感ぜずにはゐられなかつた。勿論彼は妻から愛されてもゐたし、愛してもゐた。女學校出の彼の細君は、彼の重苦しい氣分とはまるで反對に、氣爽で、聰慧で、自分の考へで何事もさつさと片をつけて行くと云ふ風であつた。で又それが不思議にも糅山の氣分と合致した。良人の顏色を一目見ると何も彼も判るといふ風であつた。家庭は總て彼女の切盛に委されてあつた。糅山は默つてそれを觀てゐたが、何うかすると自分がお客にでも來てゐるのではないかと思はれるほど、小まめな彼女の心遣が、目まぐるしく思はれることがなくもなかつた。ネキタイの柄、帽子の色の選擇は勿論、蟇口の中味やポケツトの底に到るまで彼の生活の全部に亘つて纖細な、彼女の指頭が敏捷に働いた。男子として、もつと深い省察や考慮を加へたいと思ふところも、彼女の頭腦は多少淺薄ではあるにしても、とにかく細かに働いた。糅山はそれに何の不安も不足もありようはなかつたが、良人として妻の世話をやく餘地のないのが何となく物足りなかつた。そのうへ彼は體質が餘り丈夫でなかつた。そして結婚後三年ごしになつても、子供が出來さうには見えなかつた。勿論彼はそんな必要をまだ痛切に感じ初めてはゐなかつたが、結婚の當然の約束として、期待さるべき筈のものが與へられないと云ふことは、物足りない事には違ひないのであつた。一日女中と二人きりである細君は特にもそれを寂

しく思つた。

旅館の上さんの姪にあたる其の女は、姑の惡い性癖や、良人の優柔な氣質に原因する不幸なその結婚生活に懲りて、叔母の家に身を寄せてゐた。彼女は雪國の女らしい美しい肌と、愛らしい澄んだ聲と、寂しい沈んだ氣分とをもつてゐたが出戻りとは受取れない若さと幼々しさを多分にもつてゐた。

楺山が初めて彼女を見たのは、或年の秋その邊に出張を命ぜられた時のことであつたが、その鄙びた娘々した姿が、行く先き〳〵で、何か思ひがけない掘出しものにでも出會つて、甘い秘密の戀にでも有りつきたい好奇な空想を描いてゐた。彼の目を惹かずにはゐなかつた。勿論年は年として、世間普通の結婚生活の前に、青春の夢を多く見殘して來た寂しさを彼も感じてゐた。

女は二十三であつたが、小柄で内氣で子供々々してゐた。そして何を聽いても、顏を紅くして、にや〳〵笑ふきりであつた。しかし楺山が一ト通り其の附近の貨物運搬に關する視察を了へての歸りに再びそこへ立寄つたときには可也打釋けることができた。そして話してみると、思ひのほか單純なその胸に苦勞の影がさしてゐることが判つた。彼女は一生獨身で暮すつもりだと云ふ自分の氣持を洩したり、不幸な結婚生活に懲りたことを語つたりした。

「結婚生活が皆なが皆なまで不幸に了るとも限らないぢやないか。君のことだから、又何んな好い運が向いてこないとも限らないよ。」

「それあ然うですけれど、二度目はどうせ碌な處へ行かれはしません。」

表二階の方では、三味線や太鼓の音などがしてゐた。勿論縣官などの泊る宿ではあつたが、料理屋をも兼ねてゐた。仲間と一緒の時には、楺山も藝者を揚げたこともあつたが、そんな事は出張先では品行は左に右、物質上の彼の潔泊を汚すものだと思はれた。で、彼は酒すら餘り飲まないようにしてゐた。たゞお品(彼女の名の)酌で一合か五勺の酒に陶醉するだけであつた。彼は決して上戸ではなかつた。旅宿の寂しさを紛らせるために過ぎなかつた。

お品の話によると、彼女の結婚生活では、思ひもかけない厭な事があつた。それは寡婦であつた姑が、その子息であるお品の良人を、自分に所有しておかなければ氣がすまなかつた。お品が白粉をつけると氣に入らなかつた。夜早く寢ても機嫌が悪かつた。そして其が段々極端に走つて行つた。良人はお品以上に憂鬱になつた。こゝから十里も山の彼方にある或大きな精米所の持主が、彼であつた。彼の家は可也豐富であつた。大きな水車場で機械が年から年中がら〳〵運轉してゐた。彼は終ひに夜遊びを覺えた。そして或一人の女に溺れて行つた。そして其がまたお品の不束から來たかのように、姑は彼女を憎んだ。良人は有金を懐ろにして家を出ると、幾日も〳〵歸らなかつた。辛いとや惜しいとが、一年の餘も續いた。死を思つたことも、度々であつた。お品は終ひにそこを逃出して來たが、結婚生活を呪ふ心が、一層彼女を憂鬱にした。

糅山は彼女を慰めた。

翌年の二月彼はまた其處を見舞つた。お品のことが不思議に氣にかゝつた。寂しい沈んだ愛らしさをもつてゐる彼女の切長な目や、銀杏返しに結つた蠟塗のような黑さをしてゐる髮や、白い肌や――そして何かをするのに少し粗雜で、野鄙ではあるけれど、それだけ素朴な樣子が、彼の心に不思議な愛執を殘させた。

「あの女は何うしたらう。」糅山は時々憶出しては、淡い懐かしさに浸つてゐた。何か彼女の要求に、恕紮のなかつた自分の冷やかさが咎められるようにも思へたし、自分の臆病を笑ひたい氣もしてゐた。

町は雪が積つてゐた。宿は闇が閑としてゐた。糅山は奧二階で炬燵に埋もれながら、晩酌をやつたのであつたが、お品がやつぱり出て來た。

「君はやつぱり居たんだね。」糅山は懐かしさうに言つたが、お品も嫣然してゐた。そして三月も四月も隔つてゐたことが、反つて二人を飛躍的に打釋けさせた。

お品は丸々肥つてゐた。皮膚が肌理の好い大根のような艶々しさをもつて、澄んだ目が春の星のように、潤ひをもつ

てゐた。秋の頃の憂欝な影は亡なつて氣分が明くなつたゐた。

粂山は、雪がふるので四五日そこに逗留してゐたが、或晩などは宵の口から藝者を揚げて、東京の流行唄などを謳つた。そして其の藝者が歸つて行つたあとに、彼はひどく醉潰れて、お品に世話をやかせた。

お品が東京へ出て來たのは、その四月、山國の雪の融ける頃であつた。上野の宿から會社へ電話のかゝつて來たときには、彼も同僚に散々冷かされて、顏が眞紅になつた。とにかく彼は宿を訪ねた。勿論東京へ來れば、棄てはおかないつもりだからと、彼は別れる時約束の辭を遺して來たのではあつたが、困惑を感じない譯にはいかなかつた。

「それで何う言つて家を出たんだね。」粂山は不安さうに訊いた。

「上さんに僕のことを話してしまつたんぢやないか。」

「いゝえ、たゞ貴方のお世話でどこかお屋敷奉公をする積りだと云ふ話にして來たんです。」お品は應へた。

とにかく暫く東京に留めておかなければならなかつた。そしてお品の言ふとほりに、質素にさへ暮すならその仕送りをするのは、彼の今の生活に取つて、さして困難なことではなかつた。彼は隱家を準備しなければならなかつた。それにはちやうど以前下宿してゐた家のお上が、今は商賣を止めて、娘に養子をして、高阪あたりに靜かに暮してゐることを想出した。彼は善良な妻に對しては、罪囚のような後暗さを感じつゝも、その秘密な隱れ家に足を運んで行つた一年ばかりの月日を何んなに幸福なものに思つたか知れなかつた。女はそこから裁縫學校なぞへ通はしてもらつてゐたが、それ以上のことを何一つ望みはしなかつた。彼女は粂山に愛せらるゝことを、身に餘る光榮とも幸福とも思つてゐた。

粂山はしかし終に苦しくなつた。重い荷が始終肩にかゝつてゐるような氣窮りを感じた。勿論彼としては女の長い生涯を考へずにはゐられなかつた。

或日彼はその秘密を一切妻に投げだして、罪を詫びると同時に、その處置について彼女の判斷を仰いだ。

粂山の爲たことについて、妻は決して怒りはしなかつた。のみならず優しい同情をさへ彼女に拂ふとを惜まなかつた。

「その人に若し子供でもできたら、それほど好いことはないぢやありませんか。」妻はそんな風に應へた。
棌山もそれに感謝しずにはゐられなかつたが、妻に加へる苦痛よりも自身の苦痛の段々加はつて來るのを、何う爲ようもなかつた。子供の出來る時のことを想像すると一層恐ろしかつた。
彼はその年の暮、優しく女を説諭して田舍へ歸してしまつた。
涙ながらに汽車に乘つた彼女と別れて、ステーションを出て來たとき、彼は初めて吻とした。

棌山はこの十餘年を、お品が何ういふ風に暮して來たかを知りたくもあつたし、何んな女になつたかを見たくもあつた。勿論解放された彼女の生活が幸福であるのか不幸であるのか、それも時々氣にかゝつてゐた。別れた當座一二度手紙も來たのであつたが、棌山はそれに對して、通り一遍の返辭を出すに過ぎなかつた。勿論妻以上にも彼女を愛することができたならば、二人の關係は永く續いたかも知れなかつた。然し其の愛の永く續かないことが、直に解つて來た。そして其は單に妻の前に自分を甚く窮屈なものにするに過ぎなかつた。それに其の後手術をしてから子供が妻に產れて、それからひた〳〵と四人も產れた。
廣い郊外の町を彼は尋ね〳〵して漸とその家を搜しあてた。そこは町はづれの寂しいところにある小さい平屋で、植木屋の門のなかにある借家の一つであつた。
棌山は、その入口の格子戸のなかにゐる四つばかりの男の子の顏が、どこかお品に似通つてゐるのに氣がついた。窪んだ彼女の目と、丸味のある鼻つきが、憶出せた。子供は餘り好い身裝をしてゐなかつたが、其邊に遊んでゐる子供のようには卑しく見えなかつた。
内へ聲をかけると、障子蔭に女の姿が動いて、長みのある、色の黝んだ陰鬱な顏が、そこへ現はれた。棌山は見それてしまつた。そんな顏をば、彼は期待しなかつた。あの娘々した若々しさはないにしても、美しさはそれなりに何等か

の形に於て保たれてゐる筈だと想像してゐた。勿論お品はお品であつた。目にも眉にも鼻にも口にも、昔しながらの面影は微かに殘されてゐるには違ひなかつた。たゞ年月が、すつかり共の若さを吸取つてしまつた。丸味をもつた顔がへちま瓜のように間延びがしてゐた。その上ひどく陰欝になつてゐた。

「入らつしやいまし。」彼女はさう言つてそこに手をついたが、あの何の陰氣もなく、人を見あげた澄んだ目の潤ひはどこへ行つたのであらう。

森山はこの瞬間、訪ねて來た輕率を悔ふるより外なかつた。爲方なく彼はにや／＼と、人の好ささうな笑方をしてゐた。

「上つても可いの。」

「え、私手紙は差上げましたけれど、後で何だか惡いことをしたように思つて、心配してゐました。それでも能うこそ。」

そして彼女は座蒲團を持出すと同時に、鈍い目で彼を見たが、暗いその目が彼に好い感じを與へなかつた。

その上彼女は、髮も亂れてゐた。顔の地肌も荒れて、白粉氣もなかつた。その日は立返つて蒸暑い陽氣であつたので彼女は浴衣を着て、伊達卷一筋といふ、不檢束な風をしてゐるのが、一層彼を不快にした。

[illegible]にへあがつてくると、じろ／＼彼の顔を見た。

「こんな子があるんだね。」森山はお愛相を言つた。

「え。」お品は急いでお茶の支度に取りかゝりながら、「他に一人女の子があるんですけれど、それは田舍においてございい

ますの。貴方はお子さんは……やつぱり御座いませんの。」

「ある。」株山は笑ひながら言つた。

「お幾人？」

「四人。」

お品は別に驚きもしなかつた。そして嬉さうな鈍い聲で、

「ちや奥さんをお替へなすつたの。」

「なぜ。」

「貴方の奥さんはお弱かつたぢやありませんか。」

株山は別に説明もしなかつた。彼は雪の夜、板戸に吹きつける吹雪の音を耳にしながら、彼女と甘い戀を私語いことを見出してゐた。東京の隱れ家で、十時頃にはきつと歸ることにしてゐた自分が、媚めかしい姿をした彼女と別れを惜んだことを憶出した。淸しかつた愛らしい彼女の目、玉のように白かつた彼女の皮膚、手、足などを想像してみた。それらの若々しさ、瑞々しさは今の彼女のどこに求められなかつた。澱んだような皮膚の色、肉のたるんだ目元口元、そして眠らしく衰へた頸元や寂しい耳のあたりが、譯もなく不快に感ぜられた。

でも磨硝子のはまつた茶箪笥のなかゝら、菓子を取出してゐる彼女の後姿には、まだ何處かに彼の心を惹つけた。細そりした體の輕やかさがあつた。聲とてもお品の聲に紛れもない、沈んだものであつたが、妙に濁りを帶びてゐた。

「よく入らして下さいましたことね。わたし迚も駄目だと思つてゐたんですよ。」

お品はさう言つて、さも懐しさうに初めて篠山の顔を仰ぎ觀た。

「貴方ちつともお變りにならないやうでございますわ。それでも何處かにね。」お品は寂しい微笑を浮べた。

篠山の目にも、その頃の自分と今の自分との自然の相異がありく浮んで來た。「彼は何となく寂しくなつた。

「私隨分變りましたでせう。」

「爲方がないぢやないか。生身のことだから。」篠山は笑つた。そして彼女の面影を搜さうとして、その顔を凝視めたが、それは餘りに痛ましい變化を明白させるに過ぎなかつた。

「あなた矢張りあの會社へおいでゝございますの。」

「けど方面がちかふから。君はあれから何うして暮してゐたの。」

「私ですか。」お品は寂しく笑つたが、「私の身のうへにも色々のことがございましてすわ」と言つたきり、それを話さうともしなかつた。

「いつ此方へ來たんだね。」

お品はちよつと紅くなつた。

「もう暫く居りますのよ。尤もこの家へ來ましたのは先月でございますけれど……。」

「それにしても、君は獨りぢやあるまい。」篠山は落着かない氣分で訊いた。然に氣になり出して來た。

「私？」お品は煙管で煙をふかして、「私また棄てられたんですわ。」

「旦那に。」

「え、二度も三度も。」

「結婚した？」

「結婚もしましたし……」と、お品は鼻と口元に皺を寄せて、「貴方に棄てられてから、さう云ふ癖がついてしまつたのよ。」

「それで今は……。」

「今は獨身なんですの。」お品は落着きはらつた態度と、ねちねちした調子で、「そんなにおどおどしなさらなくても可ござんすよ。大丈夫なんですよ。」

楪山はにやにやしてゐた。

「それよりも、貴方お夕飯は。何か取りませう。何が好うございますの。田舍のことですから、お口にあふような物は迚もございませんけれど、私一昨日も昨日も、御馳走してお待ちしてゐたんですわ。」

實のところ楪山は彼女に逢つたうへ、どこかへ引張出して久しぶりで何か食事を倶にしやうなどゝ考へてゐたのであつたが、それも興味がなくなつた。勿論彼は空腹を感じてゐた。

やがてお品は町まで買出しに行くために、自分にも着物を著かへたり、子供にもエプロンを取替へさせたり、帽子を冠せたりした。彼女が好きさうな粗いセルの單衣を著て、きりりと彩二重の紋の帶を締めたとき、そこに初めてお品らしい姿の美しさが、多少裝はれて來た。

「私あの時分貴方に拵へていたゞいたお召のコートを、つひ二三年前まで持つてゐましたわ。あの片がまだございます

のよ。貴方がほんとに善く似合ふと言つて下すつたことを覺えてゐますわ。」

「ほう」と、棣山は彼女をそらすまいとするように笑を浮べて、「あの時分はほんとに若かつたからね。」

直に夜になつた。お品が註文して來た仕出が來たところで、彼女が買つて來たビールの口がぬかれて、そこに三人の飲食が初まつた。鹽燒や、お汁や、野菜の煮たものなどが、餉台のうへに並んでゐた。お品はコップに二杯も三杯も麥酒を飲んだ。そして腹のくちくなつた子供がそこに倒れる頃には、彼女の調子もいくらか燥いで來た。年增らしい寂しさの媚めかしさと、廢頽的な無恥さの醜さが、棣山に長くそこに足を止めさせなかつた。

一週間ほどたつてから、棣山はまた彼女の話を聽くべきその家を訪ねた。彼はまだしみ〴〵話を取交す隙がなかつたが、しかし其は要するに彼の幻滅と嫌厭をと深めるに過ぎなかつた。

で最近彼女が流轉してゐた東北の町で、ふと昵みになつた或鑛山師が今の彼女の旦那であつたが、それも經濟界の恐慌で彼女を持切れなくなつたところから、神田の方から此の郊外へ引越して來てひつそり暮すことになつたのであつた。その男とも前の月に手が切れて、彼女は幾許かの手切をもらつて、田舍へ歸らなければならない運命にあつた。子供はといふと、それは今の旦那の世話になる前に片著いてゐて、死別れになつた良人の忘れ片身だといふのであつた。

とにかく棣山は今一度彼女を訪問すべく約して、二度目に彼女と別れたのであつたが、何時出向いて行くといふ日もなくて其きりになつてしまつた。

編輯局だより

○同人活動の計畫は漸く成つた。十二月號からは愈々内容を充實してお目にかゝりたいものだと思つて居る。

○出版部の方も段々整備し、新春と共に續々新刊書を出し得るやうになつた。處女出版「死線を越えて」は旬日にして五版を重ぬるの好況を呈した。

○評壇の人氣を一身に蒐めたる吉江孤雁氏が本號から連續して長大篇を執筆して下さつたことは同人等の深く感謝する所である。悲麗の想、鮮彩な筆致は愈出でゝ愈讀者を滿足せしむるものがあらう。

○同人橫關は十月十六日北京に赴いた。君の飛躍から新春の本誌は錦上花を添へるものがあらう。

新刊紹介

□**經濟學說と社會思想**（小泉作三著）少壯經濟學者にして社會評論界の花形たる著者が其經濟學的見地より、經濟學說の變遷を研究せるものにして、分配論、勞働價値說、勞働搾取、地代論の社會主義的應用、人口論及賃銀法則と社會運動、資本概念の變遷と社會主義者の貢獻及搾取論として、ロオドベルトスの勞働價値學說と不均利潤率の問題の各章に分ち正統派學說と社會主義學說との變遷關係に關し嚴守する研究と批判を下せるもの蓋し社會問題研究家必讀の文學である（定價金壹圓八十錢、芝三田國文堂發行）

△**歌集「無産者」**（西川百子著）「烈しく叱らんとし口を緘めり薄給に骨立ちし顏」を涙組みて人生を凝視し「勿體なき矛盾なるかな公論であり貧民、友である哉」と貧民窟に德川公を發見した、矛盾なるは現社會と無産者の生活を題材として米田庄太郎博士の指導で著者は此の一書を世に出した。（定價一圓十六錢京都弘文堂發行）

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	二錢
半ケ年	四圓二十錢	不要
壹ケ年	八圓四十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號の他定價更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌發送す

▲見本誌請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正九年十月二十六日印刷納本
大正九年十一月一日發行

本號定價　金七十錢

編輯兼發行者　東京府中目黑七七〇　橫關利藤太
印刷者　東京市京橋區南鍋町二丁目十七番地
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京一八四〇二

文學博士 米田庄太郎先生著 ■新刊■

輓近社會思想の研究上巻別册

新理想主義の歴史哲學要綱（一）

四六版五三〇餘頁　正價金參圓參拾錢　書留郵送料拾七錢

本書は歴史哲學を以て文化哲學を完成するものと見る新理想主義の歴史哲學の起源發達及び大成を研究するものにして、本篇は先づ其の今日までに最も大成せる形態を說述するものである。本篇(一)目次左の如し。

第一章　歴史哲學の根本問題
第二章　歴史論理學の諸問題
第三章　歴史的價値論の諸問題
第四章　世界史の諸問題

發行所　京都市丸太町寺町東入　振替大阪三五二六四番　弘文堂書房

社告

萬有引力論の否定

理學博士　石原純氏

我國物理學界及哲學界の最高權威たる石原博士は物理學界の絕體權威たりしニウトンの萬有引力論を根本的に修正せんが爲め相對性原理、及萬有引力論につき本誌のための長篇の論策を寄稿された。本編は我國に於ける前代未聞の大發見にして、この一文の發表によりて從來の科學界は根抵より修正さるべき運命にあり。我社はかくの如き最高論策が本誌によりて發表さるを衷心より氏に感謝するものである。尙氏は本社のために一千枚に亙る「量子論」及哲學上に於ける諸問題を執筆さるるの約あれば、稿成るの日は從來の論壇に見られざる深刻なる科學的氣分、幽遠なる哲學的筆致を味ふことが出來やう。氏は同問題に對し本社の計畫になる長時間の公開講演をも承諾された。

新國民主義

吉江孤雁氏

評壇の流行兒として新采鬱々たる吉江氏は、巴里遊學中歐洲大戰亂に遭遇して、觀戰五年、沈默五年、多大の感慨を齎らして飄然歸朝せり。氏の精透せる文明批評の第一發表は本誌によりてされたるが、以後氏は數十回に亙りてその豐富なる直觀資料を基礎として、潤麗なる筆致もて何を語らんとするか。大正九年の末より、十年初春の評壇は蓋し氏の獨壇場と云ふも不可なかるべし。

室伏高信氏

論壇新進の奇才として嘖々の英名ある室伏君は今回入社し、第一回本社海外派遣員として歐洲諸國へ特派することに決した。新鋒犀利なる氏の觀察がいかに新春の論壇を賑はすか刮目して待たれよ。

新社會の基礎

新刊發賣

◇故 中澤臨川氏著◇

◇山本鼎氏裝幀◇

四六版新鑄ポイント組
定價二圓卅錢
送料十六錢

大正初年から今年までの思想界は中澤氏の黄金時代であつた。その絢爛な文章、その豊潤な思想は近時思想界の逸品であつた。臨川の名を聞くものは假令へそれが論敵であらうとも氏の特絕の芳香に魅了せられざるものはなかつた。氏の訃と共に秋は一段と淋しくなつた。氏の存在は春の如く賑かなものであつた。本年の春の論壇は臨川氏の論壇であつた。その春も逝き、其夏も逝いて、臨川氏は再び還らない。ただ淋しき秋にこの感激の多い一書一入に氏の高風を仰がしめるのみである。

◇詩人にして科學者眞正至純なる文藝鑑賞◇
◇者にして文明評論家たる氏の至言を聽け◇

東京芝櫻田久保町 改造社 振替東京八四〇二